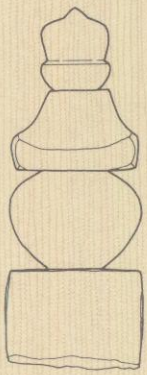
大宰府史跡

昭和62年度発掘調査概報



昭和63年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和62年度発掘調査概報

昭和63年3月

九州歴史資料館

序

昭和57年度を初年度とする大宰府史跡発掘調査第３次５ケ年計画では観世音寺地区土地区画整理事業に伴い、大宰府条坊制の解明を主な目的として政庁前面域について調査を行ってきた。その結果、これまでにも報告してきたように、この地域には広範囲にわたって官衙が配されていたことが判明し、大宰府研究にとって大きな成果をもたらした。この第３次５ケ年計画の終了に伴い、本年度からは新たに第４次５ケ年計画を立案し発掘調査を行うこととした。この計画では、これまであまり調査の手が及んでいない観世音寺ならびに同子院跡についての調査、研究に重点を置くこととした。その一環として今年度調査を行った推定金光寺跡においては、これまでにも大きな成果が得られており、今年度新たに火葬遺構および埋葬施設としての石塔群が検出された。今後の子院跡に対する調査でも大きな成果が得られるものと期待している。

大宰府史跡の発掘調査も開始以来20年目を迎えようとしている。この秋には発掘調査20周年を記念して、これまでの成果を一般公開すべく特別展示を計画している。この催しは単に20年間の調査回顧だけでなく、これを契機として新しい活動の展望としたいと考えている。これまでご指導を賜っている大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位に深甚の謝意を表するとともに今後一層のご指導をお願いする次第である。

昭和63年３月31日

九州歴史資料館長　田　村　圓　澄

例　言

1．本概報は昭和62年度に福岡県が国庫補助金を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概報である。ただし第106次・108次調査については調査面積が僅少であるとともに顕著な遺構は検出されなかったので報告は割愛した。また第109次・110次・111次・112次調査については現在発掘調査継続中ないし出土遺物整理中であるので、報告については次年度にゆずる。さらに第97次調査は昭和60年度に、第104次、105次調査は昭和61年度に実施した調査であるが、未報告であるので併せて報告する。

2．遺構実測図は国土調査法第II座標系をもとに基準点を設けて作製した。(昭和51年度発掘調査概報参照)

3．検出遺構および木簡については大宰府史跡調査研究指導委員の指導と教示を得た。また、第107次調査で検出した石塔群等の遺構については元興寺文化財研究所の藤澤典彦氏からも種々の教示を得た。

4．第107次調査で検出した人骨については九州大学医学部解剖第二講座に鑑定依頼中である。

5．遺構・遺物の写真は学芸一課の石丸洋の撮影による。

6．本概報の執筆・編集は調査課の石松好雄、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、赤司善彦と学芸一課の倉住靖彦が行った。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目　　次

序

I　調査計画……1

II　調査経過……2

1　概　　要……2

2　第104次調査……4

検出遺構……4

出土遺物……6

小　　結……8

3　第105次調査……9

検出遺構……10

出土遺物……13

小　　結……22

4　第97次調査……24

検出遺構……25

出土遺物……34

小　　結……62

5　第107次調査……67

検出遺構……67

出土遺物……80

小　　結……96

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折り込み
第２図　第104次調査遺構配置図 ……４～５
第３図　ＳＥ3069実測図……５
第４図　ＳＥ3070実測図……５
第５図　暗灰色土層、ＳＥ3069・3070出土土器・陶磁器実測図……７
第６図　第105次調査遺構配置図 ……11
第７図　ＳＢ3075・3080柱掘形断面図……12
第８図　ＳＥ3085実測図……12
第９図　ＳＢ3080、ＳＥ3085、ＳＫ3091、ＳＸ3090・3095出土土器・土製品・硯・陶磁器実測図……15
第10図　暗茶色土層出土土器実測図(1)……17
第11図　暗茶色土層出土土器実測図(2)……18
第12図　暗茶色土層出土硯実測図……19
第13図　ＳＢ3080、暗茶色土層出土石帯実測図……20
第14図　ＳＫ3096出土弥生土器実測図……21
第15図　政庁後背地検出主要遺構配置図……23
第16図　第97次調査土層実測図……26
第17図　第97次調査遺構配置図……折り込み
第18図　遺構出土土器・陶磁器実測図(1)……35
第19図　遺構出土土器・陶磁器実測図(2)……36
第20図　ＳＧ1630西拡張部出土土器・陶磁器実測図……40
第21図　整地層出土土器・陶磁器実測図……41
第22図　暗褐色土層、暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図……44
第23図　遺構・層位出土瓦質土器実測図(1)……47
第24図　遺構・層位出土瓦質土器実測図(2)……48
第25図　遺構・層位出土漆器実測図……53
第26図　遺構・層位出土木製品実測図(1)……54
第27図　遺構・層位出土木製品実測図(2)……55
第28図　遺構・層位出土木製品実測図(3)……56
第29図　遺構・層位出土石製品実測図……60

第30図　層位出土青銅製品実測図……60
第31図　銅銭拓影……61
第32図　推定金光寺跡遺構変遷図……63
第33図　第107次調査遺構配置図 ……68
第34図　Ａ地区の土層図……69
第35図　Ａ地区遺構配置図……折り込み
第36図　石塔配置模式図……71
第37図　蔵骨器出土状況実測図……72
第38図　蔵骨器出土状況実測図……73
第39図　火葬壙実測図……77
第40図　土葬墓実測図……78
第41図　ＳＱ3140、ＳＸ3137、ＳＸ3130出土土器実測図……81
第42図　蔵骨器実測図……83
第43図　Ａ地区層位出土土器・陶磁器実測図……85
第44図　火葬壙、土葬墓出土土器・陶磁器実測図……87
第45図　軒瓦拓影・実測図……89
第46図　鳥衾拓影・実測図……89
第47図　五輪塔・一石五輪塔実測図……91
第48図　五輪塔・一石五輪塔の種子拓影……92
第49図　相輪・宝篋印塔・宝塔実測図……93
第50図　板碑実測図……94
第51図　火葬壙、土葬墓出土釘実測図……95
第52図　第57・67・97・107次調査遺構配置図 ……98

図　版　目　次

図版１　（上）　第104次調査区全景
（下）　第104次調査区全景
図版２　（上）　第104次補足調査区全景
（下）　井戸ＳＥ3069・ＳＥ3070
図版３　第105次調査区全景空中写真
図版４　（上）　第105次調査南半部
（下）　第105次調査北半部
図版５　（上）　掘立柱建物ＳＢ3075空中写真
（下）　掘立柱建物ＳＢ3075
図版６　（上）　掘立柱建物ＳＢ3080空中写真
（下）　掘立柱建物ＳＢ3080
図版７　（上）　掘立柱建物ＳＢ491・柵ＳＡ3092・井戸ＳＥ3085・ＳＸ3090空中写真
（下）　不明遺構ＳＸ3090
図版８　（上）　井戸ＳＥ3085全景
（下）　井戸ＳＥ3085
図版９　（上）　礫群ＳＸ3095空中写真
（下）　礫群ＳＸ3095
図版10　（上）　掘立柱建物ＳＢ3075柱掘形
（下）　掘立柱建物ＳＢ3075柱掘形
図版11　第57・67・97次調査区（推定金光寺跡）の全景
図版12　（上）　第97次調査区全景
（中）　第97次調査区全景
（下）　第97次調査区全景
図版13　（上）　池ＳＧ1630
（中）　池ＳＧ1630
（下）　池ＳＧ1630
図版14　（上）　池ＳＧ1630護岸石組
（下）　池ＳＧ1630中島
図版15　（上）　池ＳＧ1630と下層の礎石建物ＳＢ2850
（下）　礎石建物ＳＢ2850の基壇東北隅

図版16　（上）　基壇状遺構ＳＸ2860・溝ＳＤ2855・礎石建物ＳＢ2850
　　（下）　井戸ＳＥ2875
図版17　（上）　礎石建物ＳＢ2850と重複する基壇状遺構ＳＸ2860・ＳＸ2870
　　（下）　基壇状遺構ＳＸ2870の西辺石組
図版18　（上）　基壇状遺構ＳＸ2860西南隅石組
　　（下）　溝ＳＤ2855と基壇状遺構ＳＸ2865の敷石
図版19　（上）　基壇状遺構ＳＸ2860・ＳＸ2865と溝ＳＤ2866
　　（下）　溝ＳＤ2866
図版20　（上）　不明遺構（木組）ＳＸ2873
　　（下）　不明遺構（木組）ＳＸ2873
図版21　（上）　道路状遺構ＳＸ2846
　　（下）　道路状遺構ＳＸ2846全景
図版22　第107次調査区全景空中写真
図版23　（上）　Ｂ地区火葬所・土葬墓全景空中写真
　　（下）　Ａ地区石塔群全景空中写真
図版24　（上）　Ａ地区下層の墓所区画施設ＳＸ3136・ＳＸ3139
　　（下）　Ａ地区下層の墓所区画施設ＳＸ3136・ＳＸ3139
図版25　（上）　Ａ地区上層の石塔群全景
　　（下）　Ａ地区上層の石塔群全景
図版26　（上）　Ａ地区上層の石塔群
　　（下）　Ａ地区上層の石塔群南半部
図版27　（上）　Ａ地区上層の石塔群北半部
　　（下）　Ａ地区上層の石塔群Ⅲ区南半部
図版28　（上）　Ａ地区Ⅲ区出土の宝篋印塔基礎ＳＱ3140―224
　　（下）　通路遺構ＳＸ3125
図版29　（上）　石塔群ＳＱ3140―170蔵骨器出土状況
　　（下）　石塔群ＳＱ3140―170蔵骨器出土状況
図版30　（上）　石塔群ＳＱ3140―176蔵骨器出土状況
　　（下）　石塔群ＳＱ3140―250蔵骨器出土状況
図版31　（上）　石塔群ＳＱ3140―229蔵骨器出土状況
　　（下）　石塔群ＳＱ3140―233・240蔵骨器出土状況
図版32　（上）　Ｂ地区火葬所・土葬墓全景
　　（下）　Ｂ地区火葬所・土葬墓

図版33　（上）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3100

（下）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3100・ＳＸ3101・ＳＸ3103

図版34　（上）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3102

（下）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3104

図版35　（上）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3105・ＳＸ3106

（下）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3108・ＳＸ3109・ＳＸ3112・ＳＸ3114・ＳＸ3115土葬墓ＳＸ3118

図版36　（上）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3117

（下）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3109・ＳＸ3110

図版37　（上）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3111

（下）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3112

図版38　（上）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3113

（下）　Ｂ地区火葬壙ＳＸ3114

図版39　（上）　Ｂ地区土葬墓ＳＸ3118

（下）　Ｂ地区土葬墓ＳＸ3119

図版40　（上）　Ｂ地区土葬墓ＳＸ3120

（下）　Ｂ地区土葬墓ＳＸ3121

図版41　（上）　Ｂ地区土葬墓ＳＸ3122

（下）　Ｂ地区土葬墓ＳＸ3124

図版42　第104次調査　ＳＤ320・ＳＥ3069・ＳＥ3070、茶灰色土層出土土器・陶磁器

図版43　第105次調査　ＳＥ3085・ＳＫ3091・ＳＸ3090・ＳＸ3095出土土器・硯

図版44　第105次調査　暗茶色土層出土土器

図版45　第105次調査　暗茶色土層出土土器

図版46　第105次調査　暗茶色土層出土墨書土器・坩堝・石帯・水晶

図版47　第105次調査　暗茶色土層出土硯

図版48　第105次調査　ＳＸ3096出土弥生土器・出土石器

図版49　第97次調査　ＳＤ1652・ＳＤ2848・ＳＤ2849出土土器・陶磁器

図版50　第97次調査　ＳＤ2852・ＳＤ2857・ＳＤ2858・ＳＫ2868・ＳＫ2878・ＳＧ1630出土土器・陶磁器

図版51　第97次調査　ＳＧ1630・ＳＸ2847・ＳＸ2879・ＳＸ2860出土土器・陶磁器

図版52　第97次調査　ＳＧ1630西拡張部出土土器

図版53　第97次調査　ＳＧ1630拡張部出土土器・陶磁器

図版54　第97次調査　整地層出土土器・陶磁器

図版55　第97次調査　整地層出土土器・陶磁器
図版56　第97次調査　整地層出土陶磁器
図版57　第97次調査　暗褐色土層・暗灰色土層出土土器・陶磁器
図版58　第97次調査　暗褐色土層・暗灰色土層出土土器・陶磁器
図版59　第97次調査　出土瓦質土器
図版60　第97次調査　出土瓦質土器
図版61　第97次調査　出土瓦質土器
図版62　第97次調査　ＳＢ2850上面腐植土層出土木簡実測図
図版63　第97次調査　ＳＢ2850上面腐植土層出土木簡
図版64　第97次調査　出土漆器
図版65　第97次調査　出土木製品
図版66　第97次調査　出土木製品
図版67　第97次調査　出土木製品
図版68　第97次調査　出土木製品
図版69　第97次調査　出土土製仏像残欠
図版70　第97・107次調査　出土瓦類・石製品・貨泉
図版71　第107次調査　ＳＱ3140・ＳＸ3137・ＳＸ3130出土土器
図版72　第107次調査　ＳＸ3130出土土器
図版73　第107次調査　ＳＸ3130出土土器
図版74　第107次調査　ＳＱ3140出土蔵骨器
図版75　第107次調査　暗灰色土層、Ａ－Ⅰ・Ⅱ区上層遺構面出土土器
図版76　第107次調査　Ａ－Ⅰ・Ⅱ区上層遺構面、Ａ地区遺構面、整地層出土土器・陶磁器
図版77　第107次調査　Ａ－Ⅱ区上層遺構面、整地層出土土器・陶磁器
図版78　第107次調査　ＳＸ3100・ＳＸ3102・ＳＸ3104出土土器・陶磁器
図版79　第107次調査　ＳＸ3107・ＳＸ3111・ＳＸ3115・ＳＸ3124出土土器・陶磁器
図版80　第107次調査　出土石塔
図版81　第107次調査　出土石塔
図版82　第107次調査　出土相輪・宝篋印塔・宝塔・板碑
図版83　第107次調査　出土鉄釘

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

I 調 査 計 画

大宰府史跡の発掘調査は昭和43年に開始以来政庁跡（都府楼跡）を中心とした官衙遺構の解明に重点を置いて進めてきた。また昭和57年度から始った第３次5か年計画では観世音寺地区土地区画整理事業の開始に伴い、その事前調査として政庁跡前面域を中心とした地域について条坊遺構を明らかにすることを主たる目的として調査を行った。その結果、条坊制に関する遺構は検出されず、当初の目的は果せなかったが、その反面、政庁跡前面域は従来の推定とは異り、少くとも東西400メートル、南北200メートルの範囲が大宰府を構成する官衙域であったという重要な事実が明らかとなり、大宰府研究に新たな成果をもたらすこととなった。このような過去20年間にわたる発掘調査によって大宰府の中枢ともいうべき政庁跡とこれを中心とした府庁域、すなわち官衙域を大まかではあるが把握することができた。

一方政庁跡の東方に位置する観世音寺およびその背後に分布していると推測される同子院跡については、これまで若干の発掘調査が行なわれているが、政庁跡と比較しても未だ断片的なものであると言っても過言ではなく、特に観世音寺自体については、その伽藍配置復原のための確たる手懸りがつかめていない。また子院跡については『筑前国続風土記』に記す49院のうち、これまでに金光寺と推定されるものについて調査を行い建物跡、石塔群などを検出し、今後の子院跡調査に対する有力な資料を得ることができた。しかしながらその他のものについてはほとんど調査の手は及んでいない。以上のような点から第４次５か年計画では観世音寺および同子院跡の遺構解明に主眼を置いて調査を進めることとし、まず初年度は昨年度の調査で明らかとなった金光寺跡推定地における石塔群の調査と観世音寺南門の前面域について調査を行うこととした。

この第４次５か年計画については昭和62年５月21日、22日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会議において了承されたので計画どおり実施することとした。

調 査 次 数	調 査 地 区	調査面積（㎡）	調 査 期 間	備　　考
106	9ＫＫＫ	500	４月～６月	金光寺跡
107	6ＫＫＺ	1,600	７月～９月	観世音寺南門前面域
108	6ＫＫＺ	1,500	10月～12月	〃
109	6ＫＫＺ	1,000	１月～３月	戒壇院前面域

II 調 査 経 過

概　要

昭和62年度の発掘調査は61年度事業である第105次調査を継続して行うことから開始した。調査地は政庁正殿の後方約150メートルの所で北から南へ向かってのびる幅約35メートル、長さ約90メートルの舌状台地である。その南半部はすでに61年度に調査が終了しており、その北半部について調査を行った。この調査で検出した主な遺構は掘立柱建物１棟、井戸１基である。この掘立柱建物（ＳＢ491）は昭和47年度に行った第24次調査においてその一部を検出しており、今回その規模を把握することができた。この調査によってこの台地上では掘立柱建物３棟、井戸１基が検出され政庁後背地における遺構の一端を窺うことができた。この第105次調査の遺構検出の終了にともない５月14日から第107次調査として推定金光寺跡における石塔群の調査を開始した。この推定金光寺跡については、これまで三次にわたる調査によって礎石建物６棟、苑池などを検出している。昭和61年度遺跡整備にともない、この遺構群の西側にある丘陵斜面にトレンチを設定し、試掘を行ったところ五輪塔および火葬壙と推定される遺構が検出されたため斜面全面について調査を行うことにしたものである。この斜面中腹には10メートル×20メートル程度の平坦地があり、ここでは火葬壙18基と土葬墓７基を検出した。石塔群は、この平坦地の下の斜面一帯にわたって分布しているが、石塔はすべて分離しており完全な形で残っているものは１基も存在しない。これらの石塔については写真撮影および実測を行ったのちすべてを取り上げた。この調査によって、この金光寺推定地では火葬所、石塔群、礎石建物をセットとして把握できたこととなり、今後の子院跡発掘調査の基準ともなるべき資料を得ることができた。この調査は石塔群の調査に手間どったものの９月30日をもってすべてを終了することができた。この第107次調査の遺構検出が一段落したのにともない７月４日から第109次調査として観世音寺南門推定地前面の調査に着手した。この調査では調査対象地が湿地であったことや第107次調査の石塔群の調査に手間どったため二か所を並行して調査を行うこととなったため表土および床土の除去を行い遺構検出を開始したのは９月に入ってからであった。遺構検出には約70日間を費した。遺構検出終了とともに写真撮影、実測を行い12月24日にすべてを終了した。またこの間11月30日から12月14日までは第110次調査として政庁跡前面の大楠地区における住宅建設にともなう事前調査を行った。調査地は政庁南門から西南へ約230メートルの所で、条坊復元案のうえでは右郭五条二坊にあたる。調査地の東半部には、これまでの調査によって南北方向にのびる幅14メートルほどの大溝（ＳＤ320）を検出している。今回はこの溝の西側における遺構の状況についての知見を得ることを目的とし、溝ＳＤ320自体についての調査は将来

に期することとし、その範囲を確認することのみにとどめた。

新年に入ってからは１月12日から第109次調査地の南側隣接地の調査を第111次調査として開始した。この調査では重機によって表土、床土の除去を行い１月22日から遺構検出を開始し、３月末日現在なお調査中である。また１月27日から２月２日までの間、学校院北辺部において現状変更にともなう調査を行った。この調査では倉庫と推定される掘立柱建物１棟を検出した。この他学校院跡西辺部、政庁跡東北部において住宅建設にともなう事前調査を行った。

以上が昭和62年度に行った発掘調査の概要である。これを地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考
106	6ＺＧＫ	5	870410～870412	学校院西辺部
107	9ＫＫＫ	440	870514～870930	金光寺石塔群
108	6ＡＹＴ-Ｃ	8	870525～870526	政庁東北隅
109	6ＫＫＺ	1,790	870704～871224	観世音寺南門前面域
110	6ＡＹＭ	350	871130～871214	大楠地区
111	6ＫＫＺ	1,480	880112～	観世音寺南門前面域
112	6ＺＧＫ	78	880127～880202	学校院北辺部

2　第104次調査

南北に走る大溝ＳＤ320は既に当該地より北側では昭和46･58年度に第14次調査、南側では昭和56年度に第76次調査として実施している。そこで、当該地はその中間に位置することから、この溝の存在を再確認することを最も大きな目的とした。しかし、このことだけに留まらず、東隣地域の不丁地区官衙における西への拡がり、および西隣接地区の「官人居住」域の有様をも含めて調査を実施することとなった。調査地は土地区画整理事業終了後であったため、旧地表よりも約1.0m程地上げされていた。この土砂の除去に、昭和61年11月27日から重機を使用した。他の現場との関係から12月12日にいたってようやく遺構検出作業に入ることとなった。また、本調査区に西接する地域に住宅建設の届出がなされたため、この部分の調査を、12月22・23日に実施した。この両日に行った調査を一応、第104次補足調査とした。これらの調査を終了したのは翌年１月28日であり、１月30日に埋め戻しを開始した。ここでの主たる検出遺構は大溝ＳＤ320、補足調査では井戸２基、それ以外顕著な遺構は存しなかった。

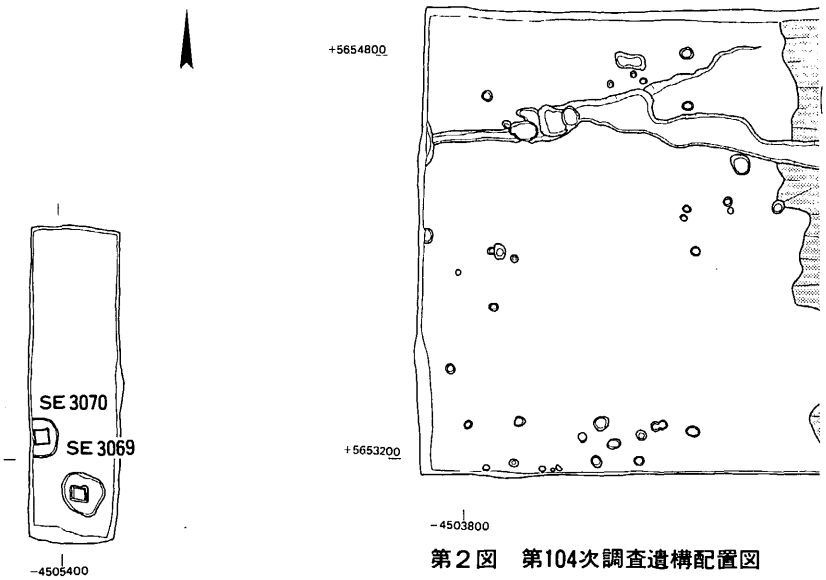
本調査地の地番は、太宰府市大字観世音寺字大楠326番地および補足は327番地である。

検出遺構

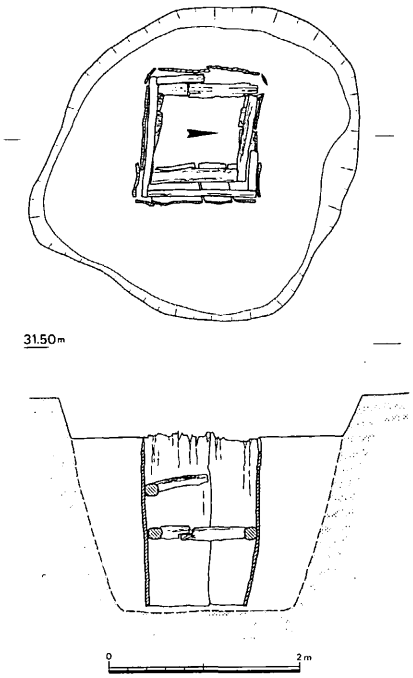
大溝ＳＤ320の東側には顕著な遺構はなく。西側に極めて稀薄なピット群、それに井戸２基が存していたに過ぎなかった。

溝

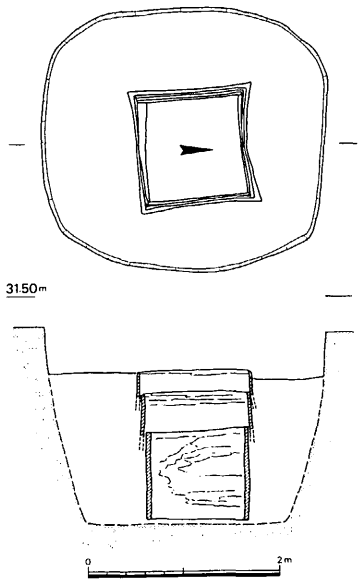
SD320　東西肩を検出し、確認した時点で発掘を中止したため、溝の最上層部を調査したに



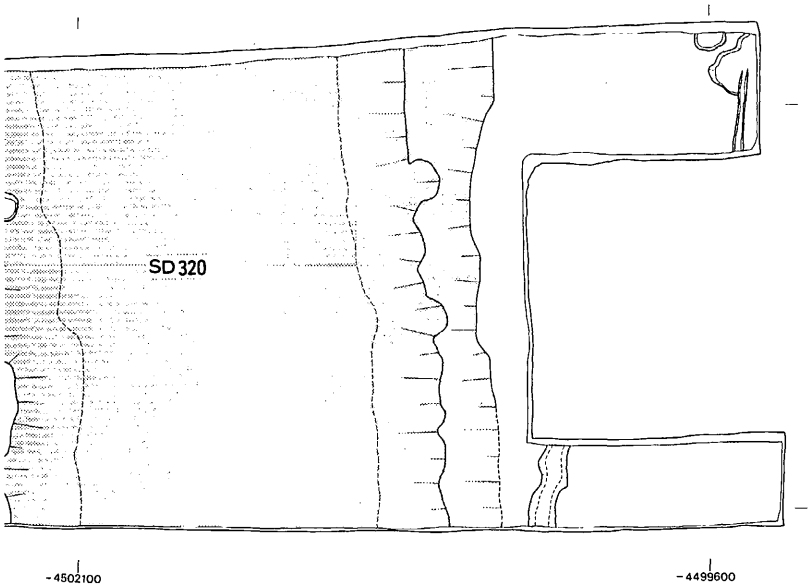
第２図　第104次調査遺構配置図



第３図　SE 3069実測図



第４図　SE3070実測図



過ぎない。東西肩が不安定なため、幅を測り難いが、16～17mある。第14・76次調査および本次調査の成果を基にすると溝の方位は約45′程東に偏している。

井戸

SE3069　掘形は上面では不整形を呈するが、一辺1.6m程の隅丸方形であったと考えられる。この掘形の中に東西0.7m、南北0.6mの方形縦板組の井戸側が組まれていた。掘形上面から井戸側下端までは1.2m、残存井戸側上面から下端までは0.9mである。縦板は一段だけ遺存し、また隅木はなく、横桟だけの構造である。9世紀前半代。

SE3070　掘形西側部分は未発掘であるが1.5m四方の隅丸方形の掘形になると思われる。井戸側は3段遺存し、各段は一辺を一枚板で「□」形に造っている。瓦は比較的多く出土したが、土器類は少ない。8世紀後半代。

出土遺物

遺構が少なく、しかもＳＤ320を完掘しなかったため、出土遺物は少ない。

SD320 出土陶磁器（第5図、図版42）

青磁

椀（1）　口径17.0cm、器高5.1cm、底径8.0cmである。胎土が粗いため化粧土をかけ、その上に淡黄緑色の釉をかけている。体部外面露胎部分は小豆色を呈する。内面には重ね焼き時の白色目跡が残る。越州窯系。

暗灰色土層出土土器・陶磁器（第5図、図版42、別表）

この層は遺構面を覆い、平安時代を中心とした遺物を出土した。

土師器

杯（2・3）　2は器形から底部を除く部分にヘラミガキがあると思われるが、器面摩滅のため明らかでない。焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。8世紀後半。3は外底部に板状圧痕を伴なう。10世紀代。

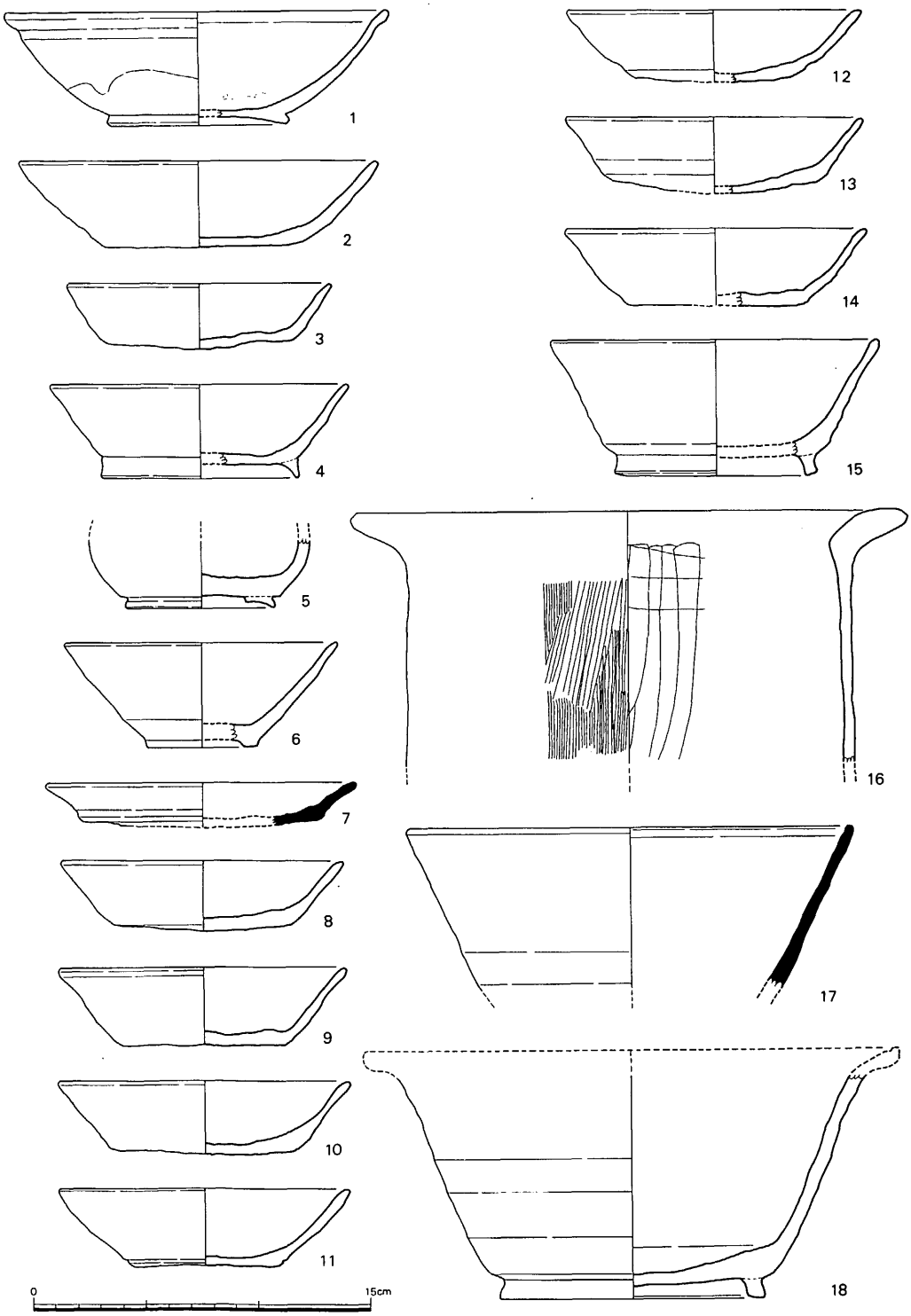
椀（4）　口径13.4cm、器高4.2cmに復原でき、淡赤褐色を呈する。高台裏には板状圧痕は認められない。9世紀後半代。

緑釉陶器

壺（5）　幅広の高台と丸味を有する体部からなるが、上半は欠失している。唾壺になると思われる。暗灰色に焼成された胎に緑黄色の薄い釉が残存部全面にかけられている。

青磁

椀（6）　体部は直線的に立ち上がるが、上半でやや内傾する。体部下位以下は回転ヘラ削り調整。茶灰色の胎に貫入を伴なう淡茶緑色の釉が畳付部を除いて、全面にかかる。内底部に白色の目跡がある。



第５図　暗灰色土層、SE3069・3070出土土器陶磁器実測図

SE3069 出土土器（第５図、図版42、別表）

須恵器

皿（７）　口径が小さく、体部は大きく外傾するタイプである。外底部はヘラ切り未調整。井戸掘形から出土した。

土師器

杯（８～14）　口径13.0cm前後を測る。10の外底部には板状圧痕を伴う。また10の内外面に煤が付着している。井戸側中出土。

椀（15）　体部は直線的に外上方へ伸び、高くて安定した高台を有する。井戸側中出土。

甕（16）　口径24.8cmに復原できる。体部は内面をヘラ削りにすることにより器壁を薄くしている。外面の刷毛目は精粗二種ある。体部外面には煤が濃密に付着している。胎土中に砂礫を含み、淡茶色を呈する。

以上の土器は９世紀前半代に属する。

SE3070 出土土器・竈（第５図、図版42）

須恵器

椀（17）　口径19.7cmに復原できる大形品である。口縁部内面に１条の沈線様の凹みが巡る。体部中位以下は回転ヘラ削り調整。焼成は堅緻で灰黒色を呈する。井戸側中出土。

土師器

鉢（18）　口縁部を外反させる鉢形土器に復原できよう。体部中位以下は回転ヘラ削り調整。高台畳付には乾燥時に付着したと思われる板様の圧痕がみられる。胎土中に微砂粒を少量含む。井戸側中出土。

竈（A）　高さ42.5cmである。付庇であり、庇内面に濃密な煤が付着している。胎土中に砂礫を多く含む。

17、18を含め８世紀後半代の特徴を有する。

瓦類

出土した瓦類は少量の丸・平瓦の他に軒丸瓦７点、軒平瓦２点、文字瓦７点である。これらは遺構面を覆う暗灰色土層およびＳＤ320の最上層から出土した。軒丸瓦、軒平瓦ともいずれも少片である。軒丸瓦は７点のうち４点が鴻臚館式である。文字瓦には「平井」と「佐」の銘のものがあり、書体等により「平井」銘のものは２種類、「佐」銘のものは４種類に分類できる。

小結

本調査ではＳＤ320、ＳＥ3069・3070以外顕著な遺構は存しなかった。第14次・76次調査の結果と合せて考えると、ＳＤ320付近には建物等重要な遺構を設置しなかったことを示しているといえよう。

3　第105次調査

本次調査地域は、大宰府政庁を西北方から一望できる小高く平担な場所であり、また古くから巨大な礎石が埋没しているとの風聞があった。官衙域において礎石を有するような建物はこれまでに政庁前面域において１棟、蔵司前面域で２棟調査したに過ぎなかった。そこで、この地域を調査し、礎石建物をも含めた遺構群の検出に大きな期待が持たれていた。

排土置場の確保のため、調査地を南北に分け、１月26日より南半部から調査を開始した。当該地は既に真砂を入れて整地されていたため、２月９日までこれの除去作業に労を要した。この後２月22日に表土除去を完了し、遺構面を覆う暗茶色土層を発掘し、遺構検出を始めた。早くも掘立柱建物ＳＢ3075の掘形の一部を２月24日に検出することになった。この暗茶色土層除去作業時の特徴は発掘区東半部からは遺物の出土は少なく、西半部に集中していた。３月６日にＳＢ3080を検出し調査した。他の遺構も含め、発掘作業が終了したのは３月17日であった。３月19日にタワー使用による写真撮影、翌20日には気球による空中写真撮影を行った。この後遺構実測、補足調査を含め４月１日に全作業が終了した。全作業を手で行い、日数を要したのを反省し、重機による埋め戻し、および北半部の埋土・表土除去作業を４月２日から４日にかけて実施した。４月８日から表土・床土の残存部分をベルトコンベアーを用いての排土作業を開始し、４月15日に完了した。４月16日から暗褐色土層を、４月20日からは、その下層であると同時に遺構面を覆う暗茶色土層を取り除く作業に入った。４月23日に土壙ＳＫ3086を調査し、４月27日には井戸ＳＥ3085、５月１日に水晶を多数出土したＳＸ3089、また同日から礫群ＳＸ3095の調査を開始した。発掘作業を終了したのは５月17日で、翌日から写真撮影のため清掃作業に入り、５月26日・27日に気球による空中写真を撮った。６月10日から実測を開始し、６月18日に全作業を終了した。

今回の調査の主たる目的であった政庁後背地における遺構の拡がりについては、遺構面が相当削平されていたとはいえ、建物や井戸等を検出調査し得た事は成果であった。地番は太宰府市大字観世音寺字大裏511である。

土層の関係

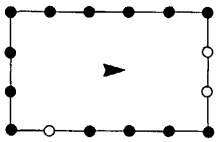
前述したように遺構面を覆う基本的な層は暗茶色土層である。しかし、対象面積が広いため、部分的には相違する部分があることも事実である。まず、南半部の東側部分の遺構面上の層は灰褐色土層であり、西側部分では暗茶色土層の下に暗褐色砂質土層が堆積していた。しかし、灰褐色土層、暗褐色土層から出土する遺構は暗茶色土層のそれと時代的に区分はできない。北半部では、北部で検出したＳＸ3095埋土の暗褐色土層以外は暗茶色土層１枚だけである。暗茶色土層と暗灰色土層の新古関係は明確にすることはできなかった。

検出遺構

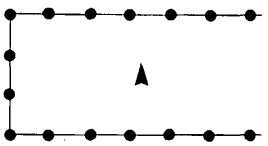
検出した主要な遺構は掘立柱建物３棟、柵列２条、井戸１基、土壙およびピット群である。それに特殊な遺構として弥生時代の土壙ＳＫ3096がある。

掘立柱建物

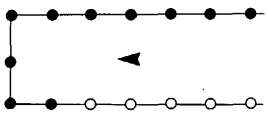
SB491　北半部中央西側で検出した南北棟建物である。西側柱列は発掘区域外であるが、既に昭和47年度（第24次調査）に調査を実施していた。今回の成果と第24次調査とを合わせ考えると３間×５間の建物になる。しかし、両次検出柱掘形は共に0.2～0.3mと浅く、更に北に延びることを想定することも可能であろう。柱間寸法を明確にし得ないが、梁行・桁行ともに７尺程度の等間と考えられる。柱掘形は1.0m前後である。本次調査では遺物は出土しなかった。しかし、第24次調査では８世紀後半代に属する資料が僅かであるが出土していることから、一応この頃に造営されたと判断する。



SB3075　南半部南東側で検出した３間×６間以上の東西棟の掘立柱建物である。方位は真東西に近い。柱位置が判明する柱穴を基に各柱間寸法を測ると、梁行・桁行ともに2.1m（７尺）等間となる。柱掘形は0.9～1.4m、深さは0.4～1.0mである。出土遺物は少量であり、かつまた細片化していたが、判断できる資料をもとにすると、もっとも新しいもので政庁第Ⅰ期後半期を降ることはないことから、政庁第Ⅱ期最初期に造営されたと考えられる。



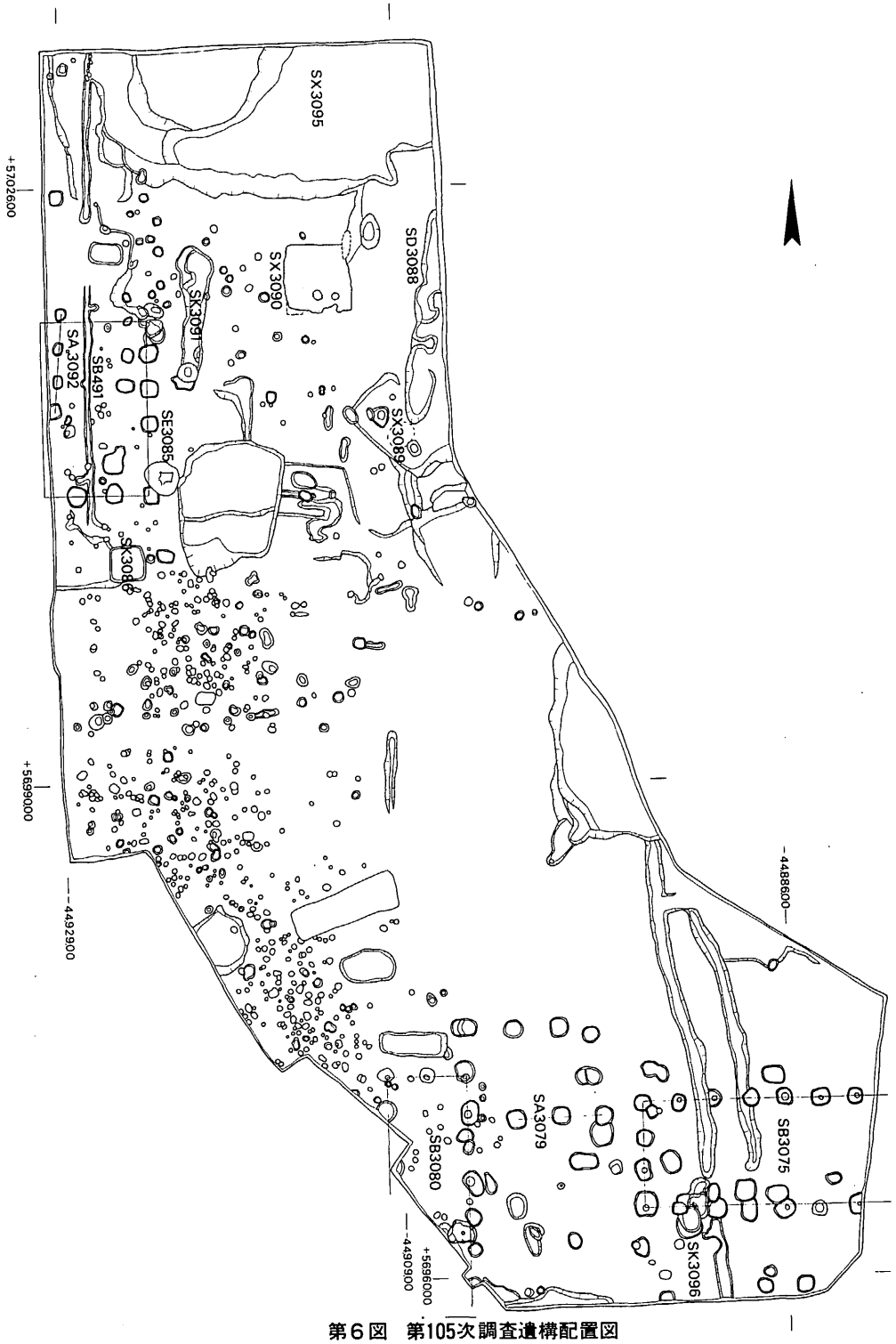
SB3080　ＳＢ3075の西に位置している２間×６間以上の南北棟建物である。柱間寸法を測り得る柱位置を示す痕跡は少ないが、判断し得る材料を基にすると、梁行は2.4m（８尺）等間、桁行は2.1m（７尺）等間と推測できる。柱掘形は0.8～1.5m、深さは0.3～0.8mを測る。出土遺物から８世紀後半代と思われる。



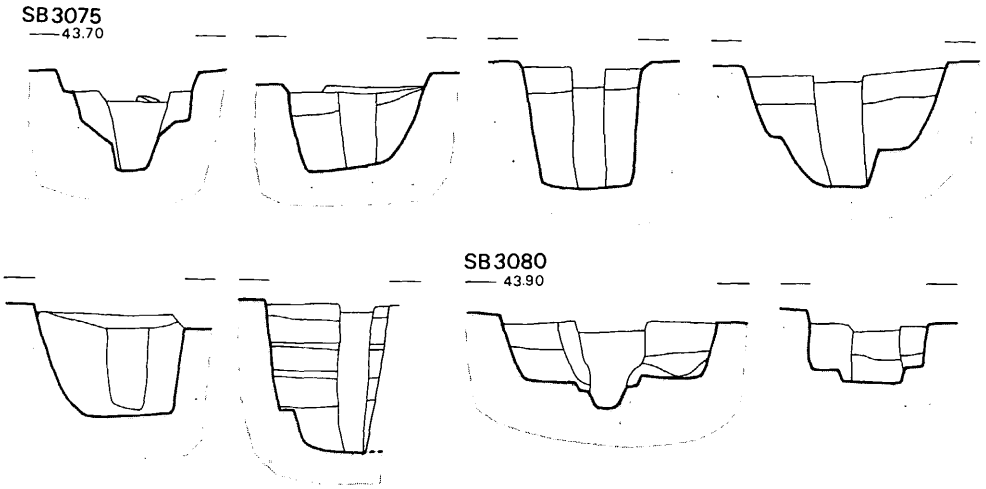
柵

SA3079　ＳＢ3075とＳＢ3080の間に位置する東西２間の柱列である。柱位置が判明するのは東端柱穴だけであるため正確なる柱間は不明であるが、一応９尺等間と考えた。出土遺物から８世紀後半代頃と考えられる。

SA3092　北半部中央西端に位置し、ＳＢ491と重複する南北の柱列である。方位はＮ—3°30′—Ｗである。全長6m（20尺）を測り、３間分検出した。柱穴中からの出土遺物が皆無のため時期は不明。



第６図　第105次調査遺構配置図



第７図　SB3075・3080柱掘形断面図

井戸

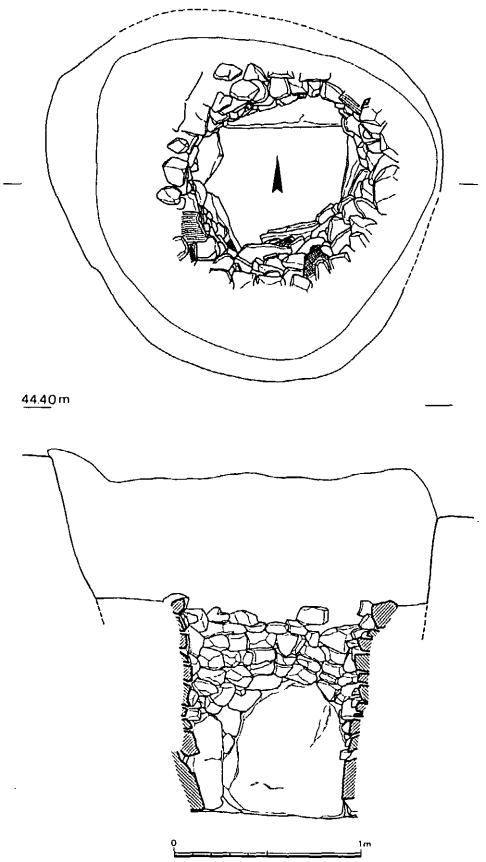
SE3085　径2m強を測る不整円形の掘形の中に、花崗岩石組みの井戸側が造られている。井戸側は、先ず大きな腰石を据え、その上に小さな石を積み上げている。形は不整円形を呈し、上面で1.0m、下面で0.8m、深さ1.2mを測る。これまでの大宰府での調査例から、石組み井戸は室町時代に入ってから出現すると考えてきたが、一気に平安時代まで遡ることとなった。しかし継続性はない。

土壙

SK3086　約２m四方の土壙である。発掘当初は方形の井戸と考えて発掘したが、0.6mの深さで底に達し、井戸ではないことが判明した。性格不明の方形土壙である。

SK3091　ＳＢ491の東側に位置し、長さ約８m、深さ0.3m程の溝状土壙である。

SK3096　1.5×1.9mの長円形を呈し、２段掘りになっている。深さは0.4m程である。中から弥生時代の壺、笠蓋、小形甕などが出土した。



第８図　SE3085実測図

政庁後背地において初めて発見された弥生時代の遺構である。

その他の遺構

SX3089　北半部中央東端に位置する。明確な遺構として検出したのではないので、遺構番号を付すのは躊躇するが、説明の都合上付した。この付近から北側には整地層がみられ、この整地層の中に水晶を多数出土する部分がみられた。これがＳＸ3089である。恐らくは整地時における祭祀の痕跡であろう。

SX3090　東西4.0m、南北4.3m、深さ0.1mである。北方、西北方の壁に幅0.1m程の白色粘土が残存していたが、南・東側の壁は削平されていたため明らかでない。そして、南壁中央部分に厚い焼土塊があり、床面に炭や焼土が残っていた。埋土およびその周辺域から坩堝など製鉄工房跡を示すような遺物が出土していることから、それに付随する施設であった可能性は高い。埋土中出土遺物から８世紀中頃に埋没したと考えられる。

SX3095　西から東へ傾斜する溝状の遺構である。一面に拳大から人頭大の石を配している。出土遺物から15・6世紀代に埋没したと思われる。

出土遺物

SB3080 出土土器　（第９図、別表）

各柱掘形・柱穴中から少なからずの土器が出土したが、細片のため図示できたのは４点だけである。

須恵器

蓋（１）　口縁部の退化が著しい。外天井部は回転ヘラ削り再調整である。柱掘形出土。

杯（２）　口縁部が欠失しているため、口径、器高は明らかでないが、類例をもとに復原すると、口径12.2cm、器高4.4cmになる。外底部はヘラ切り未調整である。体部外面に墨書の一部が残存しているが判読は困難である。柱掘形出土。

土師器

蓋（４）　口径19.4cmに復原できる。口縁部は退化し、鈍い。外天井部は回転ヘラ削り再調整している。仕上げに内外面をヘラミガキしている。胎土は精良で、焼成は良く、淡赤褐色を呈する。

皿（３）　小片であるため、復原された法量には少し無理がある。内外面には油煙が付着し、灯火器として使用されたことが判る。柱穴中出土。

以上の土器および図示できなかった他の資料を合わせ考えると８世紀後半代の年代とみることができる。

SE3085 出土土器・土製品　（第９図、図版43、別表）

井戸から出土した土器はそれ程多くはない。

須恵器

壺（５）　口径15.2cmを測り、複合口縁を有する。体部外面は格子目の叩き、内面の当て具痕跡はナデにより消し去っている。体部と頸部との境の内面には頸部接合時の指押え痕が明瞭に残っている。

土師器

椀（６）　口径12.6cmの小形の椀である。胎土中には、やや砂粒が多く、灰褐色を呈する。

黒色土器

椀（７・８）　内面だけを黒色に燻している。７のヘラミガキは少し粗いが、８は丁寧である。８の外底部には板状圧痕を伴い、また判読困難な墨書がある。両者ともに胎土は精良である。

陶製品

把手付土製品（９）　把手部分は破損し、欠失している。13cm四方、厚さ3.5～4.0cmの粘土板を造り、その上面に把手を付している。板状部分の表面はヘラ削り調整である。軟質なものを叩き締める用具であろうか。胎土中に砂粒を多く含む。焼成は硬質で、灰色を呈する。

以上の土器の特徴から９世紀後半代頃のものと思われる。

SK3091 出土土器（第９図、図版43、別表）

須恵器

杯（10）　体部は直線的に外上方へ伸び、底部との境は明瞭である。体部下位から外底部にかけて回転ヘラ削り調整をしている。外底部に墨書があるが、判読困難である。

皿（11）　口径14.8cm、器高2.4cmを測る。外底部はヘラ切り未調整である。焼成は良好で灰白色を呈する。

SK3090 出土土器（第９図、図版43、別表）

図示したのは古様を示す杯２個であるが、他に数少ないが細片が出土している。それから判断すると８世紀中頃の遺構であることがわかる。

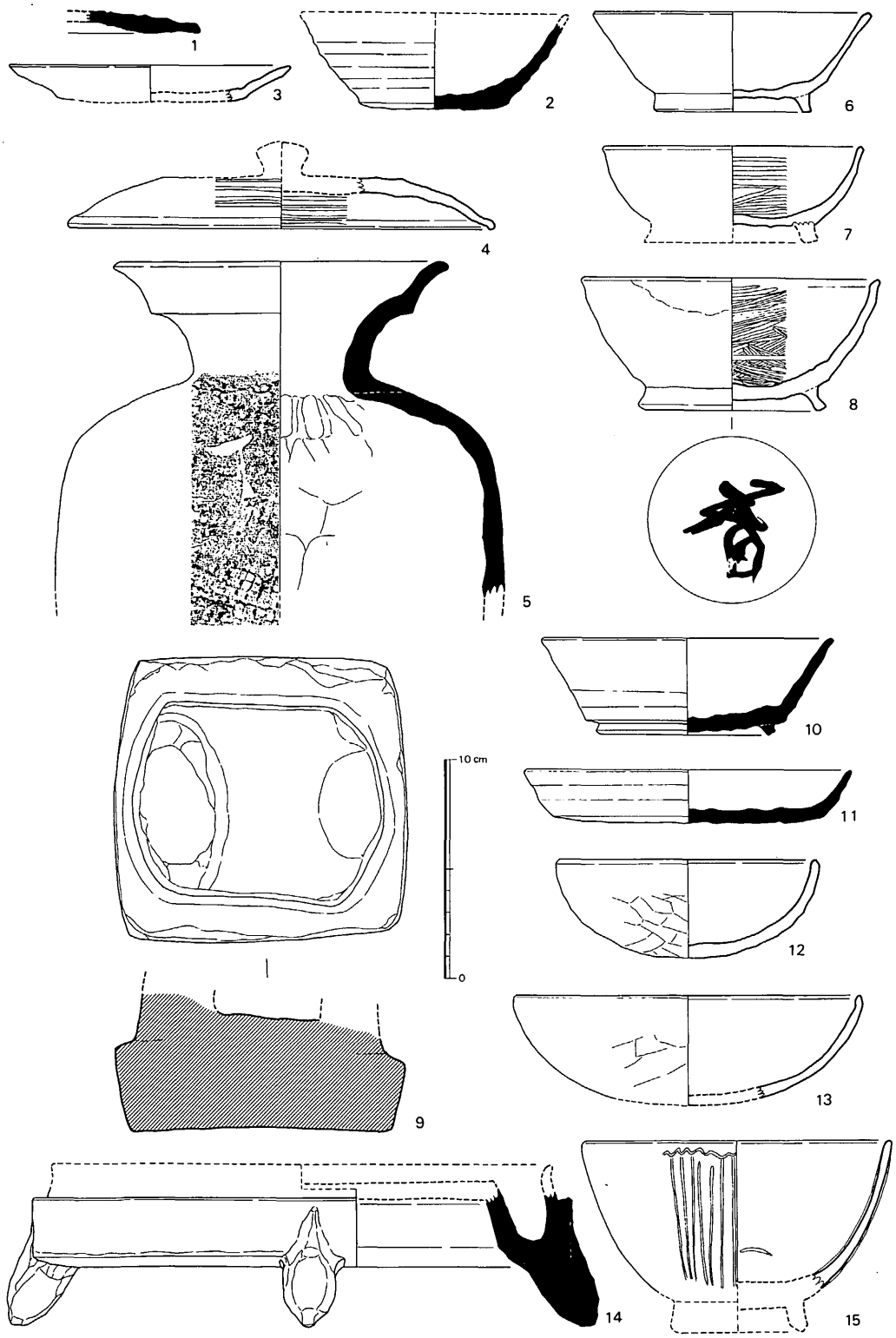
土師器

杯（12・13）　両者とも丸底であり、器高が高いことから椀とした方が良いのかも知れない。内面は平滑に仕上げ、外面は中位以下を手持ちヘラ削りしている。胎土は精良で、淡赤褐色に焼成されている。

SX3095 出土陶磁器・硯（第９図、図版43）

青磁

椀（15）　口径14.4cmに復原できる。若干灰色をおびた白色緻密な胎土に、淡黄青色の釉が比



第９図　SB3080、SE3085、SK3091、SX3090・3095出土土器・土製品・硯・陶磁器実測図

較的厚くかけられている。内面見込部分に花文、外面に細弁蓮弁が描かれている。

硯

多足円面硯（14）　脚は１個しか遺存していないので、何脚になるか明らかでない。胎土は精選され緻密である。これまで大宰府跡から発見された硯に比して異質である。台径は24.4cmである。器形および復原された法量をもとに類例を探すと忠清南道扶餘所在の定林寺跡出土のものがある。

暗茶色土層出土土器・硯・坩堝（第10～12図、図版44～47、別表）

須恵器

古墳時代

蓋（１～３）　１は６世紀後半代と考えられる。外天井部は回転ヘラ削り調整、その後「＝」のヘラ記号を入れている。２・３は身受けの返りを有する。２は外天井部と体部との境に１条の回転ヘラ削り、３は外天井部を回転ヘラ削り調整されている。７世紀前半代。

杯（４・５）　４は口径も小さく、蓋受け部立ち上りも大きく内傾する。底部は手持ちヘラ削り調整である。７世紀初頭。５は外底部を回転ヘラ削り調整し、ヘラ記号がある。６世紀後半代で１と同一時期である。

瓶（15）　口頸部を欠損し、体部が残るだけであるが、穴も欠失している。体部上位に２条の沈線、それにカキ目、中位以下は手持ちヘラ削り調整である。頸部に近い部分は、頸部接合時に生じたシボリ目がみられる。体部最大径は8.8cmを測る。６世紀後半から７世紀初頭頃のものであろう。

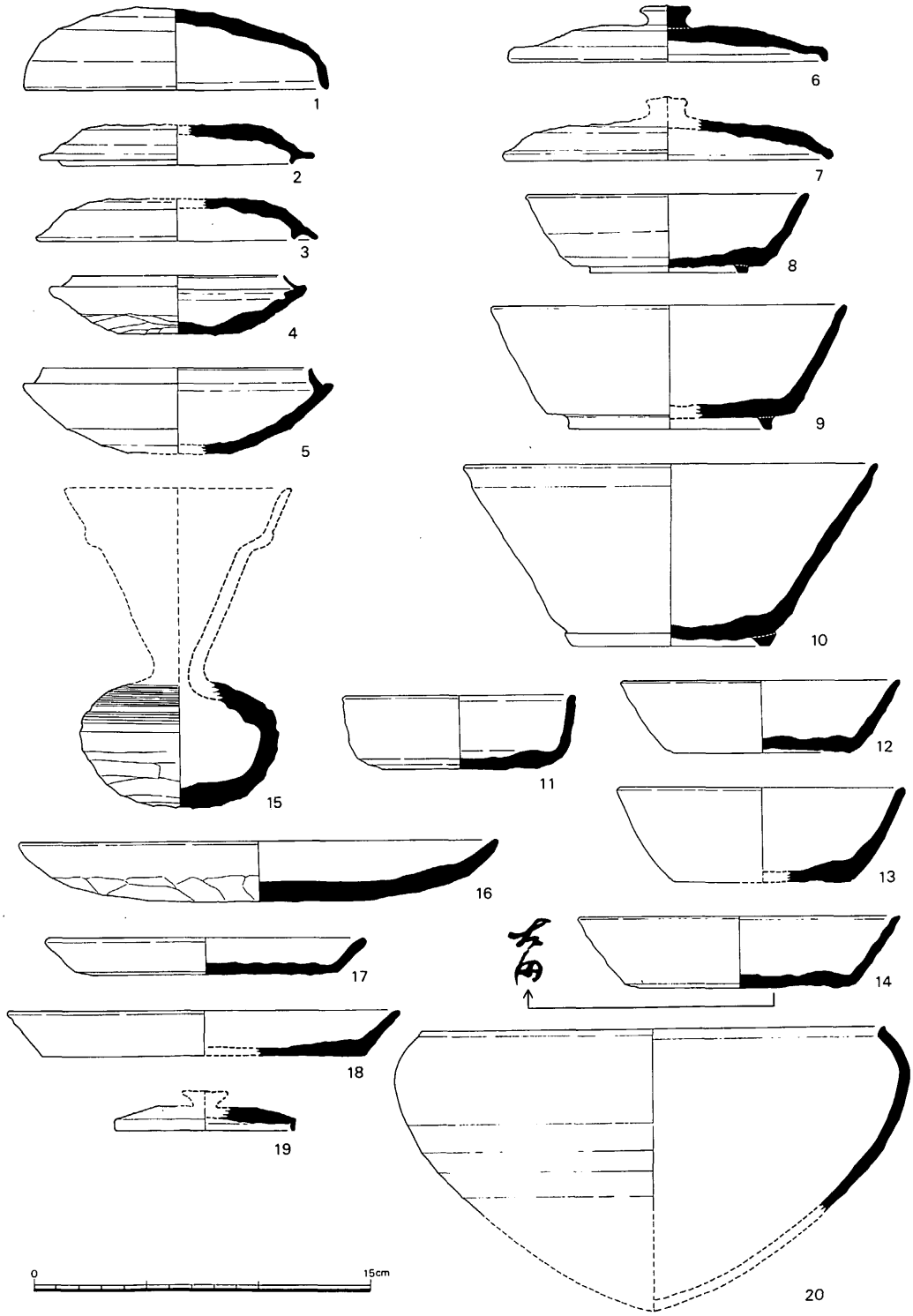
歴史時代

蓋（６・７）　６は口縁部は直立し、縁部が若干屈曲する。外天井部は回転ヘラ削り調整である。７は撮を欠失する。口縁部は退化し、丸味を有する。外天井部はヘラ切り離しのままである。

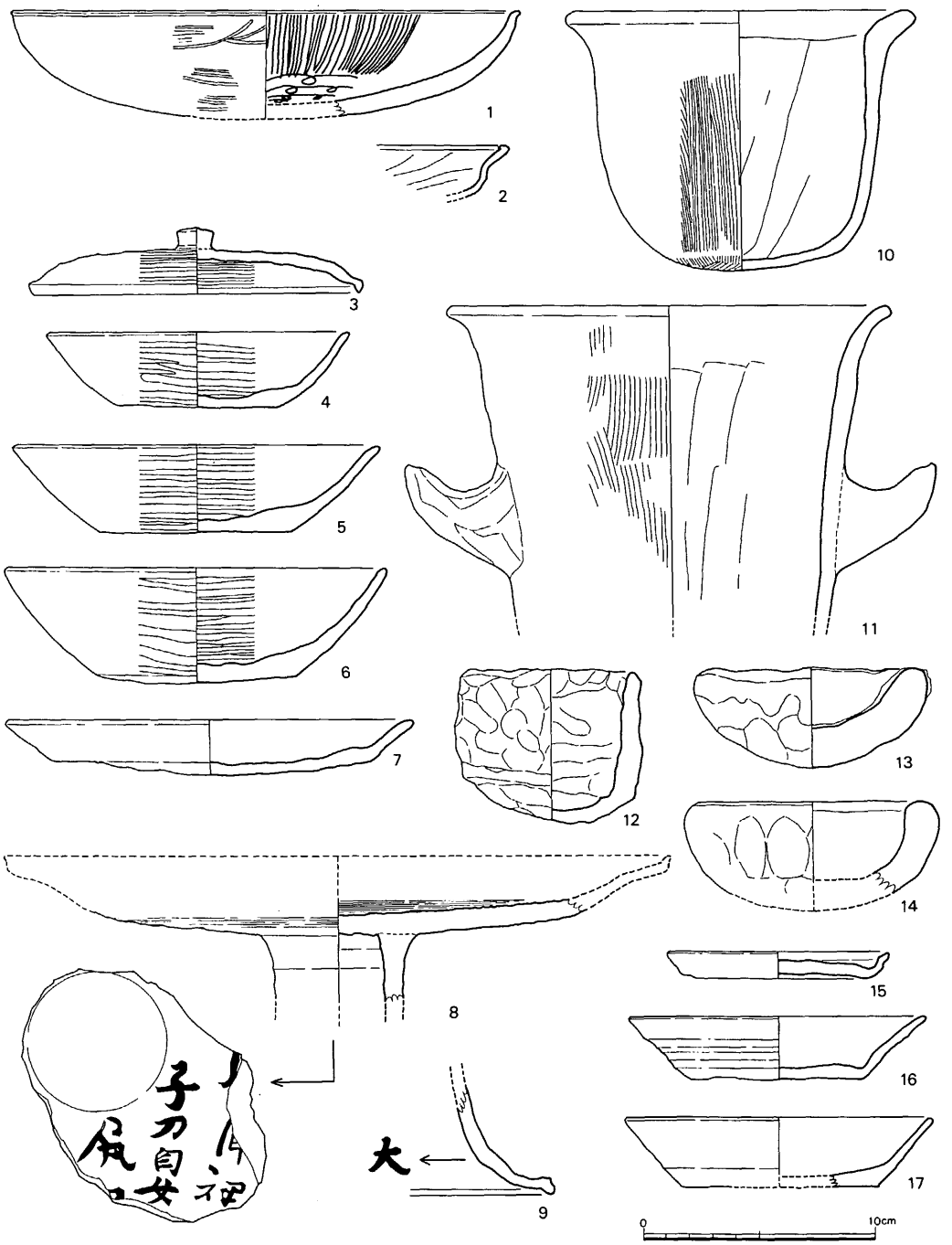
杯（８～14）　８・９は体部と底部との境が明瞭であり、また高台は底端部より内側に貼付されている。10は体部が直線的に外上方へ大きく伸びる大形品である。高台は底端部につく。いずれも外底部はヘラ切り未調整である。11～14は無高台の杯で、外底部はいずれもヘラ切り未調整である。14の外底部に「古田」と判読可能な墨書銘がある。

皿（16～18）　16は丸底に仕上げられた古様を示す皿である。外底部は手持ヘラ削り調整である。17・18の外底部はヘラ切り未調整。17の内面は平滑であり、墨痕かと思われる付着物も存していることから硯として使用されたものと思われる。

壺蓋（19）　口径8.0cmの小形品であり、口縁部の特徴から小壺の蓋と考えた。外天井部は回転ヘラ削り調整である。



第10図　暗茶色土層出土土器実測図(1)



第11図　暗茶色土層出土土器実測図(2)

鉄鉢形鉢(20)　体部中位以下を欠失する。口径は20.8cmを測る。体部は回転ヘラ削り調整されている。8世紀後半頃。

土師器

皿（1・2・7・15）　1は口径22.0cm、器高4.7cmに復原が可能である。口縁端は平坦で面を成し、端部を若干外へ引き出す。体部内面に放射状暗文を一段、見込み部分にラセン状の暗文を施す。外面には粗いヘラミガキがある。2は体部を「く」状に、更に口縁部を外方へ折り曲げ、端部を内側へ曲げる。内面には放射状の暗文がある。外面の体部屈曲部以下は平滑であることから、研磨されていると思われる。1・2ともに胎土は精良で、淡橙褐色を呈する。在地土器ではなく、搬入品であると考えられる。7は底部が脹らんだため器高2.4cmを測るが、本来は1.8cm前後であったと思われる。15は糸切り離しである。

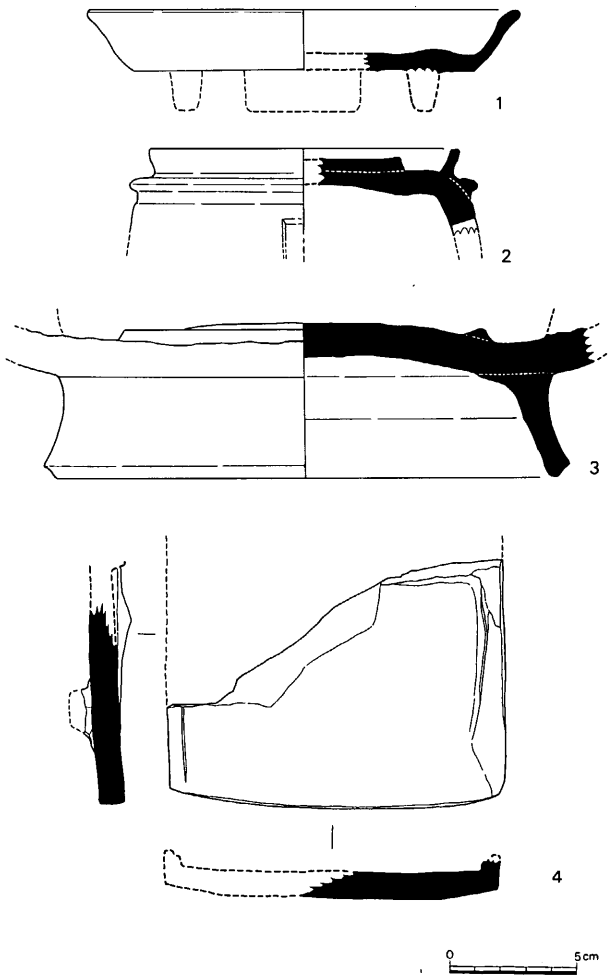
蓋（3）　天井部は丸味を有し、口縁部は断面三角形に近い。外天井部を回転ヘラ削り調整している。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。胎土は精良で、赤褐色に焼成されている。

杯（4～6・16・17）　4～6は精良な胎土を用いた精選土器で、体部下位から外底にかけて回転ヘラ削りを伴うと共に、更に内外面をヘラミガキする。16・17は糸切り、板状圧痕を伴う。共に14世紀中頃に位置づけられる。

高杯（8・9）　8の杯部は内外面ともに丁寧な横方向のヘラミガキを施している。杯部外面に墨書の一部が残存している。文字は

「□□□裡□
　　閇カ
　子刀自女□
　　□□□　」
　　尻カ

と読める。9は脚部の下部の一部が残存しているだけである。「大」の墨書銘が残っている。8・9ともに胎



第12図　暗茶色土層出土硯実測図

土は精良、焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

甕（10・11）　10は口径15.0cm、器高11.2cm、11は口径27.0cmを測る。外面は刷毛目、内面は縦方向のヘラ削りである。

硯

円形硯（1）　口径17.0cmに復原できるが、脚の剝離痕跡が1個しか残存していないためその数は明らかでない。あるいは双脚硯か。硯面は非常に平滑であり、また墨痕も残っている。

円面硯（2・3）　2は杯状の脚台部を造り、それを逆転し、上面に円盤状の粘土を貼り付け硯面とする。周堤および突帯を端部に付し、周堤と硯面との間を海部とする。脚部の透しは方形を呈し、2個所が残存するだけである。胎土は精良で淡灰色、堅緻に焼成されている。3は先ず皿形のものを造り、それに脚、周堤、突帯を貼付している。三角形を呈する凸帯の貼付により陸部と海部を区分する。硯面はナデ調整した後に研磨し、平滑にしている。胎土は精良である。

方形硯（4）　幅13.2cmを測り、2脚の一部が残存している。長さ10cm程残り、これの近くで完了するとすれば横長になる。これよりも長く伸びれば二面硯となる。残存状況からすれば二面硯の可能性が強いように思われる。硯面はナデ、堤部外面および底部外縁部はヘラ削り、外底の大部分は平行する（板状）圧痕が明瞭に残る。胎土は精良である。

土製品

手捏土器（12）　口径7.8cm、器高6.6cmである。内外面に残る指頭痕は顕著である。胎土中の砂粒は多く、淡赤褐色に焼成されている。

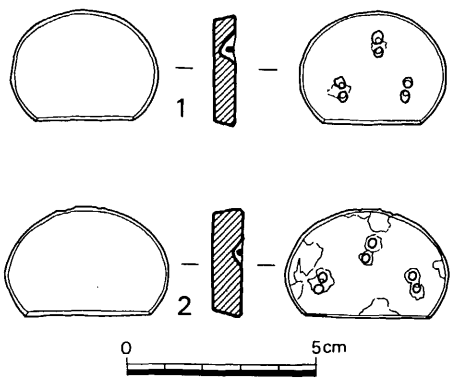
坩堝（13・14）　13の口径部から内面にかけて溶解物が付着しているが、12は残存部分が少ない（¼残）ためか付着物は確認できない。

瓦類

この調査で出土した瓦類は丸・平瓦の他に軒丸瓦4点、軒平瓦3点、文字瓦4点である。これらは遺構面を覆う暗灰色土層および暗褐色土層から出土した。軒丸瓦は4点のうち3点が鴻臚館式である。文字瓦には「平井」、「佐」銘の2種類があり、「平井」銘のものは書体によって3種類に細分できる。

石製品（第13図、図版46）

石帯（1・2）　1・2ともに丸鞆である。1は暗茶色土層出土。縦幅2.9cm、横幅3.9cm、厚さ0.7cmである。表面・側面は平滑に研磨され、濃緑色の光沢を有し、また斜に黒い縞が走る。裏面は未



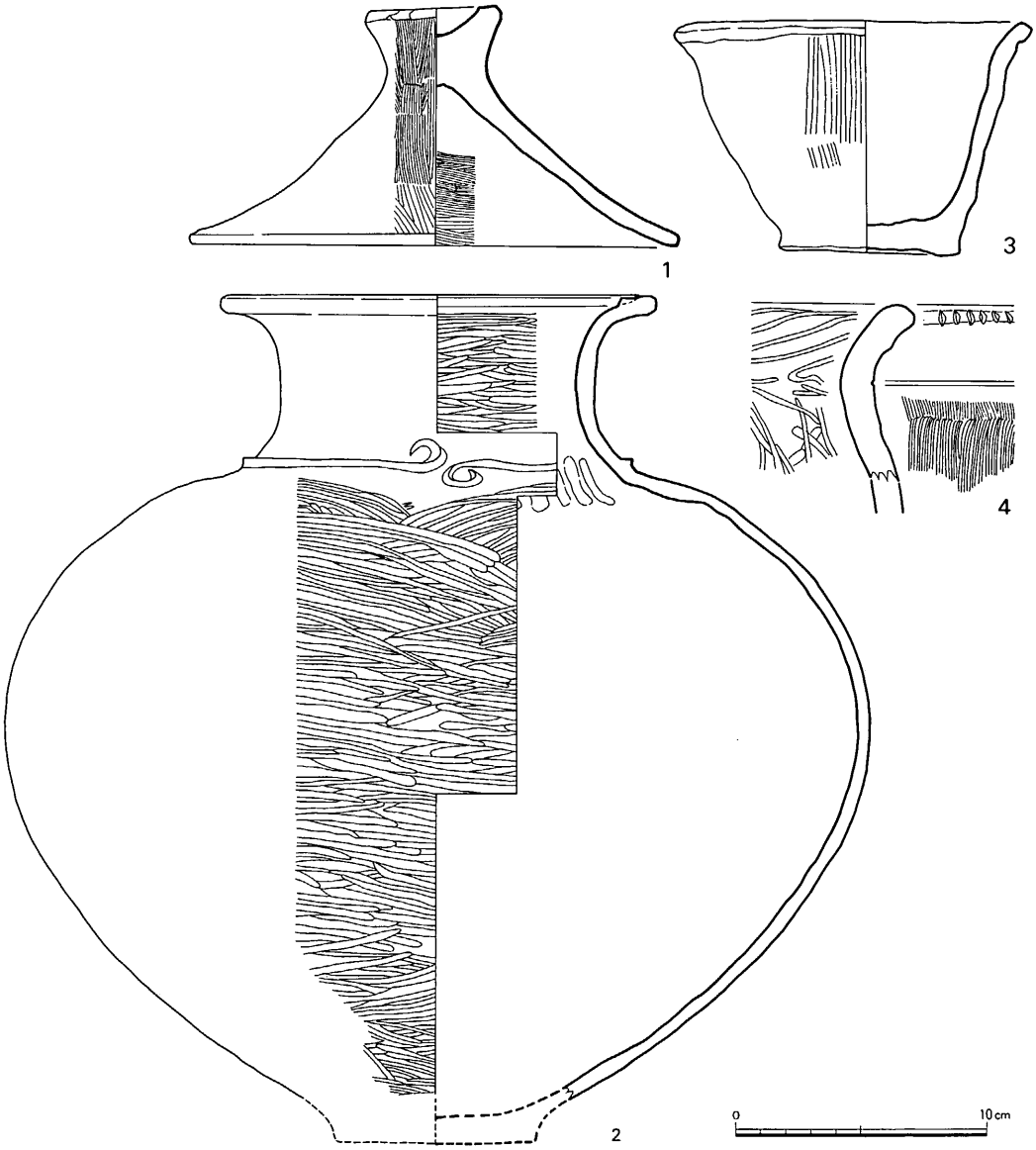
第13図　SB3020、暗茶色土層出土石帯実測図

研磨であり、３ケ所にかがり穴が穿たれている。蛇紋岩製か。

２はＳＢ3080柱穴上層出土。縦幅2.8cm、横幅4.4cm、厚さ0.8cmである。１と同様に表･側面は研磨され、裏面は未研磨である。研磨された表面は黒色を呈していることから頁岩製と考えられる。裏面は３ケ所にかがり穴がある。

SK3096 出土弥生土器（第14図１～４、図版48）

１は口径24.6cm、器高11.8cmの蓋形土器。内外面に刷毛目調整した後、口縁部にヨコナデを施



第14図　SK3096出土弥生土器実測図

す。口縁部を約⅓欠き、全縁に黒斑が認められる。黄褐色を呈す。2は口径21.7cm、底部を欠失する器高42cmの大形の壺形土器。体部の中位よりやや上に最大径を求められる。口端部内側の上面に粘土を足して段を巡らす。内外面にヘラ研磨を加える。また、頸部の付根に一条の三角凸帯を貼付するが、他例の様に全周せずに凸帯端を上下逆の方向に巻き込んで収束させている。淡褐色を呈するが、下半は赤味を帯びている。3は口径14.0cm、器高9.2cm、底径7.3cmの鉢形土器。口縁部の一部を欠失する。口縁部はほとんど屈曲せず、端部は外面にやや肥厚している。外面に刷毛目調整を施す。4は、器肉の厚い甕形土器破片で、胴部はやや張り気味である。口縁端部に刻目を入れ、屈曲部に一条の沈線を巡らす。内面に荒いヘラ研磨を施す。いずれも前期末～中期初頭。

石器（図版48　4～7）

5はＳＸ3095の埋土から出土し、その他は暗灰色土層から出土した。

4・5は横長の剝片を利用したサヌカイト製の横型石匙である。刃部は両面加工し、5の背部は剝離面をそのまま残している。6は太形蛤刃石斧。全体に風化し、基部も欠損している。刃部には一部使用による刃こぼれが認められる。幅7.5cm。玄武岩製。7は黒耀石製の石鏃で、基部を深く抉る。表裏とも素材全面に加工を施す。全長2.7cm、厚さ0.35cm。

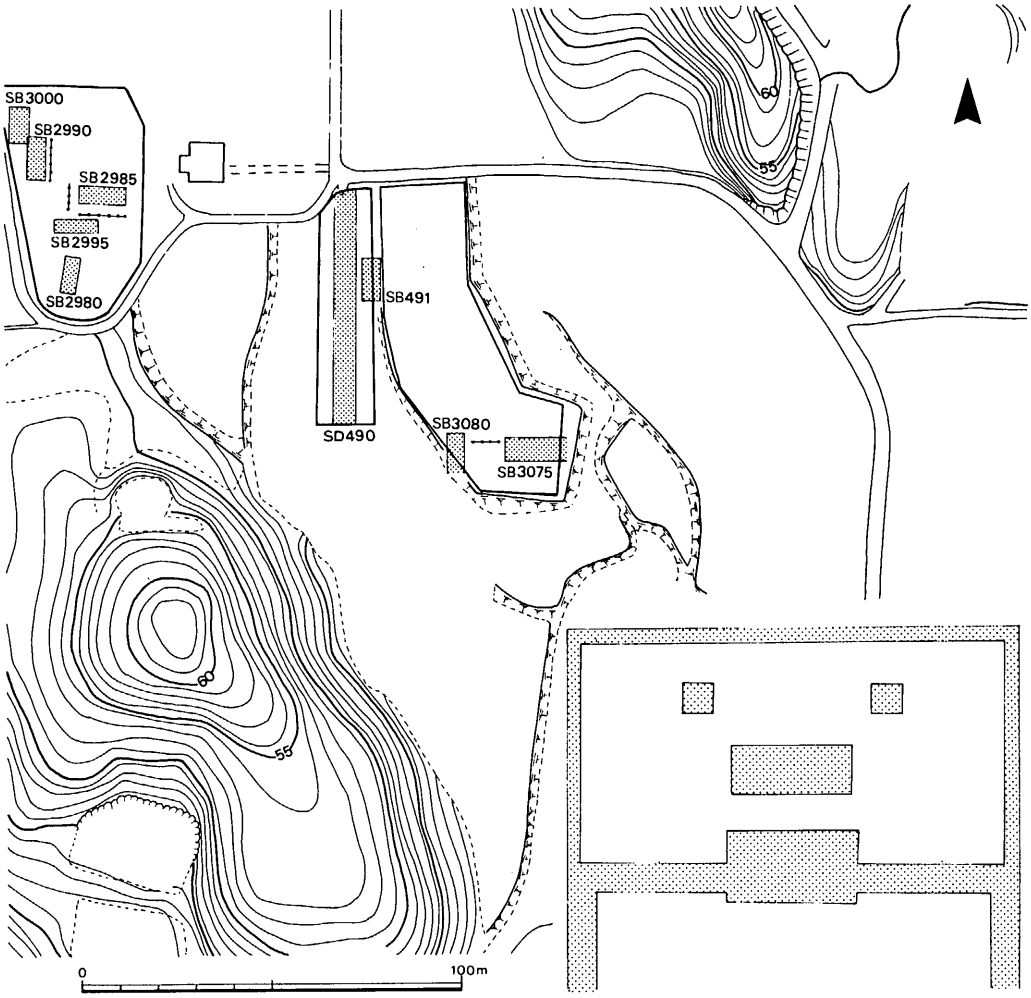
小結

政庁後背地西部域での調査は、これまでに本次調査を含め計4回実施した。これらの調査域はいずれも四王寺山から南へ延びる同一丘陵上にあり、南方には蔵司跡がある。計4回のうち第100次調査域は削平が著しく、遺構、遺物は存しなかった。したがって、ここでは第24・102・105次調査検出遺構について述べる。

3地域を総合すると、これらの地域では7世紀後半から土地利用が始まり、16世紀前半代まで途切れることなく連続するとはいえないまでも、一応各時代にわたって続く。

7世紀後半代（政庁第Ⅰ期）の遺構としては第102次調査地検出のＳＢ2980、土馬が出土したＳＫ2960、地鎮遺構と思われるＳＸ3010などがある。8世紀前半代（政庁第Ⅱ期開始期）になると、本次調査検出のＳＢ3075が造営されＳＢ491へと続く。8世紀後半代になると第102次調査地のＳＢ2995・3000、本次調査検出のＳＢ3080に移り変わる。9世紀前半代には第102次調査地検出のＳＢ2985・2990がある。これ以降に属する掘立柱建物は未検出であるが、ＳＥ3085の存在などを考慮すると、少なくとも9世紀後半代にも建物は存在していたことは十分に考えられる。政庁前面域の調査結果と同様に11世紀前半代には主要な遺構は消え、その後集落を思わせるようなピット群が出現する。

政庁後背地西部における古代の様相を総括するには、調査面積も狭く、また検出遺構も少ないことから、現時点では無理があるように思われる。



第15図　政庁後背地検出主要遺構配置図

4　第97次調査

観世音子寺院金光寺跡推定地は観世音寺の北約600m、四王寺山から南へ伸びる谷筋の一つに位置する。その調査をこれまで昭和53年度第57次、昭和54年度第67次として二度実施し、建物5棟のほか石組溝、池など多数の遺構を検出し、また多彩な遺物が出土している。これら二次の調査で、すでに団地として宅地化された南面を除いて、遺跡の東・西への広がりがほぼ確認できた。ただ北側については、池状遺構ＳＸ1630が調査区外に延びること、ＳＤ1592Ｂにともなって前面を石垣で整備した基壇状の高まりがＳＢ1590の北に存在すること、そして北側の急傾斜面まで若干の緩傾斜面を有することなどから、遺跡はさらに北へ広がると考えられた。このように、今回の調査は推定金光寺跡の北限の確定を目的としている。調査地は第67次調査区の北側で、調査の都合上、第67次調査区の一部を再発掘した。それを含めて、対象地は約1,125㎡である。遺跡の地番は太宰府市大字観世音寺字今光寺991―1番地である。

調査は昭和60年10月28日に開始した。事前に重機で表土を除去していたこともあって、11月12日には遺構の検出にはいったが、調査区の傾斜の強さもあってか土砂の堆積が複雑をきわめた。そこで一応の検出を終えた11月30日から第67次調査区北辺の再発掘にかかり、12月19日に遺構検出を終えた。年末年始の休暇を挟んで遺構の写真撮影・実測にはいった。実測終了後、補足調査にはいった。第67次調査で検出したＳＤ1592の側石構築の在り方やＳＧ1630の池底部を埋める腐植土層が池の護岸石組の下にもぐることなどから、下層遺構の存在が予測されたからである。上層遺構の保護からトレンチ調査にしたが、遺構が幾層にも分離され、さらにはＳＧ1630の底面と考えた平坦面が実はＳＢ2850の基壇整地面であるなどの稀有のできごともあり、補足調査を終えたのは昭和61年３月１日であった。

第57・67・97の三回の調査で、推定金光寺跡の発掘調査を完了した。その環境整備が次の予定に組まれたが、そのためには土砂を入れ替える必要が生じていた。それは三回に分けた調査区を一望しうる機会でもあった。そこで第97次調査区を埋め戻さず、第57・67次調査区のすべてを再検出することとした。再検出の作業は昭和61年５月19日から梅雨による中断期間を挟んで８月５日にかけて行なった。この際、調査区間の若干の掘り残し部分を合わせて調査した。ことにＳＢ1440Ａの東辺に沿う土堤状の掘り残し部の、ＳＢ1440Ａを覆う腐植土層から出土した遺物はみるべきものがあり、あわせて報告している。また西辺部に建つＳＢ1600の西側溝ＳＤ1652も一部しか検出していなかったために、その検出を行なった。ところがＳＤ1652のさらに西辺で、原位置をとどめる五輪塔群を検出した。そこで尾根の東斜面にトレンチを入れたところ、墓所・火葬所の存在が明らかとなった。寺・墓所・火葬所を一処で確認したことになる。そこでこの部分の調査は第107次調査とあわせて報告している。

なお、調査にあたって実測の基準線の方位を国土座標系の北から西へ12°59′12″偏してとって

いる。第57・67次調査では西に11°偏したとしているが、このように改めておく。

検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構に礎石建物１、建物の石組雨落ち排水溝を含む溝12、池１、杭列３、石組遺構・土壙・柱穴などがある。池は第67次調査で確認していたが、今回の調査でその全容を明らかにしている。

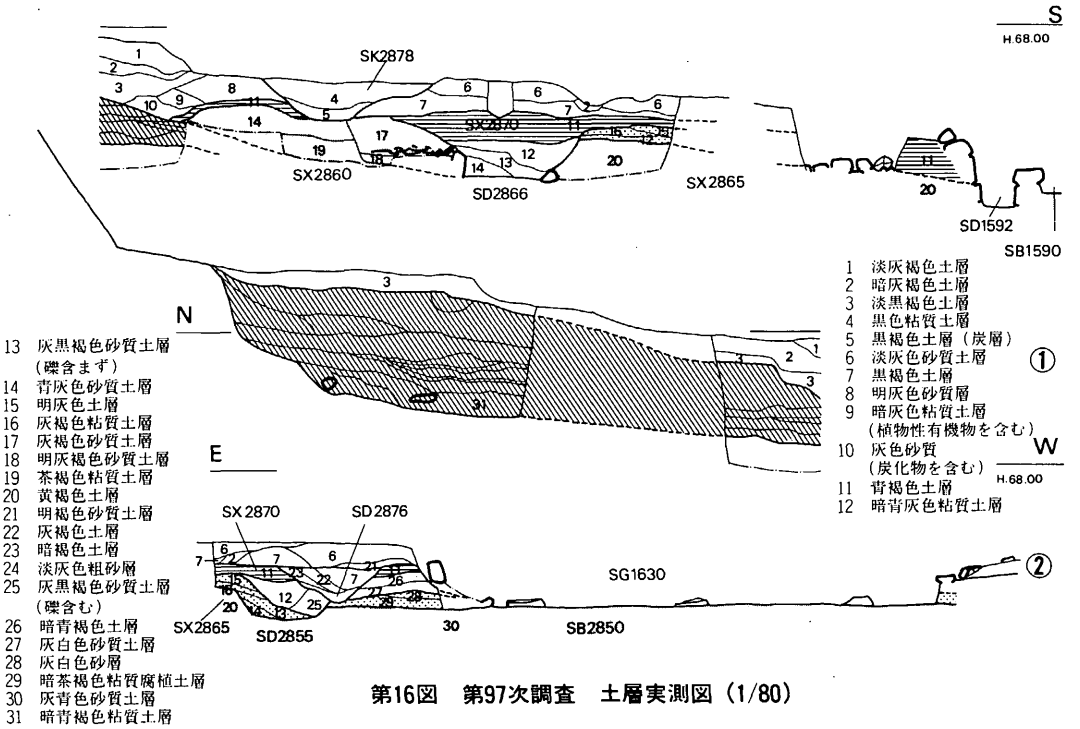
前二回の調査で推定金光寺跡の遺構を大略三期に区分している。今回の調査では時期区分に関する新たな知見を得たが、大勢は従来の通りであり、各期に分けて報告する。

土層の関係（第16図）

今回の調査区は遺跡の北限に相当するため両側の尾根および山手の三方ともに傾斜が急になり、その結果土砂の堆積は変化に富む。そこで以下に、表土・床土・二次堆積土や暗褐色土層・暗灰色土層など遺構を覆う土層を除去した後の、遺構の形成に関する土層の層序について述べることにする。

１はＦ・Ａ・Ｄトレンチの東壁を基準にした土層の模式図である。北端部は花崗岩からなる地山が深く開削される。平安時代にまでさかのぼる土器の時期からみて、この開削は第Ｉ期(13世紀後半頃）以前と考えられる。その後第Ｉ期の時期には≡で示した部分に土砂が堆積する。この堆積土層上に第II期（下限を14世紀後半～15世紀初頭とする）の遺構が形成される。すなわち南からＳＢ1590Ａ・ＳＤ1592Ａ・ＳＸ2865・ＳＤ2866・ＳＸ2866の目の細かなアミで表示した諸遺構である。このうちＳＸ2865はＳＤ2866の埋土からみて目の粗いアミで示した部分を積み上げている。次いでSD1592Ａの北側石上に石垣状の積石を行ない、ＳＤ2866を埋め、全体を青褐色土で整地してＳＸ2870を造成する。これが第III期（下限を16世紀前半とする）の遺構である。その第III期を淡灰褐色土・黒褐色土などの土層が覆い、生活面が形成される。ＳＫ2878はその面から掘り込まれた遺構であるが、第II・III期にみられた堂舎は姿を消し、性格を変えている。

２はＡトレンチの南面からＳＧ1630中島にかけての土層の模式図である。まずここでは目の細かなアミで示した第II期遺構のＳＢ2850・ＳＤ2855・ＳＸ2865が整地され構築される。次いでＳＢ2850の整地層上面に暗茶褐色粘質腐植土層などが堆積し、ＳＤ2855の東側壁は相対的に高くなる。この時点でＳＢ2850は廃棄された可能性が強いが、埋め立てられてはいない。その後１でみたようにＳＸ2565に土砂の積み上げがみられ、それにともなって目の粗いアミで示すようにＳＤ2855がやや西へ移動する。この段階のＳＤ2855の西側壁の上端は不明であるが、埋土の暗青灰色粘質土は１の断面でもみられ、埋没以前に溝として機能したことを物語っている。そのレベルからみて、ＳＤ2855の西側壁の上端はＳＤ2876で破壊されているが、ＳＢ2850を覆う暗青褐色土層の面にあろう。このようにＳＢ2850は第II期の途中で廃絶し、土砂に埋没した



第16図　第97次調査　土層実測図（1/80）

ことが知られる。次いで第III期のＳＸ2870の整地が行なわれる。ＳＤ2876を挾んで西にもＳＸ2870と同質の青褐色土の整地がみられる。後述するように、ＳＸ2870の西端はＳＤ2876の東側部分となるが、この溝の埋土下層が側溝となるかもしれない。ともあれＳＸ2870の整地はこの基壇状遺構の外辺にも及んでいる。そして、この整地層を切り込んでＳＧ1630が造成されている。その後先述のように第III期のＳＧ1630・ＳＸ2870およびＳＤ2870を淡灰褐色砂質土層が覆って、遺構の性格を変えて新たな生活面が形成されている。

第Ｉ期ないしはそれ以前の遺構

溝

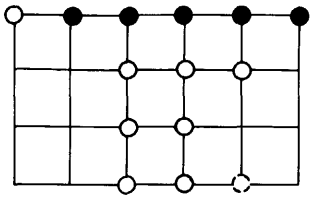
ＳＤ2872　Ｃトレンチの最下層で一部を検出した東西溝で、幅0.9m、深さ0.5mをはかる。その南肩部には一段の石組で護岸している。溝底はＳＸ2865の整地層よりも約0.8m深く、したがってＳＢ1590Ａよりもさらに下層の遺構になるが、長さ約1.2m分を検出したにすぎない。Ｆトレンチで検出した地山の掘削は第II期に先行する。この造成にともなう遺構の可能性はあるが、ＳＤ2872の時期や第Ｉ期遺構との関係を把握するにはいたらなかった。

第II期の遺構

礎石建物

第17図　第97次調査遺構配置図

SB2850　第67次調査で検出したＳＢ1590の西北、ＳＧ1630の下層から東西棟の礎石建物１棟を検出した。礎石の多くはすでに抜き取られ、また池畔の護岸石組や中島の下位に隠れている。しかし礎石５個が残存し、掘形・根石から抜き取り痕も確認でき、それらから東西５間に対し南北３間の総柱の建物が復原できる。西に12°振れる。礎石には30～50cmほどの大きさの石を用いている。北側柱列の礎石は残りが良く、その間隔から第57・67次調査検出のＳＢ1430・ＳＢ1590と同様に、東西・南北ともに柱間間隔を1.97m等間にとると推定できる。



建物の基壇は灰青色砂質土で整地され、東側・北側の雨落ちを石組をめぐらして化粧している。東側はその東のＳＸ2865との間にＳＤ2855が流れ、雨落溝となっている。この部分の石組の残りは良くない。ＳＤ2855はＳＢ2850の北東隅で東に折れてＳＤ2866と接続する一方、西に折れる。この部分、すなわちＳＢ2850基壇の北辺東半部には化粧の石組が完存する。しかし対になる石組は残っていない。トレンチ断面で幅0.8mの砂質土の堆積が溝状に観察できたが、平面的には確認できなかった。北辺では溝をなさないのかもしれない。北辺の石組はさらにトレンチの西に延びるが、この遺跡の西を限る尾根裾の岩盤につきあたる。岩盤は延長に沿うように掘削され、その裾部にＳＤ1646を削り出している。ＳＤ1646はいったん西に流れ、緩いカーブを描いて南流する。これからみてＳＤ1646がＳＢ2850の西を画すると考えられる。南側は南側柱列の南に東西にながれるＳＤ2851が雨落溝となる可能性をもっている。

ＳＢ2850の規模と基壇の四周は以上のように想定できる。その礎石位置の配置をみると、東妻柱列がＳＤ2855に接するのに対し北側柱列では約２m、西妻柱列では約1.3mと雨落溝とに間隔が開く。ことに北側柱列と基壇北辺との間隔は柱間間隔と一致しており、礎石の痕跡はまったく認められなかったが、この建物はあるいはもう１間分北に延びるかもしれない。ただその場合、西半では掘削した崖面に屋根が接触しかねない。またＳＤ1646はＳＥ2875に関する遺構の可能性もある、以上の点からみて、ＳＢ2850は５間×３間の東西棟建物で、他の建物にみられた縁が北側に取り付く可能性をもつと考えておく。

ＳＢ2850の廃棄後整地面は暗茶褐色粘質腐植土層で覆われる。この層中からは土器・陶磁器とともに多量の木製品が出土しているので、ＳＢ2850上面腐植土層として報告する。

なお、北東隅の礎石とその北約１mにある石の間に径５～６cmの自然木の端部を整えた棒５本が南北方向に並べられていたが、施設の性格は明らかにできなかった。

基壇状遺構

SX2860　Ａ・Ｂトレンチでその一部を検出した。Ａトレンチでは西南端部を検出したが、基壇の西辺・南辺をいずれも石組で化粧している。南辺はＳＤ2866に面し、40～60cm前後の石を基本的に１段に組んでいる。西辺はＳＸ2870西辺石組の下層になるため一部しか掘り下げな

かったが、一回り小さな石を用いている。これら基壇化粧の内側は粘質土・砂質土で整地され、上面を青灰色砂質土層で堅く整えている。南半約１ｍは石組にむかって傾斜している。西南隅部の石組内側には備前焼大甕１個体分が破砕して置かれ、また「随仏」銘漆器椀が埋め込まれていた。Ａ・Ｂトレンチの石組からみて11°西に振れるが、南辺は西端にむかってわずかに弧状となる。北辺は後出のＳＸ2870からみて石組されていないとみられ、整地層の広がりから、南北幅3.4ｍに復原できる。東への広がりをＣトレンチでみると、南辺石組の延長と考えられる遺構が二通りみられる。ひとつはＳＤ2872の北肩部の線に東西に並ぶ石列で、今ひとつはその北約0.6ｍにみられる地山を直線状に切り下げた個所である。しかしレベル・方位が異なり、整地層は及んでいない。東西方向の地山整形は、Ｃトレンチ西北端部で北に直角に折れる地山の削平がみられ、これに関連すると思われる。これからみてＳＸ2860の東辺はＣトレンチの西で北折すると判断される。とすれば南北幅3.4ｍに対し、東西長約11ｍ未満となる。あるいは東側が地山を整形した１段高い平坦面となっており、東辺を設けずにそれに連続させたとも考えられる。

SX2865　ＳＢ1590とＳＸ2860の間にある基壇状遺構で、13°西に振れている。その南・西・北を石組溝ＳＤ1592・ＳＤ2855・ＳＤ2866で画する。南北幅は北辺を画するＳＤ2866の南側石組が今ひとつ明瞭でないが、約5.6ｍをはかる。基壇北辺に沿って幅0.75ｍの、南辺の内側約１ｍに沿って幅約1ｍの敷石がそれぞれ東西方向に認められる。敷石の部分は黒灰色土が覆っているが、その内側は10cmほどの厚さの青灰色砂質土で整地している。整地層はＣトレンチでも認められたが、北辺を画するＳＤ2866はここまでには及んでいなかった。東西幅は第67次調査検出のＳＤ1592が参考になる。ＳＤ1592はＳＢ1590Ａにともなう段階では両岸ともに１段に石列を組んでいた（ＳＤ1592Ａ）が、次に北側の側石の上に大略２～３段の石を積み上げて基底からすれば４段約1.3ｍの高さの石垣状に造り替えている（ＳＤ1592Ｂ）。ＳＸ2865はＳＤ1592Ａにともなうから、その北側護岸石組の長さ16.2ｍがＳＸ2865の東西幅の参考になる。この確認のためＥトレンチを設定したが、整地土の砂質分の強さと湧水のため崩落がいちじるしく、断念した。ただ、石組を配する遺構は存在しなかった。なお、ＳＤ1592Ａ西端とＳＤ2855東岸とに0.6ｍのズレがあり、東西幅はそれを加えた16.8ｍとなる。ＳＸ2865は以上の規模でまず造成される。その後ＳＤ2855・SD2866の埋土処理のためか基壇内側が約0.2ｍの厚さに地上げされ、西辺ではＳＤ2855が流れを西へ約0.2ｍ替えている。遅くともこの段階にＳＢ2850は埋没している。

溝

SD1646　ＳＧ1630の下層を流れる幅0.4ｍ前後、深さ５～10cmほどの小溝で、ＳＢ2850の北辺西半および西辺の雨落溝と思われる。金光寺跡推定地の西側の尾根から下ってくる傾斜面の下端はＳＢ2850の構築にともなって急傾斜をもって掘削されるが、その裾に本溝は配される。東端部はＳＧ1630の護岸の下に隠れている。そこから掘削された崖に沿って約４ｍ緩やかな弧

を描いて西に向かい、南折してＳＥ2875を越えて南へ流れる。井戸との先後関係は明らかでないが、いったんこの井戸に水を集める役割をもつ水路とも考えられる。溝底のレベルからみると、地形とは逆に水は北流する。あるいはＳＢ2850の基壇北側に沿って東へ流れ、ＳＤ2855に注ぐものかもしれない。

SD2851　ＳＢ2850の南を画する可能性のある東西溝で、溝底のレベルからみて東へ流れるが、ＳＤ1441とは接続しない。幅0.6～0.7m、深さ5～15cmほどの素掘りにされ、ゆるやかに蛇行する。

SD2855　ＳＢ2850の東側雨落溝で、ＳＸ2865と画する。残りは良くないが、石組で護岸する。長さ約7.5m、幅0.9m前後、深さ10cmほどをはかる。東の側石はＳＤ1592Ａ北側石の西端に接続し、さらにＳＤ1441の東側石へと連らなる。また西側石はＳＤ1441の西側石に連続する。つまりＳＤ2855はＳＤ1441の北の延長部分に相当する一連の溝である。

SD2866　ＳＸ2860とＳＸ2865の間を流れる東西溝で、その東半は明らかでない。幅1.3m前後、深さ45cmをはかり、東西約５m分を確認した。北側はＳＸ2860の基壇化粧が護岸石組をなす。南側は護岸の石組はみられないが、ＳＸ2865北辺の縁部に沿った石敷きがそれを兼ねている。

井戸

SE2875　ＳＢ2850の西、ＳＧ1630の中島の下層から検出した井戸で、径80～84cmのやや角張った円形を呈する。ＳＢ2850構築のために平坦に削平された岩盤を37cmの深さ（最深部で46cm）に掘り込み、曲物を一段裾えていた。曲物はごく一部が残存していたが、腐朽に湧水とＳＤ2875からの流入水とが重さなって崩壊した。ＳＢ2850にともなう井戸であろう。

不明遺構

SX2873　Ｃトレンチで検出した木組みの遺構である。木組みはＳＸ2865の整地層（青灰色砂質土層）上に配された石の上に置かれていた。置石は四方に配されるが、横木の長さに合わせて台形状を呈している。西南の例は、横木の西端の先に当る部分を方形に約２cm削り取り、ここに直交する南北方向の横木を乗せるかのように装置していたが、実際には何も遺存しなかった。ともあれ東をそろえて北に長さ84cm、南に長さ96cmの厚味をもつ横木をわたし、その上に南北方向に８枚の幅10～15cm、長さ65cm前後の板材を並べている。これらの板材は置かれただけで、釘その他で横木に固定されてはいない。検出時には木柵の倒壊と考えたが、こうした状況からみてこれが本来の施設と判断される。木材部は整地層を覆う５～８cmほどの灰白色砂層の上から検出したが、置石との関連からみて整地層、すなわちＳＸ2865に関する遺構であることは疑えない。この砂層上に１cmほどの厚さで炭化物層がみられ、また板材の東端に合わせるように南北方向の杭列があるが、これらとの関係は不明である。

第Ⅲ期の遺構

基壇状遺構

SX2870　第67次調査検出のＳＢ1590ＡおよびＳＢ2850・ＳＸ2860・ＳＸ2865は併存するが、ＳＸ2870はそれらを覆うように造成されている。今回の調査ではＳＸ2860の約0.4m西側で南北に並ぶ石列を検出した。南北石列を南に延ばすと、その南端はＳＢ1590Ｂにともなう雨落溝のＳＤ1592Ｂの、北側石に石積みして約1.3mの石垣状に造り替えたその西端と一致する。ＳＤ1592Ｂの北石垣は長さ18.9mをはかる。石列の東側（内側）・ＳＤ1592Ｂの北側は厚さ10～40cmほどの青褐色土で堅く整地されている。それはＡ～Ｃ各トレンチで認められ、レベルもほぼ一様に平坦化されている。これらのことから、ＳＸ2870はＳＢ1590Ａの建て替えにともなってその北方に造成されたと考えられる。南北石列は検出部よりも北へは延びないが、この北端にあわせて第16図断面にみられるように、整地層は北へ傾斜する。したがってこの付近に北辺が考えられ、南北幅は約10.2mとなる。断面にはその北に幅0.9mの炭化物を含む灰色砂で埋まった溝状部がみられる。北辺に素掘りの溝を配したのかもしれない。これから仮に10.7×18.9mの長方形区画（基壇）とみた場合、その北東部で区画の内側に１段高くなった地山整形部が張り出してくる。ところでＳＤ1952Ｂ北石垣は東端でいったん南折し、さらに東折してＳＤ1587の北側石へと連続する。つまり、ＳＸ2870は長方形区画をなすとみるよりも南北10.7m、東西18.9mの、西・南側をＬ字状に石列・石垣で区画する基壇状遺構と考えたほうがよさそうである。礎石の存在を示す遺構や柱掘形はなく、建物の構築を前提としたものではなかろう。なお、南を画する石垣上端の0.9m内側に東西方向の並行する石列がみられ、その東端に直交するように地山の西側が南北方向に削平されている。ＳＸ2870に関連するものであろう。

ところで青褐色土層の整地はＳＸ2870西辺石列のさらに西に延び、尾根斜面に及ぶ。ＳＧ1630もこの整地層から掘り込まれている。つまり石列の外側に溝を設けない限りこの石列は埋没するが、平面で溝をとらえることはできなかった。石列の大半は欠けているが、それは断面にみえるＳＤ2876による破壊と思われる。この溝には上層に黒褐色土が充満し、下層は淡灰色粗砂で埋まる。下層はあるいはＳＸ2870の側溝となるかもしれない。上層の黒褐色土にともなうように南北方向の杭が２列打ち込まれていたが、打ち込み面は第Ⅲ期を覆う層からであって、SD2876とは関連しない。

園池

SG1630　第67次調査で検出し、池状遺構ＳＸ1630として報告した遺構である。ＳＸ1630は調査区外へと広がっており、その解明は今次調査の目的のひとつであった。今回の調査ではこれをほぼ完掘し、池であることを確認した。

ＳＧ1630は調査区の西辺にあり、先行するＳＢ2850・ＳＥ2875、それらにともなう溝などの遺構を埋めて構築されていた。その西南部は前回調査で検出したようにＳＸ1640の西に整地層

からの掘り込みが認められ、一部に護岸のための石組が遺存する。北側の西半部はＳＢ2850の構築による地山（花崗岩）整形をそのまま利用し、東半部には池北方の整地土の前面に石組で護岸している。護岸の石組は地山整形部の東端に接する部分からはじまり、後述の中島のカーブに合わせて東南に2.3mにわたり２段に石積みされる。そこから約110°の角度をもって北東に方向を変え、１～２段の護岸石組が緩い円弧を描いて東へ約6.5m続く。ほぼ東端で石組の残りは悪くなるが、整地層の掘り込み面は東南に向かって確認でき、護岸石組の転石が認められる。南側中央では第67次調査ですでに下層まで掘り下げており確認できない。以上のように池の北・東・南の範囲を石組・地山整形、および整地層の掘り込みで確認した。石組は石垣状につくられ、特に景観的効果を意識したとは思えない。西側については尾根の急傾斜面が迫り、法面崩落の危険性から確認していない。この部分は当時からたびたび崩壊したようで、破線で示した部分にその修復を示すように土砂を押さえる乱雑な石積みがみられた。地山面の傾斜を考慮すると、下端部は破線の１ｍも内側にはいらないものと思われる。したがって、全体として池は長円形を呈し、東西長約14m、南北長8.5mほどをはかることになる。

池の中央には中島が造られている。西側を除いて護岸石組がみられる。西岸は石組の残りが良くないが、遺存部からみて同様に護岸されていたと推定される。平面形でみると大小の円形の一部を重複させるようなプランとなっている、池の外周および島は青灰色土で整地されていた。島中央部には整地断面に喰い込むように樹根が広がっており、小丘状に盛土して樹木１本を植栽していたと考えられる。

池は上から暗灰色砂質土、黄白色砂質土、暗青灰色土、灰白色砂、暗茶褐色粘質腐植土、灰青色砂質土が層位をなしていたが、黄白色砂質土・灰白色砂両層は西部にはみられない。このうち最下層の灰青色砂質土層はＳＢ2850にともなう整地層で、暗茶褐色粘質土層がそれを覆っていた。池はその上部を覆う灰色砂層の上に青褐色土層その他で整地して造成している。したがって、暗灰色砂質土・黄白色砂質土・暗青灰色土の各層が池の埋土となる。第67次調査報告の整地層はＳＸ2870にともなう青褐色土層を主体とするが、この中に暗茶褐色粘質腐植土層をも含んでいた。しかし今回の調査で暗茶褐色粘質腐植土層はＳＢ2850整地面を覆い、ＳＢ2850の下限を示す層であるのに対し、青褐色土層はＳＸ2870にともなうことが明らかとなったので、両者は区別される。したがって前回整地層出土土器・陶磁器・木製品として報告した遺物の中で土器・陶磁器の一部、および木製品のすべては暗茶褐色粘質腐植土層出土として分離しなければならない。土器・陶磁器については今回の出土品をもってＳＢ2850の下限の指標とされたい。

道路状遺構

SX2846　調査区の東端、すなわち推定金光寺跡の東端は大野山から延びてくる尾根筋で遮断されている。その尾根の西斜面の地山（花崗岩バイラン土）を鋭く掘削して造った溝状の遺

構がＳＸ2846である。

ＳＸ2846の東壁および溝底の掘削は第67次調査検出のＳＤ1586の東岸北端付近にはじまる。一方西壁はＳＤ1586の北東隅の約2.5m北から地山の掘削がはじまる。この部分は「」状に石が組まれていたが、西・北ともに延びない。溝底は平坦で、幅3.1mをはかる。ＳＤ1586の北東隅から約6.5mまで7°30′西に振れつつ北に延びるが、やや東に向きを変え（Ｎ３°Ｅ）つつさらに13mほど北進して調査区外に抜ける。この部分では上端幅2.5m、下端幅1.6mで、深さは3.1mに及ぶ。東壁は75°、西壁でも65°の立ち上がりをもつ。直立した両壁に挟まれた底面は平坦に削平されているが、その後に水流でえぐられてかなりの起伏をもたせる。こうした形状は溝にしてはいささか人工に過ぎると思われる。さらにＳＸ2846の南延長部はわずかに方位を異にするが、無理なく第67次調査で検出したＳＤ1586にともなう道路状遺構ＳＸ1670に連らなる。このようにＳＸ2846は溝とするよりも推定金光寺跡の東端に取り付けられた道路の遺構とみたほうがよい。ただ、そう断定するには問題が残る。それはこの遺跡の北限が今回の調査区の北辺とほぼ一致することと、たとえさらに上方に遺構が所在するにしても地山の関係からそれはより高い地点になるにもかかわらず、ＳＸ2846は北に進んでも段状をなすことがなく、つまりこのまま進めば洞穴とならざるを得ない点である。この点は今少し北に発掘を進めれば確認が可能であったが、出水による崩壊の危険を避けるために断念した。

なお、ＳＸ2846の屈曲部付近の東壁に沿って板材の集積があり、**SX2847**とした。板材は幅５～10cm前後で、長さ１ｍを越えるものもあった。これらの多くはＳＸ2846と方向を同じくしており、護岸の施設とも考えたが、それを固定する杭の打ち込みはみられなかった。性格不明とするほかはない。

第Ⅲ期以後の遺構

溝

SD2848・2849　ＳＤ2848は調査区の東端を南北に走るＳＸ2846と幅約３ｍの地山掘り残し部を挟んで並行する溝で、ほぼ南北に流れる。水流によってかなり変形しているが、幅1.5～2.4m、深いところでは約1.5mの深さをはかる。上層には灰褐色砂、下層には腐植土が堆積しており、下層から蓋などの木製品・土師器・陶磁器が出土した。ＳＤ2849はさらにその西を南北に流れる溝だが、1.4m前後をはかる幅に対し、0.1mと浅い。その南北端から直交するようにして幅0.4mの小溝が東へ延び、ＳＤ2848に注いでいる。

SD2852・2858　調査区の西北端の斜面裾部を弧状にめぐる溝である。ＳＤ2852は両端を近代の溝（旧水田にともなう暗渠溝）とＳＤ2857で切られているが、残存部の溝底のレベルからみて地形とは逆に東南から西北へと流れる。幅約1.7m、深さ0.9mほどをはかる。いっぽう、ＳＤ2858は北東から西南に流れる溝で、北東端をＳＤ2857で切られている。残りの良い部分で幅約1.7m、深さ0.6mほどである。両者の方向性と位置、レベルからみて、両溝は金光寺跡推定地

北端にめぐらした上方からの漏水を排する目的で掘削された一連の溝と判断できる。

SD2857　ＳＤ2852・ＳＤ2858の間を南北に流れる幅３ｍ内外の溝で、現在の沢もこの付近を下方に流れるなど水流の集中がみられ、そのためもあって攪乱を受けている。

SD2859　ＳＧ1630の北東で検出した幅1.1m、深さ0.1mほどの溝で、浅さのため両端ともに延長の方向が不明になっている。遺構図ではＳＧ1630に注ぎ込む溝であるような印象を受ける位置にあるが、両者を関連づける資料は得ていない。

土壙

SK2868　調査区のほぼ中央に位置する土壙で、壙内から組合わせになった状態で青磁杯２点が出土した。ＳＫ2868の東方は地山を削平してやや西に傾斜する平坦面を造っているが、この付近ではその上に黒灰色腐植土が堆積し漆器ほかの木製品を含んでいた。それらを除去して東西長3.1m、南北幅1.6mの土壙を検出した。深さ５～10cmの壙内は黒色土で埋められていた。

SK2878　Ａトレンチによってその西半を断ち切られた最終期の土壙で、長径約２ｍ、深さ0.45mの浅い長楕円形を呈する。底部への傾斜は緩やかで、内部には腐植分を多く含む黒色粘質土および黒褐色土が充満し、土師器・木製品多数を包含していた。

石組遺構

SX2853・2854　Ｅトレンチの北東は地山を平坦に削平し、周囲もそれに合わせて整地していた。その北側は約0.5～1.0m高くなって再び平坦になる。その段を覆うように乱雑な石組遺構がみられる。ＳＸ2853は段裾に列石状に置かれ、その上に石が雑に積まれている。その上部は近代の暗渠にともなう溝で破壊されている。ＳＸ2854はＳＸ2853にくらべて大き目の石を用いているが、集石状をなして計画性を欠く。焼石を含む。また、その西端に五輪塔の火輪が置かれている。

杭列

SX2862　ＳＧ1630の北、ＳＤ2858の南端近くに、径６～10cm前後の丸太材を打ち込んだ東西方向の杭列が長さ3.6mにわたってみられる。杭は同方向の段落ちの上端内側に打ち込まれているが、これを延長するとやはり東西方向の段落ち上端に打ち込まれたＳＫ2868西の杭列へと連なる。両者は一連の杭列であろう。

SX2871　ＳＸ2846の屈曲部付近を東西に横切る杭列で、その東端に杭に留められた状態で南北方向1.3mにわたって板材が認められる。その北方約２ｍに南北方向の杭列がみられる。この部分ではＳＸ2846の底面をえぐる窪みに沿っており、「　　」状の杭は道路状遺構の土砂の土留め、あるいは段の造成に関する杭の可能性がある。ただ西方に約５ｍの間隔をおいて同方向の杭列がみられ、杭の先端が地山に及んでいないことを考慮すれば、ＳＸ2846に後出する別遺構の可能性がある。

不明遺構

SX2877　ＳＤ2849の西側は小範囲ながら平坦地をなしている。この部分には浅い土壙や柱根・柱穴・小溝などの遺構がみられるが、その上面は腐植土層で覆われていた。この腐植土は平坦部の全体に及ぶが、中心はＳＤ2849の西辺付近にあり、浅い土壙状を呈していた。腐植土層中からは漆器や銅銭16枚などが出土している。

出土遺物

今回の調査で出土した主な遺物は土器・陶磁器・瓦類・木製品・石製品・銭貨・金属製品である。以下に報告するが、中世土師器の器形は第67次調査の概報で皿4類･杯3類に分類しており[(2)]、それを踏襲することにする。

SD1652 出土土器・陶磁器（第18図、図版49、別表）

遺構全体の再検出時に、第67次調査で一部のみを発掘していたＳＢ1600の西雨落溝ＳＤ1652を調査した。その出土遺物である。

土師器

皿ａ（１～３）　口径7.2～7.8cmに対し、底径は5.0～6.8cmと大きいが、1.3～1.5cmと器高は低い。３は板状圧痕を有する。

皿ｂ（４～９）　口径は6.4～7.2cmであるが底径が4.0～5.0cmと小さい。器高は1.5～2.2cmと高くつくられている。８は外面のほぼ全面に煤状の炭化物が付着している。底部はすべて糸切り離しされ、内底にナデを加えている。４を除いて板状圧痕を有する。

杯ａ(10)　口径12.2cm、底径8.0cm、器高2.7cmである。内底をナデ調整し、板状圧痕を有する。

青磁

小椀(11)　内彎する体部をもつ小椀の下半小片で、高台径3.7cmをはかる。やや黄味のある淡緑色の釉を厚目に施すが、高台の畳付以内は露胎をなしている。

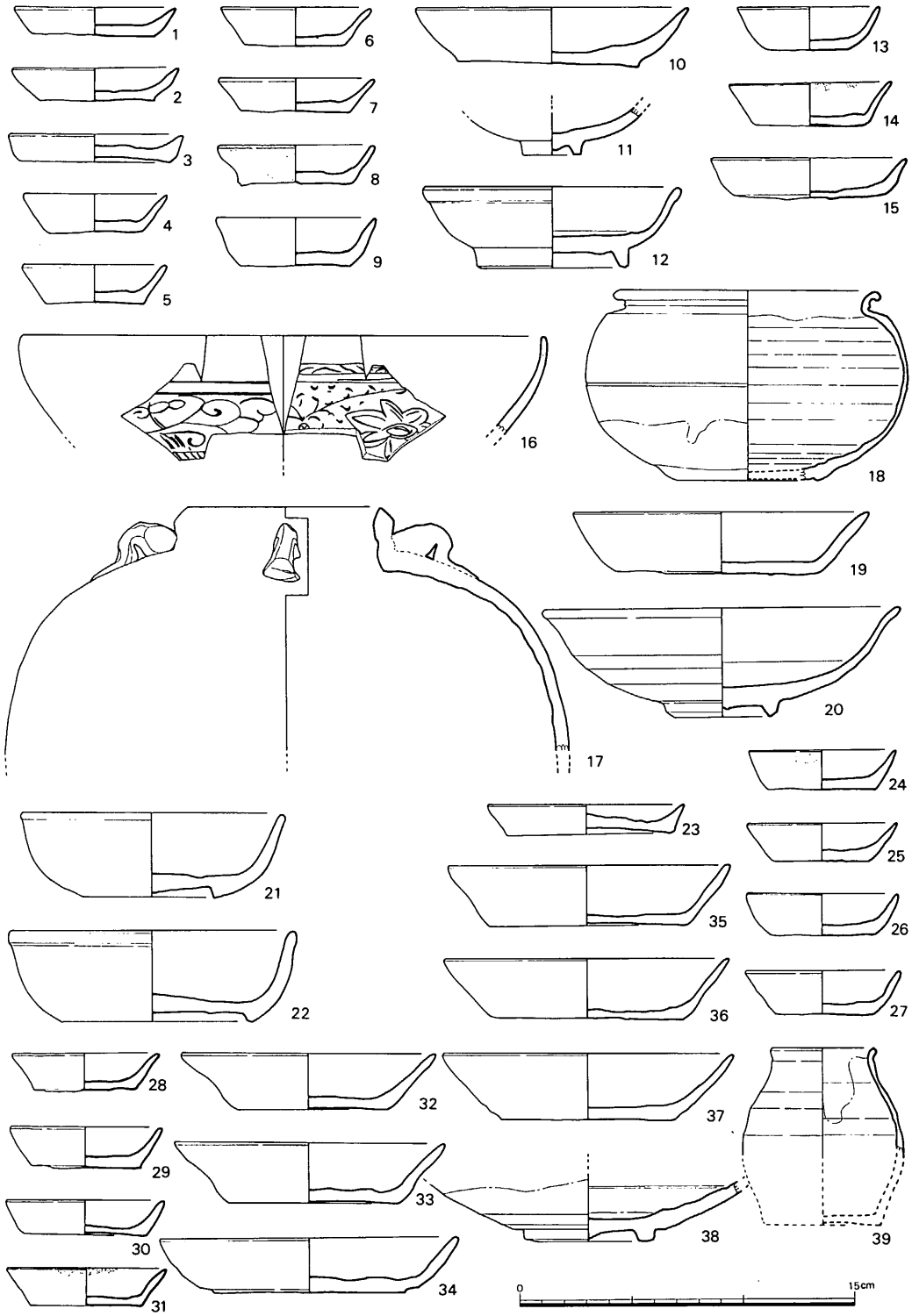
杯(12)　体部は高台部から丸味をもって内彎気味に立ち上がり、わずかに外反する口縁端部を玉縁状に肥厚させている。灰白色の胎土に淡緑色の釉を厚目に施すが、高台畳付以内は露胎をなす。体部の半分を欠くが、口径11.6cm、高台径6.8cm、器高3.6cmに復原できる。

SD2848 出土土器（第18図、図版49、別表）

土師器

皿ａ(15)　口径8.8cm、底径6.8cm、器高1.8cmをはかる。皿ａとしては器高が高目になっている。内底をナデ、外底に板状圧痕を有する。

皿ｂ(13・14)　口径に対して底径の小さな皿で、器高は1.9cmと高い。糸切り離しされた外底に板状圧痕を有し、内底をナデで調整している。13の口縁には油煙が付着している。

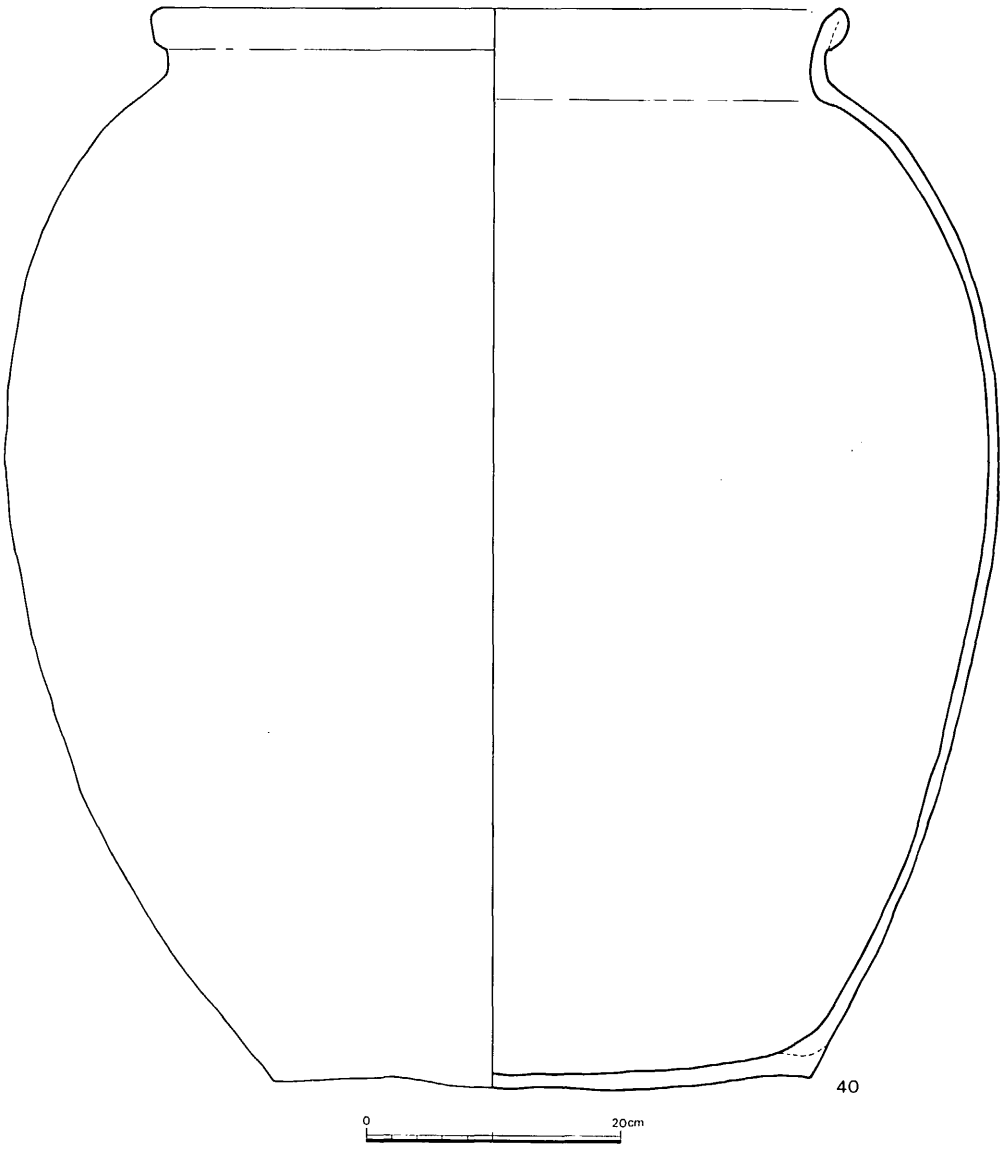


第18図　遺構出土土器・陶磁器実測図(1)

SD2849出土陶磁器（第18図、図版49）

高麗青磁

椀(16)　口径23.5cmに復原したが、小片のため口径・傾きともに正確ではない。淡茶灰色の胎土に緑色をおびた灰色の釉を施すが、ことに外面は風化のために光沢を失なっている。内外面ともに白・黒の象嵌が施されている。外面は上下の文様帯を白象嵌し、黒象嵌の花葉文帯を



第19図　遺構出土土器・陶磁器実測図(2)

挟む。象嵌は風化を受け明瞭でなくなっている。内面は双線で表現した大柄の花文の内側を黒象嵌にするが、花文の外郭線を含めてその他は白象嵌としている。

SD2852 出土陶磁器（第18図、図版50）

無釉陶器

壺(17)　口径9.9㎝に復原できる四耳壺の破片である。耳は1個完存し、他に2個確認できる。砂粒の混入する淡茶色の胎土をていねいに成形し、ヨコナデ調整で仕上げている。釉の痕跡は認められず、無釉陶器と判断しておく。

SD2857 出土陶磁器（第18図、図版50）

黒釉陶器

茶入れ(18)　第67次調査でＳＧ1630（当時は池状遺構ＳＸ1630）埋土から同一個体の破片が出土し、その出土遺物として報告した[(3)]。当時口縁部を欠いていたが、それを含む破片が今回新たに出土し、全形をうかがいうるようになった。層位的・時期的にＳＧ1630に後出するＳＤ2857からも破片が出土しているので、ここで報告しておく。砂粒を含まない暗赤色の精良で緻密な胎土を薄く整形した茶入れで、大きく球形に張る体部の肩部に稜をもつ。強い丸味をもって外反する口縁の端部は稜にむかって垂れる。体部下半をヨコナデで調整するが、下端はヘラ削りにしている。板起しされた底部は未調整のままである。内面はヨコナデされている。体部外面の中位に紐かけの沈線をめぐらす。頸部内面から外面の紐かけ沈線のやや下方にかけて、淡黄褐色の釉が薄く施され、細かい貫入を伴う。それより下位および体部内面は暗赤色の露胎である。口径11.9㎝、器高8.5㎝に復原できる。

SD2858 出土陶磁器（第18図、図版50）

青磁

椀(20)　完存する底部を中心に⅓を残す龍泉窯系の低い体部の椀で、口径16.0㎝、高台径5.0㎝、器高4.9㎝をはかる。灰白色の胎土に淡緑色の釉をやや厚目に施すが高台畳付以内は釉を削り取り露胎となる。内底の見込みの外周に浅い沈線をめぐらす。見込みの中心に花文のスタンプを押すが、文様は明瞭でない。

SD2867 出土土器（第18図、図版50、別表）

土師器

杯ａ(19)　口径13.3㎝、底径9.0㎝、器高2.9㎝の杯で、糸切り離しされた底部に目の細かな板状圧痕を有する。体部をヨコナデ、内底を強いナデで調整する。

SK2868 出土陶磁器（第18図、図版50）

青磁

杯(21・22)　いずれも龍泉窯系の杯で、重なりあった状態で底部を上にして置かれていた。両例ともに完形で、高台が退化しいわゆる碁笥底風をなす底部から体部が丸味をもって内彎気

味に立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させ丸くおさめている。21は口径11.9cm、底径5.8cm、器高3.8cmをはかる。灰色の胎土に黄色味をおびた淡緑色の釉を厚目にかける。釉は光沢をもち、粗い貫入がはいる。外底および内底見込みの中心は径4.4cmの円状の露胎となる。内底に液体状の付着痕がある。22は口径12.8cm、底径8.5cm、器高4.1cmで21よりも一回り大きく、ことに底径の大きさが安定感をもたらしている。外底の中心部のみが茶褐色の露胎となるが、他は全面に厚目の釉が施され、やや灰色味のある淡緑色、つまり空色に発色している。釉には細かな貫入がみられる。内底見込みに液体状の付着物がこびりついている。韓国新安沖沈没船出土の青磁杯に参考例がある。

SK2878 出土土器（第18図、図版50、別表）

土師器

皿a(23)　口径8.8cm、底径7.5cmに対し、器高は1.4cmと低い。体部・内底をヨコナデで調整する。糸切り離しにした外底には板状圧痕を残さない。内面が全体に煤けている。

皿b(24～27)　口径6.7～7.0cmに対し底径は4.2～4.9cmと小さい。器高は高く1.7～2.0cmをはかる。内底をナデ調整し、外底に板状圧痕を残す。24は内外面に油煙が付着している。

SG1630 出土土器・陶磁器（第18図、図版50、別表）

土師器

皿b(28～31)　口径6.6～7.2cm、底径4.6～5.4cm、器高1.6～1.9cmをはかる。いずれも糸切り離しされ、板状圧痕を有するものがある。31は内外面に油煙が付着している。

杯a(32～34)　口径11.4～13.4cm、底径6.7～8.6cm、器高2.5～2.7cmをはかる。いずれも内底をナデで調整しているが、32の外底には板状圧痕を残さない。

安南陶磁

椀（図版51―A）　底部片である。内底に鉄絵による花文がみられる。釉は淡黄緑色のガラス質で貫入を伴う。高台裏には鉄渋が塗られ暗赤褐色を呈する。高台内側に焼台剝離痕がある。胎土は灰白色を呈し、比較的緻密である。割れ面に漆が付着し、破損後補修されたことがある。重要な器としてあつかわれたことを示す。

SX2847 出土土器・陶磁器（第18図、図版51、別表）

土師器

杯a（35～37）　口径12.6～13.0cm、底径7.8～9.0cm、器高2.7～3.0cmである。35・36は内底を強くナデている。板状圧痕を有する。37はヨコナデ調整をした体部の内外面に煤が付着している。板状圧痕を有さない。

黒釉陶器

椀(38)　椀の底部片で、高台径5.8cmをはかる。回転ヘラ削りで器形をととのえている。胎土は灰白色を呈し、軟質に焼成されている。体部の内面には黒色の釉が施されているが、表面

に茶色の油滴および油膜がかかっている。天目釉としては薄い。内底見込みの中心(直径2.6cmの円形部)には釉が施されているが、その外側を幅1.8cmにカキ取り環状の露胎としている。見込みの外周に細い沈線をめぐらす。この部分に相当する外面にも沈線をめぐらすが、釉はこの部分までしか及んでいない。

SX2879 出土陶磁器（第18図、図版51）

黒釉陶器

茶入れ (39)　きわめて堅緻に焼成された口径4.8cmに復原しうる茶入れの小片がＳＸ2879から出土した。ＳＸ2879はＳＸ2870を覆う堆積土の上面から掘り込んだピットの一つで遺構配置図にはあらわれていない。黒色を呈する胎土はわずかに微砂を含む。口縁部内側の上端から外面にかけて薄く黒褐色の釉を施している。内面の大部分は露胎をなし、暗赤褐色を呈している。やや雑な造りの茶入れである。

SX2860 出土陶磁器（第19図、図版51）

陶器

甕 (40)　ＳＸ2860整地層中の、石組西南隅の裏込めから出土した備前焼の大甕で、口径55.2cm、器高85.0cmをはかる。頸部から外反して立ち上がる口縁部の端部を折り曲げて丸く玉縁にし、内外面をヨコナデ調整する。体部はあまり胴を張らない。内面を板の木口を用いたヨコ方向のナデ調整およびヘラ削りし、外面は肩部をヨコ方向のナデ、中・下半をタテ方向のナデで調整している。ナデ方向の変換部に胴部最大径があり、78.2cmをはかる。直径42.1cmと大きくつくられた底部は一方向のヘラナデで調整する。外端部に焼台の跡が二カ所あり、その片方には大きな塊が融着している。間隔から本来４個の焼台を用いたと思われる。底部に歪みがみられ、焼台片の付着にもかかわらず、安定さを失なっていない。灰白色を呈し砂礫をあまり含まない胎土を堅緻に焼成する。外面は暗灰色、内面は灰褐色、口縁部は暗茶灰色をおびている。

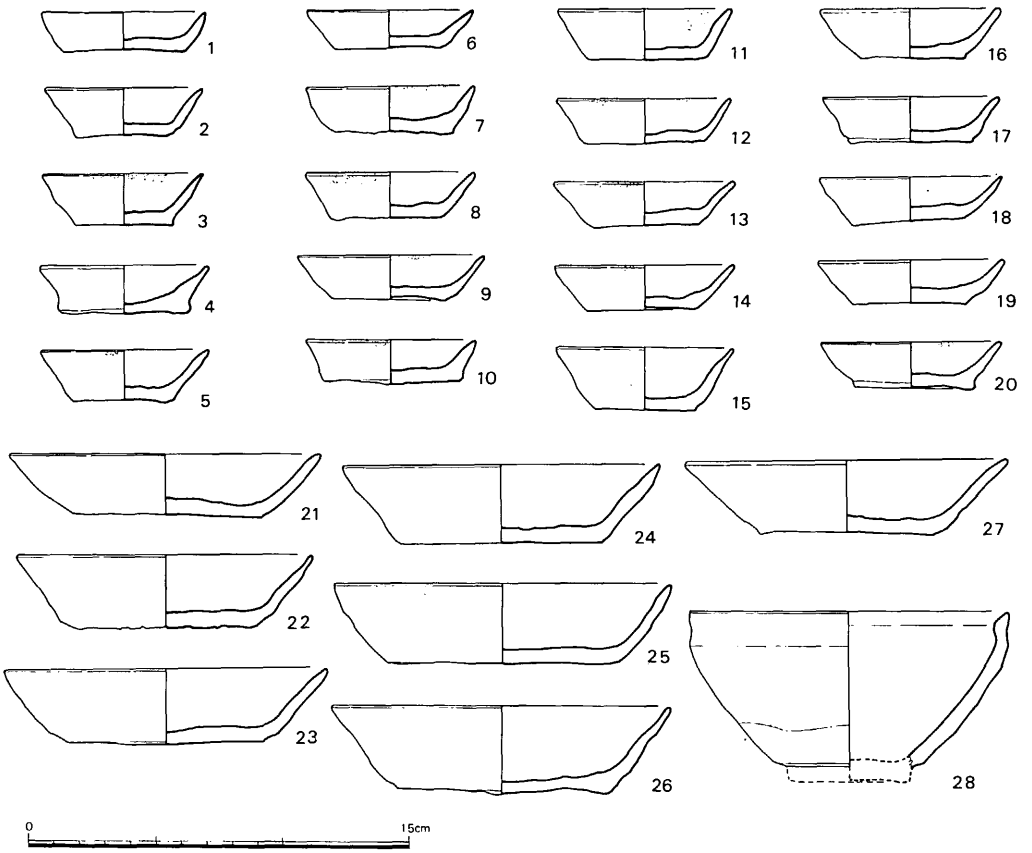
SG1630 西拡張部出土土器・陶磁器（第20図、図版52、別表）

ＳＧ1630の西端は尾根の法面保護のために未発掘部を残したが、開削された花崗岩に土砂が貼付いたような状況にあり、漏水のためかなりの部分が崩落した。次に紹介する資料はその崩落土からの出土資料で、池の埋没後の堆積によるものである。

土師器

皿ｂ(１～20)　口径6.2～7.4cm、底径3.9～5.5cm、器高1.5～2.5cmをはかる。口径に対して底径が小さく、器高は高い。底部はすべて糸切り離しにされる。ほとんどが内底をナデで調整し、外底に板状圧痕を有する。内面から外面にかけて油煙の付着する例が多い。

杯ｂ(21～27)　口径11.7～13.3cm、底径6.9～9.0cm、器高2.4～3.5cmである。すべて底部を糸切り離しにし、内底をナデで調整する。ほとんどに板状圧痕がみられる。25は杯ａとすべきかも知れない。



第20図　SG1630拡張部出土土器・陶磁器実測図

黒釉陶器

椀(28)　直立する口縁部の端部をわずかに外反させた椀で、黒色の釉を比較的薄くかける。口縁端部付近は暗黄茶色を呈する。体部外面の下半は露胎となる。口径は12.6cmに復原できるが、小片のため正確ではない。断面に補修を示す漆の付着がみられる。

高麗青磁

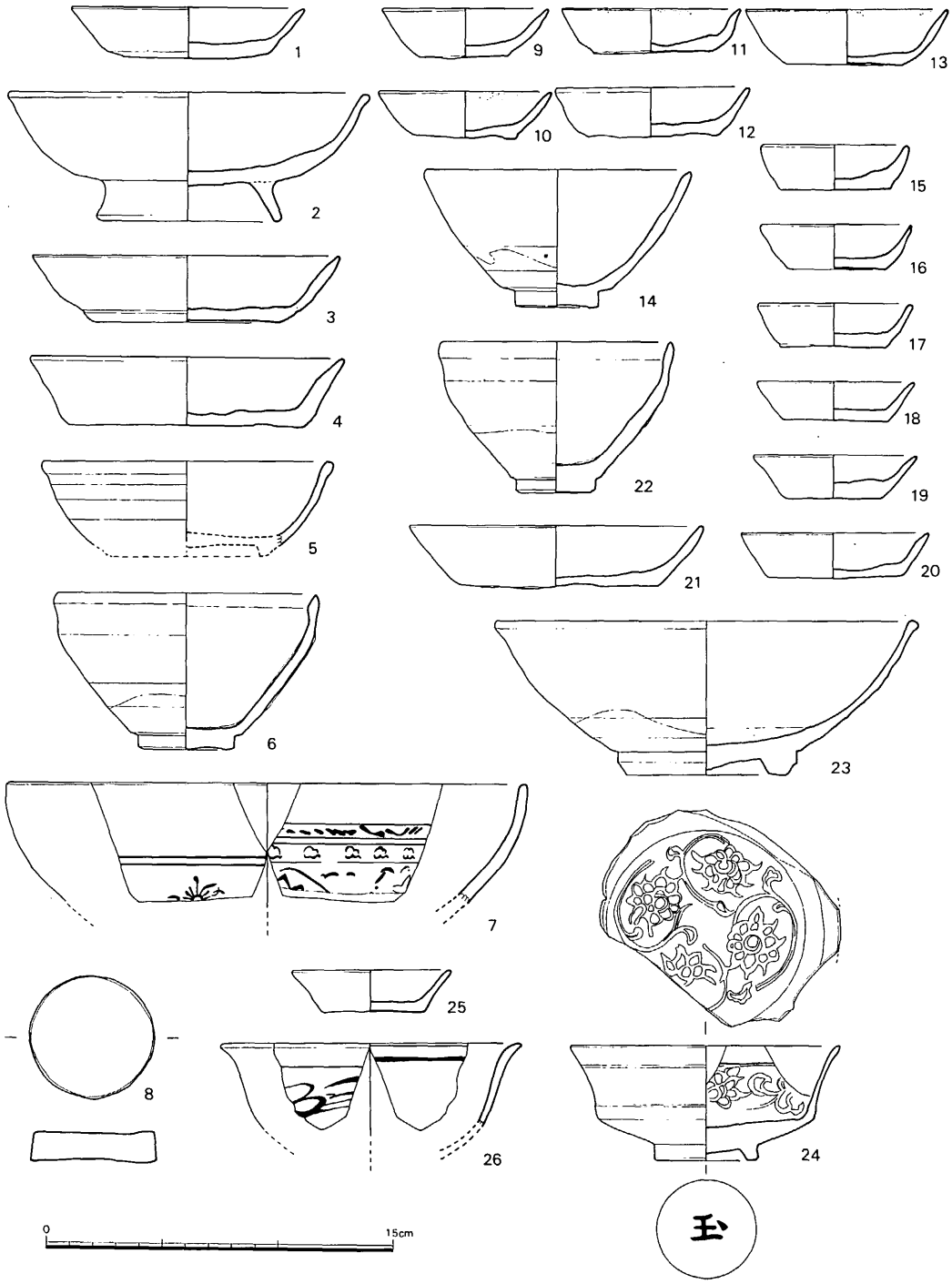
椀（A）　内面は圏線（白象嵌）に挟まれた柳文を白・黒象嵌し、外面は白象嵌による圏線を巡らしている。胎土は茶灰色を呈し、釉は茶色味をおびる。

整地層出土土器・陶磁器

第Ⅰ期以前層出土土器（第21図、図版54、別表）

土師器

皿（1）　口径10.0cm　器高2.2cmである。



第21図　整地層出土土器・陶磁器実測図

高台付丸底杯（2）　口径15.6cm、器高5.6cmである。この器形にみられる外底部に板状圧痕を伴う。内面器面ミガキはみられない稀有な資料である。

1・2の底部はヘラ切りであり、また器形から11世紀代であると考えられる。

第II期整地層出土土器・陶磁器（第21図、図版54、別表）

土師器

杯（3・4）　口径13.4・13.6cm、器高2.9・3.0cmである。3の外底部に板状圧痕を伴う。

青磁

杯（5）　口径12.6cmに復原できる。灰白色を呈する胎土に淡黄緑色の釉が比較的薄くかけられている。外体部の大部分は回転ヘラ削り調整である。

3・4・5から判断するとこの層位は13世紀後半および14世紀前半代にかけて形成されたと考えられる。

SB2850 上面腐植土層出土陶磁器・土製品（第21図、図版54）

陶器

花盆（A）　口縁部を押さえることにより波状にし、頸部に貼花文、体部に沈線による文様を表現している。底部中央に径1.0cmの穿孔が1個ある。体部内面および高台裏を露胎とする他は褐色の釉をかけている。胎土は黄灰色を呈し、比較的軟質に焼成されている。底部だけはSX1630出土として昭和55年度概報で報告している。瀬戸産と思われる。

黒釉陶器

椀（6）　口径11.1cm、器高6.8cm、高台径4.2cmである。黒色の釉がかけられているが、口辺部周辺は暗茶色を呈する。胎土は暗灰色を呈する。破損後漆で補修されている。

高麗青磁

椀（7）　口径22.3cmに復原可能な小片である。文様は内外とも白象嵌によって表現されている。淡灰色を呈する胎土にやや緑色をおびた淡灰色を呈する釉が薄くかけられている。

土製品

円盤状土製品（8）　径5.4cm、厚さ1.4cmである。表裏・側面ともにナデによる調整・仕上げである。胎土中には砂粒が目立ち、灰色から黒色に焼成されている。打毬の玉であろうか。

第III期整地層出土土器・陶磁器（第21図、図版54・55、別表）

土師器

皿b（9～13）　口径7.2～8.9cm、器高1.9～2.4cmである。11～13の外底部に板状圧痕を伴う。10・11・13は灯火器として使用されている。

黒釉陶器

椀（14）　口径11.3cm、器高6.6cm、高台径3.6cmに復原できる。外体部中位から底部にかけてヘラ削り痕が著しい。胎土は暗灰色から黄色、釉は暗茶色を呈する。

SB1440 A上面腐植土層出土土器・陶磁器（第21図、図版56）

土師器

皿b(25)　口径6.9cm、器高4.4cmである。外底部に板状圧痕、口縁部に油煙を伴う。

安南陶磁

椀(26)　口径13.0cmである。内面に2条、外面に1条および花文と思われる鉄絵がある。胎土は灰白色を呈し、細かい黒粒子を含む。釉は貫入を伴う。透明なガラス質である。この層は第II期から第III期への移行期に形成され、14世紀末さら15世紀初頭と考えていることからこの鉄絵椀はそれ以前に将来されたものと考えられる。

第III期以降層出土土器・陶磁器（第21図、図版55・56、別表）

土師器

皿b(15～20)　口径6.4～8.2cm、器高1.7～2.0cmである。17・18・20の外底部に板状圧痕を伴う。18・20は灯火器として使用されている。

杯a(21)　口径12.8cm、器高2.7cmである。外底部に板状圧痕を伴う。

青磁

椀(23)　口径18.2cm、器高6.7cm、高台径7.0cmである。昭和55年度概報で整地層出土として体部だけを報告した。その時、内外ともに鉄班文があり、外面に鉄絵があるとしたが、これは誤りであった。鉄班としたのは、鉄分を含む砂粒が表面に出た結果であり、鉄絵らしくみえたのは釉の自然変化であった。釉は濁黄緑色を呈し、無数の貫入を伴う。内底に白色粘土の目跡が5個ある。胎土は粗く、暗灰色を呈する。体部中位以下は回転ヘラ削り調整である。新安沖出土例の中の高台付皿に、釉・胎・調整ともに類似しているものがある。

白磁

杯(24)　口径11.6cm、器高5.0cm、高台径4.5cmである。内側面および内底部に浮文がある。高台畳付および高台裏が露胎となる他は白色の釉がかかる。胎土は純白、緻密である。高台内に焼成時に付着した砂粒が残っている。高台裏に鉄釉による「玉」銘がある。

青白磁

水注(B)　破片が4個出土した。体部に丸刀彫りによる花文が描かれている。胎土は灰白色を呈し、空色の釉が薄くかけられている。漆による補修がみられる。

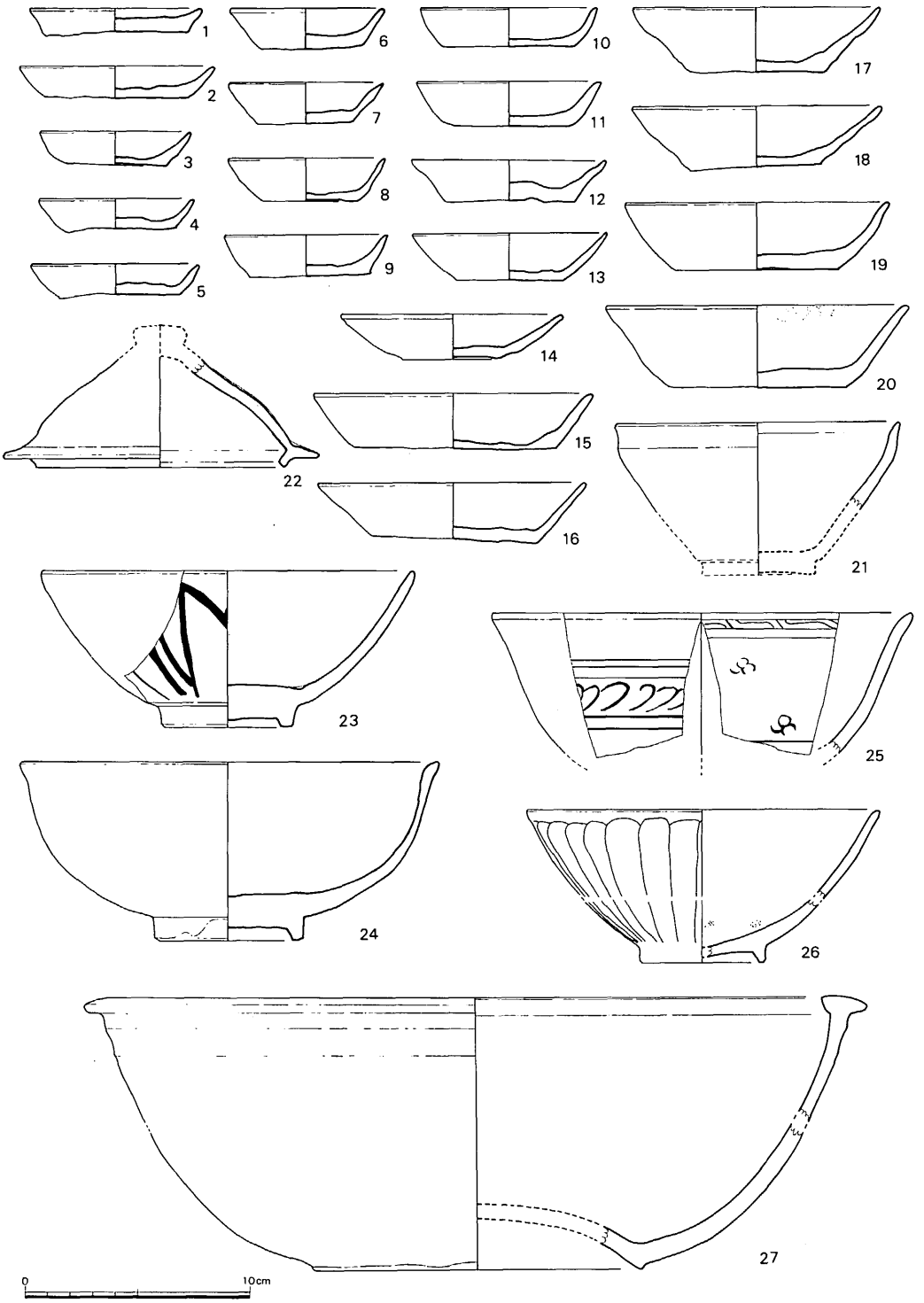
高麗青磁

椀(C)　残存部内面に4条、外面に2条の白象嵌による圏線、内面に白・黒象嵌による花文が描かれている。胎土は灰色を呈し、釉は暗黄青色を呈する。

暗褐色土・暗灰色土層出土土器・陶磁器（第22図、図版57・58、別表）

土師器

皿a(1・2)　口径7.8・8.6cm、器高1.2・1.4cmである。1・2の外底に板状圧痕を伴う。



第22図　暗褐色土・暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図

皿ｂ（３～14）　３～12は口径6.8～8.6cm、器高1.5～2.1cmである。５・６の外底部には板状圧痕、３・９の口縁部周辺には油煙を伴う。13.14は口径8.6･9.8cm、器高2.1･2.0cmである。底径が小さく、体部を大きく外上方へつくり出す。

杯ａ（15.16）　口径12.4・12.0cm、器高2.4・2.5cmである。15には板状圧痕を伴う。

杯ｂ（17～20）　17・18は底部に比して口径が著しく大きなタイプで、口径11.0・13.1cm、器高2.9cmである。19・20は口径11.8・13.4cm、器高3.0・3.7cmである。14には板状圧痕、20には油煙が付着している。

青磁

壺蓋(22)　小さな破片からの復原である。身受け部は露胎であり、その部位に鉄分を含む溶液を塗り、その部分が赤褐色を呈する。他は淡緑色の釉が厚くかけられている。胎土は緻密で灰色を呈する。

椀(23・24)　23は口径16.6cm、器高7.0cm、高台径5.8cm。高台畳付から見込み部分にかけては露胎である。鎬を有する蓮弁文様を描くと共に間弁をも表現している。胎土は精良で灰色を呈する。釉は淡青色を呈し、良好である。24は口径18.6cm、器高8.0cm、高台径6.6cmである。高台は細く、体部は大きく丸味を有し、外反する口縁部にいたる。高台畳付以内は露胎となるが、他は淡青色を呈する釉がかかる。胎土は暗灰色。14世紀における典型的な例である。

黄釉陶器

盤(27)　数個に破砕し、相互に接合しない破片からの復原である。内面だけに薄い釉をかけ外面は露胎である。胎土は暗灰色を呈し、緻密に焼成されている。口縁上面から内面にかけて釉下に白化粧がみられる。12世紀前半にみられる黄釉盤とは釉色が同一であっても、胎土等が明らかに相違する。

高麗青磁

椀(25)　小片から復原すると口径18.7cmになる。残存部内外面に白象嵌の文様がある。体部下位屈曲部から以下は回転ヘラ削り、象嵌部全体には斜方向の削り痕がみられる。胎土は暗灰色を呈し、堅緻に焼成されている。釉色は灰鼠色を呈する。

安南陶磁

椀(26)　ＳＸ1629・ＳＸ1637出土と同一個体になる。既にＳＸ1629出土として体部だけを報告したが、新たに底部が出土した。口径15.7cm、高台径5.6cmである。体部の蓮弁文はヘラ状工具で縦に削り取って表現している。内底見込み部分に５足に復原できるトチンの跡がみられる。白灰色を呈する胎土の上に貫入を伴うベージュに近い白色釉をかけている。

高麗青磁

椀（Ａ）　内外に白・黒象嵌による圏線・文様を描いている。内底近くにトチン跡が２個残存し、これから復原すると５足になると思われる。胎土は暗灰色、釉は灰緑色を呈し、無数の

貫入を伴う。

遺構・層位出土瓦質土器（第23・24図、図版59～61）

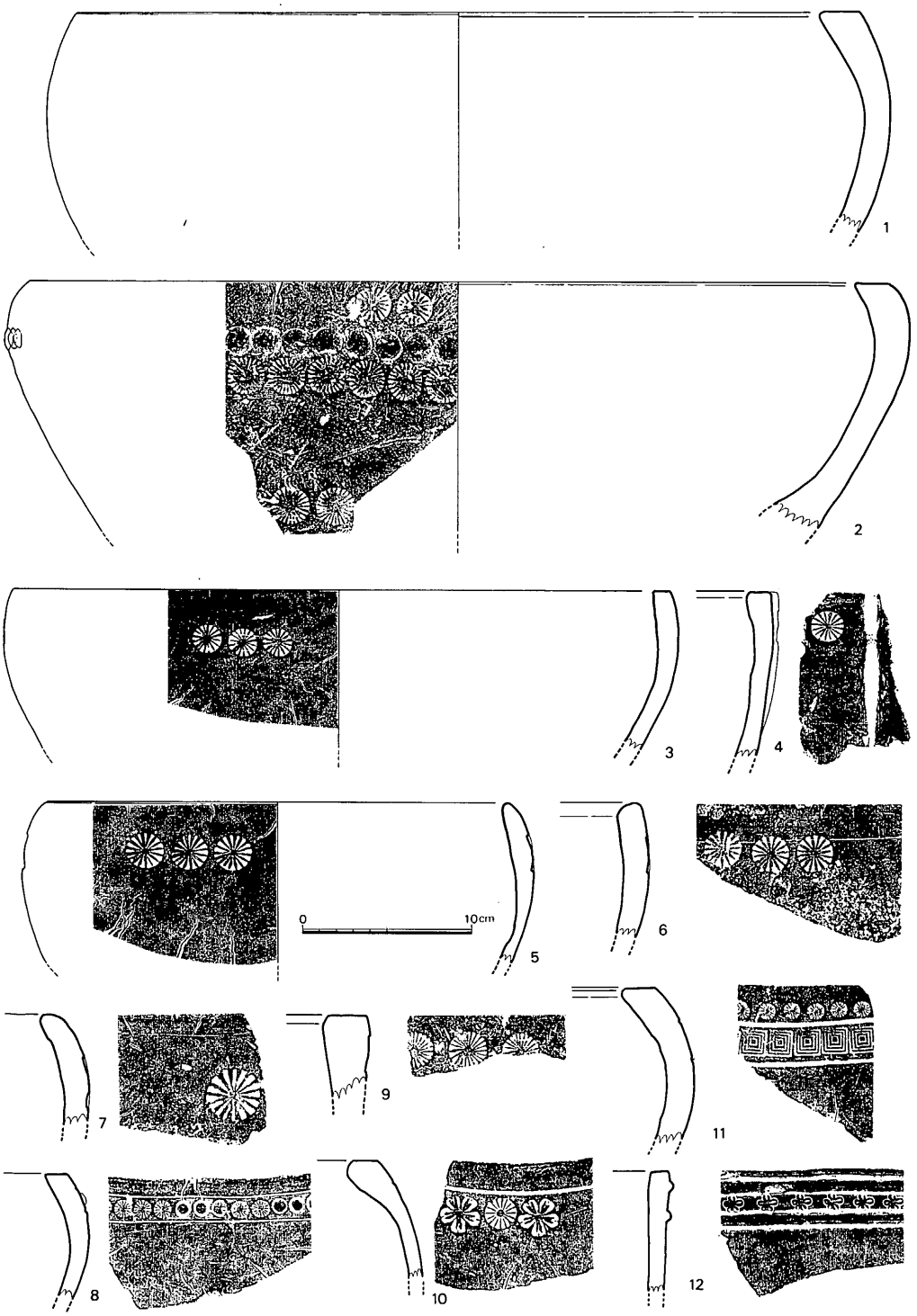
鉢（１～21）　前回同様今回の調査でも多数の瓦質土器が出土した。その一部を図示したが、１～12は菊花文・梅花文などの花文を主に、13～21は雷文・直違文など花文以外の文様をスタンプで押文した例である。以下、煩雑となるが、器形別に説明する。

１～３・８・11・19は体部を内彎させ、口縁端部の上面を水平に仕上げるタイプの鉢である。１～３の口径は47.5cm、50.8cm、39.1cmに復原でき、他の小片も一回り小形の鉢となる８を除いて同様の大きさとなろう。２はほとんど砂粒分を含まない精良な胎土を用いるが、他は砂粒を多く混じえる。２は素焼きのままであるが、１・８・19は内外面、３・11は外面が燻されて、暗茶灰色～黒灰色を呈している。１を除いて外面にスタンプ文様が押されている。３は体部上端に菊花文をスタンプするが三花を一単位としている。最終期整地土層からの出土。２は菊花文・珠文を上下の帯状にめぐらす。３列をなす菊花文帯はいずれも同じスタンプで施文している。ＳＧ1630埋土からの出土。これに対し、８は口縁上端部の下に幅1.5cmの２条の沈線をめぐらし、その間に小さくつくる菊花文・珠文を適宜配している。ＳＤ2849出土。11は小さな菊花文の下に四升文をめぐらす。ＳＸ2846出土。19は口縁上端部下に２条の凸帯をめぐらし、その間に珠文を貼付している。堆積土層からの出土。

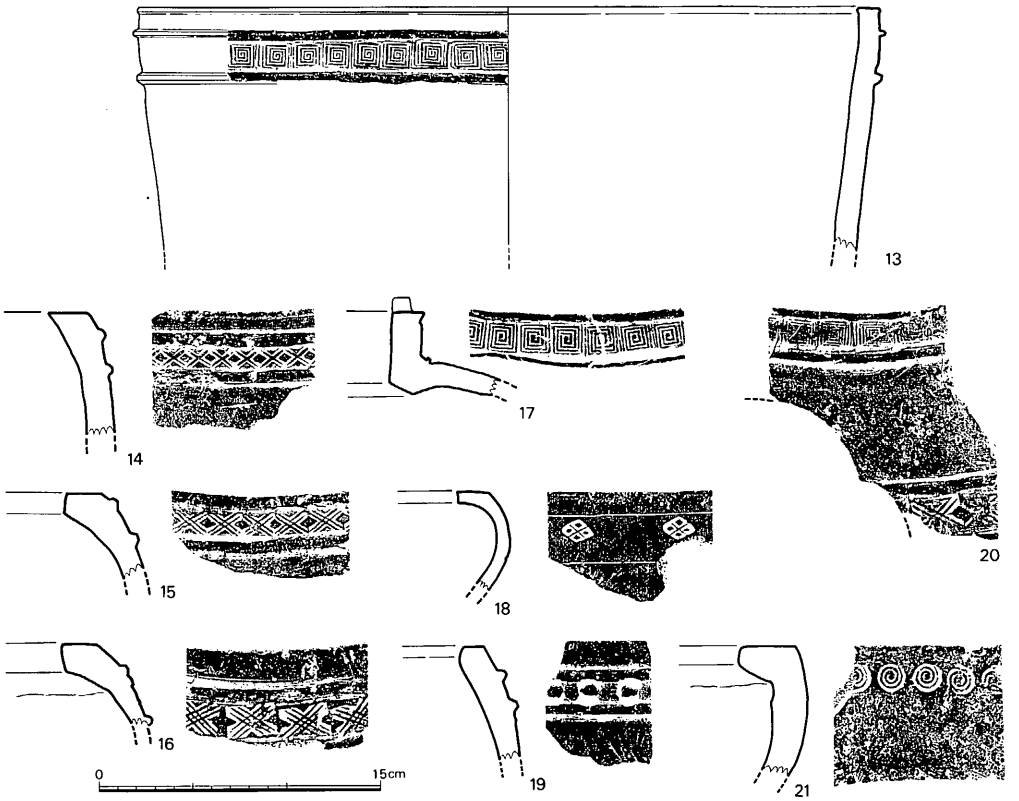
５～７は１などと同様に内彎する体部の鉢であるが、口縁端部を丸くおさめている。５は口径27.4cmに復原できる例で、砂粒をあまり含まない精良な胎土を比較的硬質に焼成している。胎土は淡灰白色であるが、内外面は黒灰色を呈する。ヘラミガキで調整し、ことに外面は光沢をもつ。三花を一単位とした菊花文をスタンプしている。ＳＸ2870整地層からの出土。６・７は軟質の焼成であるが、調整、施文は５と同じである。６はＳＢ2850上面腐植土層、７は最終期の整地層からの出土。

10・15・16・18・21は体部を内彎させ、口縁端部上面を水平に仕上げるタイプの例であるが、端部上面内側に凸帯を貼付して、内彎の張出しを強めている。いずれもヘラミガキで外面に光沢をもたせている。10の内外面および15の内面は黒化せず灰白色を呈するが、他は黒灰色～暗茶色をなしている。10は最終期の整地層からの出土で、内側への張出しを一部に貼付し、受けにしている。小片のためこの受けを何個所に設けたかは不明である。外面に桜花文・菊花文を組み合わせてスタンプしている。15・16は２条の凸帯を貼付し、その間に二直違文・三直違文をスタンプしている。15はＳＤ2846西側の平坦に削平された地山面を覆う黒褐色土層、16は床土からの出土。18は小形の鉢で、2.6cmの間隔をもつ２条の細い沈線をめぐらし、中に四菱文のスタンプを押している。石組遺構ＳＸ2854の前面のＳＫ2868を覆う黒褐色腐植土層からの出土。21は堆積土層からの出土で、巴文をスタンプしている。

４・12・13・14は体部を直立気味につくるタイプの鉢で、４は堆積土、12・13はＳＸ2846中



第23図　遺構・層位出土瓦質土器(1)



第24図　遺構・層位出土瓦質土器(2)

層、14はＳＸ2753からの出土。黒灰色の胎土をやや硬質に焼成する。12はよく選ばれた精良な胎土を用い、ていねいに調整された内外面は黒色を呈する。13は39.7cmに復原できる。砂粒を多く含み、表面を暗灰色に仕上げる。口縁上端部外面に２条の凸帯をめぐらし、その間に12は梅花文、13は雷文、14は菱形文をスタンプする。３例ともに内面から文様帯にかけてヨコナデし、それ以下をヘラミガキしている。これらにくらべ４は体部がやや内彎気味で、タテ方向のナデで体部を瓜割りにしている点に特徴がある。ヘラミガキした外面に菊花文をスタンプしている。

17・20は口縁部が直立する鉢である。17は口縁部上端と頸部に凸帯をめぐらし、口縁部外面に雷文をスタンプしている。口縁部上端に長方形の突起を貼付けている。わずかに砂粒を含むが、比較的精選された胎土を軟質に焼成し、淡茶灰色を呈する。ＳＤ2848西側の平坦に削平された地山面を覆う黒褐色土層からの出土。20も同様の形態で、口縁部外面に五升文、胴部に二直違文をスタンプしている。体部に透しをつくっている。砂粒を多く含む胎土を軟質に焼成している。外面は淡黒褐色、内面は淡茶褐色を呈する。最終期の遺構面を覆う土層からの出土。

以上の諸例は体部の特徴をやや異にするものの、すべて平面形を円形とするものであったが、9は平面形を方形～長方形とする例である。砂粒を多く含む胎土をやや軟質に焼成し、体部を直立するようにつくる。内外面とも暗茶色を呈し、外面には菊花文をスタンプしている。堆積土層からの出土。

A～Dはいずれも平面円形の鉢の底部片で脚台を付ける例である。砂粒を多く含むBを除けば精良な胎土を用いている。Aはことに精良で、灰白色の胎土を硬質に焼成する。B～Dの胎土は黒灰色を呈し、焼成もやや軟質である。器表はCの内面を除いて黒色である。A・Dは第III期整地、BはSD2857、CはSX2846からの出土。Aは装飾のない逆台形状の脚台を付ける。Cはこの側縁に切り込みを入れ、その隅角に半截竹管文をスタンプしている。体部も無文のAにくらべて装飾的で、2条にめぐらす凸帯の間に梅花文をスタンプする。Cの脚台をさらに造形化したのがDで、大きくつくった脚台の切り込み部に双頭渦文を刻んでいる。Bは脚台を獣脚状につくるが、側縁をヘラで面取りしてていねいに仕上げている。脚台を高くつくるため底部が5cmほど浮く。そのため底部の外端にそって脚台の間に幅約2cmの凸帯を垂下させて貼付し、それを切り込みや半截竹管文で造形するが、大半を欠き原状を失なっている。

瓦類

瓦類については第107次調査出土例と共通性が多く、後に合わせて報告する。

木簡（図版62・63）

今次の調査では、SB2850上面腐植土層から8点の木簡が出土した。このほか、その形状などから推して、本来は木簡の一部ではなかったかと考えられる木片が若干出土しているが、いずれも腐蝕や損傷の著しい小断片であり、しかも赤外線テレビによる観察をあわせても墨痕は全く認められなかったので、一応そのすべてを除外した。したがって、ここでもそれらについての報告は割愛する。

はじめに、これら8点の木簡について概括的に見ておこう。

墨痕の有無はともかくとして、これらを形態的に分類すれば、次のようになる。なお、以下の型式分類は木簡学会のそれに準拠したことを付記しておく。

いわゆる短冊型（011型式）を呈するものが1点あるが、後述のように、これの形状については検討を要する。また、本来はこの型式であったと考えられるが、一端が折損して原形が失われたもの（019型式）が1点ある。次に、長方形の材の一端近くの左右両辺に特有の切り込みを入れたもの（032型式）が4点あり、頂部の作り方は方頭が1点、圭頭が3点である。そして他の2点はいずれも損傷によって原形の判明しないもの（081型式）である。

次に、これらの木簡に墨書された文字について見てみよう。8点のうち明らかに字形をなすと判断されるものはわずか2点にすぎず、しかも1点は数字分が見えるにもかかわらず、その釈読は容易ではない。単なる墨痕や墨つきではなく、文字のかなりの部分が残存しているよう

に見えるが、腐蝕や損傷部分にかかるなどのため断片的であり、具体的な文字を想定できないものが4点、わずかな墨痕が見えるだけで、全く字形をなさないものが1点ある。そして残りの1点は完形品ともいえる032型式のもので、その点から木簡と判断したものであるが、赤外線テレビによる観察によっても墨痕は全く認められなかった。

このように、8点もの木簡が出土しながら、文字資料というにはあまりにも貧弱ではあるが、以下では、これらの個々についての概要を摘記してみよう。

(1) ・「∨□ □ □」

・「∨□ □」

圭頭に作られた032型式。板目材。左辺の中位に若干の損傷が見られ、表裏両辺ともわずかに腐蝕しているが、全体的には原形をとどめている。その法量は、長さ12.0cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm（いずれも最大値、以下同）である。両面ともほぼ全面にわたって墨痕が見られるが、腐蝕や墨が薄いなどのために判読できない。そのため表裏も判断できず、区別は便宜的なものである。表面では3字分を想定したが、その間隔や裏面などからみて、本来は全面に墨書されていたものと考えられる。裏面の墨痕の様子からみて、仮名文字あるいは草書体文字であったのかもしれない。

(2) ・「∨□ 」

・「∨□」

032型式。柾目材。頂部の若干の損傷を除けば、ほぼ完形品とみなしてよいだろう。表面頂部の右端が原状をとどめているので、一応圭頭とみなしたが、裏面からも察知できるように、必ずしも十分に整形されたものではなかったようである。現存法量は、長さ13.9cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmである。これも墨の残存状態が悪く、判読できない。裏面は4字分程度のようであるが、いずれにしても一部しか残存していないので、確認はできない。このように、墨痕から表裏を判断することはできないので、区別は便宜的なものであるが、これの場合は頂部の状況が参考になるかもしれない。

(3) 「∨ □ 」

圭頭に作られた032型式。柾目材。頂部や左辺に損傷が見られるが、いまだ原形をとどめているとみなしてよいだろう。現存法量は、長さ12.7cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmである。全面的に腐蝕しており、下半部に小さくかすかな墨痕がみられるのみである。

(4)

方頭に作られた032型式。柾目材。とくに損傷はなく、完形品とみなしてよいだろう。その法量は、長さ13.3cm、幅3.6cm、長さ0.7cmである。上端近くに小孔があるが、これは点綴するためのものかもしれない。表裏とも墨痕は全く見られない。整形されながら墨書されず、したがって未使用なのか、あるいは墨書面が削りとられたのか判断しがたいが、両面の整形状況や厚さ

などを考慮すれば、未使用の可能性が大きいように思われる。

(5) ・「□□□ □(仟カ)

・「□ □ □

019型式。板目材。右辺はきれいに整形しているので、左辺は二次的に割られたのかもしれない。墨書内容を考えあわせれば、本来は011型式であった可能性が考えられる。現存法量は、長さ13.1cm、幅3.3cm、厚さ0.5cmである。これも表裏の判断ができないので、便宜的に区別した。全体的に墨が薄く、肝心な部分を判別できない。表面の第1・2字は2文字が重複している可能性も考えられる。第3字は裏面の3文字と同じ文字と推定できるし、いわゆる卦算冠の文字であることは明らかであるが、具体的な文字を想定することはできない。異体字の可能性を含め、今後の検討に譲ることにしよう。第4字は人偏の文字で、「仟」字に近似するが、本来ならば交叉すべき第4・5面が交叉せず、あたかも「丁」の字のようになっており、断定するには躊躇される。4文字が同字とみられることからして、これは習書であった可能性が考えられるだろう。

(6) ・□ 」

・□」

081型式。柾目材。右辺と下端は原状をとどめているようであるが、小断片のため原形は明らかではない。現存法量は、長さ8.8cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmである。これも表裏の区別は便宜的なものである。表面は2文字、裏面は3～4文字と考えられるが、釈読できない。とくに、裏面の第1字は「二」、第2字は「至」のようにもみえるが、左半部を欠くので、断定できない。

(7) □□ □

081型式。柾目材。左右両辺は原状をとどめているようであるが、原形は明らかでない。現存法量は、長さ8.6cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmである。第1字は「亥」字のようでもあるが、中心部が不分明なため断定はできない。第2字は赤外線テレビによる観察結果を加味して図示したが、詳細は明らかでない。これより下位の部分の現状は単なる墨つき程度であるが、上位部と対比しても、この部分の面だけが削りとられたような痕跡も認められず、これの意味も明らかではない。

(8) 「三」

011型式。柾目材。とくに顕著な損傷はみられず、各辺および両面ともきれいに整形されているので、それを二次的なものとはみなしがたく、用途などに問題は残るが、これ自体は完形品とみなしてもよいだろう。法量は、長さ6.4cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmである。墨書はこれのみであり、何らかの番号札とみなしてよいのではないだろうか。おそらく他に同種のものが存したのであろうが、それは検出されなかった。

以上、8点の木簡の概要を報告したが、はじめにも述べたように、その内容はあまりにも貧

弱といわざるをえない。当地区では、これまでに第57次調査で４点、第67次調査で24点の木簡および墨書木札が出土している。それらには付札類が多く、なかでも銭に付けられたとみられるものが14点も存したことは注目された。今回の場合、その内容を釈読しえていないので、短絡させることはできないが、付札類が４点あって半数を占めており、従来の出土傾向に通じる一面がみられる点を指摘しておこう。

漆器（第25図、図版64）

椀・皿（１～４）　１は口径17.2cm、器高4.2cm、高台径8.2cmのやや浅目の椀で、低い高台を削り出す。内外面には黒漆の地に朱漆で丁寧な草文を描く。内面の漆は剝落が著しく木地が大部分露出している。２は口径10.8cm、器高3.4cm、高台径3.1cmの山形の椀。体部より上を約½程欠失する。体部外面に１条の節を削り出し、全面に黒漆をかける。３は復原口径11.8cm、器高2.1cm、高台径7.0cmの皿。中央部分は木目にそって大きく欠損する。高台の削り出しは短い。内外面には黒漆の地に朱漆で草花文を描く。４は口縁の一部をわずかに欠失した深い椀。口径16.2cm、器高6.0cm、底径8.4cm。底部は碁笥底風に浅く削られている。内外面とも黒漆を塗り、体部外面の上位のそれぞれ対称する位置に、一方に「随仏」の銘、他方に一葉の木葉文を配している。また外底部には、「一」と判読できる朱墨が認められ、セットで使用されていたものかもしれない。口縁部から底部にかけて、ちょうど随仏銘の左側の位置で、縦方向に亀裂が走っているが、楔を打ち込み補修した痕跡が顕著である。また内面には漆の皮膜がヒダ状に付着している。

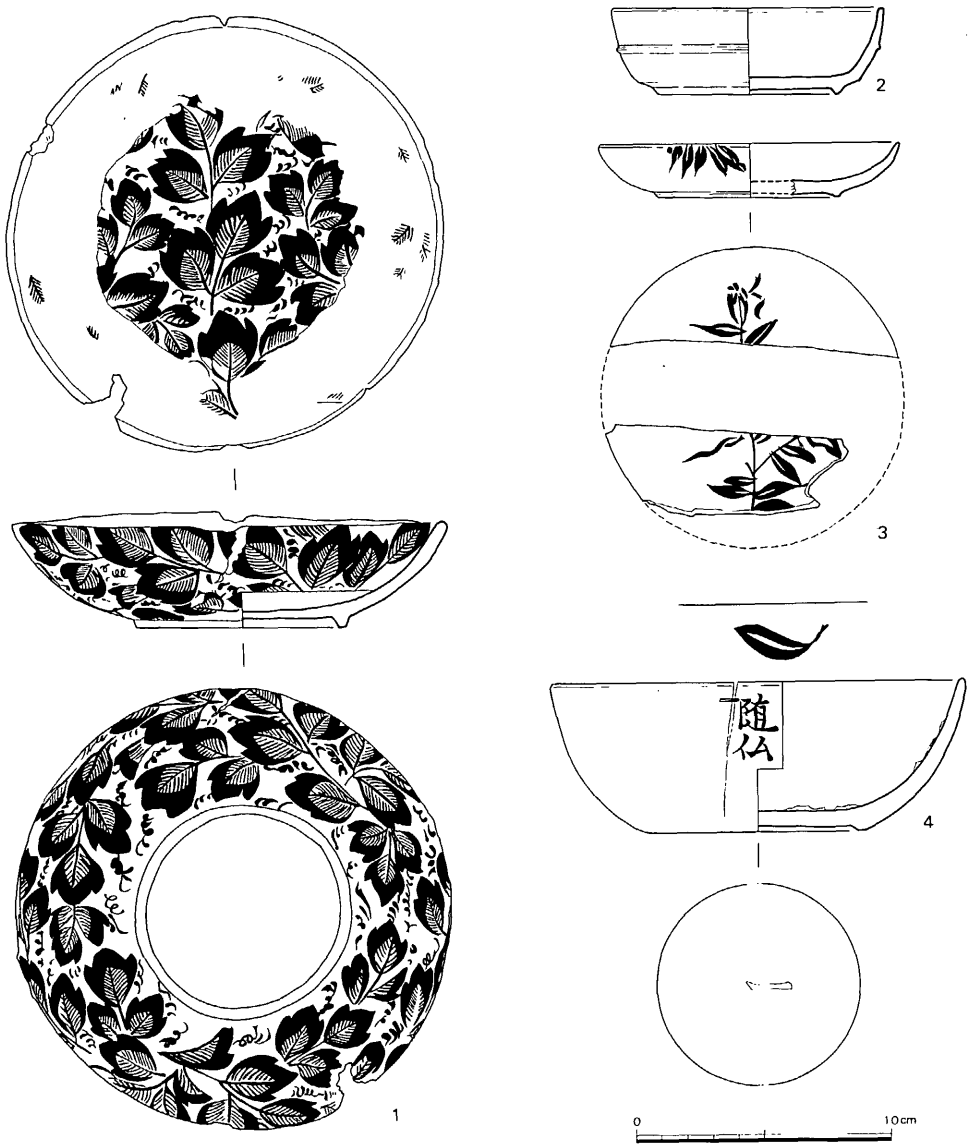
１はＳＢ2850上面腐植土層、２・３はＳＸ2877、４はＳＸ2860から出土した。

木製品（第26～28図、図版65～68）

仏像（３）　木像薬師如来立像。岩座の上に立つ小像で総高7.3cm、像高6.4cm、頭部は肉髻部と地髪部を区別して彫るが、螺髪は刻んでいない。右手はすでに失なっているが胸前にあげている。左手には共木から刻み出した薬壺をのせている。背部の頸後に共木から彫り出したと思われる頭光の柄の凸部が認められる。頭部と台座が一部黒色となっていることから、当初は墨が塗られていた可能性が強い。推定金光寺跡からはこれが初例であるが、同様に多数の像が造られ千体仏として祀られていたのかもしれない。衣の形勢、像様からみて中世後半の様式と思われる。ＳＢ1440を覆う腐植土層から出土。

人形（５）　割載した細板の両端を斜めに削り落とし、一端の側面にＶ字の切り込みを入れて頭部をつくり出す。表裏面は未調整だが、両側面は削りを加えて再調整する。杉の板目材を利用。長さ19.0cm、頭部幅0.5cm、高さ0.9cm。ＳＸ2854前面の腐植土層出土。

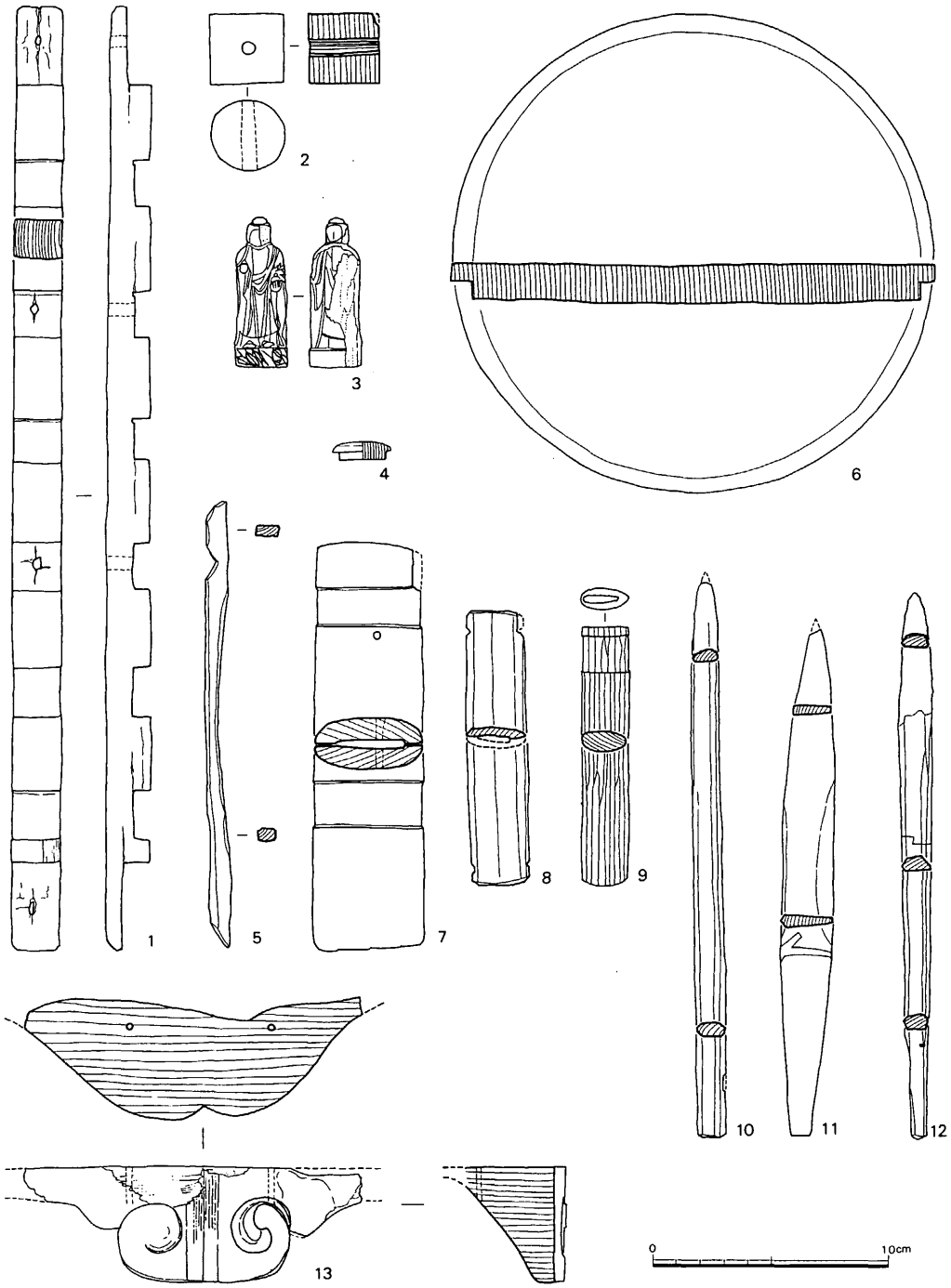
蓋（４・６・14）　４と14は柾目の杉材を円形に整え、上半は甲高に、下半は容器に差込むためさらに径を狭めた小形の蓋。14の上面には焼き箸で松をおさめた風景を描く。いづれも茶壺等の小壺類の蓋と思われる。６は厚い杉の柾目材を円形に削り、外周は切り欠いて段をつける。



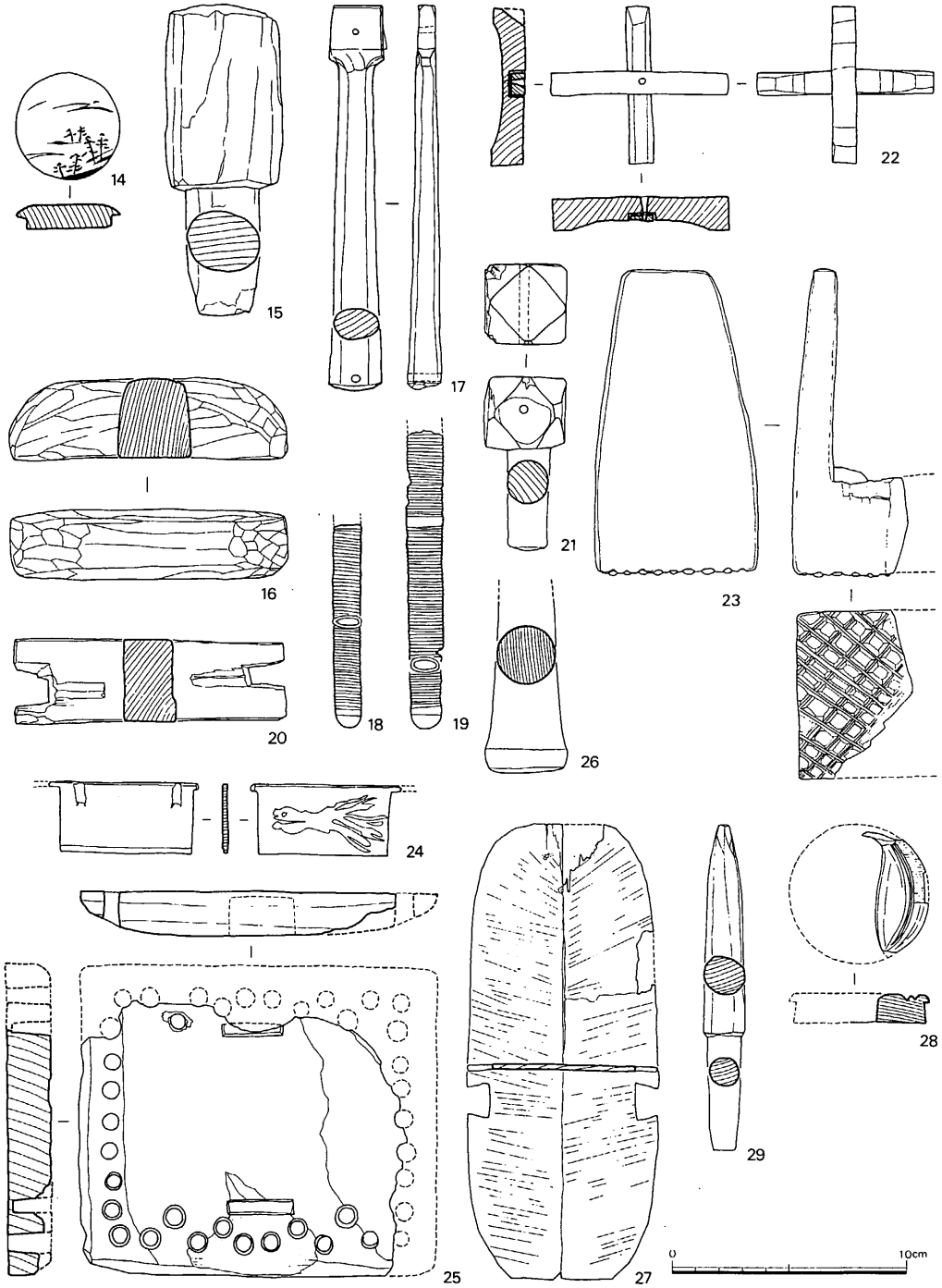
第25図　遺構・層位出土漆器実測図

円板の中央に貫通するにはいたらない小孔をうがつ。4は上面径2.6cm、高さ0.7cm。ＳＢ1440Ａを覆う腐植土層出土。14は上面径4.5cm、高さ1.1cm。ＳＤ2848出土。6は径20.4cm、厚さ1.6cm。ＳＢ2850上面腐植土層出土。

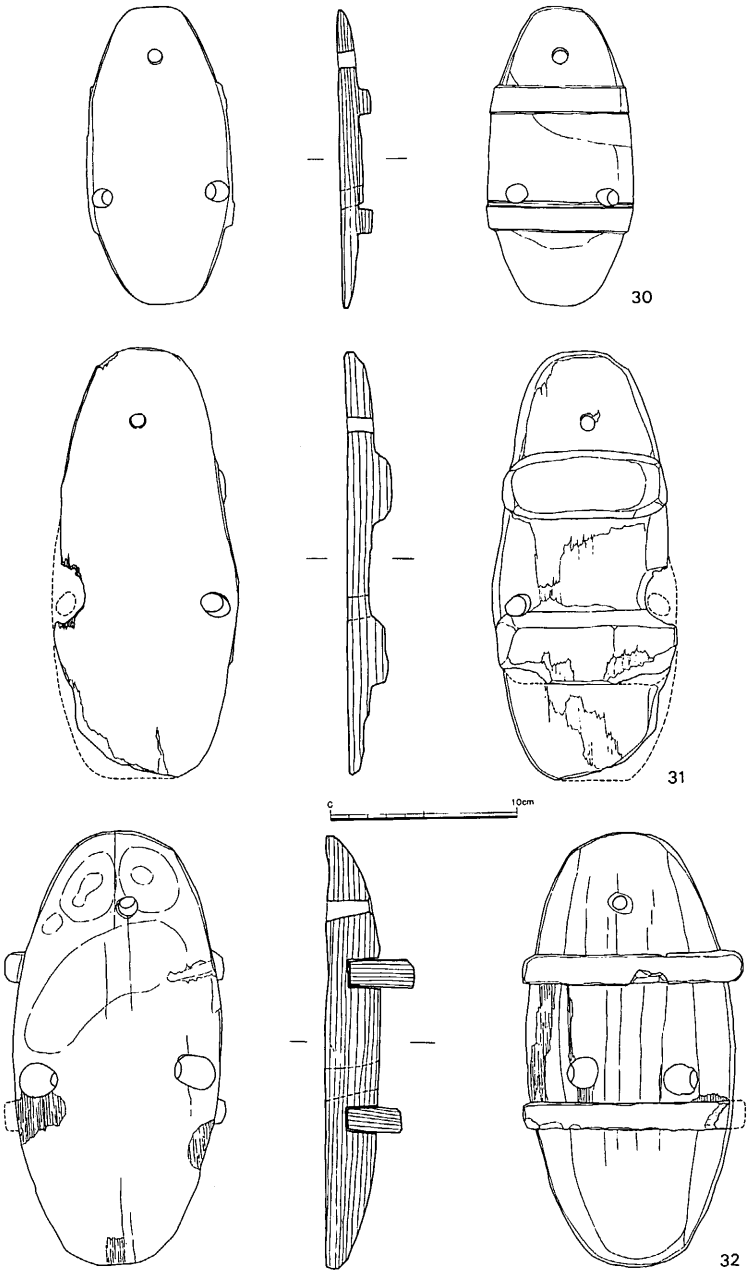
柄（7・8・9）　7は内面に茎孔を抉った断面カマボコ形の板材を二枚合わせて柄としたもの。2条の責め金具溝が巡り1個所目釘孔が通る。刀類の柄と考えられる。長さ17.2cm、幅4.2



第26図　遺構・層位出土木製品実測図(1)



第27図　遺構・層位出土木製品実測図(2)



第28図　遺構・層位出土木製品実測図(3)

cm、厚さ2.2cm。8は縦割れした柄の半分を残す。両端近くの側面に2対の浅い切り込みを入れる。内面にやや幅広い抉り込みが残る。9は板目材を断面長円形に削って整形し、一端に責め金具の溝が巡る。茎孔は一端より抉ってあけられ、目釘孔がないことから茎は焼き入れしたものと思われる。8は長さ11.7cm、幅2.6cm。9は長さ11.0cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm。ともにＳＢ2850上面腐植土層出土。7は第Ⅱ期整地層出土。

鞘(18・19)　ともに内側を抉った断面弧形の薄板を合わせたもので、糸で巻縛した後に黒漆を塗って仕上げている。鞘尻の形態も同じであることから、長短のセットをなしていたものかも知れない。18は長さ8.7cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm。ＳＢ2850上面腐植土層出土。6は残存長12.7cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。ＳＸ2874ピット内出土。

横槌(15)　心持材を利用せず割材を用いてつくった小形のもの。断面円形の柄は身より短く切られる。身は使用のため著しく窪む。長さ13.3cm、身径5.0cm、柄径3.3cm。ＳＤ2848出土。

箆形木片(10・11・12)　10・12は棒状の材の一端のみを剣先状に尖らせる。裏面は割載面を残し、表面のみ面取りを行う。11は杉の柾目材を長方形の板材に割り、先端を剣先状に削り、さらに先端より5cmのところから表裏面を削って尖らせている。他の一端もやや細めに削るが尖らせてはいない。11は一部漆状のものが残る。12の先端部には黒漆が付着しており漆工等の関係に使用されていた工具と思われる。10は現存長23.8cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm。11は現存長21.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm。12は長さ23.3cm、幅1.4cm、厚さ0.7cm。いずれもＳＢ2850上面腐植土層出土。

台座脚(13)　蓮弁を意匠としたもので、内側を内反するように削って接地部をつくる。台座を留めるため、上面には2個の釘孔が垂直に貫通している。側面は花頭の輪郭を形成し、隅角に弁脈を入れて左右を弧状の二股にひろげる。弁脈をはさんで左右に対称する巴文を彫り込んでいる。磨滅する部分もあるが、側面には黒漆が残っている。ＳＸ2870出土。

草履(27)　薄板を中央で半載し、周囲を削り両端は直線的に整える。先端部に2個所の穿孔が残っている。表裏に繊維の付着痕が顕著に認められる。長さ19.5cm、幅8.1cm、厚さ0.2cm。ＳＢ2850上面腐植土層出土。

栓状木製品(21・29)　21は角材の下半部を円柱状に削って差し込み部分をつくる。頭部は正六面体の隅角をていねいに削って面取りし、幾何学的な十六面体をなしている。頭部の側面には、中央に小孔が貫通する。29も同様に棒状の下半に段をつけ差し込み部をつくる。頭部は先端にむかって尖り気味に削る。21は長さ7.4cm、頭部幅3.4cm、差し込み部径1.8cm。ＳＸ2877出土。29は長さ13.9cm、差し込み部径1.4cm。ＳＢ2850上面腐植土層出土。

スタンプ状木製品(23)　杉角材の一方の木口を切り欠いて、厚目の台部と台形上の柄を残す。台部下面は平らに整え、幅3㎜から5㎜の切り目を格子状に入れている。前回第67次の調査時に、ほぼ完形に近い同様の製品が出土している。別の部材と組み合わせて藁などを打つ叩打具

としての用途が考えられる。高さ13.2cm、幅7.1cm。ＳＢ2850上面腐植土層出土。

杷手形木製品(16)　柾目材を直方体に整え、木口の角を削って丸味を帯びた肩をつくったもの。下面は平らにし、一部漆様の付着物がわずかに認められることから、木蓋の上面に付く把手と考えられる。長さ11.9cm、幅2.9cm、高さ3.5cm。ＳＤ2848出土。

木葉形木製品(28)　一部を欠損するが、本来は環状に連続していたと考えられるもので、板目材を切り抜き、片側の表面に、弧状の葉脈を彫り出している。茎部は薄く削られ、一周して葉先に続いていたと思われる。裏面は他の部材に嵌め込むように外周に沿って切り欠きを入れている。家具引き戸の把手飾りと思われる。ＳＢ2850上面腐植土層出土。

円筒形木製品(２)　広葉樹の自然木の表皮を剝ぎ、円筒形にした後、切断面を平滑にしている。側面には小孔が貫通し、内部に籤状の木質が遺存する。高さ3.0cm、径3.1cm。ＳＢ1440Ａを覆う腐植土層出土。

工具柄(15・26)　15は角材を断面長円形に削り柄としたもので、頭部を台形状に整えて、身に着装するようにできている。頭部の中央に目釘穴が穿たれ、さらに柄尻にも紐かけ用の小孔が通っている。頭部の側面に楔状の薄板が遺存している。長さ16.5cm、柄頭の幅2.3cm、厚さ0.7cm。26は柾目材を轆轤挽きで整形。縦位に割れた⅓を残す。柄の先端は、野球のバットのグリップエンドを思わせる。ともにＳＢ2850上面腐植土層出土。

切り欠き部材(１)　細長の角材の一面に、3.1cmから3.5cmの間をおいて６個所に連続した切り欠きを入れたもの。両木口はさらに深目に切り欠き、背面の角は削って丸くする。切り欠き部には４個所の木釘孔が貫通する。本来はこの材に他の横木を組んで完成した製品となる組合せ部材である。長さ42.5cm、幅2.1cm、高さ1.8cm。ＳＢ1440を覆う腐植土層出土。

相欠き部材(20)　杉柾目材を直方体に直裁し、両木口に他の部材を受ける切り欠きを入れたもの。長さ11.5cm、幅3.6cm、厚さ2.2cm。ＳＸ2874出土。

十字形木製品(22)　２本の長方形の角材に長目の切り欠きを入れ、ていねいに削って舟底状にかたどる。中央に相欠きを入れて十字形にかみ合わせたもの。交差する部分に錐で小孔を穿っているが、これはさらに第３の部材を結合させるためのものと思われ、十字の枝が四方にのびた台座と考えられる。長さ7.8cm、8.7cm、幅1.2cm、高さ1.6cm。ＳＸ2877出土。

箱蓋状木製品(24)　長辺5.6cm、短辺3.0cmの柾目薄板と、一辺に連続してつく軸状の突起からなる。裏面の一辺には段を設けている。一面に10本の足を扇形に広げた鳥賊の絵を墨描きし、他面にも軸の付く一辺と直交する風帯様の絵を入れている。木口の両端からのびた細棒を軸として、開閉できるようにつくったものである。ＳＤ2857出土。

穿孔木板(25)　現在二側面を欠損する厚目の板材で、残る二側面の二稜を面取りし法をつけている。材の一方の面には、ちょうど中軸上に、２個の長方形の柄孔をあけるが貫通してはいない。さらに四辺に沿って、下駄の鼻緒孔程の小円孔を規則性を持って配列している。円孔は

焼火箸で穿孔しているために黒く焦げている。これらの円孔のうち最も内側に位置する4孔は、他に比べて径が大きい。他の部材を差し込んだ台座の役目を想定しうる。ＳＢ2850上面出土。

櫛(Ａ)　両面から交互に挽き出した横櫛である。むねの断面は丸く、切り通し線は上縁に対応して曲線を描く。長さ4.5cm、幅8.5cm、厚さ0.9cm、歯長3.2cm、歯数93本。ＳＢ1450Ａを覆う腐植土層出土。

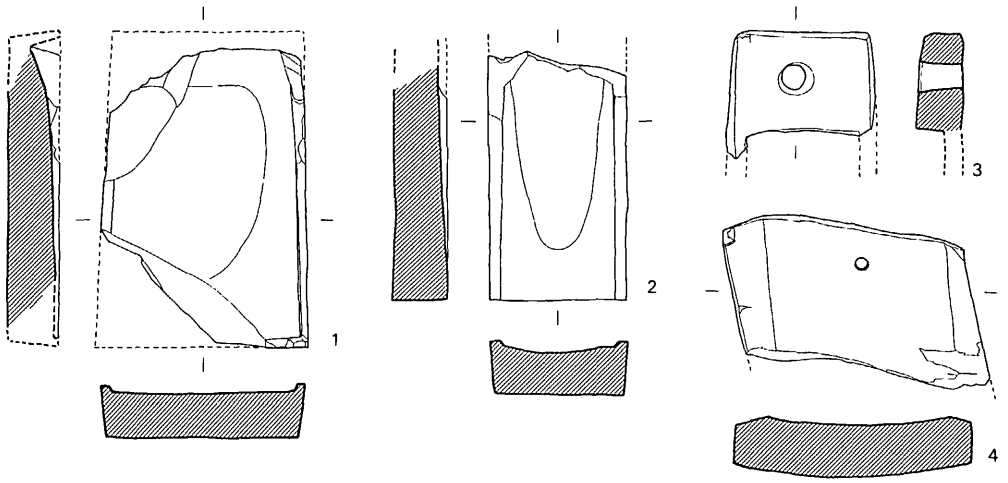
下駄(30～32)　形状はいづれも小判形に近い。鼻緒孔の前壺は台の中央に位置し後壺は後歯の内側にあけられる。後壺は全て焼火箸で穿孔されたために孔の周囲は焦げている。30は長さ15.9cm、幅7.8cm、現存高1.7cmと小形で、台と歯を一材から作った連歯のもの。女性か小児用として使われていたものか。31も同じく連歯のもの。台部左側を欠失する。歯の接地面は右にすり減っており右足用か。長さ23.0cm、現存高2.2cm。32は台と歯が別づくりの差歯のもの。台裏面はノミで削り、断面舟底状に整える。前後の歯は台形状になっているため、下端幅は台の幅より広い。上面には使用による足裏の圧痕が良く残っている。長さ23.2cm、幅11.9cm、現存高4.8cm。30はＳＤ2860、31は第II期整地層、32はＳＫ1470から出土。

土製品（図版69）

仏像残欠　土師質の土製仏像残欠が7点出土している。胎土の状況と残欠部分からみて2個体と思われる。そのうち膝前をのこす仏像からみると尊名は分からないが如来形坐像である。残欠部分から像高約1尺(30cm)、左右の蓮台の幅20cm前後に復原できる。頭部はやや大き目の肉髻部をつくり、地髪部との区分は明瞭である。螺髪は刻みつけられていない。衣部の一部に赤色の顔料が一部残っているので、赤衣の彩色があったことがわかる。製作は型入れによって行なわれたと思われる。残存部分からみると頭部は前後に分けて型が用いられ、膝前も別型の可能性がつよい。とすれば体部前後、膝前の三つの部分を型入れし、相互に接合して焼きしめているようである。土の厚みは、厚いところでほぼ5cm、薄いところで1.5cmなど一定していない。像底縁まわりに約4.0cmの高さの蓮肉部に相当する台座状のものがみられる。図版69―Ａの頭頂―顎は高さ10.4cm、面幅6.3cm、肉髻の高さ2.6cm、左右の張り5.6cm、前後の幅6.2cmである。Ｃ・Ｆ・Ｇは第III期整地層出土。ＢはＢトレンチ最終期の層、Ｅは上層の黒灰色土層、ＤはＳＸ2879出土である。またＡは第107次調査ＳＱ3140-183後方の遺構面上で出土したものであるが、同一個体になると思われるので、この項で報告した。

石製品（第29図・図版70）

硯(１・２・３)　１・２はいずれも長方形石硯で、石色はあずき色（輝緑凝灰岩）を呈する。１は硯頭部と硯尻部の一部を欠失し全形は知り得ない。残存部から復原すると、硯尻から硯頭部に向っての硯面の幅が狭くなる台形状の形態のものである。四周に一段高い縁部をめぐらす。側面はやや傾斜をもち、裏面は平らにする。陸部の中央にはやや凹みがみられ使用の痕跡を残す。墨の付着が顕著である。Ｃトレンチのｓ Ｘ2870（第III期）整地層出土。２は海部を含んだ



第29図　遺構・層位出土石製品実測図

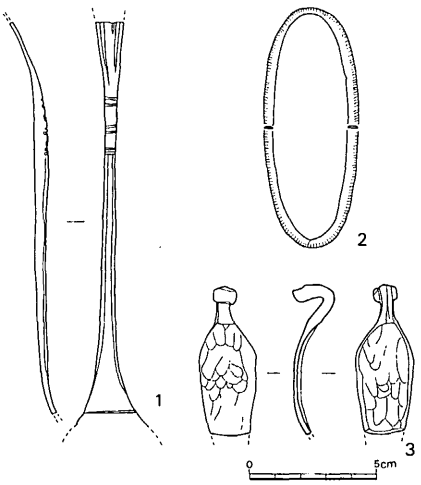
硯頭部を欠失する。残存部から硯頭部と硯尻部の幅は同じで、長方形を呈する。陸部中央は使用されたため凹みになっている。両側の縁部は硯尻に向って低くなり、端部は陸部と同じ高さになる。硯尻部には縁部は設けられていない。側面はやや傾斜をもち、裏面は平坦に仕上げている。ＳＸ2846出土。３は滑石製で、残存部の形状から硯の頭部と判断した。しかしながら硯の海部とみられるわずかな成形痕がみられるだけで、その根拠には乏しい。硯頭部には径1.0cm前後の穿孔がある。ＳＸ2870の整地層出土。

用途不明品（４）　滑石製の石鍋を再加工してつくられたもので、やや丸味を有する。上・下とも割れて欠失しているため全形は知り得ない。凹面の両側は面取り風に平らにしている。凸面は煤のためか黒色化が著しい。ＳＤ2855（第II期）出土。

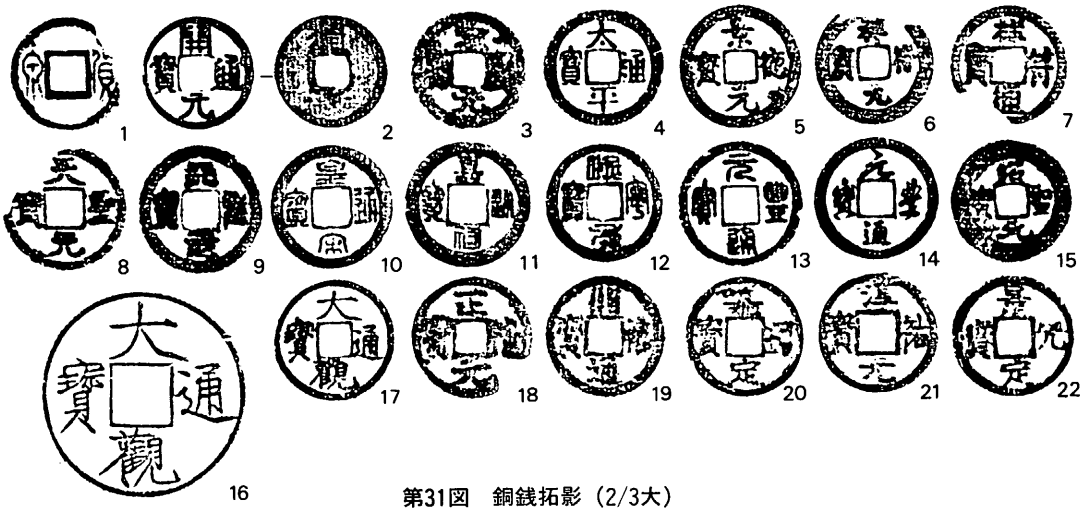
青銅製品（第30図）

匙形製品（１）　残存長15.4cm、柄部先端と匙面がすでに欠失し全形を知り得ない。棒状の柄から先端にかけて厚みを減じつつ、幅も広くなり、ゆるく彎曲する。柄部と匙面の境は現状で見る限り段がつかず、そのまま広がって匙面を形成するようである。柄部には先端にかけて線刻による装飾を彫る。形姿は朝鮮半島出土品に類似する。上層暗褐色土層出土。佐波理製か。

環状飾製品（２）　銅の細棒を叩いてのばし長円形にまわし、下端部を接合する。周辺はやすりで粗く整えただけである。断面はカマボコ形。表面には、タガネ



第30図　層位出土青銅製品実測図



第31図　銅銭拓影（2/3大）

銅銭出土遺構・層位表

図番号	1	2	3	4	5	6	7	8·9	10	11	12	13·14	15	16·17	18	19	20	21	22		合計
銅銭の種類	貨泉	開元通寶	宋元通寶	太平通寶	景德元寶	祥符元寶	祥符通寶	天聖元寶	皇宋通寶	嘉祐通寶	熙寧元寶	元豐通寶	紹聖元寶	大觀通寶	正隆元寶	開禧通寶	嘉定通寶	淳祐元寶	景定元寶	不明	
初鋳年代	新	唐	北宋	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	金	南宋	〃	〃	〃		
	王莽	高祖	太祖	太宗	真宗	〃	〃	仁宗	〃	〃	神宗	〃	哲宗	徽宗	海陵王	寧宗	〃	理宗	〃		
	天鳳元	武德4	開宝年	太平興国年	景德年	大中祥符年	〃	天聖元	宝元2	嘉祐年	熙寧年	元豐元	紹聖年	大観年	正隆年	開禧元	嘉定元	淳祐年	景定元		
出土遺構 ⊡層位	14	621	968〜975	976〜983	1004〜1007	1008〜1016	〃	1023	1039	1056〜1063	1068〜1077	1078	1094〜1097	1107〜1110	1156〜1160	1205	1208	1241〜1252	1260		
SB1440Aを覆う腐植土層				1					1			1									3
SB2850上面腐植土層	1	1							2							1				1	6
SX2865整地層																				1	1
SX2870整地層		1																			1
SX2870整地層を切る柱穴																				1	1
SG1630整地層		1										1									2
SG1630埋土																				1	1
SX2846									1												1
SD2867									1	1		3		2							7
SK2868を覆う腐植土層														1						1※	2
SX2877		2				1	1	1	3			3	1		1		1	1	1		16
堆積土・表土など			1	2	1			1	2		2	2	1							1	13
合計	1	5	1	3	1	1	1	2	10	1	2	10	2	3	1	1	1	1	1	6	54

※は「太平通寶」もしくは「治平通寶」（治平元年、1064）の可能性がある。

で打った細線が周辺と直交し、全周する。裏面に黒色物質が付着する。長径9.5cm、短径3.8cm、厚さ0.1cm。上層暗灰色土層出土。

鉤状製品（3） ややくぼんだ木葉状の身部に、そのまま短かく反転する柄部が続く。屈曲した柄部の先端は、三角形に突起し、紐架けを形成している。鋳造後、鎚打ちして身部を整形しており、鎚打痕を残す。身部下位が折れて不明なため、用途を明確にしえない。表土出土。

銅銭（第31図、図版70）

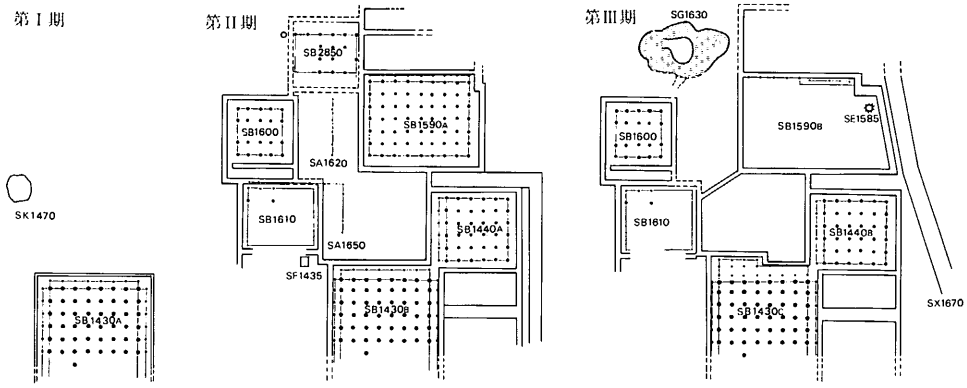
新の貨泉から南宋の景定元宝までの19種54点が出土した。第67次調査では46種873点の銅銭が出土したが、今回の出土銭の種類は貨泉を除いてすべて含まれている。背面に文字・記号のみられる例は2のみで、他は拓影を略している。2は開元通宝で、背面に不明瞭ながら浙西（今日の浙江省西部から江蘇省にかけての地域）での鋳造をあらわす「潤」字がみえる。今回の出土銅銭ではとりわけ王莽時代（ＡＤ８～24）の貨泉が注目される。これについては小結でふれることにする。

小結

遺構の変遷 第57・67・97次の三回の調査によって推定金光寺跡の建物部分の調査を西南隅の一部を残してほぼ完了した。この後に一体をなす墓所・火葬所を第107次調査として実施し、推定金光寺跡の全体像が明らかとなった。第97次調査の成果の一つはこの遺跡の北限を明らかにしたことにある。遺跡が第97次調査区の北へ広がることは地形的にも考え難いが、Ｆトレンチで確認した明瞭な地山の削平がそれを証明している。もっともこの削平が推定金光寺跡の造成にともなうものかどうかは不明である。ＳＢ2850の整地層に設定したＧトレンチで、その西壁近くに地山の開削面がみられ、整地上面から約1.25m下で平坦となる。これらＦ・Ｇトレンチの地山の開削は第II期の整地に先行している。それはたとえばＳＤ2872にともなう造成と思われるが、それが第Ｉ期となるか否かは判断できない。Ｆトレンチ最下層出土土器からみればこの開削は平安時代に遡る可能性があるし、これまでのところ、第Ｉ期遺構はＳＢ1430Ａ・ＳＫ1470など遺跡の南辺に片寄っているからである。第Ｉ期と第II・III期との規模の落差からすればあるいは第II期遺構の下層に埋没しているのかも知れないが、確認できなかった。

ともあれ、推定金光寺跡の第Ｉ期は13世紀後半～終末頃にはじまる。この期の建物はＳＢ1430Ａがある。東西７間で、南辺が調査区外のため明らかでないが南北６間以上の礎石建物である。東西の尾根筋の間の、平坦にした造成地の中央に建ち、地形からみて南面すると思われ、とすれば７間×７間の建物となる。以後第III期まで存続し、後続する建物群にくらべて一回り大きな礎石を用いるなど、この遺跡の中枢をなす建物である。

14世紀中頃を降らない時期にはじまる第II期にはいると、ＳＢ1430Ｂのほかに ＳＢ1440Ａ・ＳＢ1590・ＳＢ1600・ＳＢ1610・ＳＢ2850の５棟の建物が造営される（このうちＳＢ2850は早



第32図　推定金光寺跡遺構変遷図

く廃棄されている)。また基壇状遺構がＳＢ1440Ｂの南にＳＸ1450、ＳＢ1590Ａの北にＳＸ2860・ＳＸ2865がつくられる。これらの建物、基壇状遺構は中央の広場を囲むように整然と配される。またこれらには排水用の石組溝がめぐらされ、それらは相互に連続する。したがって６棟の建物は一体をなす可能性をもつ。しかし建物相互は独立し、ＳＢ1440Ｂと東尾根の間に道ＳＸ1670Ａ、建物相互の間に歩廊状の通路をつくり、中央広場にも柵を配して遮断している点は、各建物の独立性をあらわすものと思われる。

第Ⅲ期は14世紀終末～15世紀初頭頃に成立したと考えている。第Ⅱ期の段階に、ＳＢ1440Ａ・ＳＢ2850の整地層上面が腐植土層に覆われているように、かなりの出水があったようである。そのためか、第Ⅱ期の建物のうちもっとも山付きのＳＢ2850は廃棄されて園池ＳＧ1630に造り替えられ、ＳＢ1440Ｂのようにかさ上げをした建物もある。ＳＢ1590の背後の基壇状遺構ＳＸ2860・ＳＸ2865も一つにまとめられＳＸ2870となる。このように第Ⅲ期は第Ⅱ期のそれを建て替えあるいは改修して造営されたと思われ、配置に第Ⅱ期と大きな開きはない。この時期においても建物は独立し、歩廊状通路で分けられ、東には道がつくられているのである。つまり第Ⅱ・Ⅲ期の建物は一体をなすとも、いくつかの群に分けられるとも考えられよう。ただ小区画に分けた場合には、全体の中で調和のみられる園池の位置づけに困難が生じることになる。

第Ⅳ期は16世紀前半頃をもって終わると考えている。遺構としては第Ⅲ期層を覆う整地状の土層がみられ、溝・石組遺構・杭列などがみられる。しかしすでに建物はなく、そこには推定金光寺跡とは別性格の生活があったのであろう。

遺跡の性格　三回の調査を通じて常に問題となったのは遺跡の性格である。

1953年にＳＢ1430をはじめて調査した鏡山猛氏によって本遺跡は金光寺跡とされた。[(4)]それは出土遺物に仏教関係の遺物が多かったことと、所在が大字観世音寺字今光寺で、観世音寺子院四十九院のひとつ金光寺を思わせたからであろう。しかし字今光寺の範囲はきわめて広く、また谷筋としては座禅谷と通称されるところで同じ子院の座禅寺にも通じる。つまり、本遺跡を

金光寺跡と断定するにはさらに検討が必要であった。

第57次調査の時点では、ＳＢ1430・ＳＢ1440の２棟のみが知られ、規模と出土遺物の違いからそれを本堂と庫裡と考えた。ところが第67次調査でその背後に３棟の建物が、第97次調査で１棟の建物が検出され、さらにＳＢ1590で検出された木簡の内容やその他の出土遺物に寺院的でないものが少なからず検出されるなど、そう簡単には考えられなくなってきたからである。遺構・遺物からみて、現状でこの遺跡は①金光寺を含めた観世音寺子院、②金光寺を含めたいくつかの観世音寺子院の集合体、③居館の３通りの性格が考えられよう。

①はこの遺跡がＳＢ1430の１棟にはじまり、拡大していったとみる時である。ＳＢ1430を本堂、ＳＢ1440を庫裡とみることは先述した。瓦葺建物で宝形造りの「三間堂」と称される建物とみられるＳＢ1600は、第107次調査で報告するように墓所･火葬所の前面に建てられ、礼拝堂の性格をもつとみられる。つまり性格を異にする建物が一体となってひとつの子院を形成したとみるのである。

②は①のように考えた場合、この子院は観世音寺本体よりも大規模な寺になりかねない。そこで、柵・道・歩廊などの存在から、たとえばＳＢ1430・ＳＢ1440、ＳＢ1590・ＳＢ2850、ＳＢ1600・ＳＢ1610のような組み合わせの子院の集合体とみるのである。いくつか子院が集合する場合、隣接するにしても土塀などで画されるからいくつかの子院に分離する条件は弱いが、逆に一体の寺であるならばこれほどの道・歩廊は不要とも考えられ、この可能性は否定できない。この場合、ＳＢ1600は礼拝堂であるとともに、観世音寺の墓寺の可能性が生じてくる。

いずれにしても①・②は寺とみる点で変わりはない。③は居館とみる場合で、性格は一変する。居館説の根拠は②同様規模の大きさと、「さいふいつミたゆうとのち□とのにまいる」（宰府＜西府＞泉大夫殿ち□殿に参る）、「十貫文とう四郎」など寺院的でない人名を付した木簡や子供用下駄・櫛・笄などの女性用品など児童・妻女を含む家族の居住を思わせる遺物などが出土している点にある。十分に考慮すべき見解である。ただ木簡には１点ながらも「志を五つ丶らのうちさ□□□あんにまいる」（塩一葛のうちさ□□□庵に参る）と寺院名が混じる。さ□□□庵に相当する子院は明らかでない。西福寺・西林寺のいずれかかも知れないが、それは本遺跡と観世音寺の間に所在を推定できる。ともあれ付札は進上者を示す場合、あるいは進上後の移動の場合も考えられる。子供用下駄は稚児の、櫛・笄は願掛けの奉納物ともみられる。このように居館を考えさせる遺物は視点を変えれば寺院を思わせることにもなり、居館と判断することも困難である。因みに建築史学者による遺構そのものの評価も寺院説と居館説に分かれている。

以上のように本遺跡の性格は寺院と決するにもまだ解決すべき問題が多く、ましてや金光寺と断定することは不可能に近い。性格の決定は周辺の調査を進める将来のものとし、当分は「推定金光寺跡」と称しておきたい。

貨泉の出土　今回の出土銅銭では中国の王莽新代の天鳳元年（ＡＤ14）に初鋳された貨泉の出土が注目できる。方孔の円銭で、暗緑色を呈する。両面ともに方孔のまわりに郭をもつ。一部分を欠くが、方孔の右に「貨」、左に「泉」が篆書で鋳出されている。方孔の上下で、直径22.7㎜、郭長9.9㎜、郭線幅1.8㎜、郭厚1.3㎜、孔幅6.6㎜をはかる。一部を欠くが、重量は2.05ｇである。

貨泉の鋳造期は北部九州の弥生時代後期初にあたり、後期初頭～中頃の遺構を中心に沖縄県から北海道にかけての26遺跡から38枚出土している。この他に参考として表に付け加えたように、王莽銭は貨泉以外にも福岡県大野城市仲島遺跡から「貨布」、福岡市鴻臚館跡から「大泉五十」が各１枚出土している。

貨泉は紀元14年の開始以来、わずか10年で鋳造を終えたと考えられる。近年、後漢代の出土銭を分析された菅谷文則氏は法量の大きな貨泉のように後漢代にもその鋳造が行なわれたことを指摘されている。[5] 菅谷説が正しいにしても、弥生時代に後漢の五銖銭の渡来はみられない。これに対し貨泉の出土例はみられ、これらの大半が方格規矩四神鏡などの王莽鏡とともに渡来した王莽銭であることを示している。本遺跡出土の貨泉もまた直径や一部を欠くとはいえその重量から王莽銭と判断できる。たとえば埋納の買地券から光和５年（ＡＤ182）の埋葬が確実な河北省望都２号漢墓からは597枚の五銖銭とともに半両銭１・貨泉２・貨布１が出土[6]していて、少ないながら王莽銭の流通を示している。岡崎敬氏は貨泉・大泉五十などの王莽銭の流通が六朝時代にも及ぶことを指摘されている。[7] 三国呉嘉禾５年（236）の「大泉五百」や陳天嘉３年（562）・北周保定３年（563）の「布泉」は王莽銭の大泉五十・布泉を意識してのことであろう。このように少ないながらも中国において後漢以降にも貨泉の流通をみることができる。

日本出土の王莽銭の中には中世遺跡の出土例がかなりみられる。たとえば沖縄県今帰仁城志慶真門郭跡・宮崎市曽井古墳・大宰府推定金光寺跡・福山市草戸千軒町遺跡出土の貨泉および大野城市仲島遺跡出土の貨布、福岡市鴻臚館跡出土の大泉五十は本来の流通の時期をかなり降る。曽井古墳の場合出土状況が明瞭でないが、大分県下で弥生時代中期～後期前半頃に伝来した朝鮮製の小銅鏡・小銅鐸が弥生時代終末に廃棄された例があり、弥生時代に伝播した貨泉の残存とみられないことはない。仲島遺跡の場合は弥生時代遺跡の重複が指摘されている。しかし今帰仁城志慶真門郭跡・推定金光寺跡・草戸千軒町遺跡出土の貨泉は大いに事情を異にする。今帰仁城志慶真門郭跡からは貨泉・五銖銭とともに唐・宋・明銭が65枚、推定金光寺跡からは唐・宋・明銭が963枚、草戸千軒町遺跡ではその第35次調査を例にとると12,586枚の中国古銭が貨泉とともに出している。北海道志海苔遺跡などの備蓄銭をみてもいずれも北宋銭が中心となっている。つまり中世遺跡出土の貨泉は宋銭とともに扱われているのであって、それは宋銭の流入にともなってもたらされたと解するのがもっとも穏当な見方であろう。決して弥生時代にもたらされた貨泉が十数世紀を経て流伝したものではないのである。

貨泉出土地名表

No.	出土地名	遺構	時期	径（cm）	文献
1	長崎県下県郡豊玉町大字佐保字シゲノダン	埋納土壙	弥生時代後期初頭～前半	2.3	岡崎・小田　1969
2	長崎県壱岐郡芦辺町深江　原ノ辻遺跡	包含層	弥生時代後期中頃	2.35	水野・岡崎　1954
3	福岡県糸島郡志摩町御床松原	包含層	弥生時代遺跡	2.23～2.3	中山　1917
4	〃	包含層	弥生時代後期前半	2.15	井上　1983
5	〃	包含層	弥生時代後期前半	2.27	〃
6	福岡県糸島郡志摩町大字新町	包含層	時期不詳	2.32～2.34	橋口　1987
7	福岡県福岡市博多区堅粕　吉塚遺跡	包含層	古墳時代後期	2.23	新聞による
8	福岡県太宰府市大字観世音寺　推定金光寺跡	寺跡	中世（14世紀）	2.27	本概報
9	福岡県中間市感田字西前田				中山　1920
10	熊本県菊池市大字長田　長田外園遺跡	包含層	弥生時代後期終末か		高山　1982
11	熊本県菊池郡七城町　うてな遺跡	住居跡	弥生時代後期後半	2.3	高木正文氏による
12	宮崎県宮崎市曽井　曽井古墳	前方後円墳	古墳時代？	2.3	山崎　1920
13	鹿児島県曽於郡大隅町大字岩川字中馬場	採集		2.2	池畑・中村　1984
14	沖縄県国頭郡今帰仁村大字今泊字ハンタ原 今帰仁城志慶真門郭跡	城跡	中世（14～16世紀）	2.4	金武・宮里　1983
15	愛媛県北条市善応寺	採集			得居　1981
16	広島県福山市津之郷町本谷	包含層	弥生時代後期	2.3	村上　1954
17	広島県福山市　草戸千軒町遺跡（第4次調査）	排土	時期不詳（中世？）	2.240～2.245	篠原芳秀・岩本正二氏による
18	〃　（第30次調査）	土壙	中世（鎌倉時代）	2.260	〃
19	〃　（第35次調査）	埋納銭甕内	中世（南北朝時代）	2.235～2.240	〃
20	〃　（　〃　）	〃	〃	2.285～2.310	〃
21	大阪府大阪市東住吉区瓜破西之町　瓜破遺跡	包含層	弥生時代遺跡	2.2	文殊　1986
22	〃	包含層	中世		
23	大阪府東大阪市若江西新町　巨摩廃寺遺跡	包含層	弥生時代後期前半～中頃	2.5	玉井・井藤・小野　1982
24	大阪府八尾市南亀井町　亀井遺跡	土壙	弥生時代後期中頃	2.70～2.75	寺川・尾谷　1980
25	〃	包含層	弥生時代後期後半	2.31	高島・広瀬・畑　1983
26	〃	包含層	〃	2.26	〃
27	〃	包含層	〃	2.195	〃
28	大阪府貝塚市　澱池遺跡	包含層	中世		
29	京都府京都市左京区一乗寺向畑町	採集	「至大通宝」を共伴		
30	京都府熊野郡久美浜町湊　函石浜遺跡	採集	弥生時代遺跡	2.2	梅原　1920・22
31	〃	採集	〃		
32	長野県岡谷市長地　榎垣外遺跡	採集			両角　1931
33	〃	採集			〃
34	〃	採集			〃
35	新潟県南魚沼郡塩沢町吉里字糠塚	埋納銭	中世		山口県　1980
36	青森県南津軽郡尾上町猿賀	埋納銭	中世（鎌倉～室町時代）		千代　1981
37	青森県弘前市乳井	埋納銭木箱内	中世（鎌倉～室町時代）		千代　1981
38	北海道函館市志海苔	埋納銭甕内	中世（14世紀）	2.26～2.32	千代　肇氏による
参考	貨布　福岡県大野城市仲畑　仲島遺跡	溝	古墳時代（6世紀後半～末）	5.8（長）	舟山　1983
参考	大泉五十　福岡県福岡市中央区城内　鴻臚館跡	土壙	古代（11世紀）	2.7	新聞による

（なお、紙数の都合上、文献の詳細は省略している）

註(1)　九州歴史資料館編『大宰府史跡』（昭和53年度発掘調査概報）1979。
九州歴史資料館編『大宰府史跡』（昭和55年度発掘調査概報）1981。
(2)　註(1)昭和55年度概報14ページ。
(3)　註(1)昭和55年度概報第19図6。
(4)　鏡山　猛「金光寺址」（『日本考古学年報』6）1953。
(5)　菅谷文則「銭貨と年代―とくに王莽銭について―」（『日本考古学協会昭和57年度大会発表要旨』）1982。
(6)　敖承隆『望都二号漢墓』1959。
(7)　岡崎　敬「日本および韓国における貨泉・貨布および五銖銭について」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』）1982。

5　第107次調査

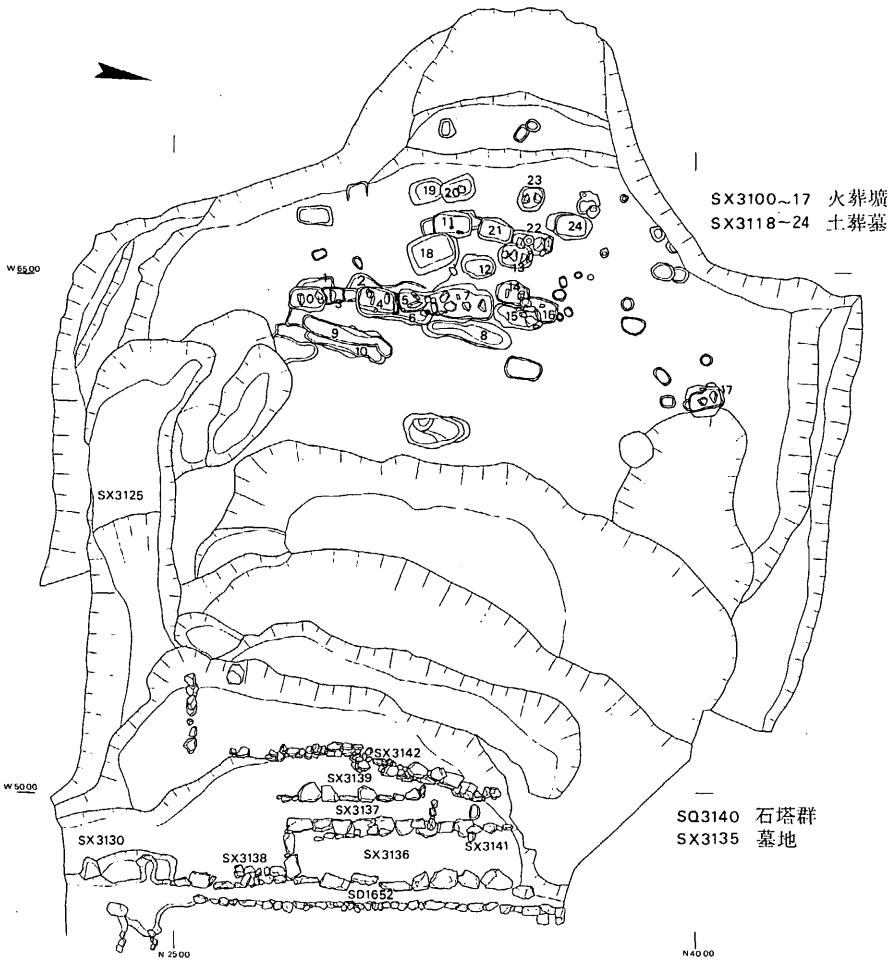
推定金光寺跡については第57次調査（昭和53年度）・67次調査（昭和55年度）・97次調査（昭和56年度）として過去三次の調査を実施している。そして、今回はその四次目にあたる。過去三次の調査により、礎石建物６棟、建物の周囲に巡らされた石組の排水溝、池、井戸等の遺構をきわめて良好な保存状態で検出し、ここが中世の寺院もしくは武家の居館的性格を有する大規模な遺構群であることが判明していた。この三次の調査で、この地域についての発掘調査はほぼ終了していたが、昭和61年に、保存整備の関係で遺構群を覆う土の除去と再調査の際、西側の低丘陵の斜面にトレンチを設定し調査したところ、五輪塔等の石塔および火葬壙らしき遺構が検出され、ここに墓地遺構が存在する可能性が指摘されるに至った。そして、この予備調査の成果を受け、この斜面一帯に造られたと予測される墓地遺構の性格および範囲等を把握するため今回、第107次調査として実施した。

遺跡は背後の四天王山から南へ延びる谷筋に立地し、西側と東側には低丘陵があり、それは細長く観世音寺の背後近くまで至っている。本次調査地はこの西側に伸長する丘陵のつけ根にあたる斜面部の約440㎡を対象として調査を実施した。この地は第67次調査地に隣接し、裾部で既検出の礎石建物ＳＢ1600に接した地域である。地番は太宰府市大字観世音寺字今光寺990および大浦谷715―160番地である。

調査は昭和62年５月14日に着手した。調査地域は傾斜地であり、また木の根等があるため表土は重機により除去し、５月28日から覆土の除去を開始した。傾斜地の作業の都合で、上方の平坦部から遺構検出作業には入り、６月中旬には下方の石塔群の遺構検出へと進み、６月末日には石塔群の遺構検出を終った。この時点で石塔群の部分写真撮影と略実測を行なった。終了後原位置を動いた石塔の取り上げ作業を開始し、土葬墓、火葬壙の精査を含め７月の中旬には一応の遺構検出を終了し、実測、写真撮影を行った。そして、９月初旬から石塔の取り上げ作業と補足調査を始め、これらの作業が終了したのは９月末日である。

検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構は７基の土葬墓と五輪塔を中心として構成される石塔群からなる「墓所」遺構、および18基の火葬壙を有する「火葬所」遺構である。各期にわたる遺構群は傾斜面を削平して造られた３つの段差によって大略構成される形となっており、各々の段差には平担地が設けられ、そこに遺構が造営されている。最上段部には「火葬所」が、中・下段部には石塔群からなる「墓所」が造営されている。最上段部では後に土葬墓が造られるなどして、当初の姿と異った所がみられる。また中・下段部では層位の関係から大略二時期の遺構の重複が確認できている。すなわち、ＳＸ3136・3139の石組みによって区画された最初期の墓所



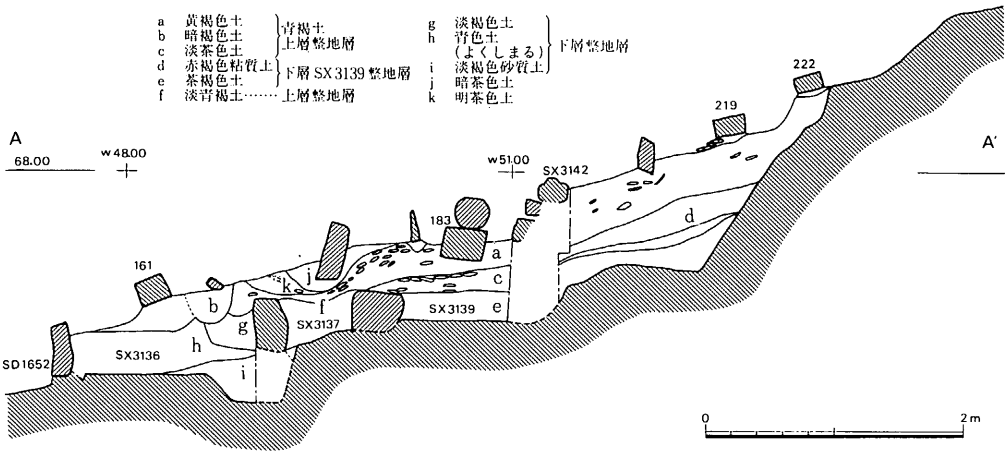
第33図　第107次調査遺構配置図

が営まれる。その後この区画上を盛土整地し、石垣ＳＸ3142を構築することによって、新たに中段部分を造るなどして、墓所の拡張造営がなされ、当初の墓所が大きく改変される。

すなわち、当初は上段部に「火葬所」を設け、下段部に墓地を造営するという基本的な計画があったようであるが、後に下段部分は整地、拡張され中段部分が設けられ、さらには上段の火葬所も墓所と併用されて使われてくる。

地区の区分と土層の関係

「火葬所」および墓所は丘陵頂部（比高差約15m）から東側のや、急斜面を東西幅約20mにわたって地山整形を施し、部分的に盛土整地をし中段部を設けている。上段部と中段部の比高差は約6.0mある。



第34図　A地区の土層

以下、記述の都合上から「地区」「区」「群」「単位」の4つを設定し述べたい。

中・下段の石塔群が造営された地域いわゆる墓所をA地区、上段の「火葬所」が設けられた平担部をB地区に大区分する。そして、A地区では石塔群の配列状況からⅠ～Ⅲの3区に区分し、さらに各区を五輪塔と板碑のそれぞれを「群」「単位」に小区分する。

次に土層の関係について記述する。

発掘区は全体的に自然堆積の厚い層があり、その下層に遺構面を覆う遺物包含層が認められる。この遺物包含層は下方のA地区ではかなりの厚さになる。この包含層中から出土する最も新しい遺物としては中世末～近世初頭のものが出土する。B地区では地山の花崗岩バイラン土が露出し、東側よりは黄褐色の整地土が認められ、遺構はそれに掘り込まれる形で営まれている。東半分の整地土の下は黒褐色の自然堆積層状の厚い層がみられる。A地区では上・下2層の遺構が重復している。

下層遺構として墓所を区画するＳＸ3136･3139があり、これは整形された地山上に造られる。上層遺構は下層の区画を含めＢ区全体を盛土整地（青褐色土・黄褐色土・暗褐色土・淡茶色土層）し、大部分の石塔群はこの整地上に造営される。石垣ＳＸ3142はこの整地上に構築されているが、その時期は整地時もしくはそれよりやゝ遅れた時期が考えられる。この上層の石塔群に伴なう14世紀代の遺物が遺構面から出土しており石塔群の造営年代を知り得る手掛りの一つになる。この石塔群の直上を覆う層として、暗灰色土層があり、その上層に暗灰色土層がのる。この層は、上層石塔群の廃絶終焉を示すものである。

A地区（墓所）

下層遺構

下層遺構として墓所の区画施設ＳＸ3136・3139それに通路状遺構ＳＸ3137・3138がある。

墓所区画施設

SX3136　礎石建物ＳＢ1600と隣接して構築された南北7.0m東西2.0mの長方形の区画で、北端部は斜面を削り整形した地山面に接続した形となる。区画の護岸として使用された自然石は周囲の排水溝等に使用された石より一まわり大きい。西面する護岸石は北端部近くで直角に石１個分西へ折れ、西壁の地山面と接続する。この遺構面とＳＢ1600の遺構面の高低差は約0.5mあり、ＳＸ3136が一段高くなっている。この区画に伴なう石塔として、蔵骨器をもった170と、176の五輪塔が考えられる。

SX3139　ＳＸ3136と約60cmの間隔をもって西側の一画を区画する施設である。東側から北側に「Ｌ」字状になる護岸の石は西側の岩盤面に接続し、西側は約１mの高さの、地山整形した西壁で画されている。この護岸石は南端部では欠失しており定かでない。この区画施設と伴なう石塔はないが、黒釉の蔵骨器250がその可能性が強い。

通路状遺構

SX3137・3138　区画施設3136の東側護岸石と面を合わせ一線の護岸となっている。ここでは通路状遺構としたが、ＳＤ1652の溝と連続することを考慮すれば、西側傾斜面上の排水をも兼ねた施設と考えられる。

土留遺構

SX3143　ＳＸ3139の南端部付近で検出した木製の板状の痕跡を残す遺構である。この痕跡はＳＸ3139に直交するように位置し、長さ約3.5m、厚さ約0.08mである。深さは断面観察によれば0.5m前後あり、底部はＳＸ3138の地山面に接する。層位的には最初期の遺構ＳＸ3138・ＳＸ3139等よりも後出し、また上層の遺構ＳＸ3142等よりも先行するという層位関係になる。このことから考えると、墓所区画ＳＸ3136・3139が存在していたある時期に、施行されたとみられる。土層観察からすると板状痕跡を境いとして南側と北側では明らかに土層が異なり、おそらく板状のもので仕切り、土留め材として用いたのであろう。

上層遺構

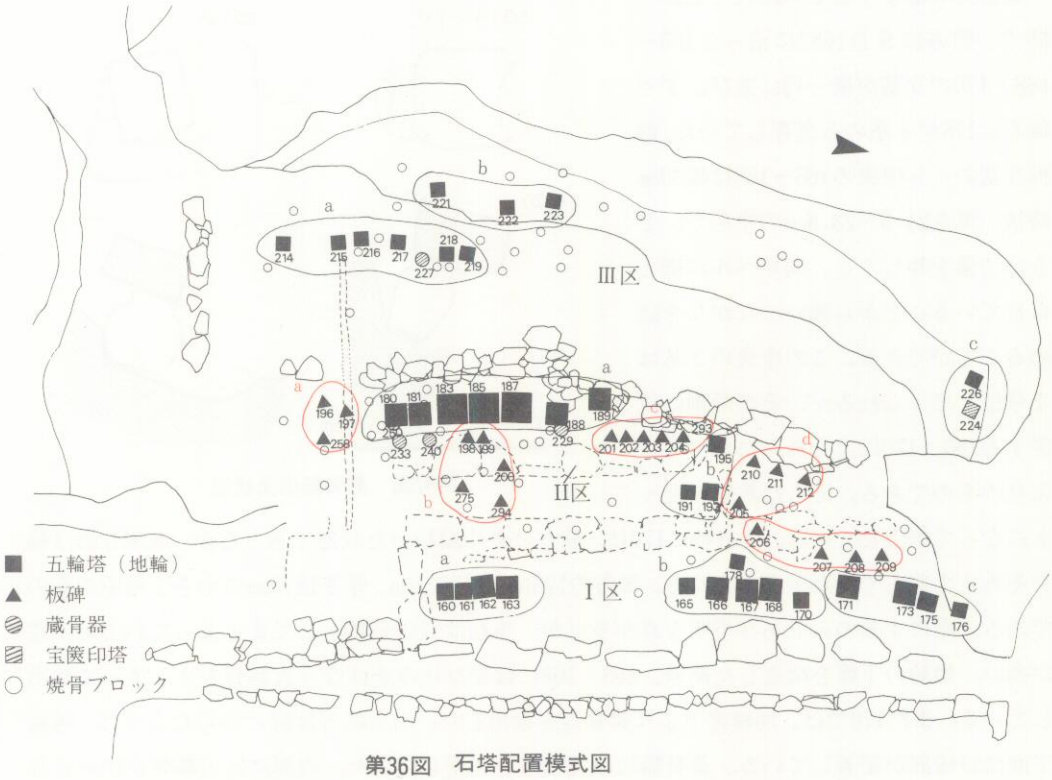
石塔群

石塔群はそのほとんどが原位置を離れ散乱していた。そこで、確実に遺構面に据えられていたと思われる石塔を図示したのが第36図である。整理の都合上、図示した遺構番号は、例えば水輪と地輪がセットであっても別々に付けた為、連番とはなっていない。

これらを俯瞰すると、南北方向に数列配置されているのが分る。大きくは石垣ＳＸ3142をはさんで上段と下段の２区に分けられるが、さらに下段を二つに分け、便宜的に３区に区割りした。

また、石塔は造塔時の位置を保つと考えられるものも数塔（170・176）存在するが、多くはその後に整理されているようである。両者の明確な区別は現段階で困難なので、ここでは全ての石塔群を上層遺構として記述する事にした。

第35図　A地区遺構配置図



第36図　石塔配置模式図

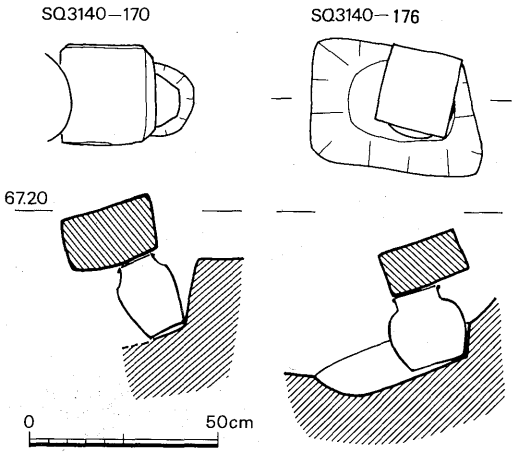
Ⅰ区　A地区の最前列を占め、ＳＢ1600西側の雨落ち溝ＳＤ1652に沿うようにして並んだ石塔群である。14基の五輪塔と４基の板碑で構成される。配列に多少の出入りが認められるが、石塔のまとまりから五輪塔をａ・ｂ・ｃの３群と板碑をａ群の４支群に分ける事が出来る。

五輪塔

ａ群はⅠ区の最も南に配列された一群で、160～163の４基からなる。いづれも近接した位置関係を保っている。160・161は高さ20.0cm、幅20.0cmの立方体をした小形の地輪。162、163は一辺の幅が28cm前後を計るが、高さはその半分近い16cm前後と厚みが乏しい地輪である。法量から見る限り、160・161と162・163はそれぞれ同形態である事がみてとれ、さらに接地面もそれぞれ一致するなど共通性をあげる事ができる。したがってａ群は現状では、二基の単位から構成された一群である事が云えよう。

なお、ＳＤ1652の付近で二基の水輪を検出したが、位置関係からそれぞれ162、163に伴っていたものである可能性が強い。地輪の下面を精査したが、蔵骨器は検出していない。ただし、162の下面から少量の火葬骨を得たが、掘り込みがはっきりせず、青褐色土整地層に混った状況であることから、162の五輪塔に確実に伴なった地下埋葬骨とは断定できない。また、163は、河原石の敷石上に据えられていた。

b群はa群より約2m離れて並ぶ一群で、前方にSD1652に沿った165～168・170の5基が横一列に並び、すぐ後ろに178が1基のみ遺存していた。前列5基のうち中央の166～168は幅30cm前後、厚さ21.5～23.6cmの中形で、ともに法量を等しくし、同レベルに据えられていることから強いつながりを認めることができる。この中央の3基は1単位と考えられるが、その両側に位置する165、170は、それらに比べて小ぶりのものである。ともに水輪とセットになって出土している。検出時に170は、前方にやや傾むいた状態であったが、本来b群は軸をそろえて並んでいたと考えられる。後方の178は、幅22.1cm、厚さ13.3cmの小さく薄手のものである。単に1基のみであり不明な点が多いが、当初は別の一群としてまとまっていた可能性が高い。地輪の下面を精査した結果、165・168には掘り込みを伴なう火葬骨をまとまって検出している。また170では、地輪直下より蔵骨器を検出した。出土状況は図に示したように、地輪下面に口縁部が密着している。蔵骨器には褐釉壺を利用していた。内部には火葬骨が納められていた。蔵骨器を取り上げると、さらに掘形底面から火葬骨がまとまって出土した。蔵骨器は上部の地輪に確実に伴なうとみられる事から、この五輪塔が供養塔としてではなく墓塔として造塔されたものと考えられる。



第37図　蔵骨器出土状況

c群は、I区の最も北側に並んだ一群で、これより北側には石塔は見あたらない。a・b群同様に横一列に並んでいるが、その中軸ラインは、ややb群とは異にしている。171・173・175・176の4基から構成され、地輪の法量は北へ並ぶにしたがって順に小ぶりになっている。配置はa・b群の様に側面を接してはおらず、171と173、175と176の間にはほぼ1塔分の空白地が存在する。171は、他より低い位置に据えられ、どちらかといえばb群と同じ高さである。したがってb群に加えた方が良いのかもしれない。173・175は地輪の側面を接し同じ高さに据えられ上面に水輪を残している。法量に多少の違いがあるものの同形態のつくりであることから、一つの単位を構成したものであろう。176はこれらよりさらに一段高いテラスに置かれ、下面はすでに地山面となっている。これらの下層の状況は、176以外特に火葬骨は出土せず、173・175では敷石が敷かれていた。176は170と同じように、地輪下面に密着した蔵骨器が出土した。蔵骨器には須恵質の壺を使い、周囲に0.5×0.4mの東西に長軸をもつ土壙状の掘り込みを伴なっていた。蔵骨器内には火葬骨が口縁部付近まで納められていた。

176のすぐ北側で自然石のままの板碑が出土したが、すでに倒れて込んだ状況であった為ここでは割愛した。

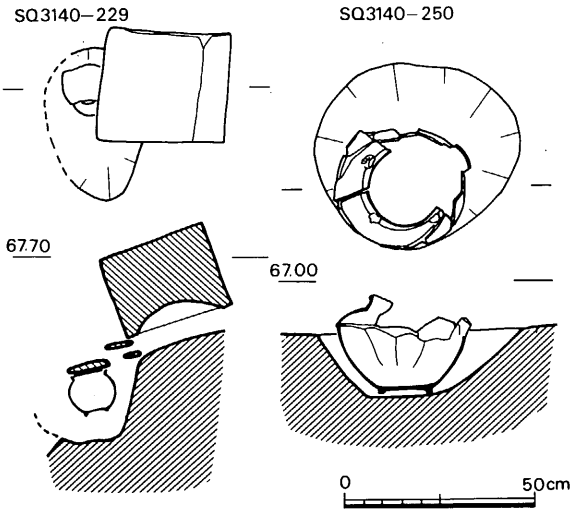
板碑

Ⅰ区では4基の板碑が出土し、墓域の東側にまとまっている。五輪塔b・c群の後方に横一列に並んだ一群として配されている。206は、下層の石列ＳＸ3136の上に位置している。頂部と額部はすでに折損し、表面の風化も著しい。207～209は近接して並んだもので一つの単位を見い出せるが、形態は同じではない。207は自然面を残し、前面のみ粗く面取りしたもので、身部に種子は認められない。208・209は、頭部を三角形に整え、横線を刻んで額部を低く削り出したものである。身部にはキリーク𑖀の種子を彫っている。いづれも分厚く特に208は細身の形態である。これら3基は頂部の高さをそろえている点で、配列の上のみではなく、密接な関係をさらに印象づけている。下面を精査したところ207・208のすぐ後側から火葬骨がまとまって出土した。

Ⅱ区　10基の五輪塔と17基の板碑で構成される。石塔のまとまりから五輪塔をａ・ｂの2群に、板碑を4群に分けることができる。

五輪塔

ａ群は墓域全体の中央寄りにあって、石列ＳＸ3142の前面に一列に並んだ一群である。総数7基から構成されている。これらは地輪の形態から三つの単位を認めうる。まず左側の180・181は幅30cm弱、厚さが20.5cmと22.7cmの中形のもので、側面を接して並んでいる。中央の183・185・187は幅36cm前後、厚さも29cm前後の法量をもつ。今回検出した五輪塔の中では最も大形の部類に入り、重厚な感じを与えている。いづれも上面に水輪を伴ない、水輪には、金剛界の四仏が四面に彫られ、阿彌陀如来キリークは東面、すなわちSB1600を向いて配されている。これらは五輪塔の形態、配置関係からみて、三基が強いつながりをもった一単位であることは明らかであろう。さらに、東に188・189の2基の地輪が存在する。これまで述べてきた五輪塔が全て花崗岩の石材を使用したものであったが、この2基は石材に砂岩を使ったものである。一辺の幅は31cm前後と揃っているが、幅は188が23.7cm、189が19.5cmと、やや189は薄手である。また底部外面も189は平担であるが、188は断面弧状の抉りを入れている点を異にしている。両者の据えられたレベルは、他の二つの単位よりやや高く位置し



第38図　蔵骨器出土状況

ている。a群の中では、この188・189を除いたものは、大きさを違えているものの、地輪前面の通りを一致させている。下層には河原石に混って焼骨片が少量出土したのみである。ただし、189のやや前面で図示した様に蔵骨器が出土した。青磁小壺を利用し、上面には河原石が蓋をするように覆っている。189がこの蔵骨器への墓塔である可能性は低いと考える。その他に注目すべき例として、180・181の前面から検出した233・240の蔵骨器があげられよう。この蔵骨器は丸瓦をそのまま利用したもので、裏面を上に向け凹面に火葬骨を納めている。上面に河原石をかぶせた状態で検出した。配置は、後方の地輪に平行して直列に並んでいる。五輪塔を立てた後に、追葬したものかもしれない。なお、180の下層約50cm下で黒釉陶器を利用した蔵骨器250が出土している。口縁部は、その後の墓地改葬時に撹乱されており、下層の時期に伴なっていたものと考えられる。

b群は、II区の北寄りで検出した3基から構成される。全て水輪を伴なっている。この中で191・193は近接して並んでいる。191は幅22cm前後、厚さ12.2cmと小形のものである。この後方にはSX3142のすぐ前面に接するようにして195が位置する。幅29.0cm前後、厚さ28.4cmの中形のものである。これら3基の下層からは何も出土しなかった。

板碑

17基の板碑はa・b・c・dの4群にまとまる。なかでもII区に集中している。

a群は、五輪塔a群のすぐ南に位置し、196・197・258の三基がまとまる。いづれも高さ30cm以下の小形のもので、自然石の一面を平らにしただけで、身部に種子は刻まれていない。

b群は、五輪塔a群の前面にまとまる198・199・200・275・294の5基からなる。全て自然石を一面のみ整えたものである。このうち198・199は側面を接している。

c群は、五輪塔のa群とb群の間に位置し、SX3142の前面に並んだ201～204・293の5基からなる。横一列に整然と並んでいることから、強いつながりが考えられる。201と203は頂部を山形に整え、塔身との境に額部をつくるが、額部の出は短かい。裏面も二面の面取りを施し、断面三角形となる。塔身にはキリーク𑖀の種子を彫り込んでいる。201は頂部がつぶれてやや丸くなっているが、残りが良く全形の解るもので、全長63cm、幅9.5cm、下部を鋭く尖らせた形態をなす。約1／3を地中に差し込んでいる。202・204・293は自然石を一面のみ整えたものだが、204は板状に割載している。一群一単位で構成される。

d群はII区の最も北側で、SX3142の前面に沿って並ぶ210～212の3基からなる。210・211は自然石を一面のみ整えたものだが、210の基部は裏面から削って尖らせている。212は頭部を山形に削り、額部をつくるが、その出が短かい為に、二本の刻線を入れただけに見える。額部の下にはキリーク𑖀を刻む。d群も一群一単位で構成される。

III区　I・II区より1段高い位置に造塔されている。五輪塔10基と宝篋印塔1基からなり、それらはa・b・cの3群にまとまる。

①五輪塔、宝篋印塔は長辺、板碑は最大幅 ②五輪塔・宝篋印塔は短辺、板碑は厚さ

区	遺構番号	塔種	法量(cm) ①	②	高さ	石材	備考
I	160	五輪塔	24.5	24.1	18.9	花崗岩	
〃	161	〃	24.8	24.0	19.5	〃	
〃	162	〃	32.0	31.6	20.5	〃	
〃	163	〃	31.8	31.6	22.4	〃	
〃	165	〃	25.6	25.3	20.5	〃	水輪伴なう。
〃	166	〃	28.6	28.0	17.0	〃	
〃	167	〃	31.9	31.7	21.5	〃	
〃	168	〃	30.0	29.4	23.6	〃	
〃	170	〃	27.8	22.7	16.5	〃	水輪伴ない下面に蔵骨器あり。
〃	171	〃	33.3	32.0	25.4	〃	
〃	173	〃	28.6	28.0	17.8	〃	水輪伴なう。
〃	175	〃	25.1	24.7	16.0	〃	〃
〃	176	〃	22.8	22.7	12.7	〃	下面に蔵骨器あり。
〃	178	〃	22.1	21.5	13.3	〃	
〃	206	板碑	15.3	10.5	26+α	〃	上部欠失
〃	207	〃	27.8	12.0	53.1	〃	自然石板碑
〃	208	〃	15.2	10.5	40+α	〃	種子刻む。
〃	209	〃	20.5	13.1	66.0	〃	〃
II	180	五輪塔	31.0	30.5	20.5	〃	
〃	181	〃	30.7	30.3	22.7	〃	
〃	183	〃	36.0	34.8	29.2	〃	種子を刻んだ水輪を伴なう。
〃	185	〃	36.0	33.3	25.0	〃	〃
〃	187	〃	36.5	36.5	28.8	〃	〃
〃	188	〃	31.1	30.6	23.7	砂岩	前面下層から蔵骨器出土。
〃	189	〃	31.1	30.3	19.5	〃	
〃	191	〃	22.5	21.8	12.2	花崗岩	
〃	193	〃	26.5	26.0	19.0	〃	
〃	195	〃	29.5	28.4	19.2	〃	

区	遺構番号	塔種	法量(cm) ①	②	高さ	石材	備考
II	196	板碑	29.5	11.6	41.0	花崗岩	自然石板碑
〃	197	〃	20.2	10.3	48.2	〃	〃
〃	258	〃				〃	〃
〃	198	〃	17.8	9.3	31.7	〃	〃
〃	199	〃	19.5	7.4	34.8	〃	〃
〃	200	〃	13.4	11.9	37.3	〃	〃
〃	275	〃	22.7	16.3	50.2	〃	〃
〃	294	〃				〃	〃
〃	201	〃	9.5		63.0	〃	種子刻む。
〃	202	〃	24.2	15.2	45.0	〃	自然石板碑
〃	203	〃	15.1	9.0	45.5	〃	種子刻む。
〃	204	〃	21.4	4.0	32.3	〃	自然石板碑
〃	293	〃				〃	〃
〃	205	〃	20.0	12.5	53.0	〃	〃
〃	210	〃	31.3	13.5	62.0	〃	〃
〃	211	〃	31.0	12.5	60.0	〃	〃
〃	212	〃	19.8	12.6	79.2	〃	種子刻む。
III	214	五輪塔	23.8	23.6	15.0	〃	
〃	215	〃	22.0	21.7	13.8	〃	
〃	216	〃	18.5	18.0	53.5	〃	一石五輪塔（地輪のみ）
〃	217	〃	21.8	21.8	12.8	〃	
〃	218	〃	20.0	19.9	63.1+α	〃	一石五輪塔（地輪のみ）
〃	219	〃	24.0	23.7	16.2	〃	
〃	221	〃	20.2	19.8	8.0+α	〃	上半欠失
〃	222	〃	24.1	23.6	16.3	〃	
〃	223	〃	25.6	25.4	17.8	〃	
〃	226	〃	22.0	21.2	15.1	〃	
〃	224	宝篋印塔	25.6	25.6	18.8	砂岩	刻銘あり。

石塔法量表（五輪塔は地輪のみ）

a群は、ＳＸ3142より約1.7m程離れた後方に位置し、緩く降りる斜面から検出した。ほぼ一列に並ぶが、整然とした状態ではない。214～219の６基からなり、地輪のみを残している。このうち216・218は、空風火水地輪を一つの石材から造り出す一石五輪塔であるが、水輪と地輪の境で折れ、現状では基部を兼ねた地輪のみ残している。これまでの調査で、ＳＢ1600の南側付近で同形態のものが出土しているが、後世に動かされていたものである。この他の五輪塔は、幅22cm前後、厚さ12.8cmから16.2cmの小形のものばかりであった。下面からは、確実に五輪塔

に伴なう埋納遺構は検出されていない。ただ、217と218の間に約40cm程の空きがあるが、その間から褐釉壺の蔵骨器が出土した。胴部の上半はすでに欠失しているが、内面に火葬骨が納められていた。また、この周辺にも骨が散乱していた。その他、216・218の一石五輪塔の前面からもまとまって火葬骨が出土している。

b群は、a群の後方にあって、周囲はテラス状に整えられている。この段上に3基の地輪が残されていたが、それぞれ間隔をおいて221・222・223が配置されている。いづれも幅25cm前後、厚さ17cm前後の小形のものである。この他に221の前面で、納骨孔を穿った樽形の水輪が出土している。素材に阿蘇凝灰岩を使った唯一のものである。周辺からセットとなる火輪が出土しているが、空風地輪は出土しなかった。

c群は、B群と同じテラス上の北端に位置し、すぐ北は崖面となっている。遺存していたのは五輪塔1基と宝篋印塔1基である。

五輪塔

226は小形の五輪塔で、地輪の他に水輪と火輪をずれ落ちた状態で検出した。地輪の正面は、SB1600の中心方向に向けられている。水輪に種子は刻まれていない簡素なものである。

宝篋印塔

226のすぐ前面に据えられ、宝篋印塔の基礎部のみを残す。石材は砂岩である。この基礎は上面を二段につくり、前面に薬研彫の刻銘が認められた。

石垣

SX3142　A地区の墓域を後方へ拡張した際に土留めの為に設けられた南北にのびる石組列である。長さ7.3mにわたって一段ないし四段組まれている。北端は開削した岩盤より始まり、4m程南にのびた所で屈折しさらに連続する。石列は下層を覆う青褐色整地層から積まれている。

B地区（火葬所・墓所）

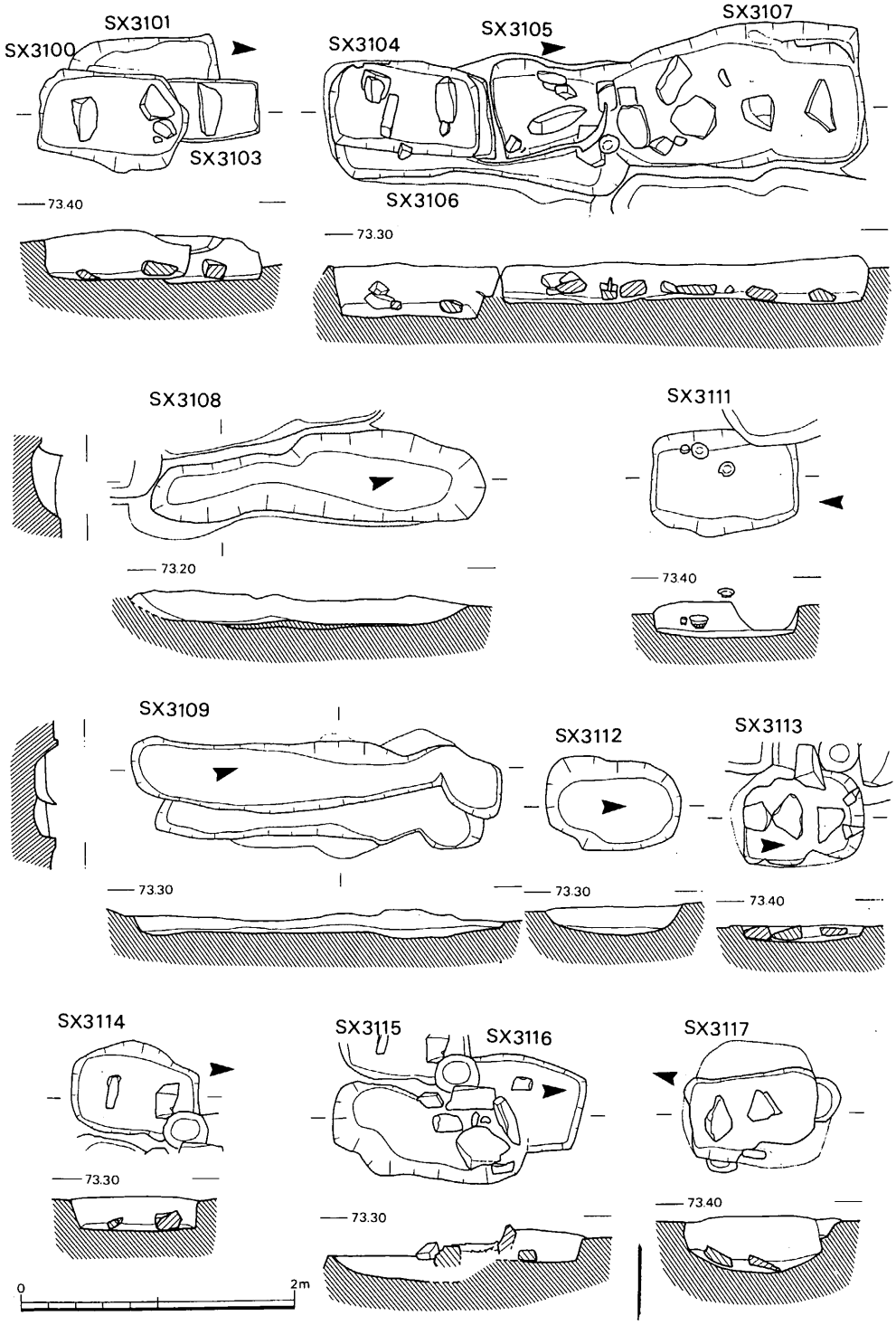
SB1600の西方に設置された墓所および火葬所は段を成し、B地区はその最上段に位置する。ここで発見し、調査した火葬壙は18基、土葬墓は7基である。その他に、時期不詳の土壙やピットが幾つか所在する。A地区の北半部は花崗岩バイラン土が遺構面となるが南半部は地山面ではない。

火葬所

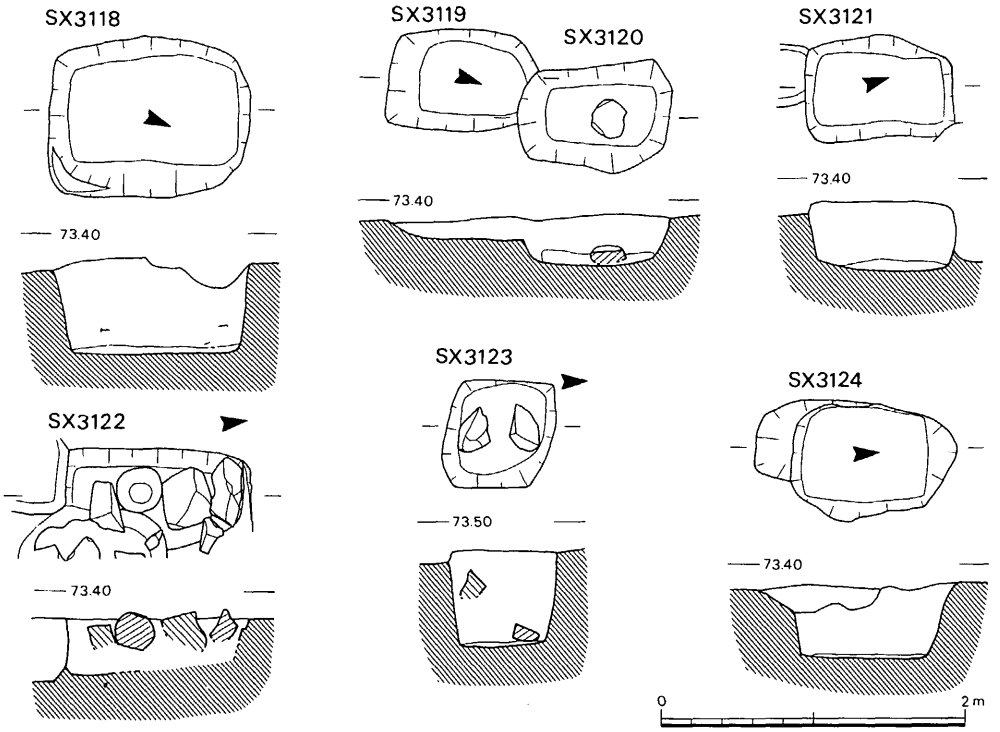
SX3100　SX3101・3103を切って掘られ、0.7×1.1m、深さ0.3mを測る。棺台として用いられた石は基本的には3個で、いずれも上面は焼けている。しかし、壁面はさほど焼けていない。床には炭が堆積していた。この中から焼骨が相当量出土した。頭位は南である。N—9°30′—E。

SX3101　SX3100・3103によって切られている。南北1.1m、深さ0.2m程残存している。西壁は強く焼けている。床面から土師器小皿が2点出土した。

SX3102　SX3104により大部分が欠損し、大きさを明らかにし得ない。深さは0.2m。


SX3101
SX3100
SX3103
73.40
SX3104
SX3105
SX3107
SX3106
73.30
SX3108
73.20
SX3111
73.40
SX3109
73.30
SX3112
73.30
SX3113
73.40
SX3114
73.30
SX3115
SX3116
73.30
SX3117
73.40
0
2m

第39図　火葬壙実測図



第40図　土葬墓実測図

SX3103　0.4×0.7m、深さ0.3mである。中央に棺台のための石を1個据えている。この石の上面は焼けて黒化している。北壁の一部に強く焼けた壁が残存している。N—9°—E。

SX3104　0.7×1.1m、深さ0.4mである。棺台として使用された石は、主軸に直交する2個と、これに付随する小さな石1個である。ともに上面は焼けている。頭骨は北から出土した。N—7°30′—W。

SX3105　0.7×0.8m、深さ0.4mである。南・北・東壁は粘土で造っている。N—13°—E。

SX3106　SX3104・3105によって破壊されているため規模は明確ではないが、2.0m以上、深さが0.3mになる。残存している東壁は強く焼けている。

SX3107　南壁を欠失しているが、復原すると1.0×1.9m、深さ0.3mになる。棺台となる石は南北等間近くに4個を配している。壁面および棺台は良く焼けている。SX3106とSX3107の境から口縁部の一部を打ち欠いた青磁椀1個が出土した。切り合い関係から後出するSX3107に所属すると判断した。N—13°—E。

SX3108　SX3107から西南壁を破壊されている。復原すると0.7×2.6m、深さ0.3mになる。丸味を有する床焼け面は2枚あり、少なくとも2回は使用されている。N—30°30′—W。

SX3109　SX3110の西壁を切る。0.5×2.7m、深さ0.2mで、床面は丸味を有する。西壁は特に焼けている。N—27°—W。

SX3110　南北2.4m、深さ0.1mで、床面は丸味を有する。残存する東壁は特に焼けている。

方位はＳＸ3109とほぼ同一と考えられる。

SX3111　0.8×1.1m、深さ0.3mである。壁は赤化する程よく焼けている。壙内で青磁椀・香爐を検出したが、床面上ではない。また、遺構面より上に口縁部の一部を打ち欠いた白磁皿を１個発見した。N－13°－E。

SX3112　0.7×1.0m、深さ0.2mを測り、長円形に近い形状を成す。西壁の一部に焼けた壁が残存している。N－13°－E。

SX3113　土葬墓ＳＸ3122を切る。0.7×1.0m、深さ0.1mで、石を３個用い棺台としている。周囲の壁および棺台として用いた石ともに良く焼けている。頭骨は北で発見した。N－13°－E。

SX3114　0.7×1.0m、深さ0.3mである。棺台としての石を２個配している。壁および棺台は焼けている。焼骨が多数出土したが、頭骨はなかった。頭骨を全て拾骨したのか、あるいは頭無しのまま火葬されたのかであろう。体方向は北向きである。N－7°－E。

SX3115　ＳＸ3116と先後するが、この関係については判然としなかった。しかし、配石の状態や遺物出土状態からＳＸ3115の方が後出すると考えた。明確ではないが、0.6×1.5m、深さ0.2mの規模が想定できる。上層から壊れた青磁杯が出土した。N－0°30−E。

SX3116　北壁・西壁および東壁の一部が残るだけで、深さは0.2mである。北壁の一部に焼けた面が残存している。遺構面と同一レベルで、ＳＸ3115出土の青磁杯と接合する青磁片を検出した。

SX3117　Ａ地区北側に単独に営まれていた。0.5×0.9m、深さ0.4mを測る。四周ともに良く焼け、赤化している。棺台として石を２個配している。出土した頭骨方位は北向きである。N－5°－E。

墓所

Ａ地区においては全て火葬に基づく墓所を形成しているが、この地区では木棺直葬を始めとした墓所を形成している。

SX3118　1.1×1.3m、深さ0.6mである。棺に使用された釘の残存状態から棺の大きさを復原すると0.6×0.8m程になる。N－8°－E。

SX3119　ＳＸ3120から北東隅が切られる。0.7×1.0m、深さ0.2mである。N－6°－E。

SX3120　0.7×1.0m、深さ0.4mである。壙内から石を１個検出したが、床には接しない。おそらくは棺上に置かれたものが落下したと考えられる。N－6°－E。

SX3121　0.7×1.0m、深さ0.5mである、N－27°－W。

SX3122　火葬壙ＳＸ3133に切られる。0.7×1.2m、深さ0.4mである。棺上に４＋１個石を配している。この石の中にＡ地区で使用されていたと考えられる水輪を用いている。水輪は焼けていないが、他の３個は焼けている。あるいは火葬壙から集めて配置したのかも知れない。N－20°30′－W。

SX3123　0.7m四方、深さ0.6mである。棺上に置かれていたであろう石を壙内から発見した。N－13°－E。

SX2124　0.7×12.8m、深さ0.5mである。

通路

SX3125　発掘区南端部に位置するB区への通路遺構である。通路の上方、B区付近では幅約2.0mで地山を凹状に削り成形している。中位付近で地山の段差が大きくなり、下半域ではかなり盛土整地して通路としている。直線的にB地区へ至るには、通路はかなり急傾斜となり、簡単な階段が設けられていたと考えられる。傾斜地に凹状につくられた通路であるため、B区からの雨水がこれに集中し、排水溝の役割を果していたようで、かなり地山面がえぐられている。

土器溜り

SX3130　通路遺構ＳＸ3125の下方部分の路面上で検出した土器溜りである。通路の盛土整地層上で完形の土師器の皿・杯がかなり集中して出土した。先述したように雨水の排水路的な役割もあったため、土壙状の明確なプランは確認できず、また層位的にも判然としない。出土状況からみて一括投棄されたことは疑いない。

出土遺物

A地区土器・陶磁器

SQ3140出土土器（第41図、図版71、別表）

土師器

皿ａ（１）　口径8.0cm、器高1.3cmである。外底部に板状圧痕を伴う。３と口を合わせるような格好で出土した。178出土。

皿ｂ（２～７）　口径6.7～8.0cm、器高1.6～2.3cmである。５～７の外底に板状圧痕がある。２・７は灯火器として使用されている。２は160、３は178、４・５は183、６は189、７は217出土。

SX3137出土土器（第41図、図版71、別表）

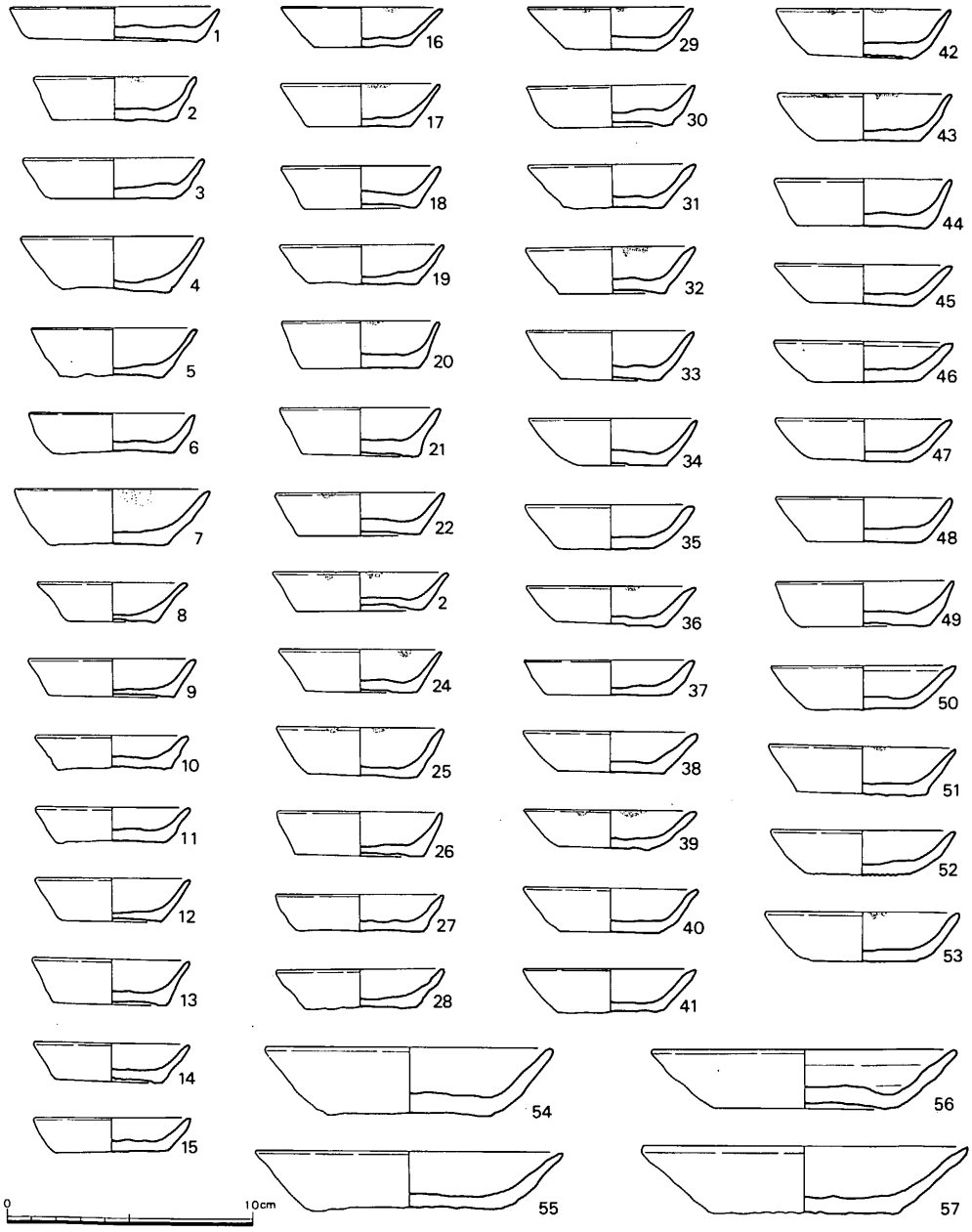
土師器

皿ｂ（８・９）　口径6.1・7.0cm、器高1.6・1.5cmである。道路状遺構は幾度か修復されたと考えられ、８は最終期近くの時期をあらわしていると思われる。

SX3130出土土器（第41図、図版71～73、別表）

土師器

皿ｂ(10～53)　口径6.3～7.9cm、器高1.5～2.0cmである。14、15、20、23、24、30～36、39、41～43、45～50、52、53の外底部に板状圧痕を伴う。13～18、20、22～25、29、30、32、36、



第41図　SQ3140、SX3137、SX3130出土土器実測図

42、43、51、53は灯火器として使用されている。

杯b（54～57）　口径11.6～13.2cm、器高2.4～2.8cmである。55～57の外底部に板状圧痕を伴う。

以上の土器の特徴からこの遺構は14世紀中頃から後半代に位置付けられよう。

藏骨器

SQ3140－170出土陶器（第42図、図版74）

黒褐釉陶器

壺（2）　口径10.4cm、器高20.2cm、胴部最大径15.5cm、底径9.6cmである。黒褐色を呈する釉を全面に施釉した後、口縁部上面の釉を拭き取っている。頸部と体部との境いは1条の沈線によって分けられる。体部は成形時のロクロ目が著しい。口縁部上端に重ね焼き時に付着した釉および取り離し時に生じたキズがある。外底部には砂が多く付着しているが、周縁部に付着した砂を擦って除去している。このため、周縁部は露胎となっている。胎土は暗灰色を呈し、精良である。韓国新安海底出土陶磁器のなかに酷似している例がある。下層遺構出土。

SQ3140－176出土陶器（第42図、図版74）

無釉陶器

壺（3）　口径13.0cm、器高21.5cm、胴部最大径20.6cm、底径14.3cmである。内底に粘土を押えた跡が明瞭に残っている。内外面ともにヨコナデ成形で、体部最下位を回転ヘラ削り調整をしている。外底部は末調整である。胎土中の砂粒は少なく、比較的精良である。白灰色から暗灰色に焼成されている。「水ノ子岩学術調査報告」の中に類例を見い出し得ることから備前焼の可能性が強い。下層遺構出土。

SQ3140－277出土陶器（第42図、図版74）

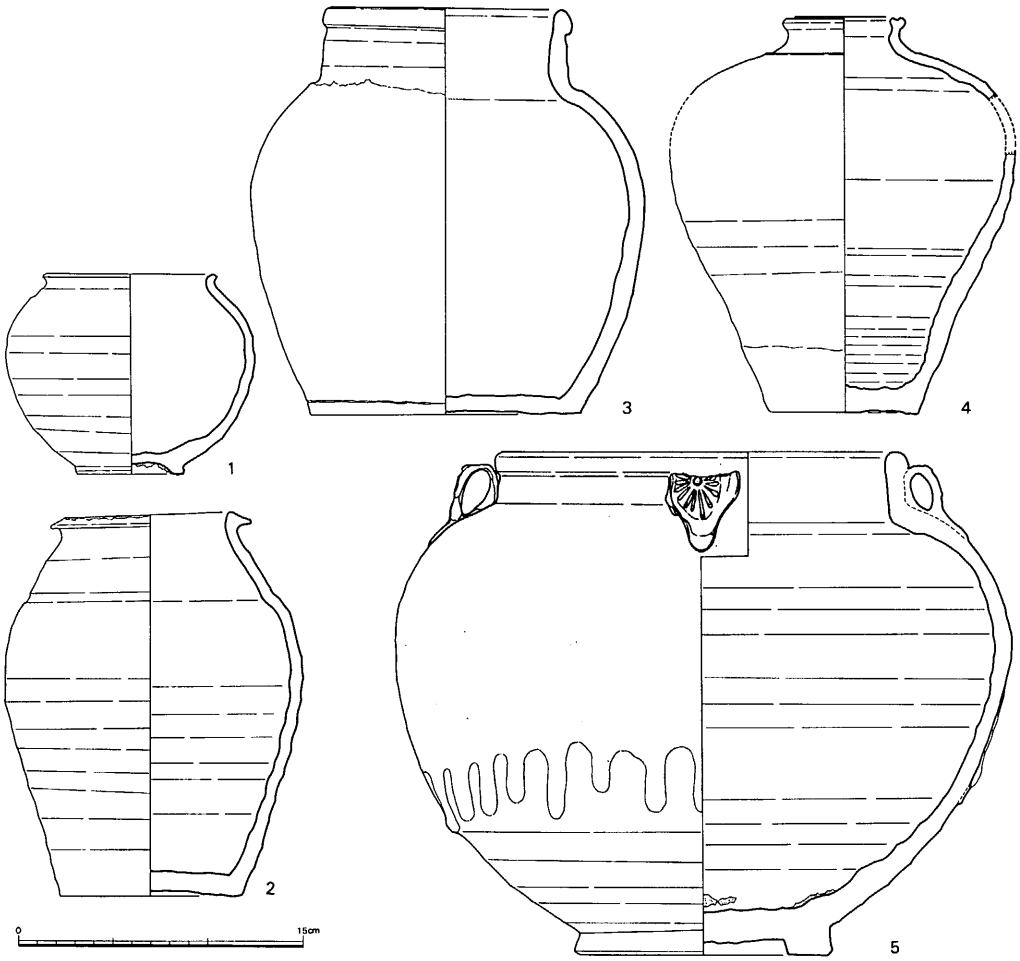
褐釉陶器

壺（4）　3つに割れ、それらは直接接合しないが、口径6.4cm、器高20.9cm、胴部最大径18.1cm、底径7.8cmに復原される。口縁部上面に1条の沈線を入れ、段を造っている。頸部と体部との境いはヨコナデにより低い1条の突線を巡らす。体部内外特に内面は強いヨコナデによる凹凸が著しい。外底部は調整されていず凹凸が著しい。胎土中に砂粒を多量に含み、暗灰色に焼成されている。この粗い胎土の上に薄い暗褐色の釉がかかる。上層に営まれた墓に伴う。

SQ3140－229出土磁器（第42図、図版74）

青磁

壺（1）　口径9.2cm、器高10.6cm、胴部最大径13.1cm、高台径5.6cmである。体部下位以下を回転ヘラ削り調整している。白灰色を呈する胎土に、細貫入を無数に伴う透明度が強い黄緑色の釉が全面にかけられている。外底部に白色・黒色の砂粒が多数付着している。高麗陶磁と思われる。上層に営まれた墓に伴う。



第42図　蔵骨器実測図

SQ3140－250出土陶器（第42図、図版74）

黒釉陶器

四耳壺（5）　口径21.8cm、器高26.5cm、胴部最大径32.4cm、高台径13.5cmである。菊花状のスタンプ文様を有する耳を相対する位置に4個配している。釉が薄い部分は茶褐色を呈し、文様が浮き上っている。体部中位以下は回転ヘラ削り調整である。胎土は精良で乳白色を呈する。内面および外面中位までかけられた真黒色を呈する釉は厚く、また粘性が強いため、垂下した釉の先端は盛り上っている。内底に本壺と同質の胎土を有す器の底部の一部と思われるものが釉上に残存している。また、外面にある釉の垂下部分を押しつぶす状態のアタリがあり、これも重ね焼き時の圧痕と思われる。このような状態をみると、単体で焼成されたのではなく、数個重ねて焼成されたことが知れる。2と同様に新安海底出土陶磁器の中に類品を見い出し得る。下層の墓域に伴う。

SQ3140－233・240 出土瓦（図版74）

軒丸瓦（イ）　瓦当は剥離しているが、丸瓦の先端部には接合のための刻目と貼付された粘土が残っている。丸瓦部は玉縁式のもので凸部は縦方向に丁寧にナデ調整されているが、一部に縄目が残っている。瓦当と玉縁が欠失しているが、蔵骨器として転用するために意識的に割られたとみられる。現在、まだ人骨の処理が済んでないので細部については明瞭ではない。ＳＱ3140―233出土。上層の墓に伴う。

丸瓦　玉縁式の完形品で、全長32.0cm前後である。凸部は縄目の叩きを丁寧にすり消しているが、部分的に縄目が残る。側面はヘラ削りによって整形され、玉縁の先端はやや幅を狭くする。凹面には、まだ人骨が未処理で残っており明らかでないが細かい布目がみえる。ＳＱ3140―240出土。上層の墓に伴う。

以上の蔵骨器をみると、下層遺構出土の２・３・５はいずれも14世紀中頃か、それ以前の製作品であり、墓造営時の年代の推定が可能である。また、上層遺構出土の１･4は14世紀中頃以降に将来されたものであろう。

更に、Ｂ地区で推定された拾骨量の多少による変遷と、ここから出土した蔵骨器の容量ともうまく合致する傾向を示しているようであり、火葬所と墓所との強い関連がみられる。

暗灰色土層出土土器（第43図、図版75、別表）

土師器

皿ｂ（１～11）　口径6.2～7.0cm、器高1.4～2.0cmである。１～３は器高は1.5cm以下、４～10まではそれ以上、11は底径が小さく体部を外上方へ伸ばす。１・２・６には油煙が付着している。４の外底部には板状圧痕を伴う。

Ａ―Ⅰ地区上層遺構面出土土器（第43図、図版75、別表）

土師器

皿ｂ（12～18）　口径6.4～7.4cm、器高1.6～2.0cmである。12には油煙が付着し、15・17・18には板状圧痕を伴う。

杯ａ（26・27）　口径12.2cm、器高2.2・2.3cmである。26には板状圧痕がある。

杯ｂ（28・29）　口径11.6・12.5cm、器高2.8・2.5cmである。28・29ともに板状圧痕を伴う。

Ａ―Ⅱ地区上層遺構面出土土器・陶磁器（第43図、図版76・77、別表）

土師器

皿ｂ（19～21）　口径6.4～6.8cm、器高1.8～2.1cmである。３点ともに油煙が付着している。21の外底部に板状圧痕がある。

杯ｂ（30）　口径11.8cm、器高2.8cmである。粘土塊水挽手法によると考えられる。

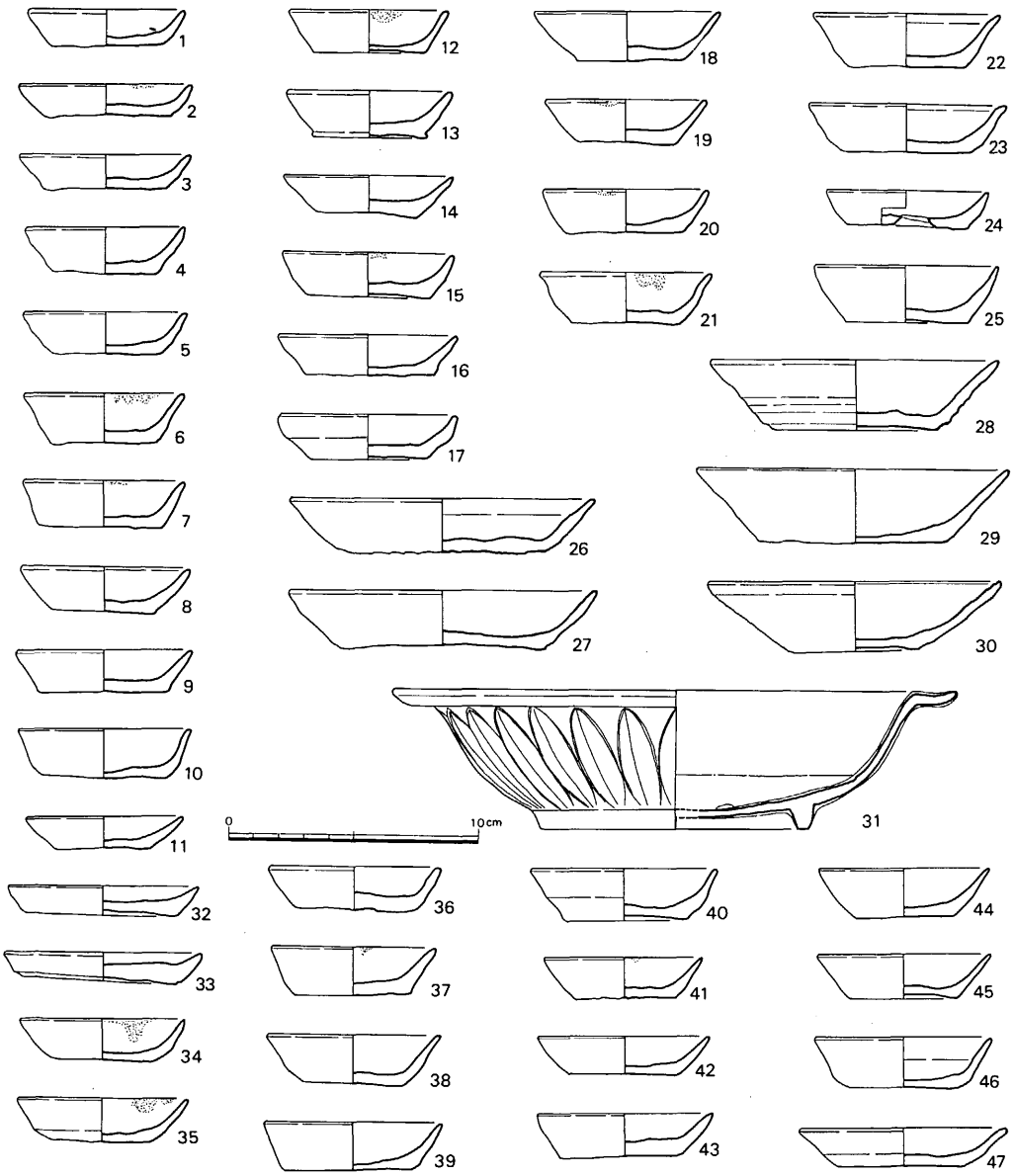
高麗青磁

椀（Ａ）　同一個体と思われるが接合しない。内面に白象嵌による文様を描いている。胎土

は暗灰色を呈し、灰青色を呈する釉は高台畳付部を除き全面にかけられている。高台畳付には焼成時に付着した土砂が顕著に残存している。

A－III地区遺構面出土土器（第43図、別表）

土師器



第43図　A 地区層位出土土器・陶磁器実測図

皿ｂ（22・23）　口径7.6・8.0cm、器高2.2・2.0cmである。22・23には板状圧痕を伴う。

Ａ地区遺構面出土土器・陶磁器（第43図、図版76、別表）

Ａ区各所から出土した遺物をまとめて報告する。

土師器

皿ｂ（24・25）　口径6.6・7.4cm、器高1.5・2.3cmである。

青磁

盤(31)　口径22.5cm、器高5.6cm、高台径10.7cmである。高台畳付を除いて、全て厚い淡緑色を呈する釉が濁白色の胎土の上にかけられている。外面に鎬を有する蓮弁文、内底に、双魚紋の一部が残っている。

整地層出土土器

整地層は、黄褐色土層・青褐色土層と上下２層に大きく分かれる。

黄褐色土層出土土器　（第43図、図版76・77、別表）

土師器

皿ａ（32・33）　口径7.8・7.9cm、器高1.1cmである。32の外底部に細かい板状圧痕がある。

皿ｂ（34～40）　口径6.6～7.4cm、器高1.7～2.0cmである。34・35・37は油煙、35には板状圧痕を伴う。

青褐色土層出土土器（第43図、図版77、別表）

土師器

皿ｂ（41～47）　47を除くと、口径6.3～7.1cm、器高1.5～2.0cmである。41には油煙、外底部に板状圧痕がみられる。47は口径8.4cm、器高1.5cmであり、皿ａとすべきかも知れないが類例に乏しい。

Ｂ地区土器・陶磁器

SX3100出土土器（第44図、図版78、別表）

土師器

壙中の南から出土した土師器は割れていた。２次的な火熱を受けていないことから、焼骨後に配されたことが判る。

杯ａ（１～３）　口径11.8～12.5cm、器高1.7～2.3cmである。外底部に板状圧痕を伴う。

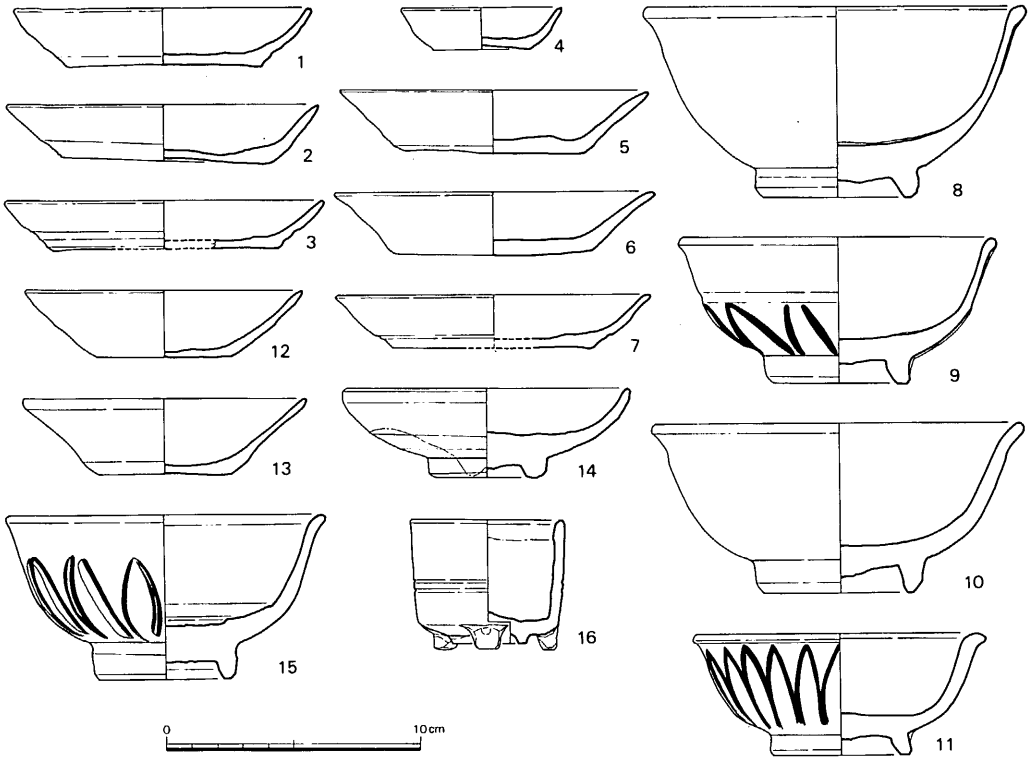
SX3102出土土器（第44図、図版78）

土師器皿ｂが１点出土した。この壙における骨の出土状況は乱れており、これらの骨の間から出土した。２次的火熱は受けていない。

土師器

皿ｂ（４）　口径6.4cm、器高1.7cm、底径3.8cmである。

SX3104出土土器・陶磁器（第44図、図版78、別表）



第44図　火葬壙・土葬墓出土土器・陶磁器実測図

いずれも壙上層から出土した。多くの切り合いがあるため、ＳＸ3104に所属するかどうか明らかでない。

土師器

杯ａ（７）　口径12.4cm、器高2.1cmである。

杯ｂ（５・６）　口径12.1～12.6cm、器高2.5～2.6cmである。外底部に板状圧痕は伴わない。

青磁

椀（８）　口径15.0cm、器高7.6cm、高台径6.4cmである。高台見込み部分が環状に露胎になる他は、全て淡緑色の釉が厚くかかる。内体部中位に花文状のスタンプ文様がみられるが、厚い釉のため明らかでない。ＳＸ3102上層、遺構面を覆う層出土と接合することからＳＸ3104に伴うかどうか明らかでない。

SX3107出土陶磁器（第44図、図版79）

青磁

椀（９・10）　９は口径12.4cm、器高5.8cm、高台径5.6cmである。体部中位で丸味を有しながら曲るが、その部分は凹線状を呈する。これより下位に丸刀彫りによる蓮弁が描かれる。高台畳付から高台見込み部分は露胎である他は淡緑色の釉が厚めにかかる。胎土は淡茶白色を呈

する。10は口径14.6cm、器高6.7cm、高台径6.5cmを測る。高台見込部分は環状に露胎となる他は淡緑色の釉が施釉されている。口縁部の一部を1ケ所打ち欠いている。仮器であろうか。9は壙内北側上層で割れて、10は南端で口縁部を上にし、完形で出土した。

SX3111出土陶磁器（第44図、図版79）

白磁

皿（14）　口径11.4cm、器高3.4cm、高台径4.6cmである。体部中位以下は回転ヘラ削りである。焼成温度は低く、また酸化炎焼成のためか、釉は黄白色を呈する。釉には無数の貫入を伴う。高台畳付部を擦って滑らかにしている。10と同様に口縁部の一部を打ち欠いている。

青磁

椀（15）　口径12.5cm、器高6.5cm、高台径6.5cmである。高台内面および見込み部分の環状カキ取りを除いて全面に施釉されている。体部外面に片切り彫りによる蓮弁、体部内面に2条の沈線を伴う。見込み部分に花文状のスタンプがあるが、明瞭でない。

香爐（16）　口径6.0cm、器高5.1cmである。高台を有するコップ状の器形に三足を付している。体部外面に沈線状の凹線が2条走る。高台部および足部畳付を除き、淡緑色の釉を全面に施釉している。

SX3115出土陶磁器（第44図、図版79）

青磁

杯（11）　ＳＸ3116上層から出土した破片と接合した。口径11.5cm、器高4.8cm、高台径5.6cmである。高台見込み部分を除き、淡緑色の釉が厚くかかる。外面に片切り彫りによる蓮弁、内底に花文のスタンプがある。

SX3124出土土器（第44図、図版79、別表）

土師器

杯（12・13）　口径10.9・11.1cm、器高2.7・3.0cm、底径5.2・5.1cmである。精良な胎土を用い器壁を薄く仕上げている。ロクロ水挽であろう。

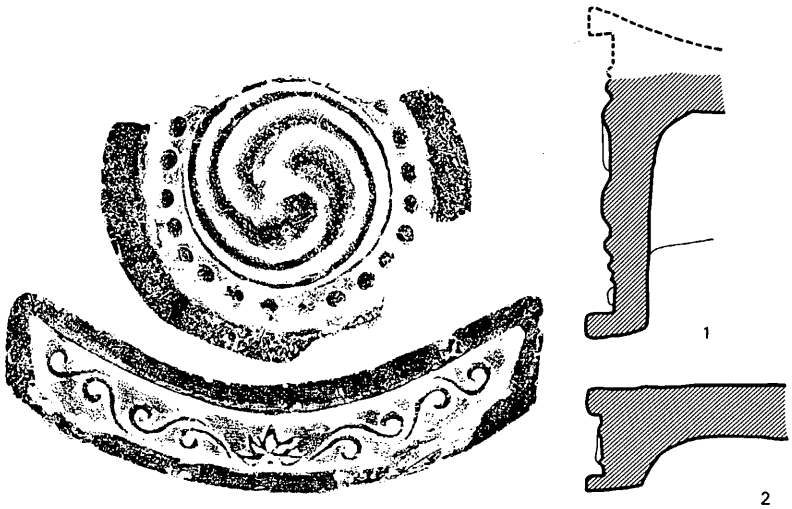
瓦類（第45・46図、図版70）

両次の調査で出土した瓦類は丸・平瓦のほかに軒丸瓦84点、軒平瓦86点および道具瓦として鬼瓦、雁振瓦、鳥衾がある。これらの瓦類は第97次調査では調査区西側のＳＢ1600とＳＧ1630を中心とした地域、第107次調査では表土および石塔群を覆う黄褐色土層から出土した。軒丸瓦は5型式に軒平瓦は6型式に分類できるが、そのうち第45図に示したものが最も多く、軒丸瓦では67％、軒平瓦では80％を占める。その他は数点ずつである。

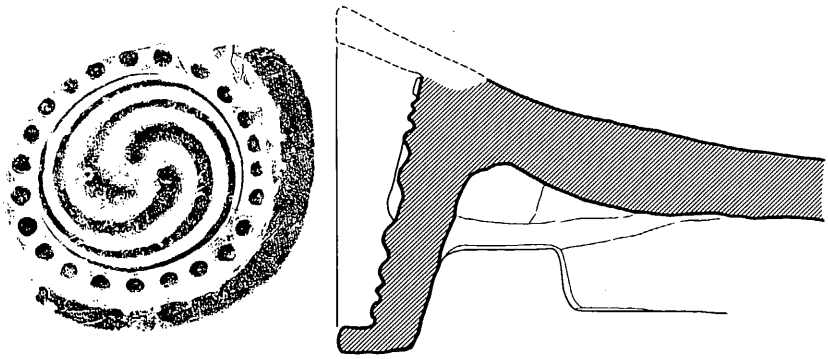
軒丸瓦（1）は瓦当径13.5cmで内区は右巻きの三巴文で頭部はやや丸味をもち、尾は長くほぼ一周する。外区内縁はボタン状のやや大きな珠文23個を配する。丸瓦の取り付きは珠文帯付近にある。その他の形式の軒丸瓦はいずれも珠文が小さくまたまばらになるところから（1）

よりは後出のものと思われる。

軒平瓦は均正唐草文で半載の菊花状文を中心飾とし、その左右に4回反転する唐草を配する。外縁は平縁をなし低い。また顎部は段顎風に作る。瓦当厚20.0cm、瓦当厚3.8cm、その他の型式の軒平瓦は瓦当厚が薄くなるものや外区の両側縁の幅が広くなるなど新しい要素が認められ時期的には後出するものと考えられる。



第45図　軒瓦拓影・実測図



第46図　鳥衾拓影・実測図

鬼瓦はいずれも外縁部の小片で全形を窺い得るものはなく、一段高い外縁に竹管文状の円圏文を配している。

雁振瓦も全形を知り得るものはない。凸面は縄目の叩きを丁寧にすり消し、凹面は丸瓦部に布目を残している。

鳥衾は第46図（1）の軒丸瓦に雁振瓦を取り付けたもので、凸面は丁寧なヘラナデによって調整し、二か所に菊花状の刻印がある。凹面はナデによって調整している。

以上今回の調査で出土した瓦類について述べたが、これらのうち特に第45図に示した軒瓦について若干ふれておこう。まずこの軒丸瓦と軒平瓦は全体の出土点数に占める割合からみてセットをなすものであることはまちがいないと考えられる。またその出土地点についてみると、昭和55年度に行った第67次調査においては、この軒瓦はＳＢ1600を囲むＳＤ1444、1651、1653

とＳＢ1600西方のＳＤ1652から、かなりまとまって出土している。さらに今回の第97次調査ではＳＢ1600付近およびその北側にあるＳＧ1630の埋土からまとまっている。また第107次調査ではＳＢ1600の西側に接している石塔群を覆う層から主に出土している。このような状況から、そのほとんどがＳＢ1600を中心としたその周辺に集中していることがわかる。したがってこの軒瓦はＳＢ1600の屋根に葺かれたものであることはまずまちがいであろう。

石塔（第47図、図版80～82）

今回の調査で出土した石塔は「五輪塔・一石五輪塔」「宝塔・多宝塔」「宝篋印塔」「板碑」の４種類があり、その中で最も出土点数が多いのは五輪塔である。出土点数を個別にみると、空風輪31、火輪16、水輪30、地輪38、塔身（一石五輪塔）２、相輪13、宝塔（笠）２、宝篋印塔（笠）２、宝篋印塔（基礎）１、宝篋印塔（塔身）１の出土点数になる。但し、相輪等は残欠が多く、接合の可能性もあり、若干の点数増減は否めない。また、石塔群の形態分類および計測等の細かい検討は行っておらず、その傾向さえも今回は述べられないが、ここではその中で代表的な例を図示し、記述したい。

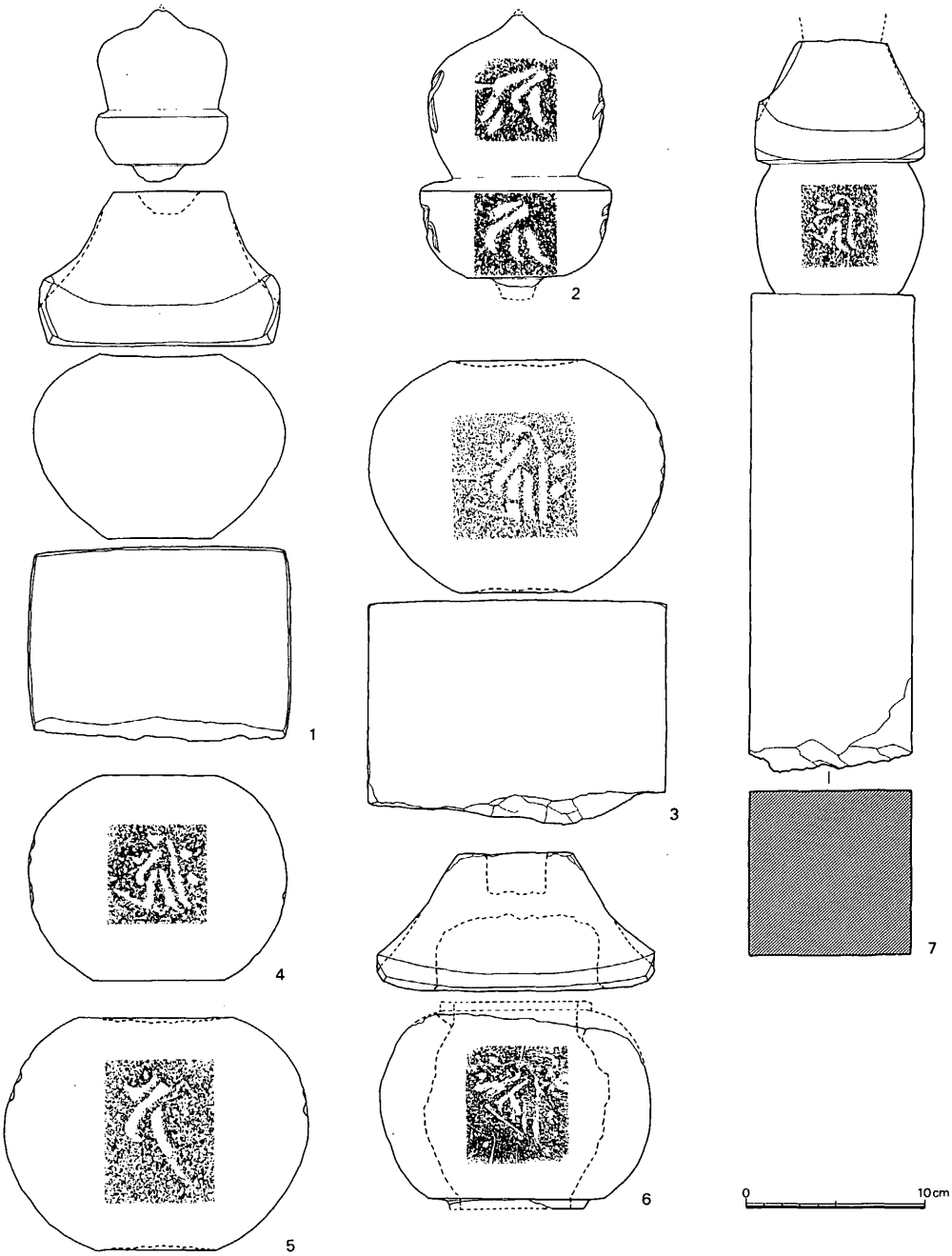
五輪塔（１～７）

五輪塔は地輪の大きさから大形36×34cm前後、高さ21cm前後・中形27×27cm前後、高さ21cm前後・小形20cm×20cm前後、高さ14cm前後の大略３種に分けられる、そして石材から花崗岩、砂岩、凝灰岩の３種に分けられ、そのうち花崗岩製のものが最も多く、凝灰岩製のものは火輪１、水輪１（この２つはセット）のみである。

１はII区の北端部付近でかなり近接した位置で出土している（ＳＱ3140―94・95・96・101）。倒壊し原位置を動いているが、出土状況からみて一対になると考えられる。空風輪、火輪、水輪、地輪のいずれも花崗岩製で地輪を除き、やや風化がみられる。空風輪は尖頭形でやゝ肩が張っている。径14.7cm高さ19.5cm。火輪は軒先端部が風化してやや正確さを欠くが、幅26.8cm、高さ17.5cmである。降り棟はやゝ反がみられ、軒は傾斜で切る。上面には円形の枘穴を設ける。水輪は径28.0cm、高さ20.6cm、上面径13.4cm、下面径11.8cmを測る。上・下面とも中心部をわずかに凹ませている。また胴部の最大径は中位よりやゝ上方にある。「種子」はない。地輪は横幅28.7cm、奥行29.2cm、高さ21.7cmを測る。上面はわずかな傾斜をつけ中心部をやゝ高くしている。側面もわずかに丸味をもっている。下面は打ち欠いたままの未調整である。火輪と地輪の最大幅の差は2.0cmとわずかである。

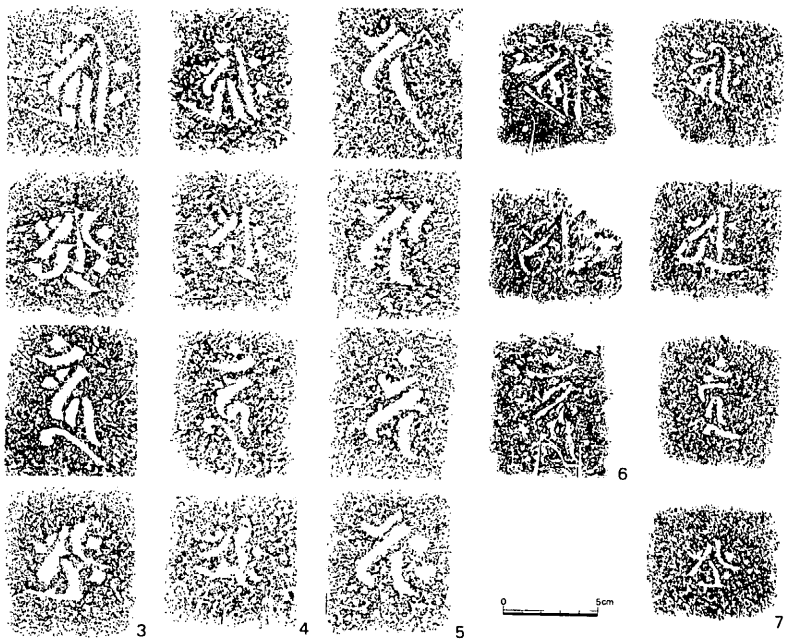
２の空風輪（ＳＱ1340―51）は尖頭形で、空輪に「𑖎（キャ）」風輪に「𑖏（カ）」の梵字をそれぞれ四方に薬研彫りする。最大径21.5cm、高さは上・下端部が一部欠失するので明確ではないが、22.0cm前後と考えられる。この空風輪と対になると考えられる火・水・地輪は出土していない。

３はII区の五輪塔Ａ群に位置し、水輪と地輪（ＳＱ3140―185）がほぼ原位置を保った状態で



第47図　五輪塔・一石五輪塔実測図

出土した。これはＳＱ3140—183・187と同一規模・同種で、接し並んでいることから、この３個の五輪塔は一つの単位を構成している。水輪には四方に（キリーク）・（アク）・（ウーン）・（タラーク）の金剛界四仏種子を表わしている。アクの梵字は疑問がある。やゝ赤味のある花崗岩製で風化はほとんど進んでいない。水輪の最大径33.0cm、高さ26.0cm、上面径15.0cm、下面径12.5cmで、上・下面とも座りをよくするためか、中央部を凹ませている。地輪は正面幅33.3cm、奥行36.0cm、高さ25.0cmである。水輪径と地輪幅はほゞ同じである。



第48図　五輪塔・一石五輪塔の種子拓影

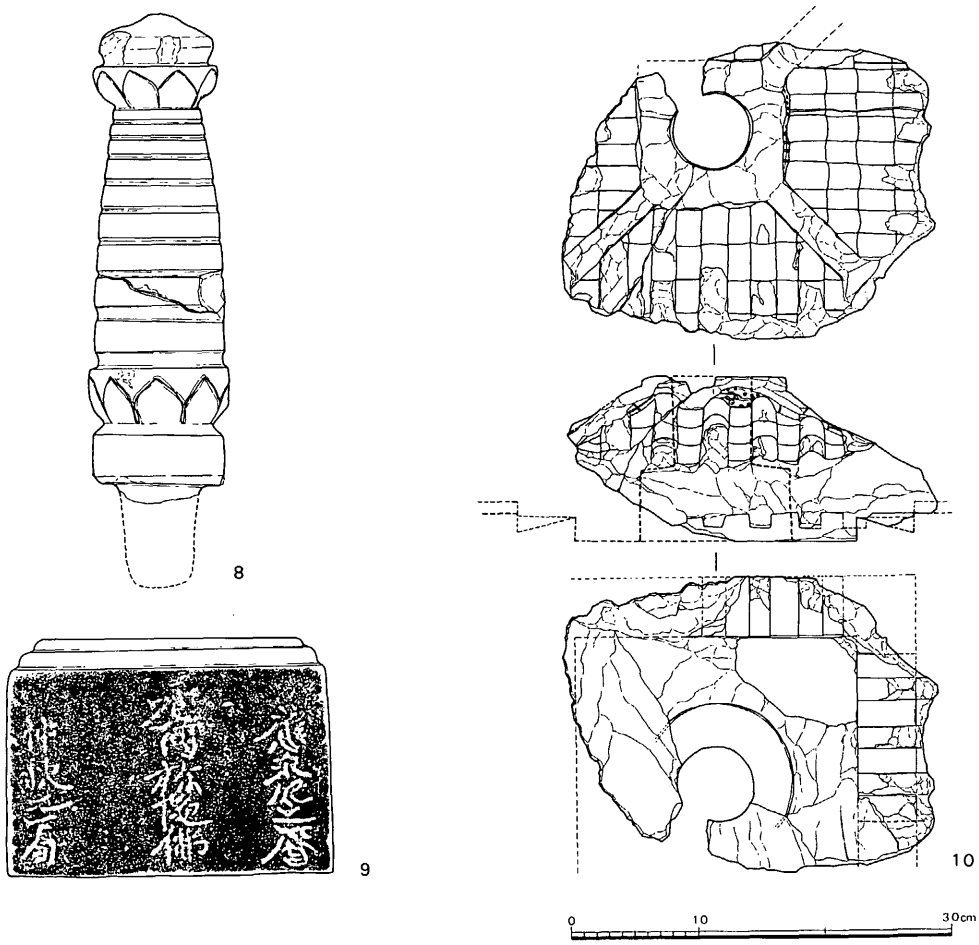
４は小型に類する花崗岩製の水輪である。最大径28.8cm、高さ23.0cm、上面径12.5cm、下面径14.5cm、四方に（キリーク）・（アク）・（ウーン）・（タラーク）の種子を表わす。上・下面とも平担である。タラークの梵字は間違って彫ったのであろう。

５（ＳＱ3140—88）は花崗岩製で最大径34.0cm、高さ26.2cm、上面径17.0cm、下面径13.6cmで大形に類する。最大径はほぼ中位にあり、円弧に近い。四方に表わされた種子が、「」(バ)「」(バー)「」(バン)「」(バク）と転回するものとしては、今回出土した中では一例のみである。Ｉ区の護岸列石上に転って出土し、その近くに大形の地輪ＳＱ3140—163があり、これと対になる可能性は強い。

６は凝灰岩製の火輪と水輪である（ＳＱ3140—75・220)。石質はやわらかく、小豆色を呈する。凝灰岩を使用したものとしては８（ＳＱ3140—124）の板碑の他に破片がいくつかあるのみである。III区の五輪塔のＡ群に位置する。近接した位置で出土したことからみて対になるとみられる。火輪は最大幅31.0cm、15.6cm、高さ15.7cm、上面幅は13.0cmを測る。上面には一辺6.5cm、深さ4.5cmの方形の枘穴がある。下面には径8.0cm、深さ4.5cmの円形の穴を穿っている。降り棟の反りは若干みられ、軒は斜めに切る。水輪は最大径30.0cmで、高さについては上部が

欠失しているため不明である。下部では組合せのための高さ約1.0cmの枘を設けており、口径150cmを測る。上部は欠失して不明であるが、下部と同様の枘があったと考えられる。四大種子は風化が著しく、明瞭でない。時計回りに、𑖭・𑖮・𑖯があり、𑖰（タラーク）は割れて欠失している。内部は径約20cmで刳り貫かれ空洞になっている。水輪、火輪とも刳り貫き時の粗いノミ痕が明瞭に残る。

7は花崗岩製の一石五輪塔で、火・水輪部（SQ3140—50）と地輪（SQ3140—216）はやゝ離れた地点で出土している。空風輪部は欠失し、その痕跡のみが認められる。火輪の降り棟は



第49図　相輪・宝篋印塔・宝塔実測図

わずかに反がみられ、軒は直に切る。水輪部には𑖀・𑖁・𑖂・𑖃の種子を彫る。地輪部は断面18.0cm×18.5cm、高さ53.5cmの方柱である。この地輪（ＳＱ3140—216）は原位置で検出している。下面は未調整である。

相輪（８）　砂岩製で、枘部が欠失している。残存高38.5cmで、上部と下部に請花を有する。九輪は下部が径10.2cm、上部が5.8cmで上部に向ってやゝ丸味をもちながら細くなる。この他に相輪の残欠が数点出土しているが、その中には花崗岩製のものもみられる。

宝篋印塔（９）　III区の北端部で出土した宝篋印塔である。砂岩製で正面には應永四年（1397）の紀年を有する刻銘がある。

銘文

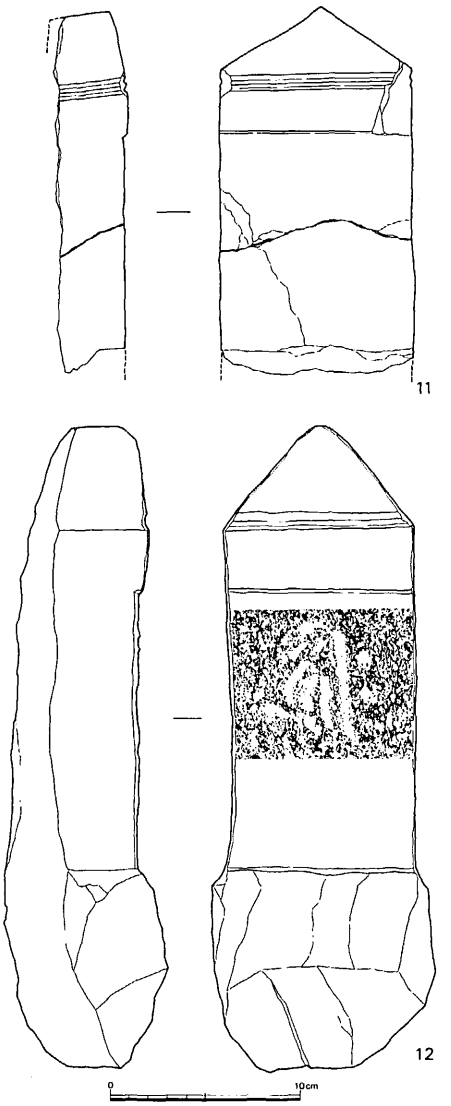
「應永四之暦」

「□（无カ）阿弥陀仏」

「仲秋之下旬」

上部に丸味のある３つの段を有し、上面の横幅20.0cm、奥行20.0cmである。下面に向ってやゝ縦・横幅が大きくなり、最大横幅25.6cm、奥行25.6cmである。高さは18.8cm。下面は平滑ではないが、細かくノミで調整し平担にしている。

1　この他に図示しなかったが、花崗岩製の塔身が出土しており、これには四方に梵字を彫っている。



第50図　板碑実測図

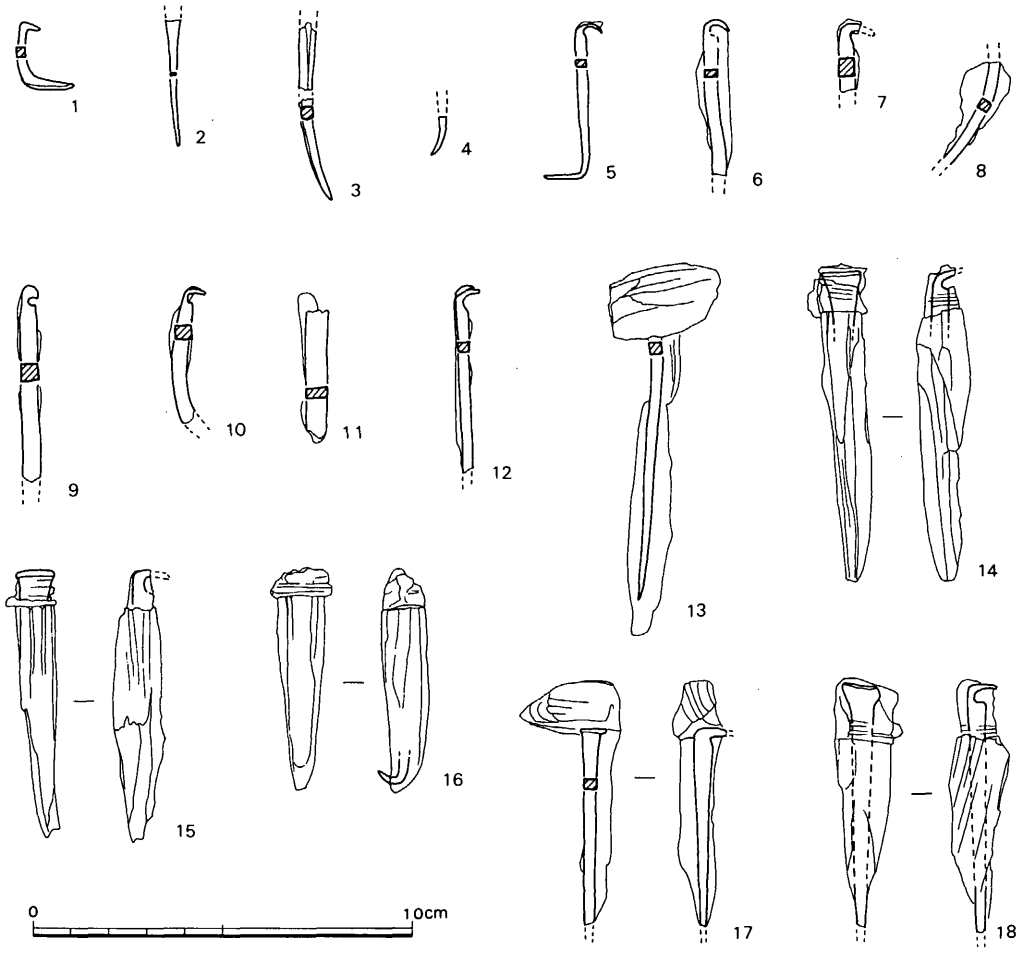
宝塔（10）

やや赤味の混った灰白色を呈する。滑石製の宝塔もしくは多宝塔の笠である（ＳＱ3140—127）。全体の約½が残存し、とくに軒先の破損が著しく、軒の形態は明らかでない。丸・平瓦の屋根を丁寧に表わし、写実性に富んでいる。笠石上には一辺約11.2cmの正方形の平担面を造り出し、露盤としている。露盤側面には軒先瓦を重ねた状態が表現され、露盤の四隅からは丸瓦による降棟を表現している。そして露盤中央には径6.4cmの柄穴を中位まで、ここから段をなして径12.0cmの柄穴が裏面に通じる。軒裏には二重に垂木を造り出す。また下面には復原幅一辺22.0cm、高さ約2.0cmの正方形を造り出し受部としている。

板碑（11・12）

板碑には頭部を山形にし、額部を設けるなど整形を施した典型的な形態のものと、比較的平担な面を有する自然石を未整形のまま板碑として利用したものがある。自然石を利用したものの中で、明らかに原位置に立て埋められたものを除いてはその判断がきわめて困難であり、その出土点数についても現段階では把握していない。今回出土した典型的（板碑として成形したもの）な板碑は12ある。

8（ＳＱ3140—124)は凝灰岩製で、やゝ硬質で黒褐色を呈している。下半部と裏面が欠失し、全形については明らかでないが、残存部分では丁寧な調整を施している。頭部は三角形で、その下に二条の切り込みを入れている。この切り込みは側面にも巡る。額部は幅4.3cm、高さ約0.



第51図　火葬壙・土葬墓出土釘実測図

5cmである。残存する身部には種子はみられない。

9は花崗岩製で完形である。頭部は三角形でその下に幅広の一条の切り込みがある。額部幅は6.5cm、高さは0.5cmである。身部には主尊種子として𑖭（キリーク）を表わしている。裏面と基部は未調整である。幅20.0cm、高さ68.5cm、厚さ13.0cmである。

金属製品

鉄釘（第51図、図版83）

釘は火葬壙の各処から出土したが、土葬壙からの出土はＳＸ3118だけである。

釘は断面四角形を呈し、頭を叩いて扁平にし、折り曲げられている。長さは一定ではない。12～17は棺の木質が遺存している。

小結

Ａ地区では上・下２層に大別される石塔群からなる墓所遺構を検出した。下層すなわち当初の墓所ではＳＸ3136と3139の長方形の２つの区画(墓域)が設けられ、石塔が造営されている。この区画に伴うものとして、ＳＱ3140—170・176の蔵骨器を埋納する五輪塔、それにＳＱ3140—250の蔵骨器がある。これらの蔵骨器は14世紀の前半～中頃にその製作が求められるものであるが、墓そのものは14世紀中頃になって造営されたものと考えられる。Ｉ区に位置付けた五輪塔および板碑のうち、前述のＳＱ3140—170・176の他に下層の墓域ＳＸ3136に伴うものとみられるものもあるが、必ずしも詳細な検討、整理が進んでいない現段階においてはその可能性を指摘するにとゞめておく。

下層の墓域は全面的に盛土整地され、上層とした石塔群が造営されることになる。この大規模な整地は墓域の拡大を示すもので、それにともなって下層に営まれていた墓の改変、改葬が当然行なわれたはずである。そして傾斜地でのより広い墓域を得るために石垣ＳＸ3142を構築することにより、その解決をはかっている。このＳＸ3142の構築により設けられたIII区の墓域が、Ｉ・II区の石塔群の墓域と同時に計画、実施されたものであるのか、それともＩ・II区の墓域が、過密になり、さらに墓域拡大の欲求が生じたために設けられたものであるのかは必ずしも明確ではない。

いずれにしても、年月の経過とともに石塔の造営は増加し、墓域の拡大、拡張が欲求されてきたことは事実であり、狭少な地域での墓域の拡張が上方に求められていった事は、残存する石塔群の配置から推察される。上層の墓域の設定年代については、その整地層中に含まれる遺物からほぼ14世紀後半代に求められ、大規模な墓域の改変をこの頃に考えることが可能である。もう一つ造営年代の手掛りとなるものにIII区の北端で出土した宝篋印塔と推定される（ＳＱ3140—224）基礎に「応永四年」の紀年銘を刻したものがあり、上層の墓域が整地された時期と近い年代にある点が注目される。この基礎は原位置から動かされた可能性が強いが、本来、上

層整地のIII区の何処かに造営されたものであれば、石垣ＳＸ3142によって画されたIII区の墓所は遅くともこの頃には設定されたと考えて大過なかろう。

過去に実施した第57・67・97次の三次の調査成果によって、この地域で検出した建物等の遺構を大きく３期に分けて報告している。そこではＩ期を13世紀後半代、II期の下限は14世紀後半～15世紀初頭、第III期の下限は15世紀後半から16世紀前半代との大まかな年代を与えている。この期別と今回検出した遺構の年代を対比してみると、下層の墓域ＳＸ3134・3136は第II期に、上層の墓域は第III期にほぼ比定することができる。

Ｂ地区は、火葬壙・土葬墓が計25基所在し、それらをすべて調査した。火葬壙、土葬壙は一部重複する部分はあるが、火葬壙は中央部、土葬墓は西側奥部に位置し、地域を区分している。

火葬壙は形態によりＩ．狭長なもの、II．方形のものに分かれ、さらにIIは大きさによりａ・ｂに区分できる。

Ｉは、ＳＸ3106・3108・3109・3110である。この４つの壙は、床面が丸味を有すると同時にほぼ同一方向をとる。また、IIよりも先行する。横幅や長さから考えると、伸展の状態で棺に入れ、壙の上に載せ、火葬したと考えられる。この時の壙は通風を助ける役割りを有することになる。これらの壙からはほとんど拾骨されたためであろうか、骨の出土は少なかった。ＳＸ3104上層から出土した土師器杯５・６がＳＸ3106に伴う可能性がある。これが正しいとすると、Ｉに属する火葬壙は14世紀中頃には既に存していたと言えよう。

IIの大部分は南北方向に重複して並ぶ。このような並び方をみると、かつて標識が存在していたような感じがある。

II—AはＳＸ3107である。ＳＸ3107の壙は２ｍ近くもあり、しかも棺台とした石を４個等間近く配している状況から考えると、Ｉと同様に伸展の状態で焼かれたと考えられる。骨が多量に出土したことからＩとは相違し、少量の拾骨で終ったと考えられる。出土青磁椀から14世紀後半から15世紀前半と考えられる。

II—ｂは、Ｉ・II—ａ以外の火葬壙である。壙の大きさや骨の出土状況から臥屈位で焼かれ、少量拾骨されたと考えられる。群在する火葬壙から離れ、単独に位置するＳＸ3117は火葬壙の中では最も新しく16世紀前半代と考えられるが、他は出土遺物からみると、すべて15世紀代になる。

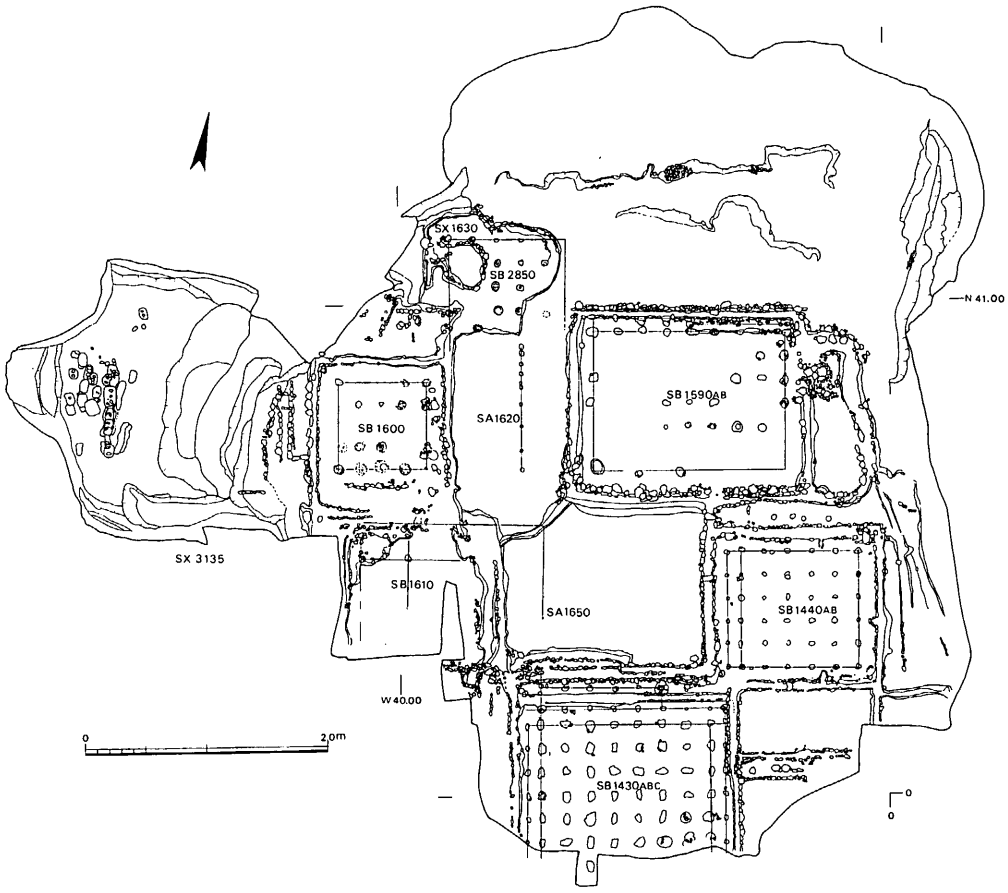
以上の火葬状況をみると伸展位から臥屈位への移行と共に、拾骨される量も変化していったと推察される。また、人骨が残存している壙からみると、ＳＸ3100は頭を南向き、それ以外は北向きにしている。基本的には頭位を北向きにしていたと思われる。

土葬墓は、木棺を使用したと判る例はＳＸ3118だけで、他は明らかでない。壙の大きさから座棺の存在も予想される。ＳＸ3121・3124から土器が出土し、それからみると16世紀前半代の年代が想定できる。また、ＳＸ3122の土葬墓標識と考えられる石の配置に五輪塔の水輪を使用

するなど、全てではないにしても火葬壙よりも後出する要素を見出すことができる。

以上、A地区（墓所）とB地区（火葬所）について個別に整理し、いくつか問題点等について述べてきた。しかしながら、A地区とB地区は密接不可分な関連を有しており、本来、墓所と火葬所は対になるものとして計画され使用されてきたものであり、年代の点からも符号する。時期が下るにつれ、B地区では土葬墓が営なまれるなどして明確な区分が失われてくるもののA地区では墓所の要求により石塔群は増加し、墓域は上方に拡大されている。この墓所と火葬所の変遷は、また下方の建物遺構群の変遷と呼応するものでもある。

現在、墓所および火葬所から出土した人骨の分析や個々の石塔についての比較、検討等を進めている所であり、詳細についての報告は後稿に俟つこととし、ここでは現段階で記し得る概略の報告に止めた。



第52図　第57・67・97・107次調査遺構配置図

別　表

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
暗灰色土層（第104次調査）								
土師器　杯								
2	第５図	16.0	9.0	3.9				
3		11.9	8.3	2.9			○	○
椀								
4		13.4	8.8	4.2			○	
SE 3069								
須恵器　皿								
7	第５図	13.9	10.1	2.0			○	
土師器　杯								
8		12.6	8.0	3.2				
9		12.8	7.3	3.5			○	
10		13.0	8.3	3.3			○	○
11		13.0	6.8	3.5			○	
12		13.1	8.0	3.2			○	
13		13.2	10.0	3.4			○	
14		13.4	8.2	3.5				
椀								
15	第９図	14.6	9.1	6.1				
SB 3080（第105次調査）								
土師器　杯								
4		19.4					○	
SE 3085								
土師器　椀								
6	第９図	12.6	7.1	4.6			○	
黒色土器　椀								
7		11.8			○			
8		13.4	8.4	6.1				○
SK 3091								
須恵器　杯								
10	第９図	13.2	8.1	4.4			○	
皿								
11		14.8	12.2	2.4				
SX 3090								
土師器　杯								
12	第９図	11.6		4.5				
13		15.6						
暗茶色土層								
須恵器　杯蓋（古墳時代）								
1	第10図	13.6		3.6			○	

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
2	第10図	10.4		1.8			○	
3		12.6		1.9			○	
		須恵器	杯身					
4		9.5		2.6			○	
5		12.0		3.8			○	
		須恵器	蓋（歴史時代）					
6		14.0		2.6				
7		14.8			○			
		須恵器	高台杯					
8		12.6	7.0	3.5	○		○	
9		16.0	9.0	5.5	○		○	
10		18.4	8.8	8.2			○	
		須恵器	杯					
11		10.4	8.2	3.2			○	
12		12.4	7.8	3.3	○		○	
13		12.8	8.0	4.3			○	
14		14.3	10.2	3.2	○		○	
		須恵器	皿					
16		21.4		2.7			○	
17		14.4	11.8	1.7				
18		17.5	14.4	2.1			○	
		土師器	蓋					
3	第11図	14.4		2.9				
		土師器	杯					
4		13.0	6.8	3.3				
5		15.9	8.2	3.8	○			
6		16.4	8.7	5.0				
16		12.8	7.4	2.7		○	○	○
17		13.2	8.6	3.0		○	○	○
		土師器	皿					
7		17.6	13.7	2.4	○		○	
15		9.6	7.2	1.2		○	○	
SD 1652（第97次調査）								
		土師器	皿a					
1	第18図	7.2	5.4	1.3		○		
2		7.5	5.0	1.5		○	○	
3		7.8	6.8	1.3		○		○
		土師器	皿b					
4		6.4	4.0	1.8		○	○	
5		6.4	4.4	1.8		○	○	○
6		6.8	4.5	1.8		○	○	○
7		7.0	5.0	1.5		○	○	○
8		7.0	5.0	1.8		○		○
9		7.2	5.0	2.2		○		○
		土師器	杯b					
10		12.2	8.0	2.7		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SD 2848								
		土師器	皿a					
15	第18図	8.8	6.8	1.8		○	○	○
		土師器	皿b					
13		6.4	3.7	1.9		○	○	○
14		7.3	4.9	1.9		○	○	○
SD 2867								
		土師器	杯a					
19	第18図	13.3	9.0	2.9		○	○	○
SK 2878								
		土師器	皿a					
23	第18図	8.8	7.5	1.4		○		
		土師器	皿b					
24		6.7	4.9	1.8		○	○	○
25		6.9	4.2	1.7		○	○	○
26		6.9	4.4	2.0		○	○	
27		7.0	4.5	2.0		○	○	○
SG 1630								
		土師器	皿b					
28	第18図	6.6	4.6	1.7		○	○	○
29		6.8	5.0	1.9		○		
30		7.1	5.4	1.6		○	○	○
31		7.2	5.0	1.7		○	○	
		土師器	杯a					
32		11.4	6.7	2.5		○	○	
33		12.2	7.6	2.7		○	○	○
34		13.4	8.6	2.5		○	○	○
SK 2847								
		土師器	杯a					
35	第18図	12.6	9.0	2.7		○	○	○
36		12.7	8.6	2.7		○	○	○
37		13.0	7.8	3.0		○		
SG 1630 西拡張部								
		土師器	皿a					
1	第20図	6.4	4.8	1.6		○	○	○
2		6.2	3.9	2.0		○	○	○
3		6.3	3.9	2.0		○	○	○
4		6.6	5.1	1.9		○		○
5		6.6	3.9	2.1		○	○	○
6		6.7	4.2	1.5		○	○	○
7		6.8	4.6	1.9		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
8	第20図	6.8	4.4	1.9		○	○	○
9		7.4	4.4	1.8		○	○	○
10		6.8	5.5	1.8		○	○	○
11		6.8	4.7	2.0		○	○	○
12		6.9	4.7	1.8		○	○	○
13		7.0	4.1	1.8		○	○	○
14		7.0	4.3	1.8		○	○	○
15		7.0	4.0	2.5		○		○
16		7.0	4.1	2.0		○	○	
17		7.0	5.0	1.8		○		○
18		7.2	4.3	1.9		○		
19		7.3	4.5	1.7		○		○
20		7.2	4.7	1.8		○	○	○
土師器　杯b								
21		12.3	7.5	2.4		○	○	○
22		11.7	6.9	2.9		○	○	○
23		12.7	7.7	3.0		○	○	
24		12.5	8.0	3.1		○	○	○
25		13.3	9.0	3.2		○	○	○
26		13.3	8.2	3.5		○	○	
27		12.7	6.9	3.0		○	○	○
第Ⅰ期以前整地層								
土師器　皿								
1	第21図	10.0	7.0	2.2	○			
土師器　高台付丸底杯								
2		15.6	8.0	5.6			不明	○
第Ⅱ期整地層								
土師器　杯a								
3	第21図	13.4	8.0	2.9		○	○	○
4		13.6	8.0	3.0		○		
第Ⅲ期整地層								
土師器　皿b								
9	第21図	7.2	4.0	2.1		○	○	
10		7.5	4.4	2.0		○	○	
11		7.8	5.0	1.9		○	○	○
12		8.3	5.7	2.1		○	○	○
13		8.9	5.0	2.4		○	○	○
第Ⅳ期整地層								
土師器　皿b								
15	第21図	6.4	4.8	1.9		○		
16		6.6	4.2	2.0		○		
17		6.8	4.6	1.9		○	○	○
18		6.9	4.6	1.7		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
19	第21図	7.1	4.1	1.9		○		
20		8.2	5.8	2.0		○	○	○
		土師器　杯a						
21		12.8	8.4	2.7		○	○	○
暗褐色土・暗灰色土層								
		土師器　皿a						
1	第22図	7.8	6.4	1.2		○	○	○
2		8.6	6.2	1.4		○	○	○
		土師器　皿b						
3		6.8	4.3	1.5		○		
4		7.0	5.0	1.5		○	○	
5		7.4	5.4	1.5		○		○
6		6.9	4.5	1.8		○		
7		6.9	4.2	1.8		○	○	○
8		7.0	4.2	1.9		○		
9		7.2	5.5	1.9		○	○	
10		8.0	5.8	1.7		○		
11		8.2	5.0	2.0		○		
12		8.6	5.8	1.9		○		
13		8.6	4.8	2.1		○		
14		9.8	4.4	2.0		○	○	
		土師器　杯a						
15		12.4	9.0	2.4		○	○	○
16		12.0	7.4	2.5		○	○	
		土師器　杯b						
17		11.0	6.0	2.9		○		
18		13.1	5.9	2.9		○	○	
19		11.8	7.0	3.0		○	○	○
20		13.4	7.8	3.7		○	○	○
SQ3140（第107次調査）								
		土師器　皿a						
1	第41図	8.6	6.7	1.3		○	○	○
		土師器　皿b						
2		6.7	5.0	1.8		○		
3		7.3	5.3	1.6		○	○	
4		7.5	4.5	2.2		○		
5		6.8	4.3	2.0		○	○	○
6		7.0	5.0	1.6		○	○	○
7		8.0	4.8	2.3		○		○
SX3137								
		土師器　皿b						
8	第41図	6.1	3.6	1.6		○		
9		7.0	5.0	1.5		○	○	

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SX3130								
		土師器	皿b					
10	第41図	6.3	4.7	1.4		○		
11		6.3	4.5	1.5		○	○	
12		6.3	4.0	1.8		○		
13		6.3	4.6	1.8		○	○	
14		6.4	4.4	1.6		○		○
15		6.4	4.6	1.4		○	○	○
16		6.4	3.9	1.6		○		
17		6.4	4.0	1.7		○		
18		6.4	4.3	1.7		○		
19		6.5	4.3	1.5		○		
20		6.5	4.6	1.9		○	○	○
21		6.5	4.8	1.9		○		
22		6.7	4.9	1.7		○		
23		6.7	5.0	1.6		○		○
24		6.7	4.5	1.7		○	○	○
25		6.7	4.4	1.9		○	○	
26		6.7	5.2	1.8		○		
27		6.8	5.0	1.5		○		
28		6.8	4.6	1.6		○		
29		6.8	3.5	1.7		○		
30		6.8	4.6	1.7		○	○	○
31		6.8	4.0	1.8		○	○	○
32		6.8	4.2	1.9		○		○
33		6.8	4.0	2.0		○	○	○
34		6.9	3.5	1.9		○		○
35		6.9	3.9	1.8		○	○	○
36		7.0	4.3	1.5		○		○
37		7.0	5.0	1.5		○		
38		7.0	4.4	1.7		○		
39		7.0	4.0	1.7		○		○
40		7.0	4.0	1.8		○		
41		7.1	4.5	1.7		○		○
42		7.1	4.2	1.9		○	○	○
43		7.1	4.5	1.9		○	○	○
44		7.1	5.2	2.0		○		
45		7.2	4.2	1.6		○		○
46		7.2	4.5	1.6		○		○
47		7.2	3.9	1.7		○	○	○
48		7.2	4.6	1.8		○	○	○
49		7.3	5.3	1.9		○	○	○
50		7.4	4.2	1.8		○		○
51		7.4	5.2	1.9		○		
52		7.5	4.3	1.8		○		○
53		7.9	4.5	2.0		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
		土師器　杯b						
54	第41図	11.6	6.6	2.8		○		
55		12.4	7.5	2.5		○	○	○
56		12.2	7.4	2.4		○	○	○
57		13.2	7.8	2.8		○		○
暗灰色土層								
		土師器　皿b						
1	第43図	6.2	4.4	1.5		○		
2		6.9	4.9	1.4		○	○	
3		6.8	4.9	1.5		○		
4		6.3	4.0	1.9		○		○
5		6.4	4.3	1.7		○	○	
6		6.4	4.2	2.0		○		
7		6.5	4.8	1.9		○	○	
8		6.8	4.0	1.9		○		
9		7.0	5.2	1.7		○		
10		7.0	5.0	2.0		○		
11		6.3	3.8	1.3		○		
A－I地区上層遺構面								
		土師器　皿b						
12	第43図	6.4	4.5	1.7		○		
13		6.7	4.6	1.9		○		
14		6.8	4.0	1.6		○		
15		6.8	4.7	1.8		○	○	
16		7.2	5.2	1.6		○		○
17		7.2	4.7	1.8		○	○	○
18		7.4	4.2	2.0		○	○	○
		土師器　杯a						
26		12.2	7.1	2.2		○	○	○
27		12.2	8.0	2.3		○		
		土師器　杯b						
28		11.6	6.6	2.8		○	○	○
29		12.6	7.7	3.0		○	○	○
A－II地区上層遺構面								
		土師器　皿b						
19	第43図	6.4	3.9	1.8		○		
20		6.6	4.6	1.8		○	○	
21		6.8	4.4	2.1		○	○	○
		土師器　杯b						
30		11.8	5.2	2.8		○	○	
A－III地区遺構面								
22	第43図	11.6	4.8	2.2		○	○	○

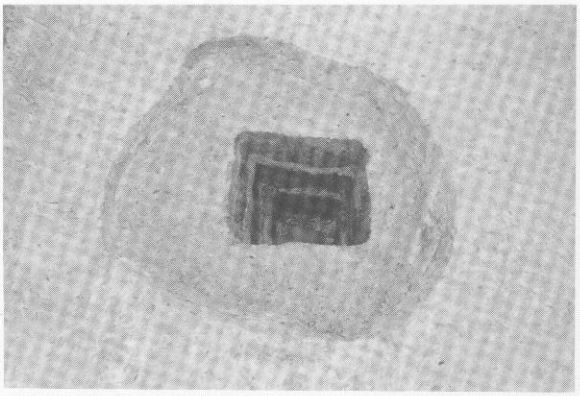
番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
23	第43図	8.0	5.2	2.0		○	○	○
A地区遺構面								
		土師器　皿b						
24	第43図	6.6	5.0	1.5		○		
25		7.4	5.0	2.3		○		
黄褐色土層								
		土師器　皿a						
32	第43図	7.8	6.2	1.1		○		○
33		7.9	6.4	1.1		○		
		土師器　皿b						
34		6.6	3.8	1.7		○		
35		6.7	3.9	1.8		○		
36		6.8	4.7	1.7		○	○	○
37		6.8	4.7	1.9		○		
38		7.0	3.9	2.0		○	○	
39		7.2	5.1	1.9		○		
40		7.4	5.0	2.1		○		
青褐色土層								
		土師器　皿b						
41	第43図	6.3	3.9	1.7		○		○
42		6.8	4.3	1.5		○	○	
43		7.0	4.9	1.8		○		
44		7.0	4.0	1.9		○		○
45		7.0	4.3	1.8		○	○	
46		7.1	4.2	2.0		○	○	
47		8.4	5.0	1.5		○	○	
SX 3100								
		土師器　杯a						
1	第44図	11.8	7.8	2.3		○	○	○
2		12.2	8.2	2.2		○	○	○
3		12.5	8.8	1.9		○	○	○
SX 3104								
		土師器　杯a						
7	第44図	12.4	7.8	2.1		○	○	
		土師器　杯b						
5		12.1	7.0	2.5		○		
6		12.6	7.7	2.4		○	○	
SX 3124								
		土師器　杯b						
12	第44図	10.9	5.2	2.7		○		
13		11.1	5.1	3.0		○	○	

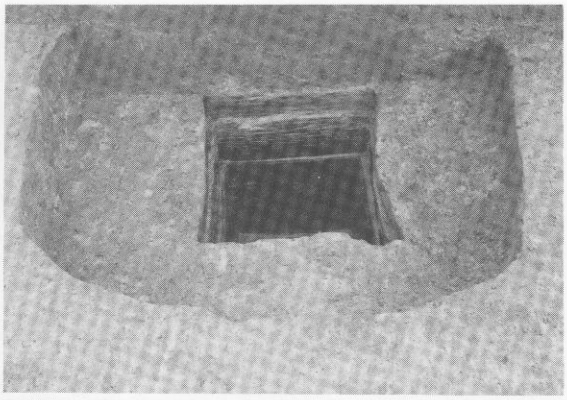
図　版

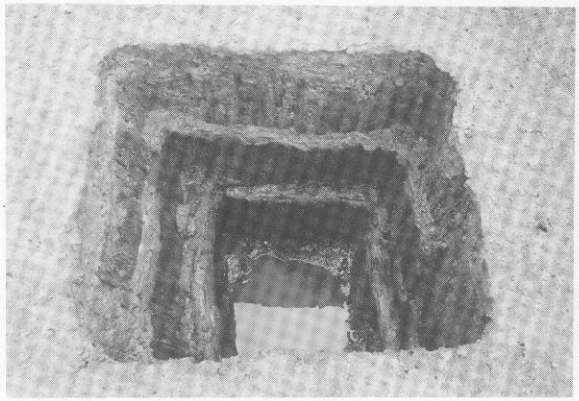
第104次調査区全景（西から）

第104次調査区全景（東から）

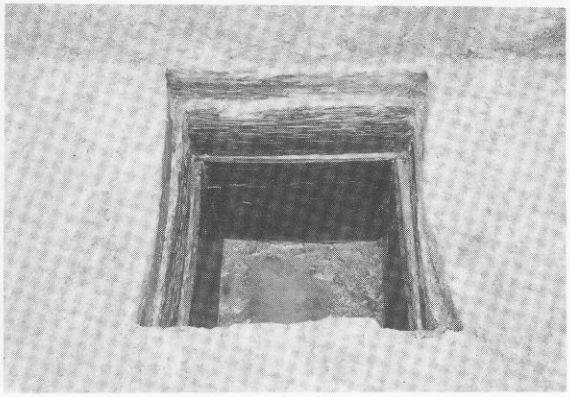
第104次補足調査区全景（南から）







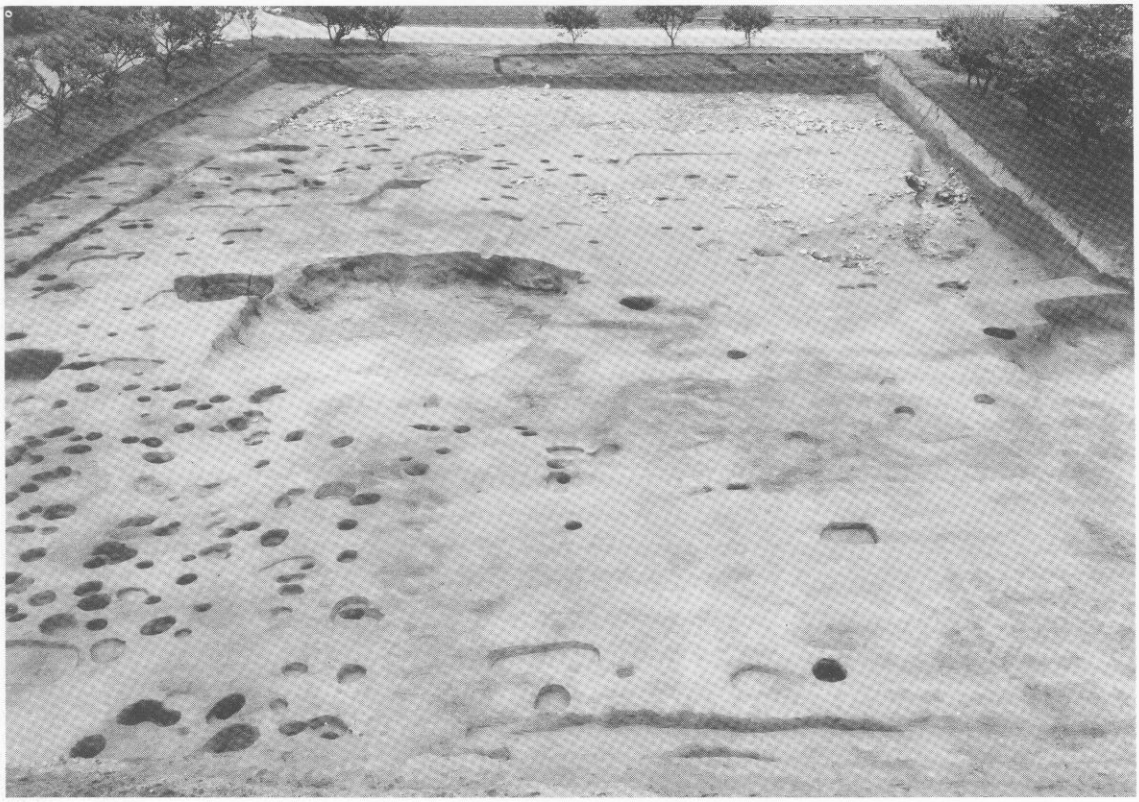
井戸SE3069（北から）



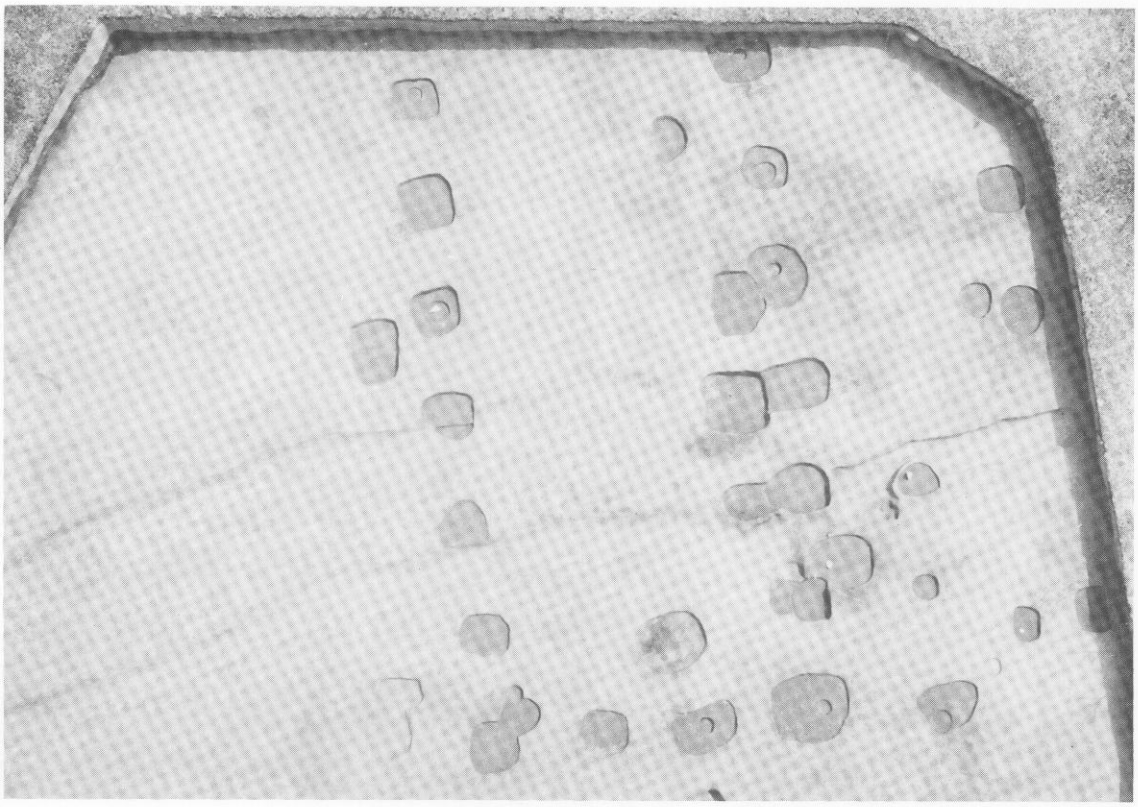
井戸SE3070（東から）

第105次調査区全景（空中写真）

第105次調査南半部（北から）

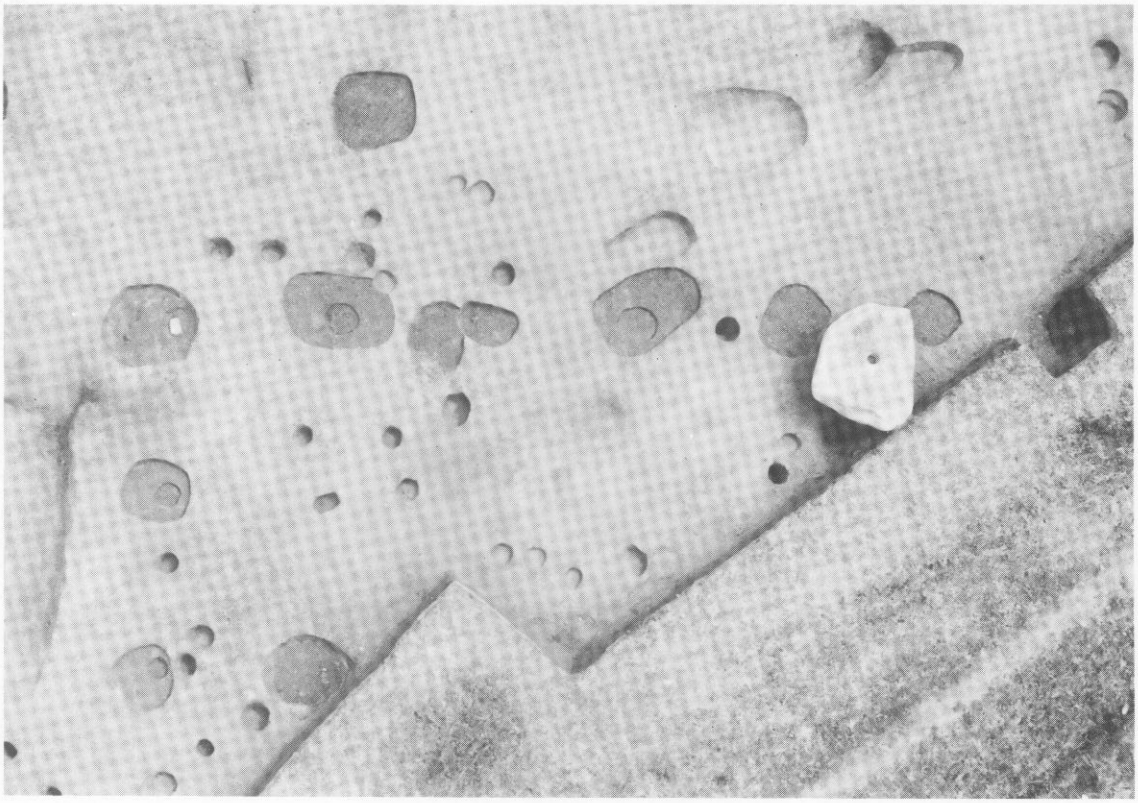


第105次調査北半部（南から）

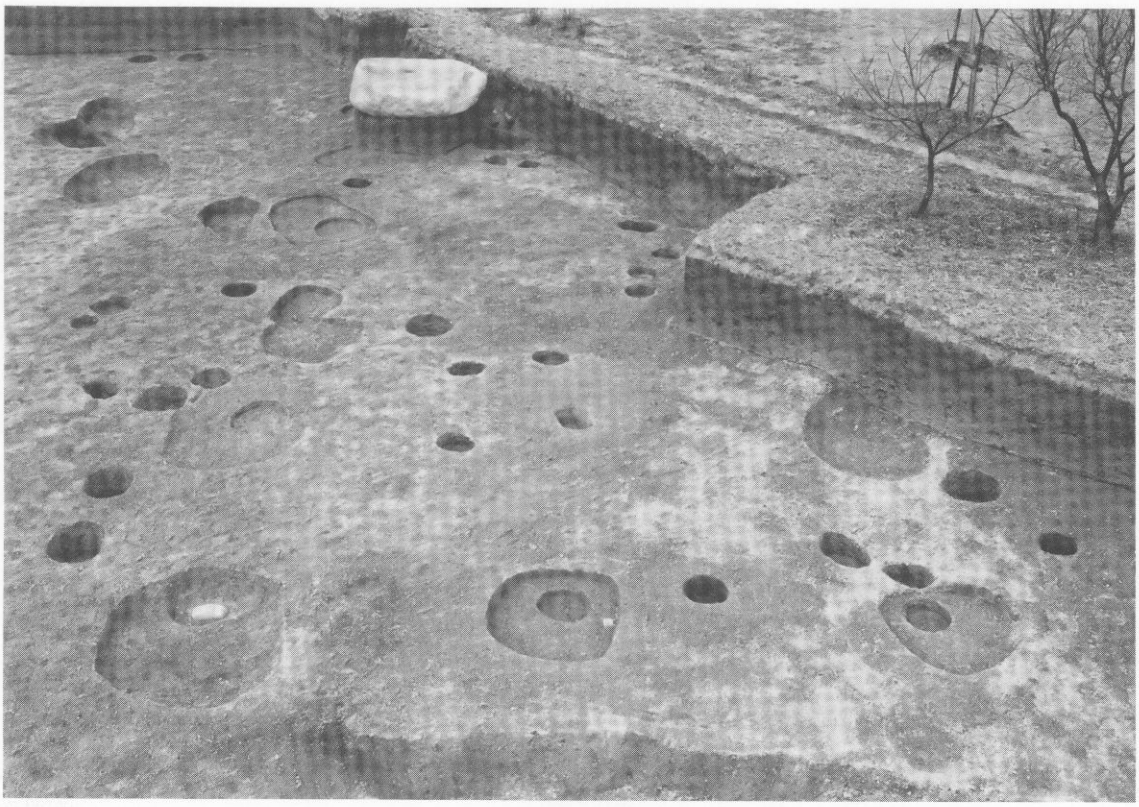


掘立柱建物SB3075（空中写真）

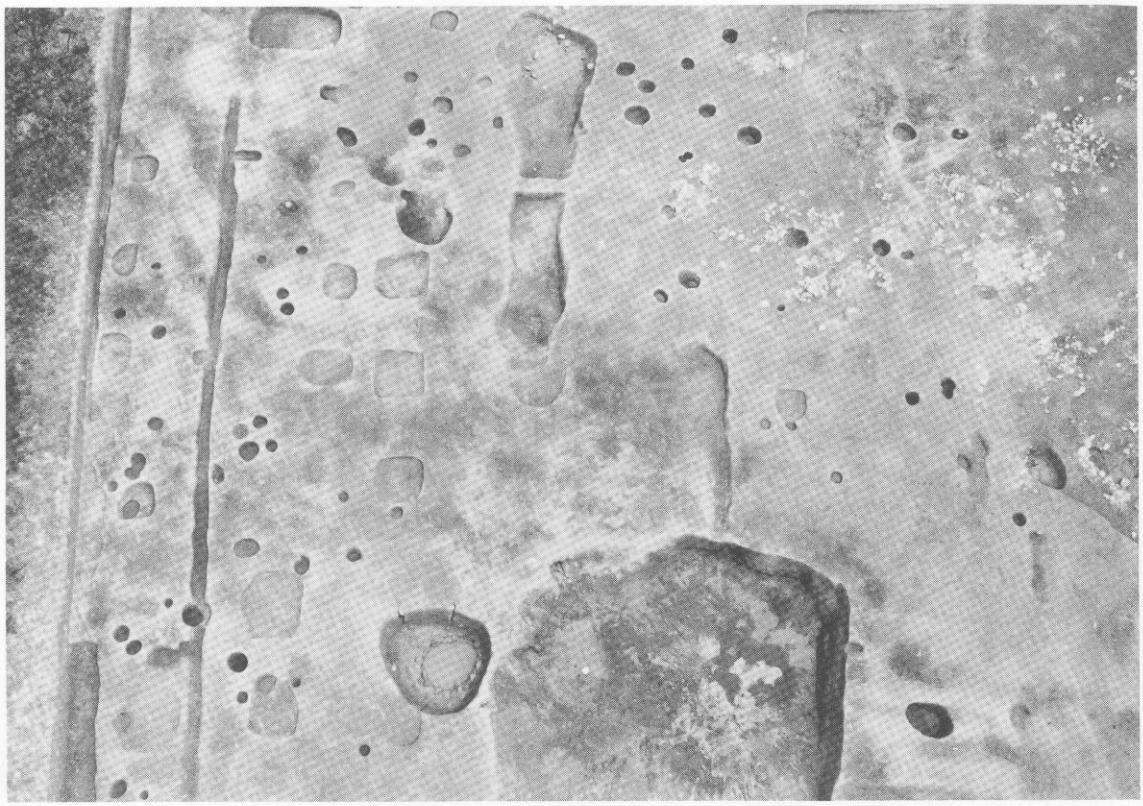
掘立柱建物SB3075（北から）



掘立柱建物SB3080（空中写真）



掘立柱建物SB3080（北から）

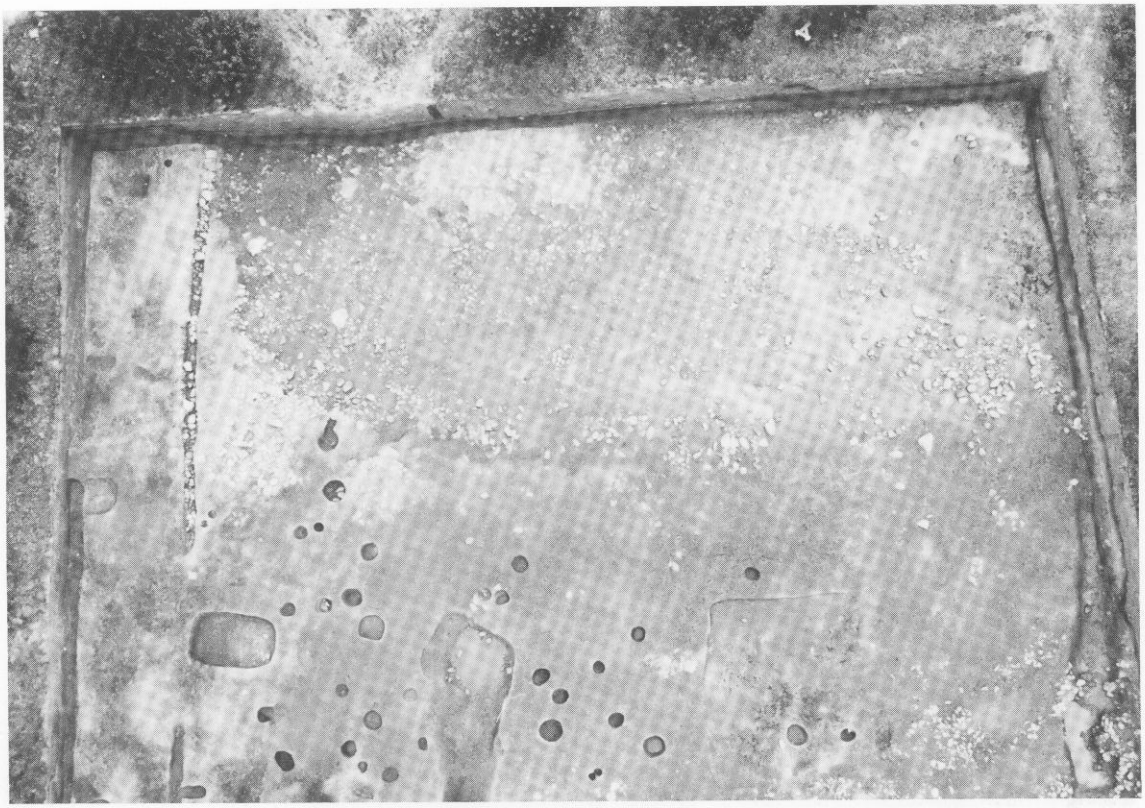


掘立柱建物SB491・柵SA3092・井戸SE3085・SX3090等（空中写真）

不明遺構SX3090（南から）

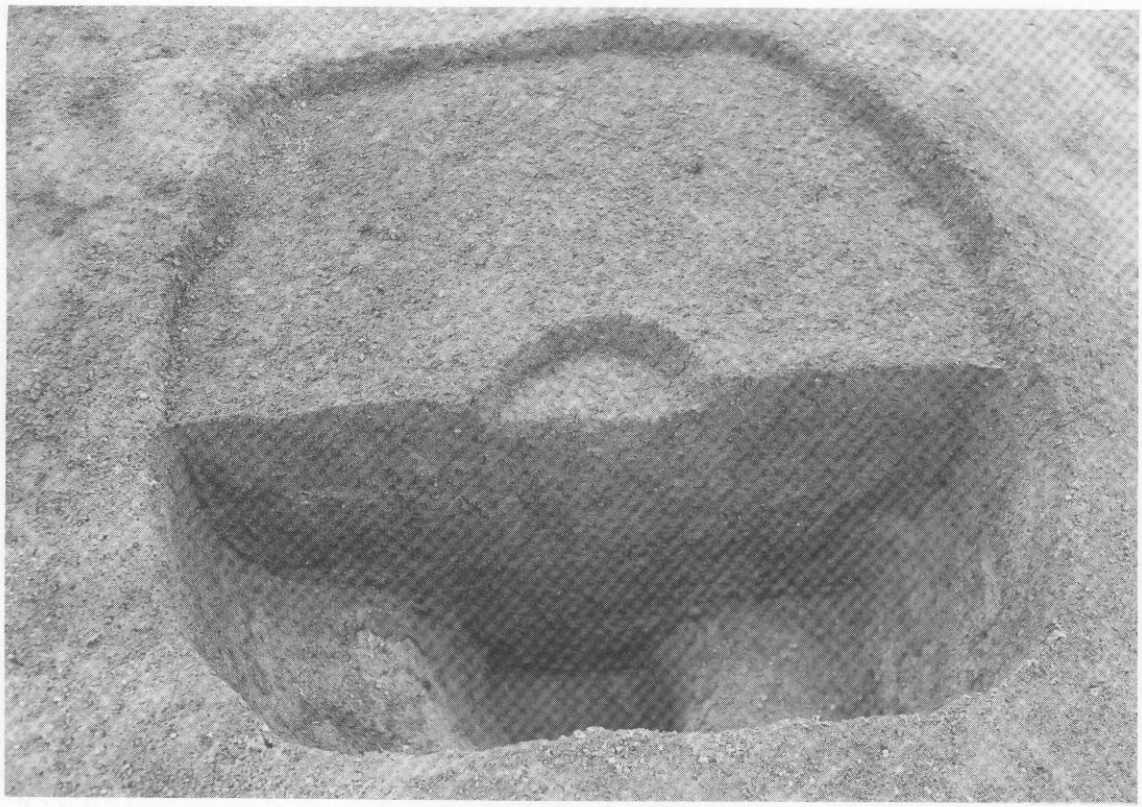
井戸SE3085全景（南から）

井戸SE3085（南から）

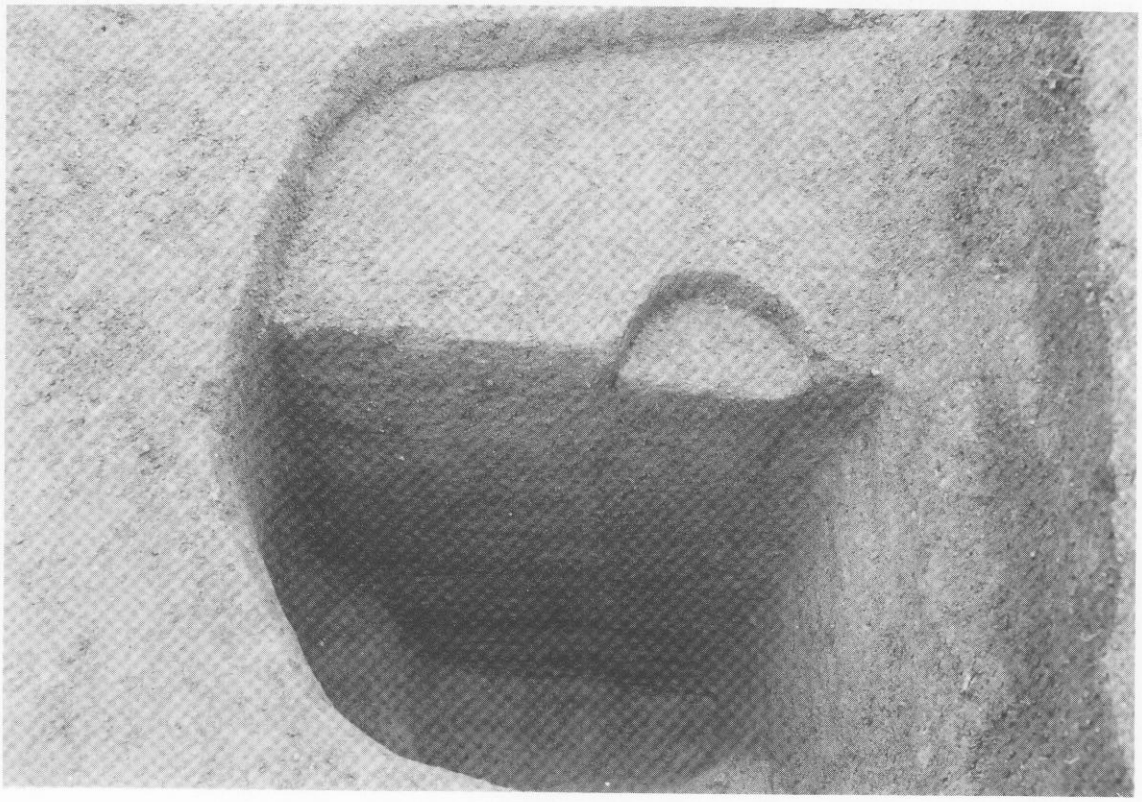


礫群SX3095（空中写真）

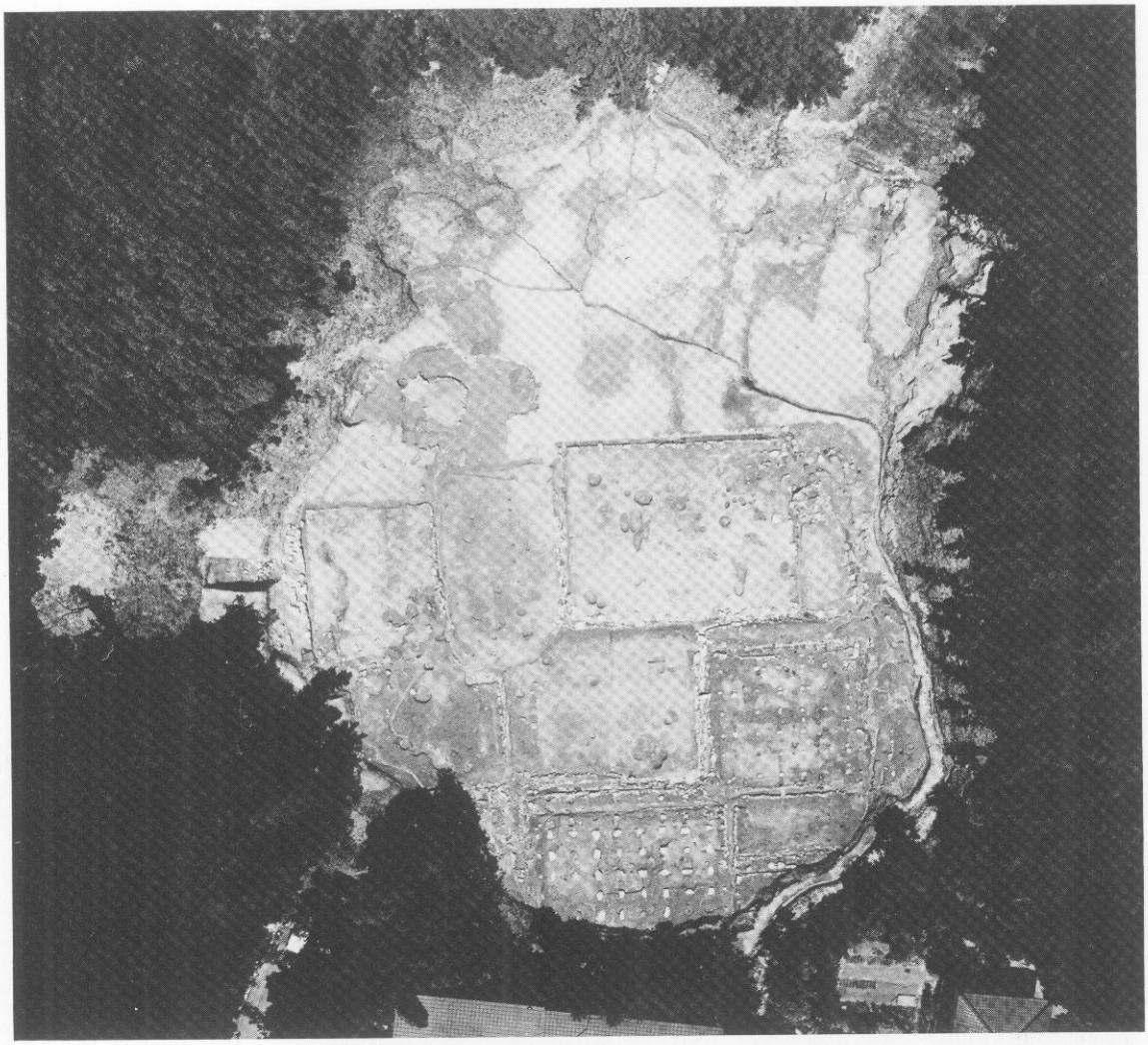
礫群SX3095（西から）



掘立柱建物SB3075柱掘形



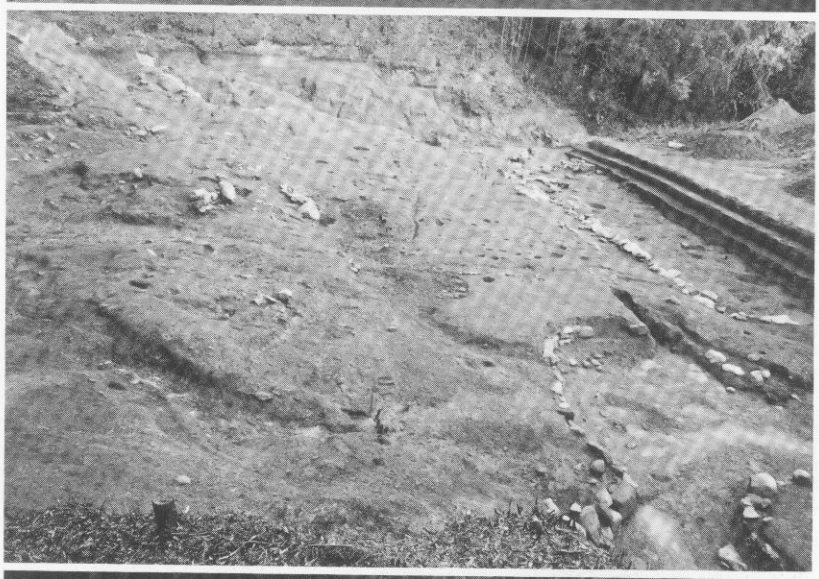
掘立柱建物SB3075柱掘形



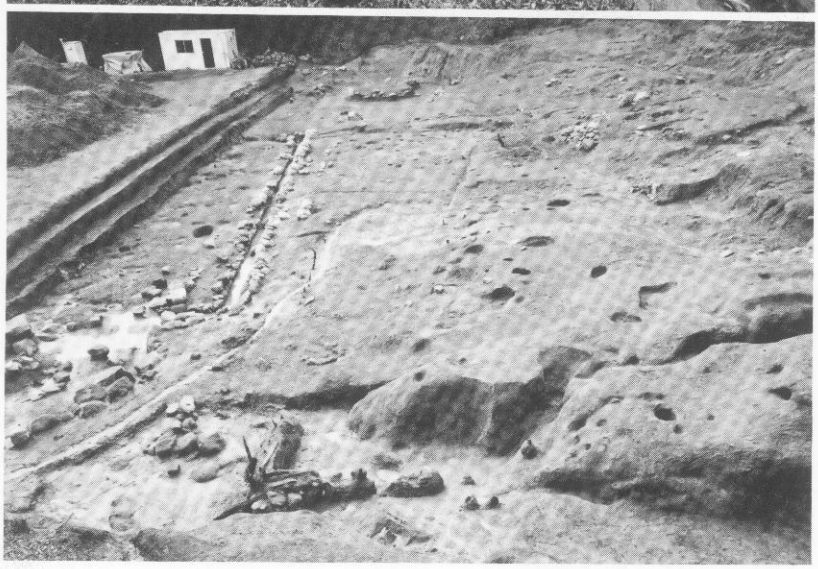
第57・67・97次調査区（推定金光寺跡）の全景

第97次調査区全景

南から



西から



東から

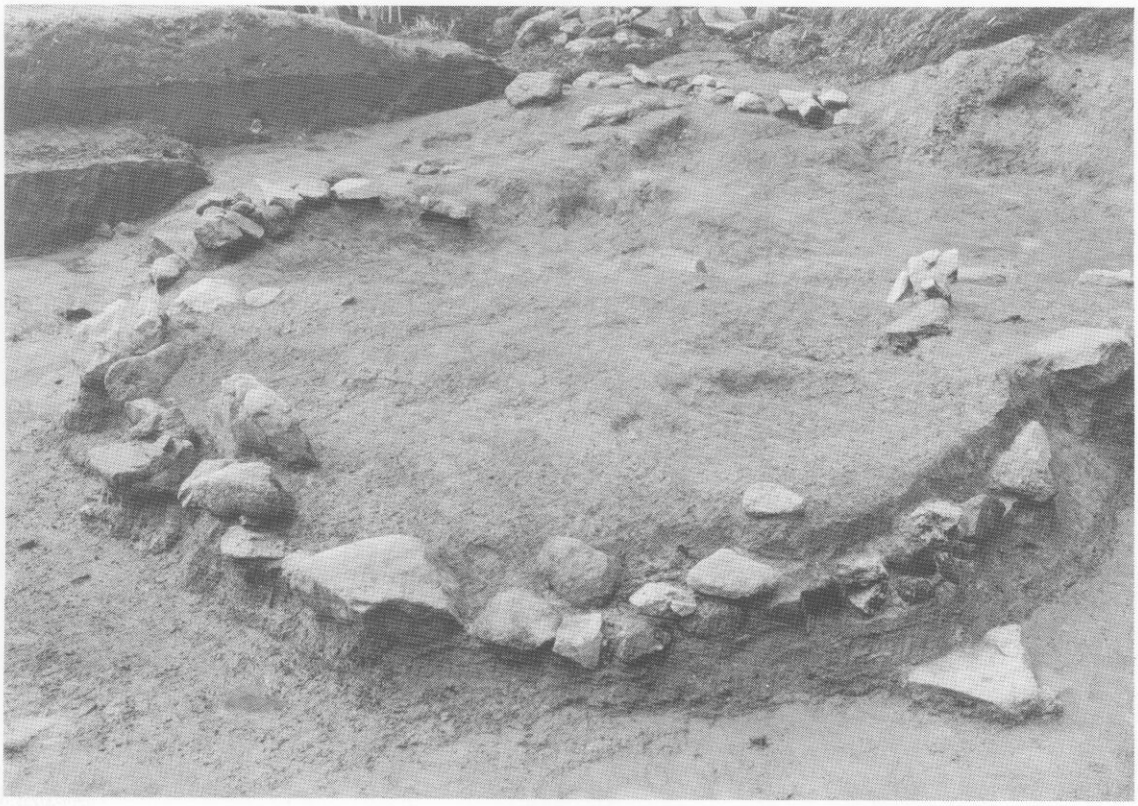
池SG1630

南から

西から

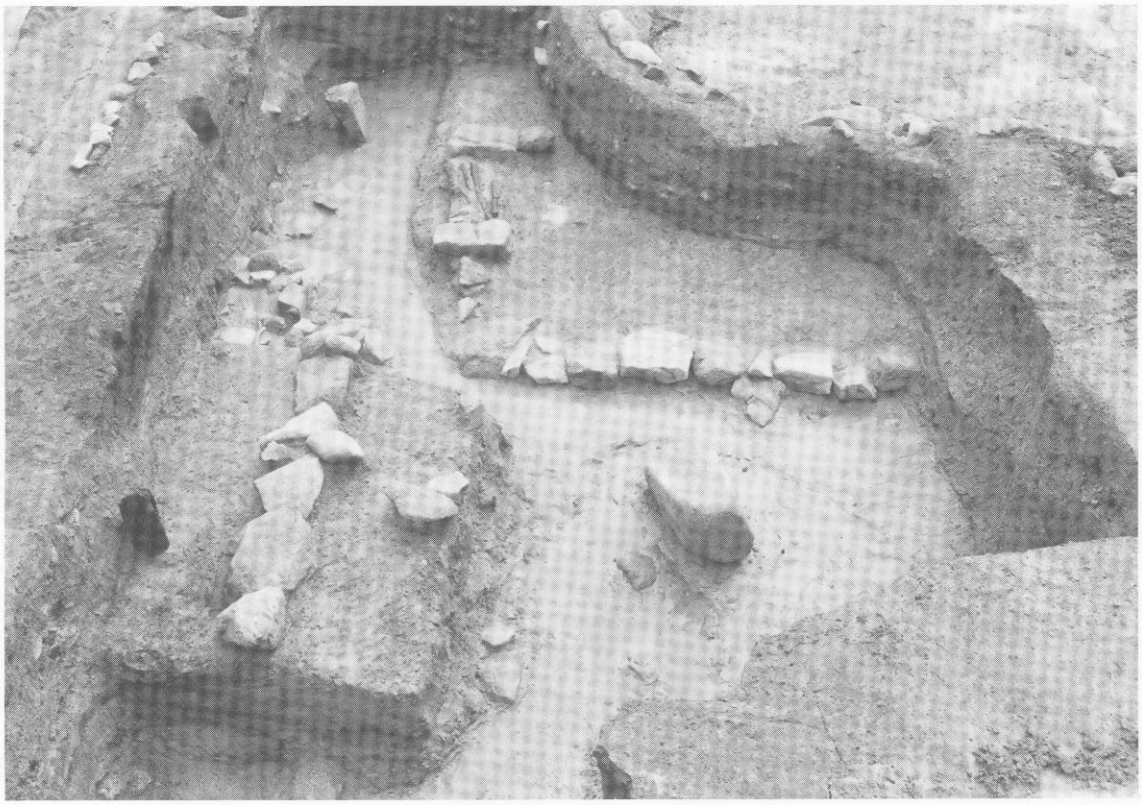
西北から

池SG 1630 護岸石組（南から）



池SG 1630 中島

池SG1630と下層の礎石建物SB2850



礎石建物SB2850の基壇東北隅

基壇状遺構SX2860・溝2855・礎石建物SB2850（北から）

井戸SE2875（西から）

礎石建物SB2850（左）と重複する基壇状遺構SX2860・SX2870（南から）

基壇状遺構SX2870西辺石組（西から）

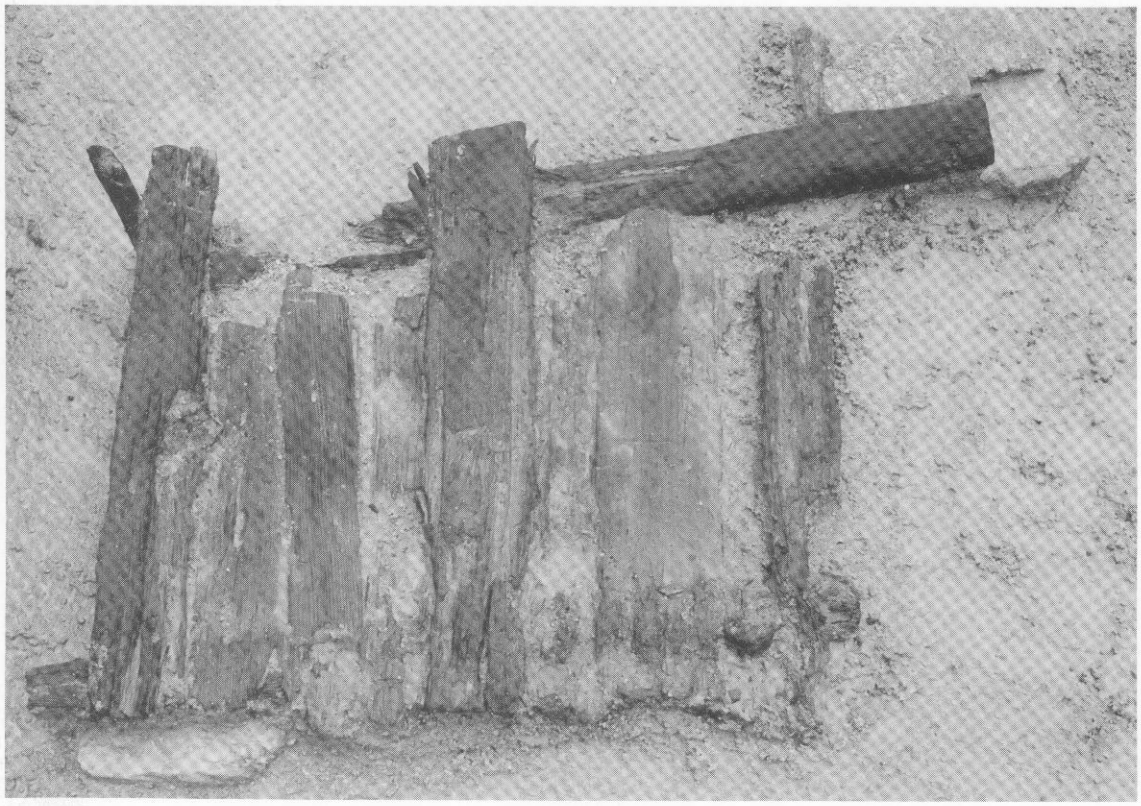
基壇状遺構SX2860西南隅石組（西から）

溝SD2855と基壇状遺構SX2865の敷石（西から）

基壇状遺構SX2860・SX2865と溝SD2866（南から）

溝SD2866（西から）

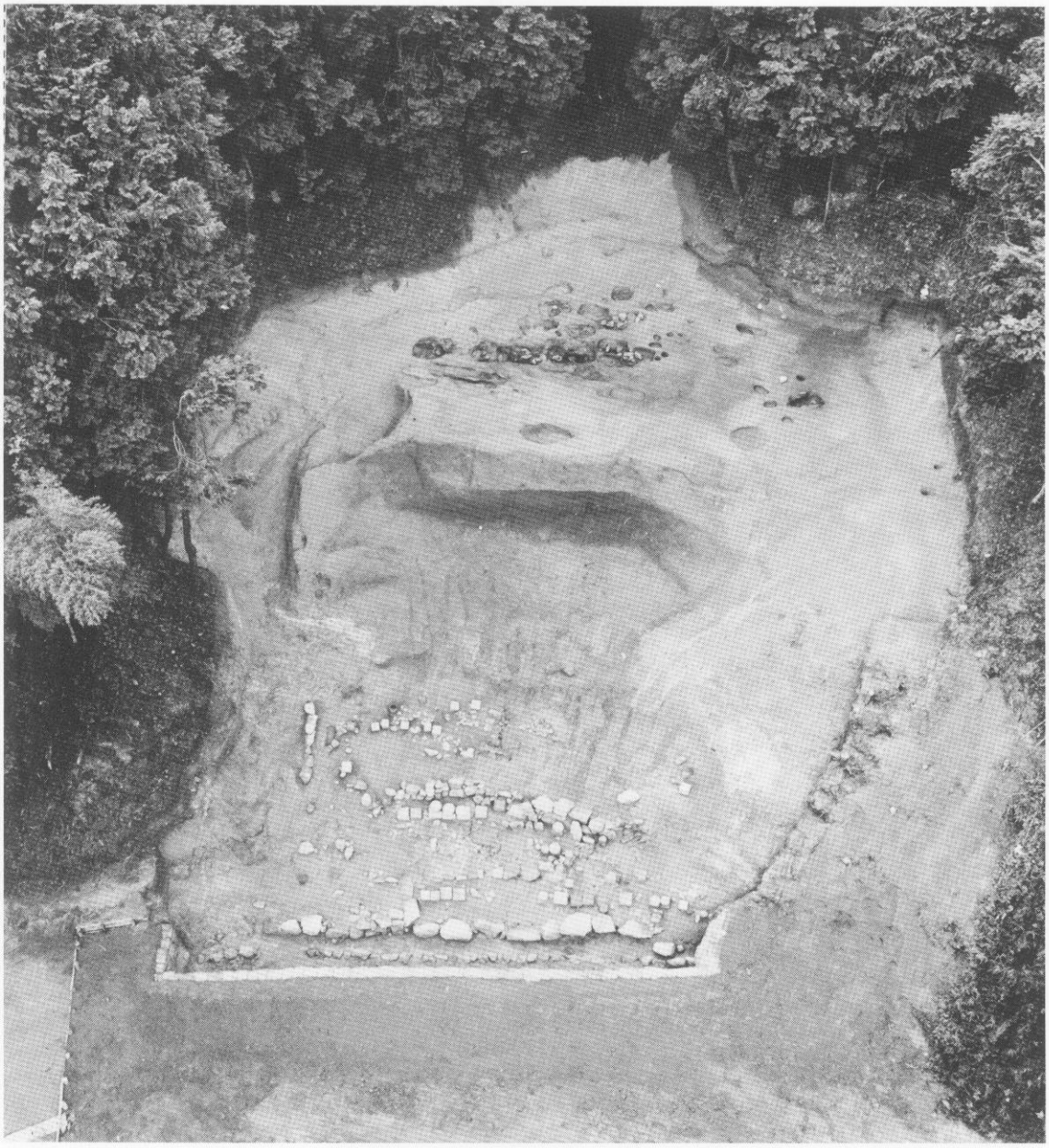
不明遺構　（木組）SX2873（南から）



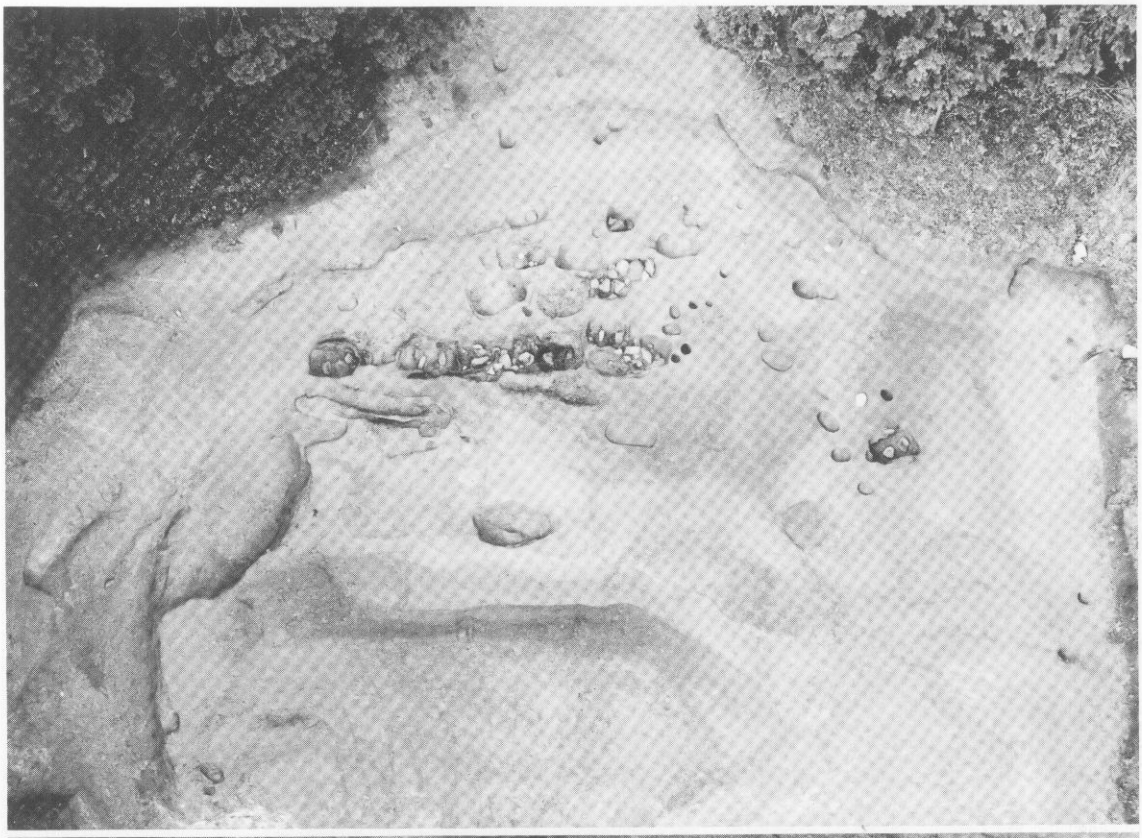
不明遺構（木組）SX2873（北から）

道路状遺構SX2846（南から）

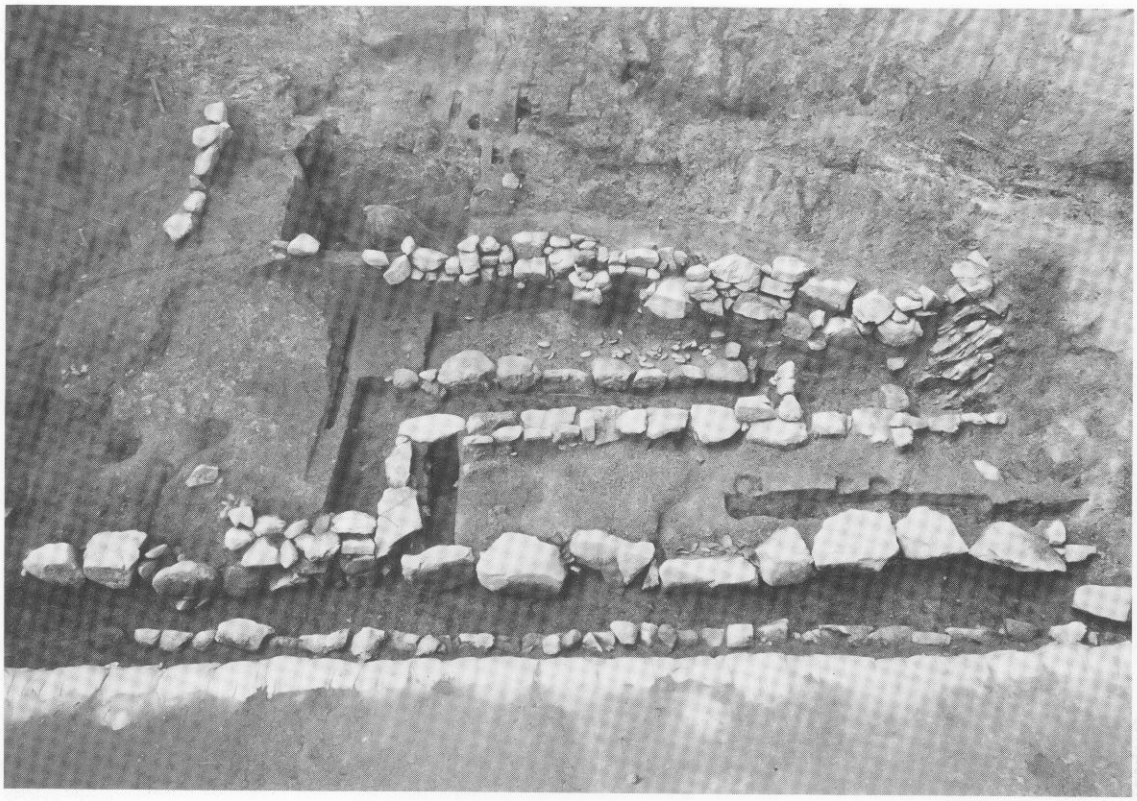
道路状遺構SX2846全景（南から）



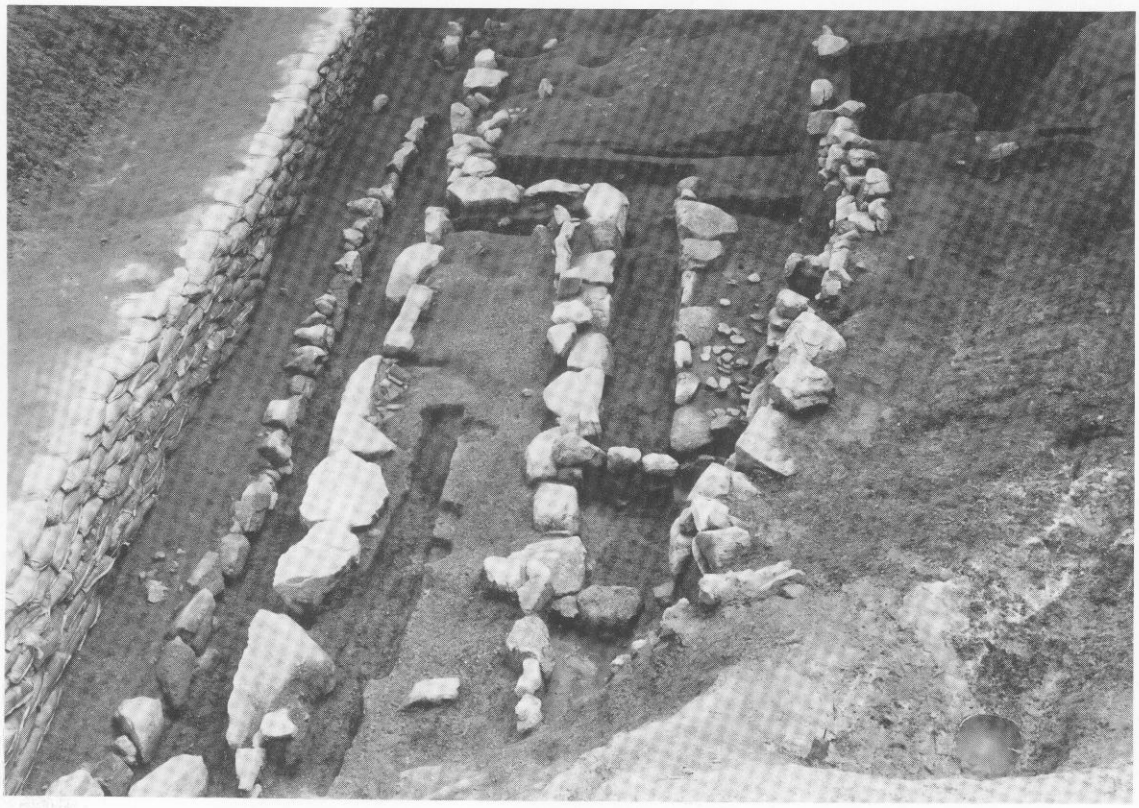
第107次調査区全景（空中写真）



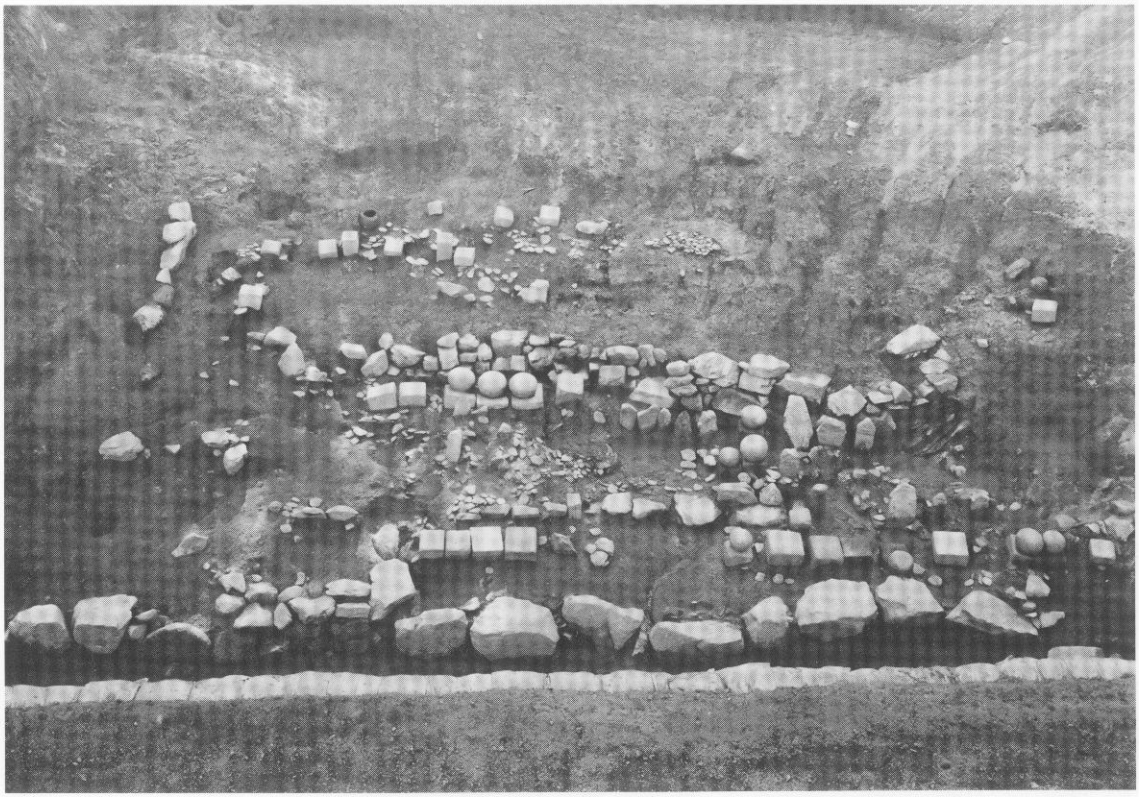
（上）B 地区火葬所、土葬墓全景（空中写真）・（下）A 地区 石塔群全景（空中写真）



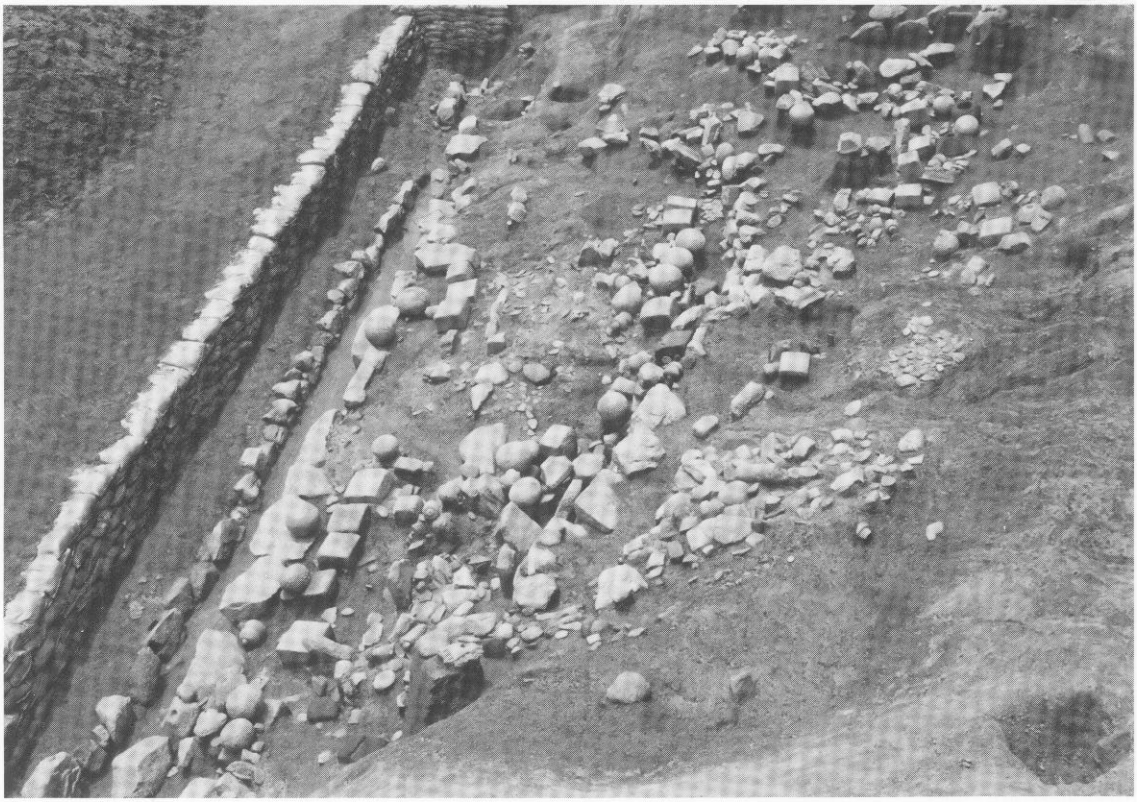
A 地区下層の墓所区画施設SX3136・SX3139（東から）



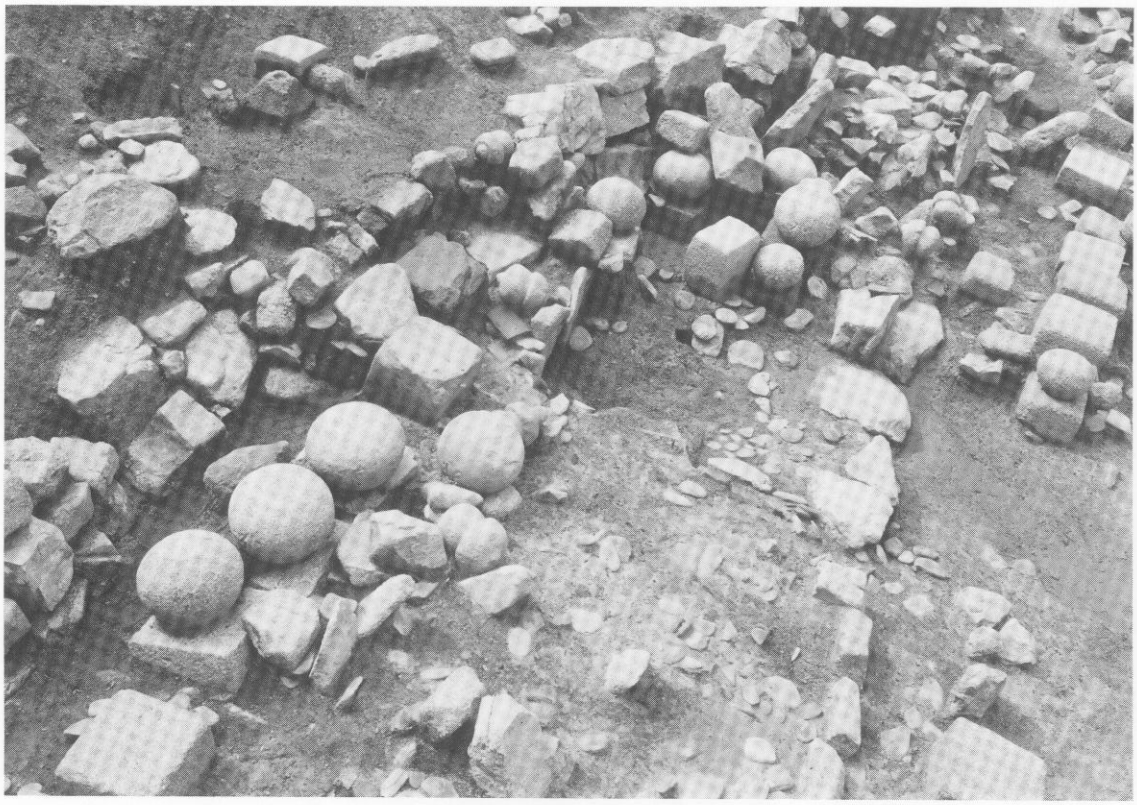
A 地区下層の墓所区画施設SX3136・SX3139（北から）



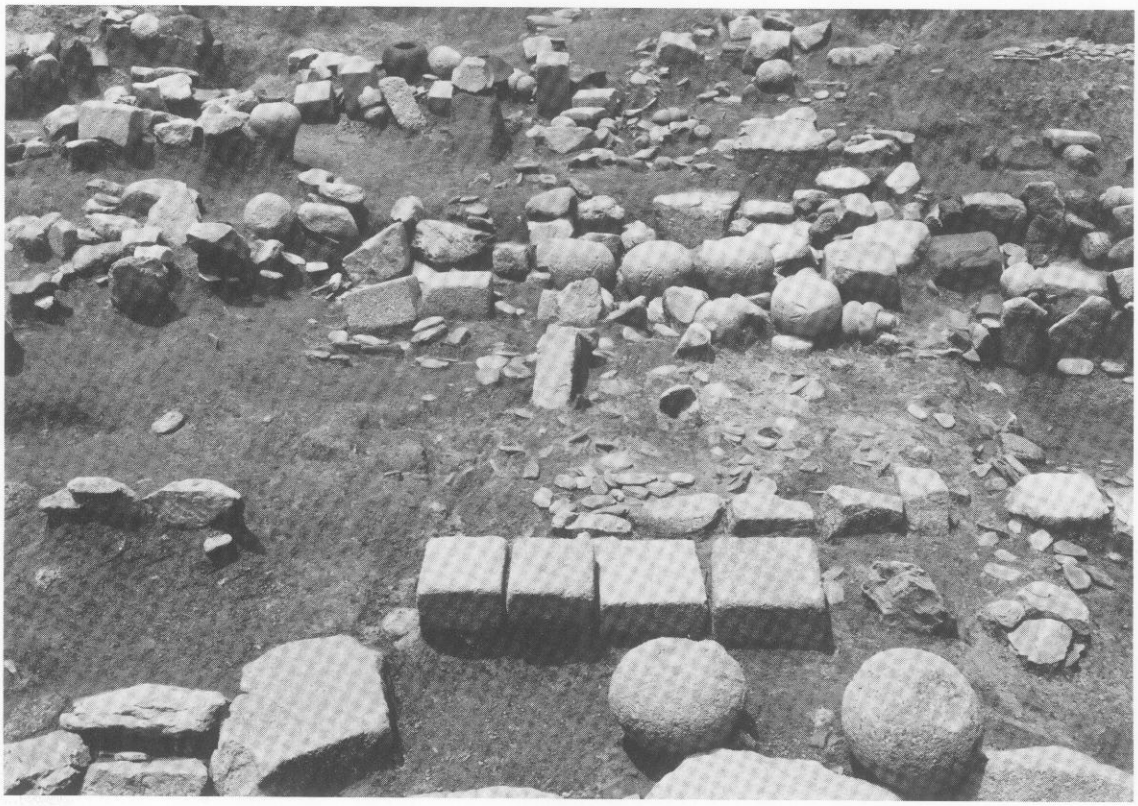
A 地区上層の石塔群全景（東から）



A 地区上層の石塔群全景（北から）



A 地区上層の石塔群（南東から）



A 地区上層の石塔群南半部（東から）

A 地区上層の石塔群北半部（東から）

A 地区上層の石塔群 III 区南半部（東から）

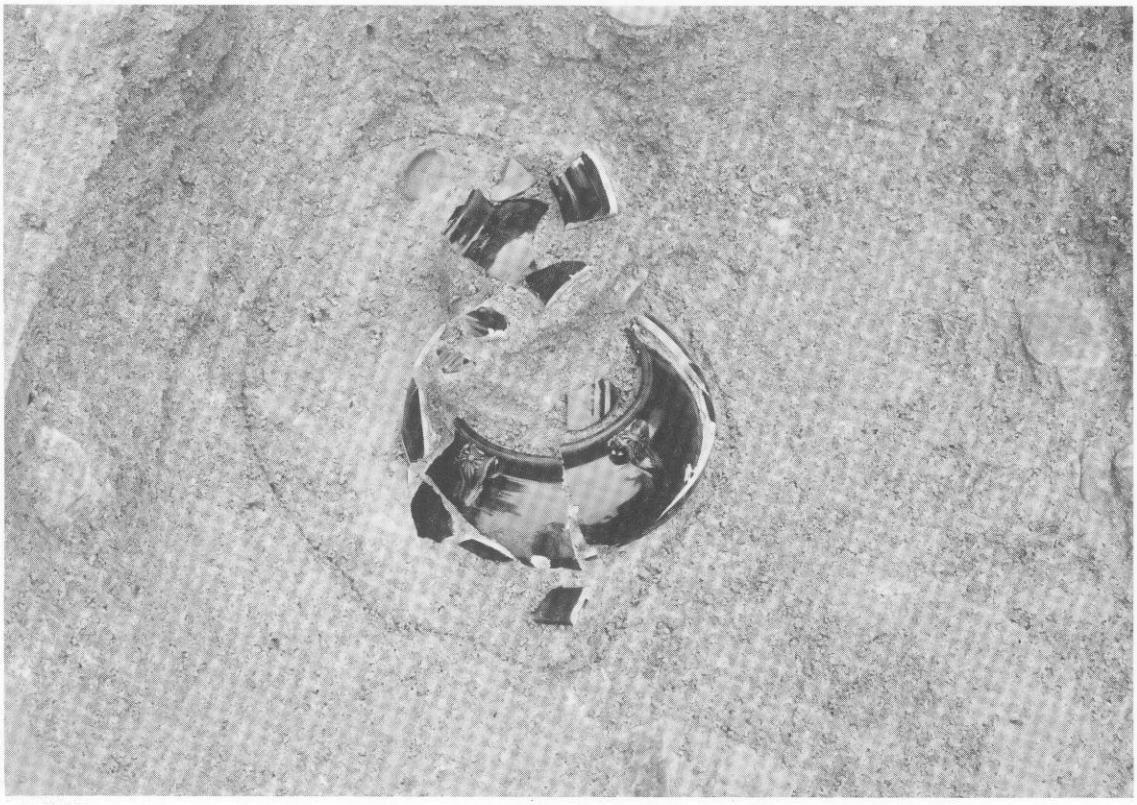
A 地区　III区出土の宝篋印塔基礎SQ3140－224（東から）

通路遺構SX3125（西から）

石塔群SQ3140－170蔵骨器出土状況（北から）

石塔群SQ3140－170蔵骨器出土状況（上から）

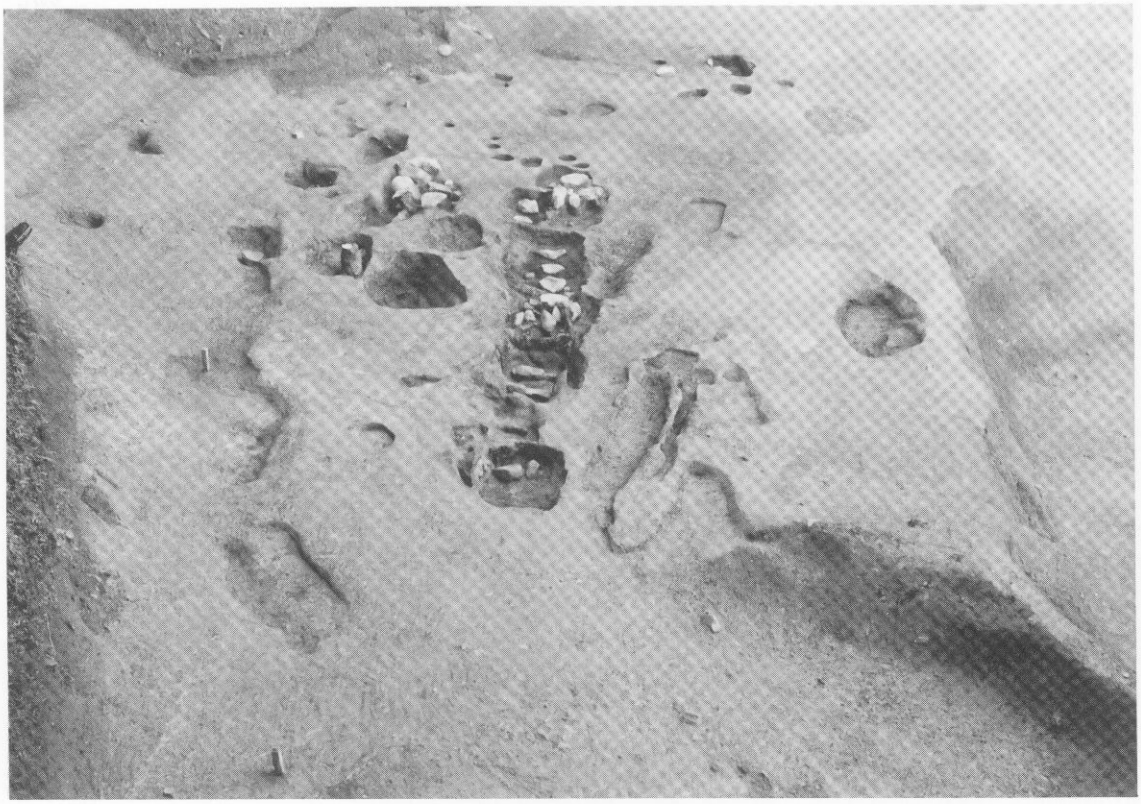
石塔群SQ3140－176蔵骨器出土状況（東から）



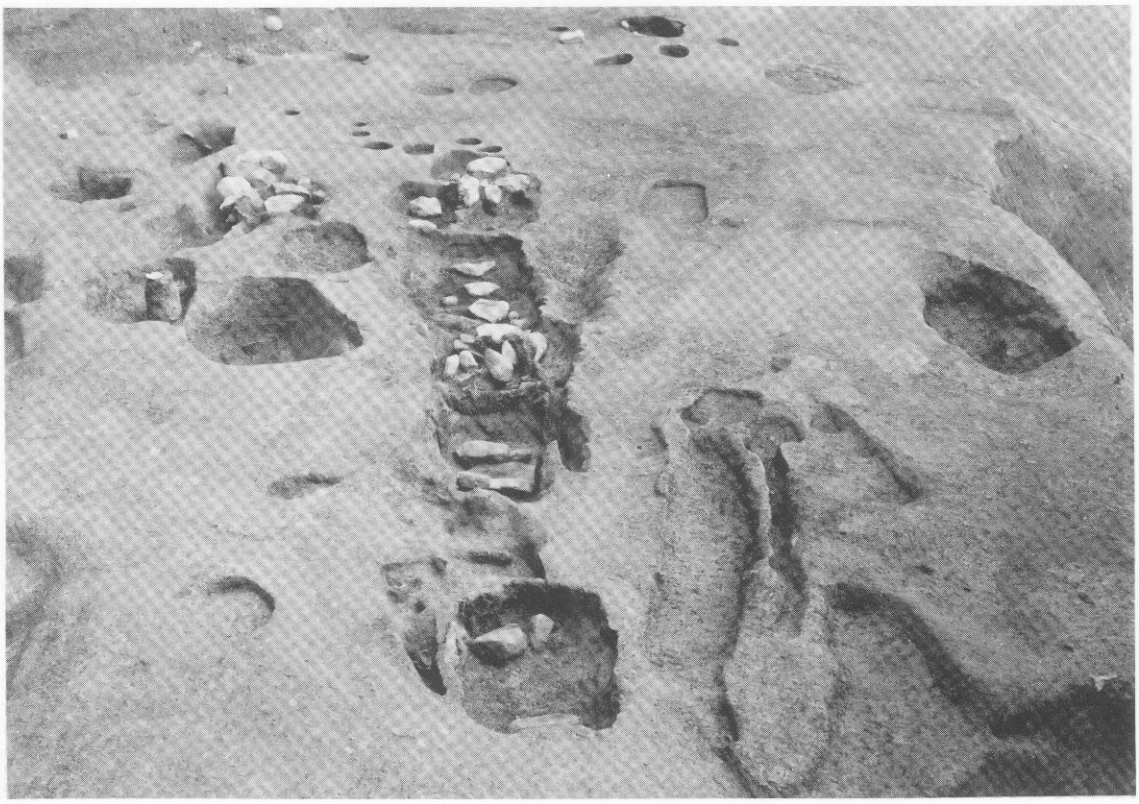
石塔群SQ3140－250蔵骨器出土状況（東から）

石塔群SQ3140－229蔵骨器出土状況（東から）

石塔群SQ3140－233・240蔵骨器出土状況（東から）



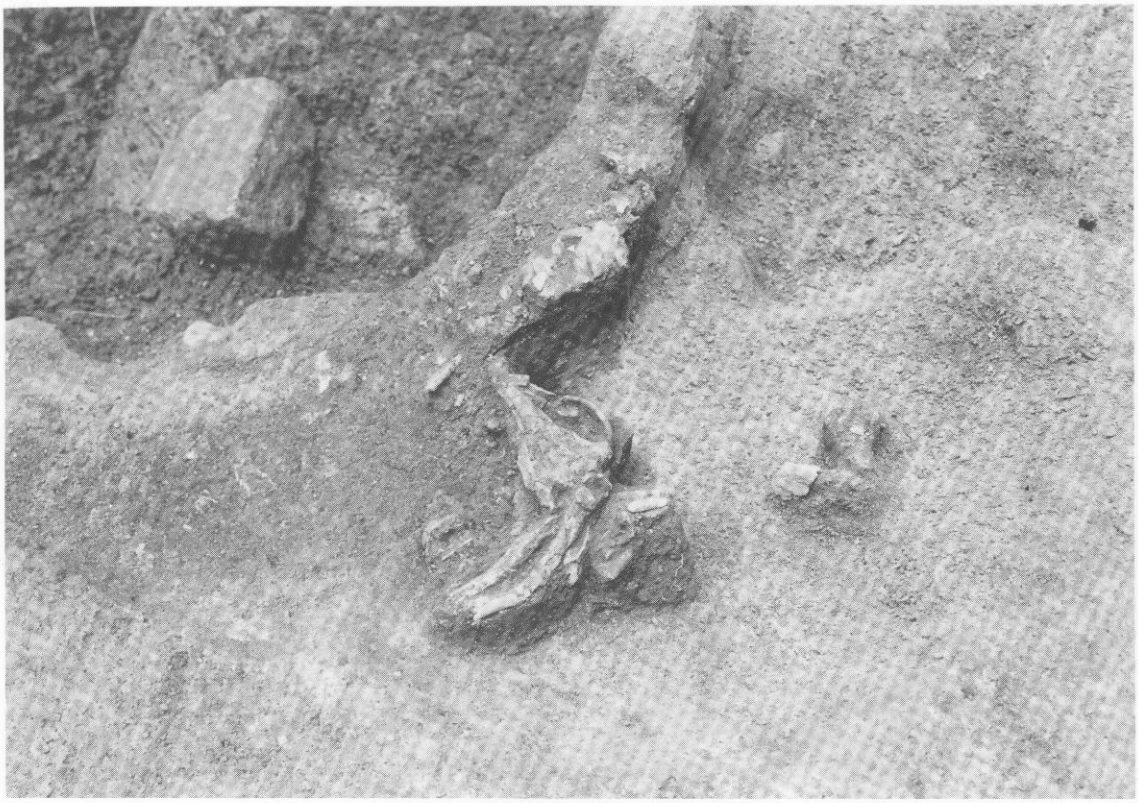
B 地区火葬所・土葬墓全景（南から）



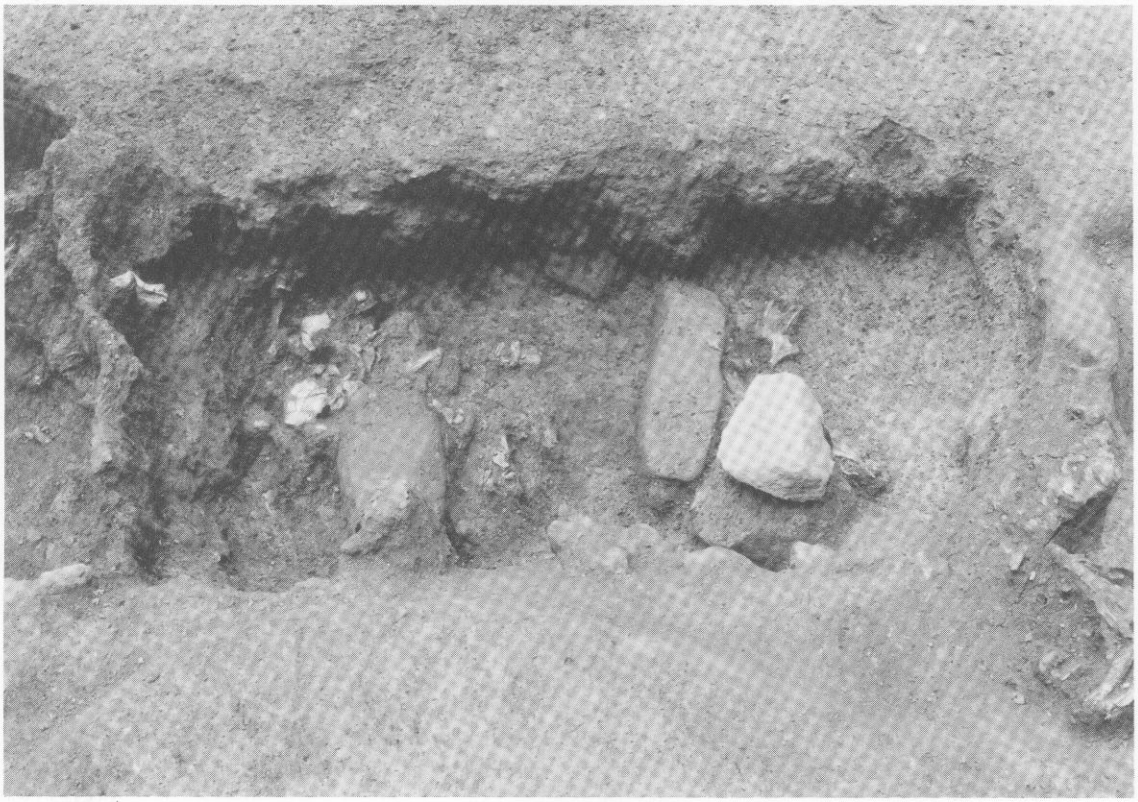
B 地区火葬所・土葬墓（南から）

B 地区火葬壙SX3100

B 地区火葬壙SX3100・SX3101・SX3103



B 地区火葬壙SX3102



B 地区火葬壙SX3104

B地区火葬壙SX3105・SX3106

B地区火葬壙SX3108・SX3109・SX3112・SX3114・SX3115
土葬墓SX3118

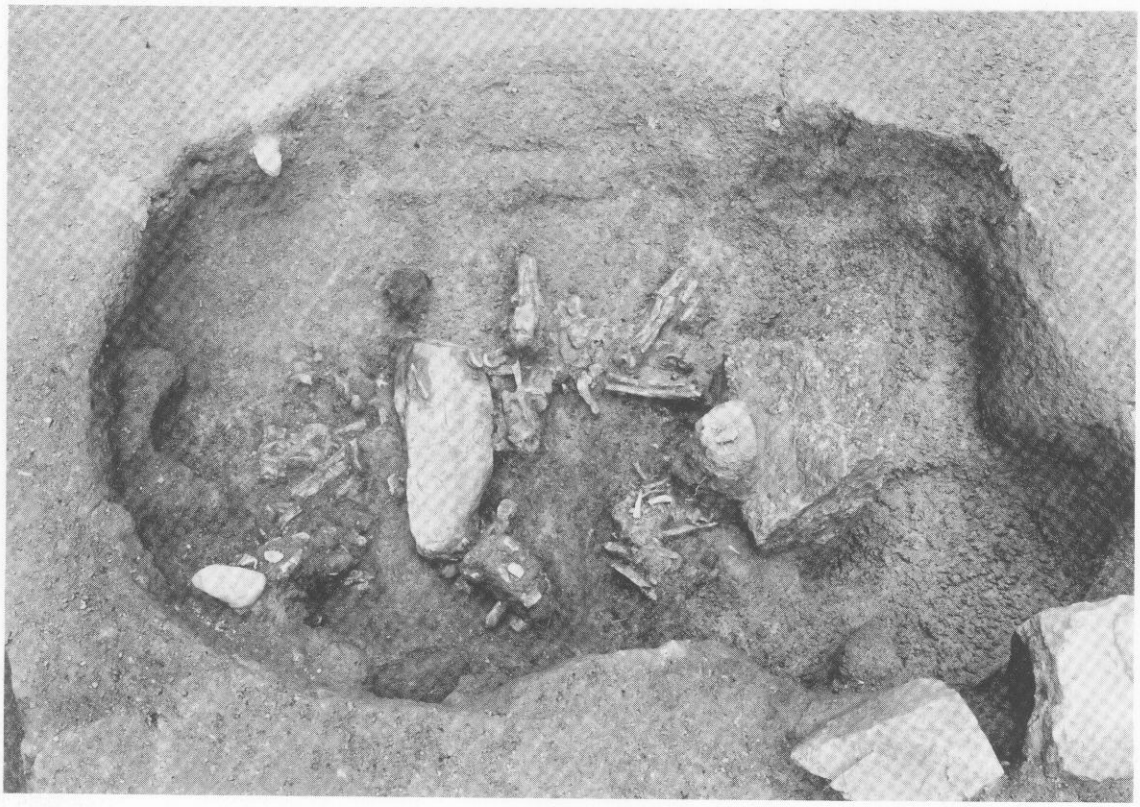
B 地区火葬壙SX3117

B 地区火葬壙SX3109・SX3110

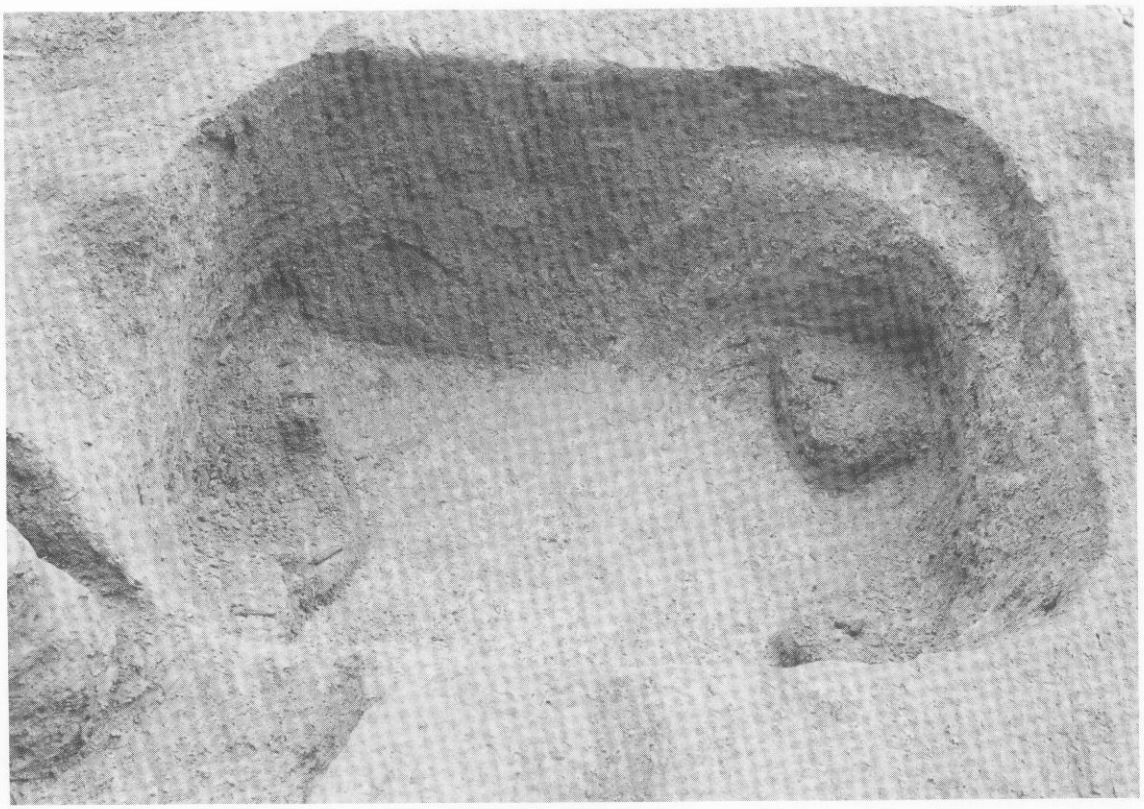
B 地区火葬壙SX3111

B 地区火葬壙SX3112

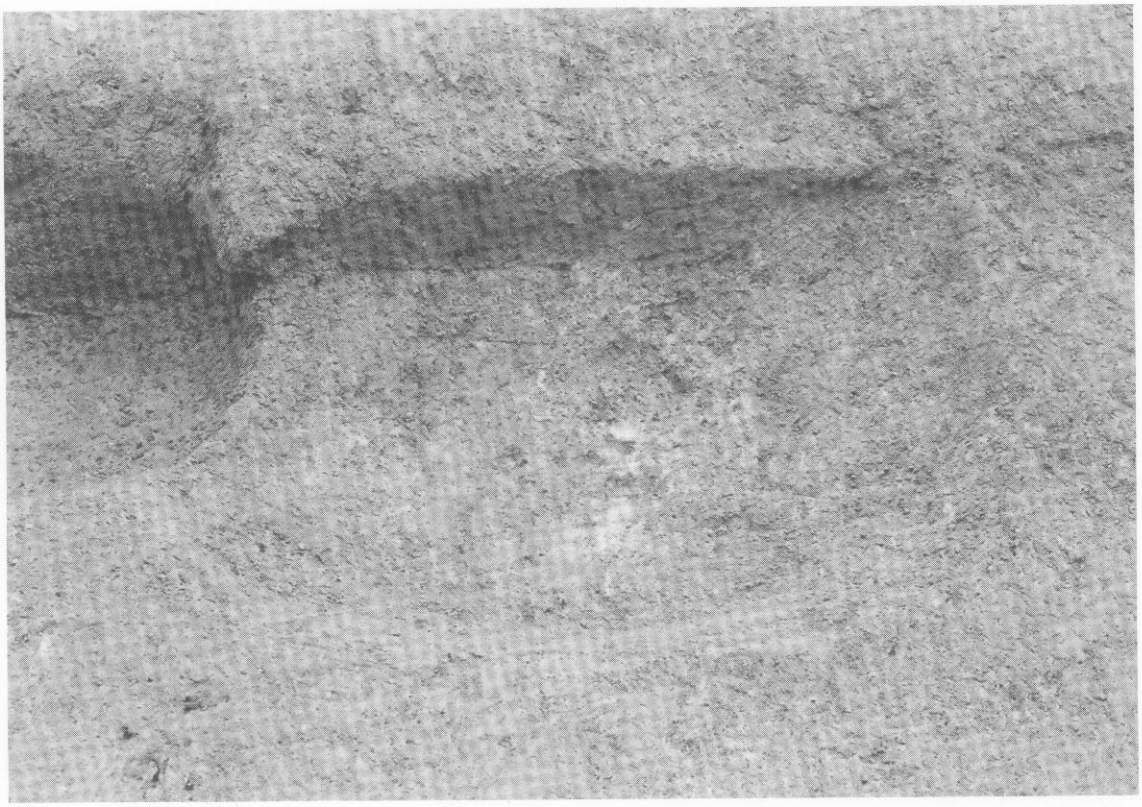
B 地区火葬壙SX3113



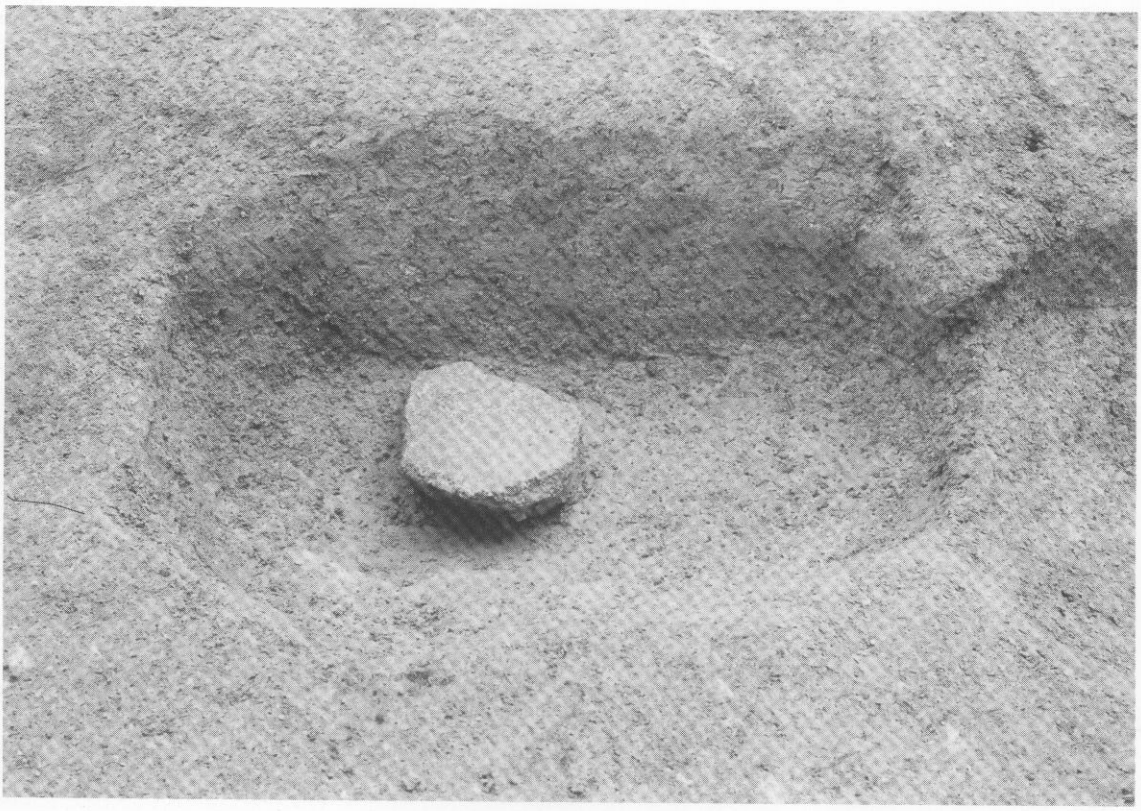
B 地区火葬壙SX3114



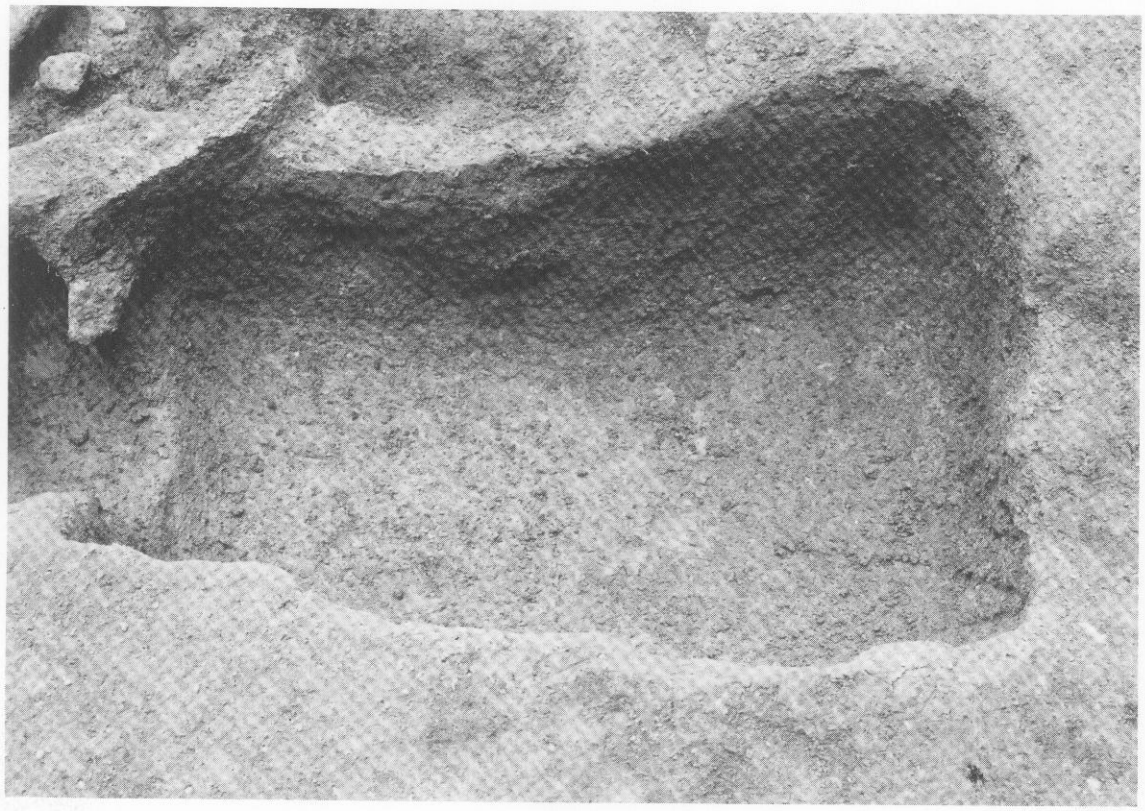
B 地区土葬墓SX3118



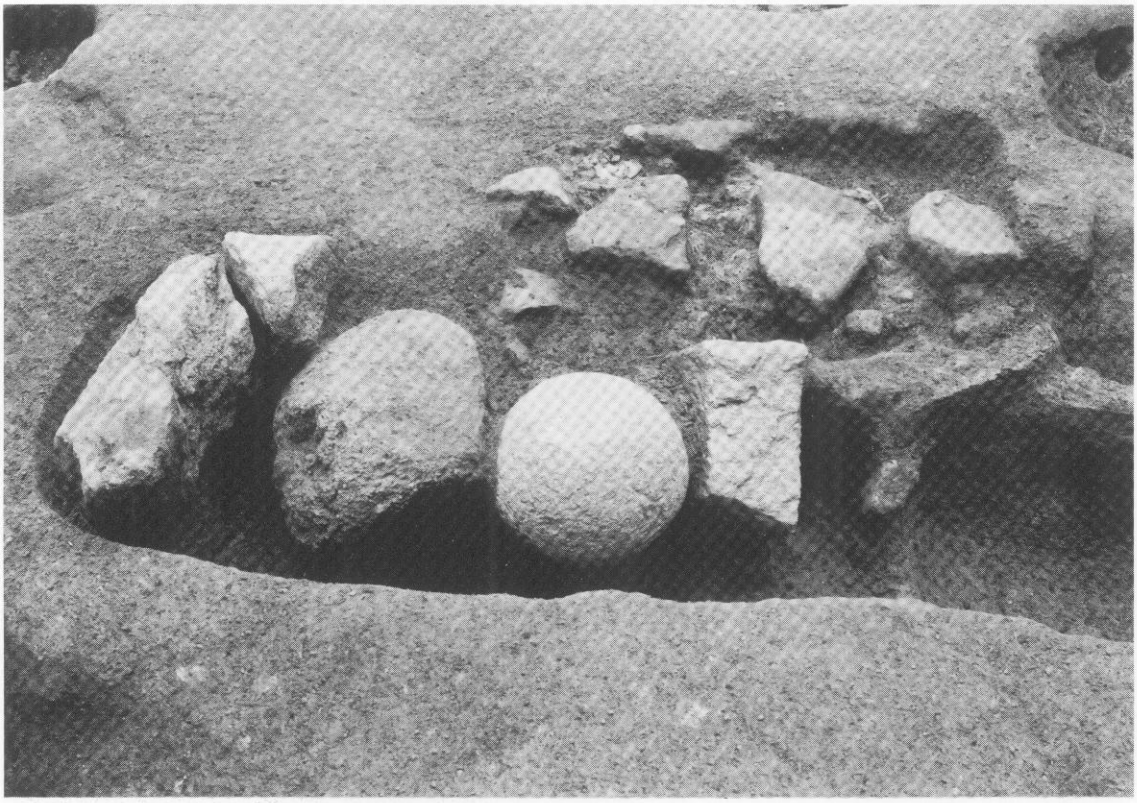
B 地区土葬墓SX3119



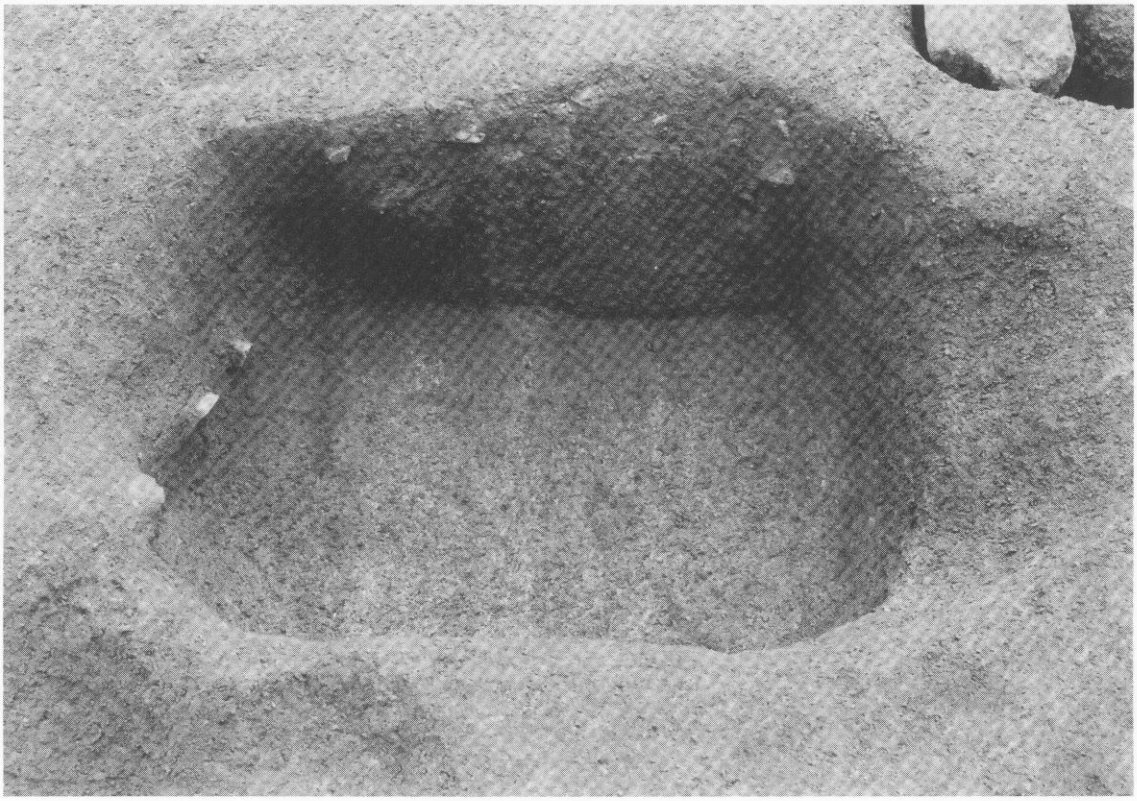
B 地区土葬墓SX3120



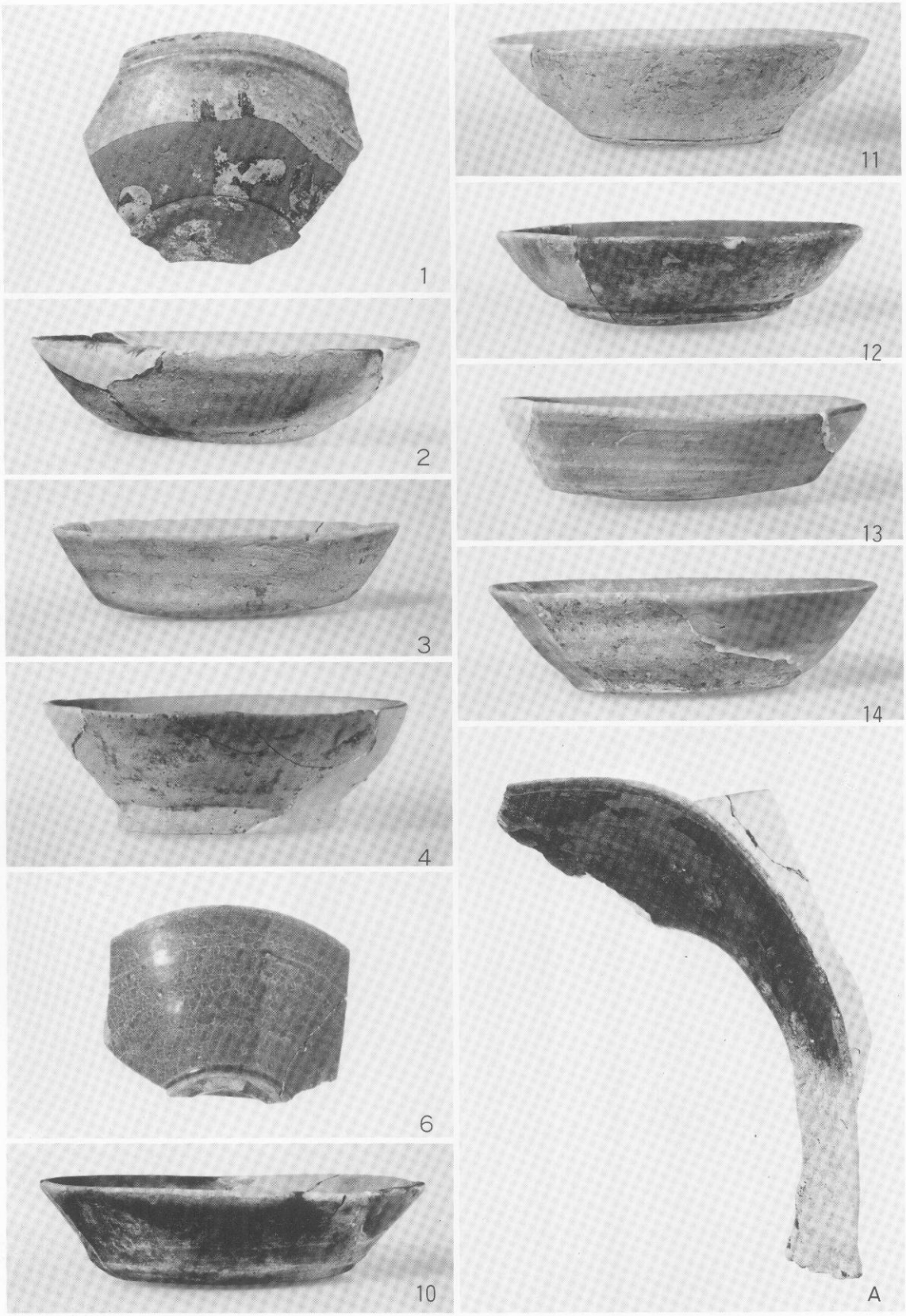
B 地区土葬墓SX3121



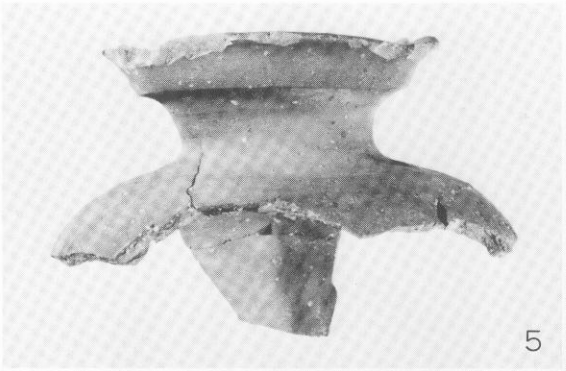
B 地区土葬墓SX3122

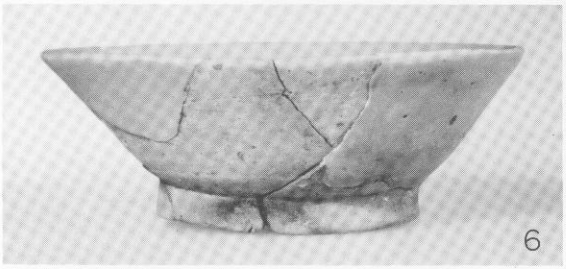


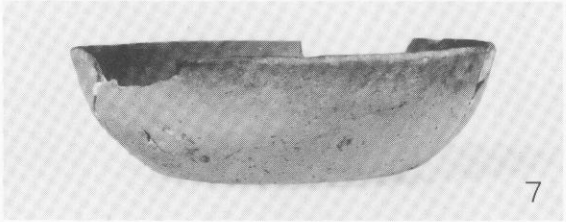
B 地区土葬墓SX3124

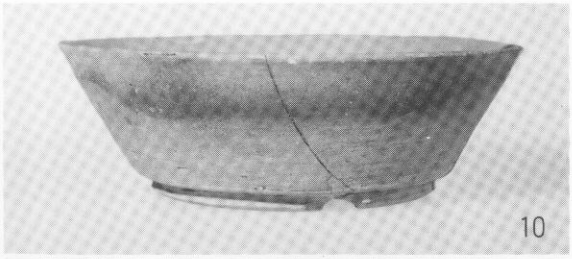


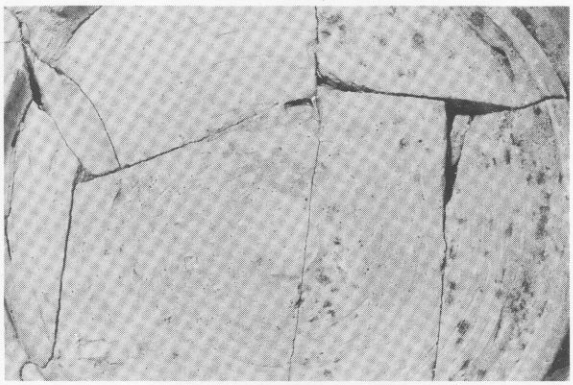
第104次調査　SD320・SE3069・SE3070、茶灰色土層出土土器・陶磁器

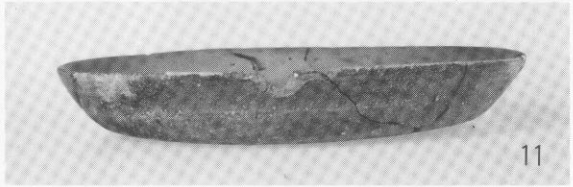


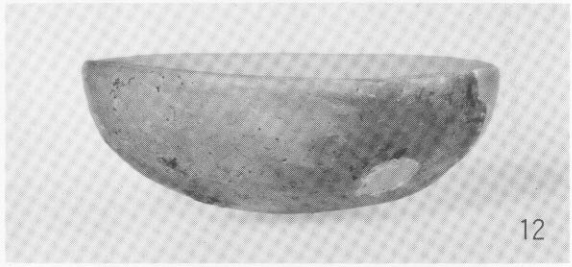


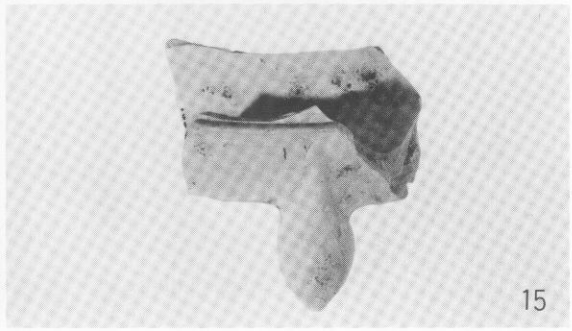




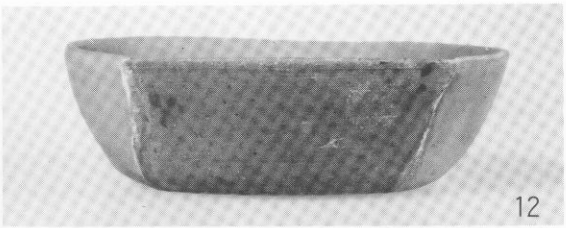


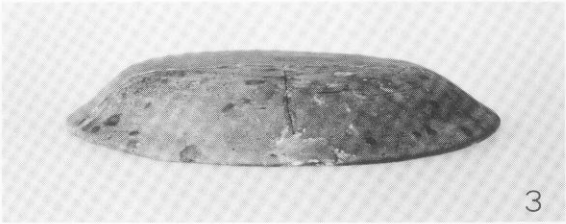


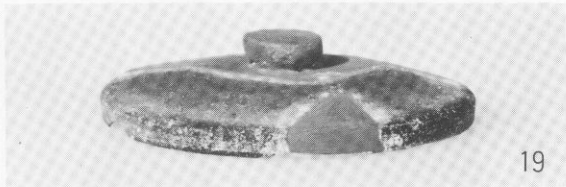


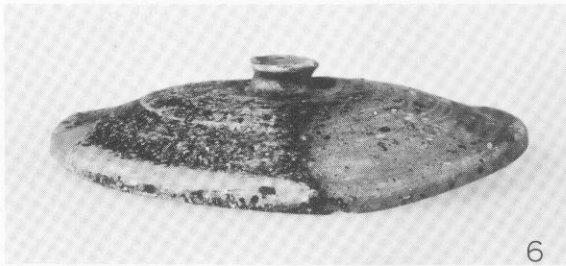


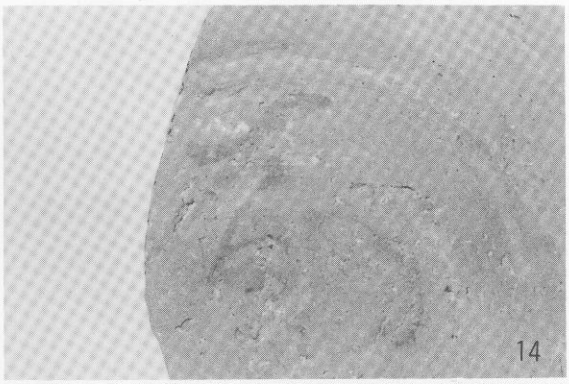
第105次調査　SE 3085・SK 3091・SX 3090・SX 3095 出土土器・硯

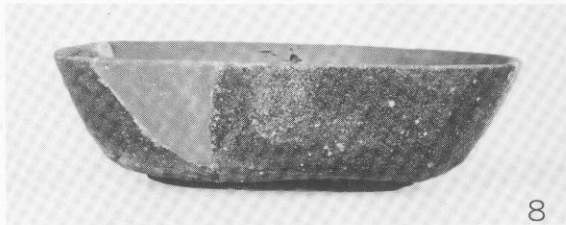


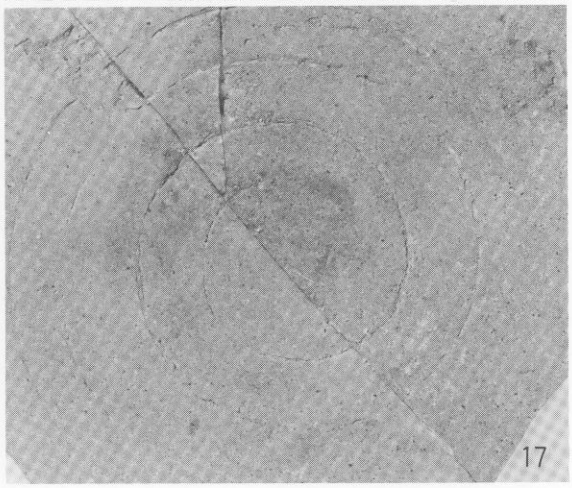




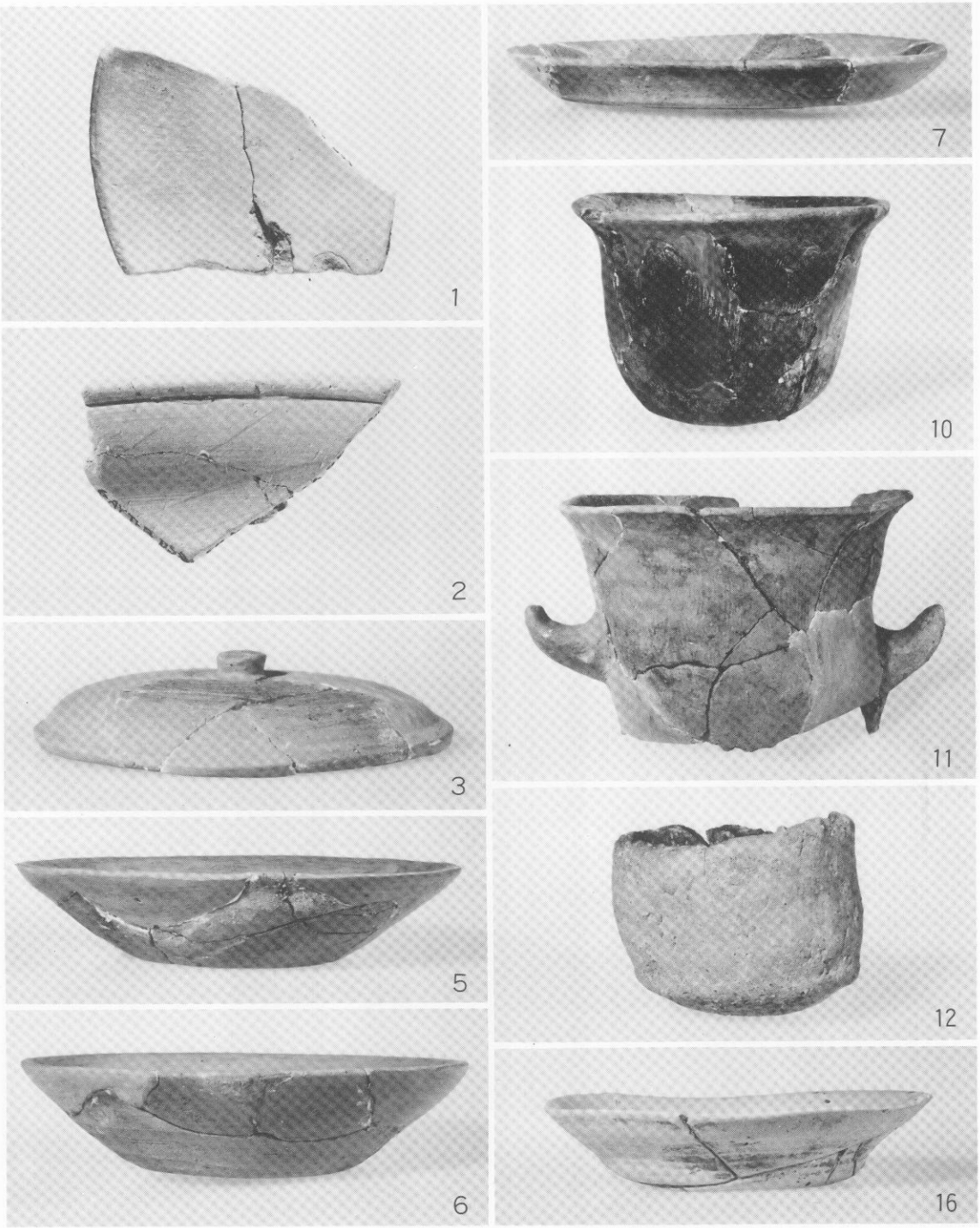




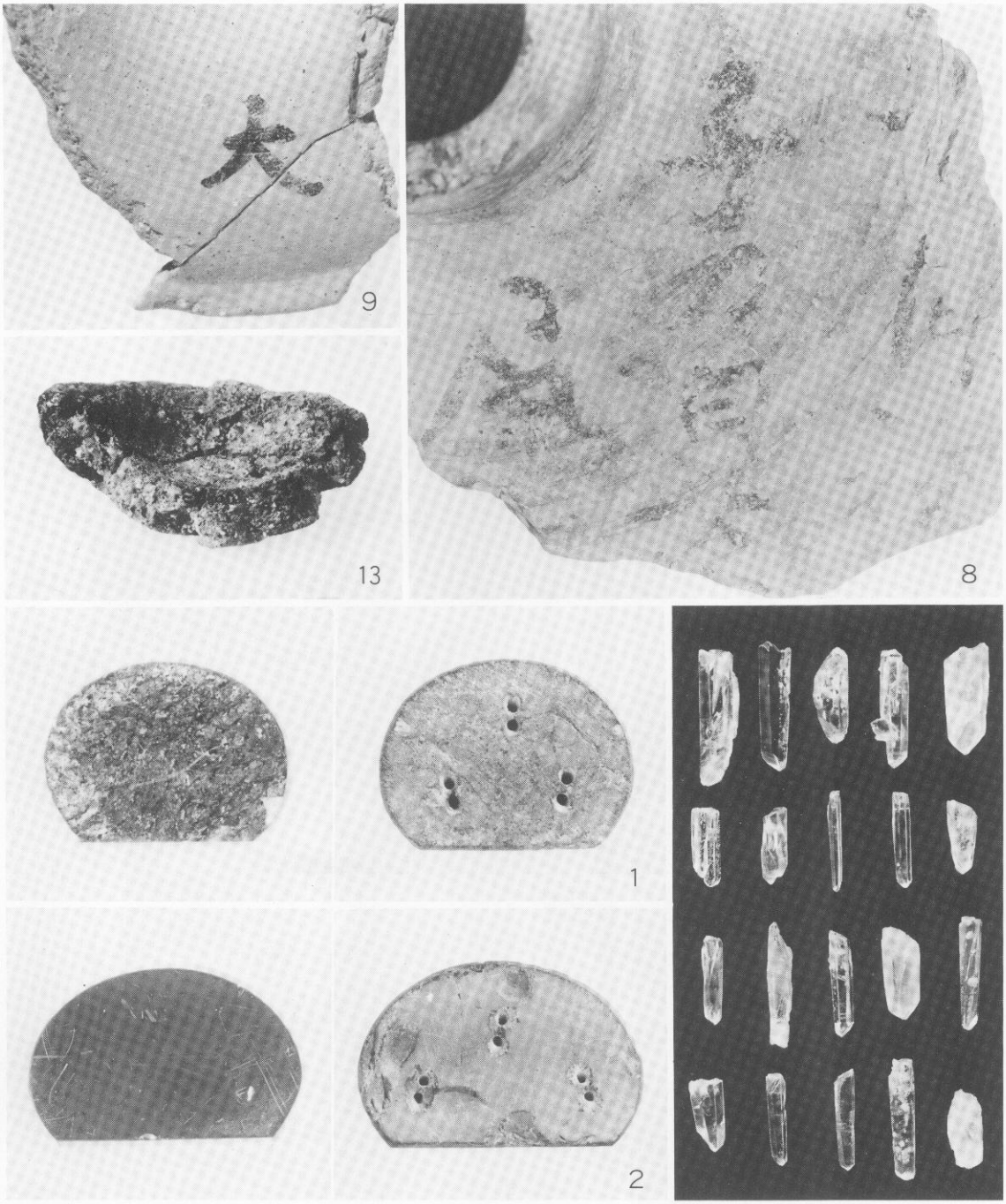




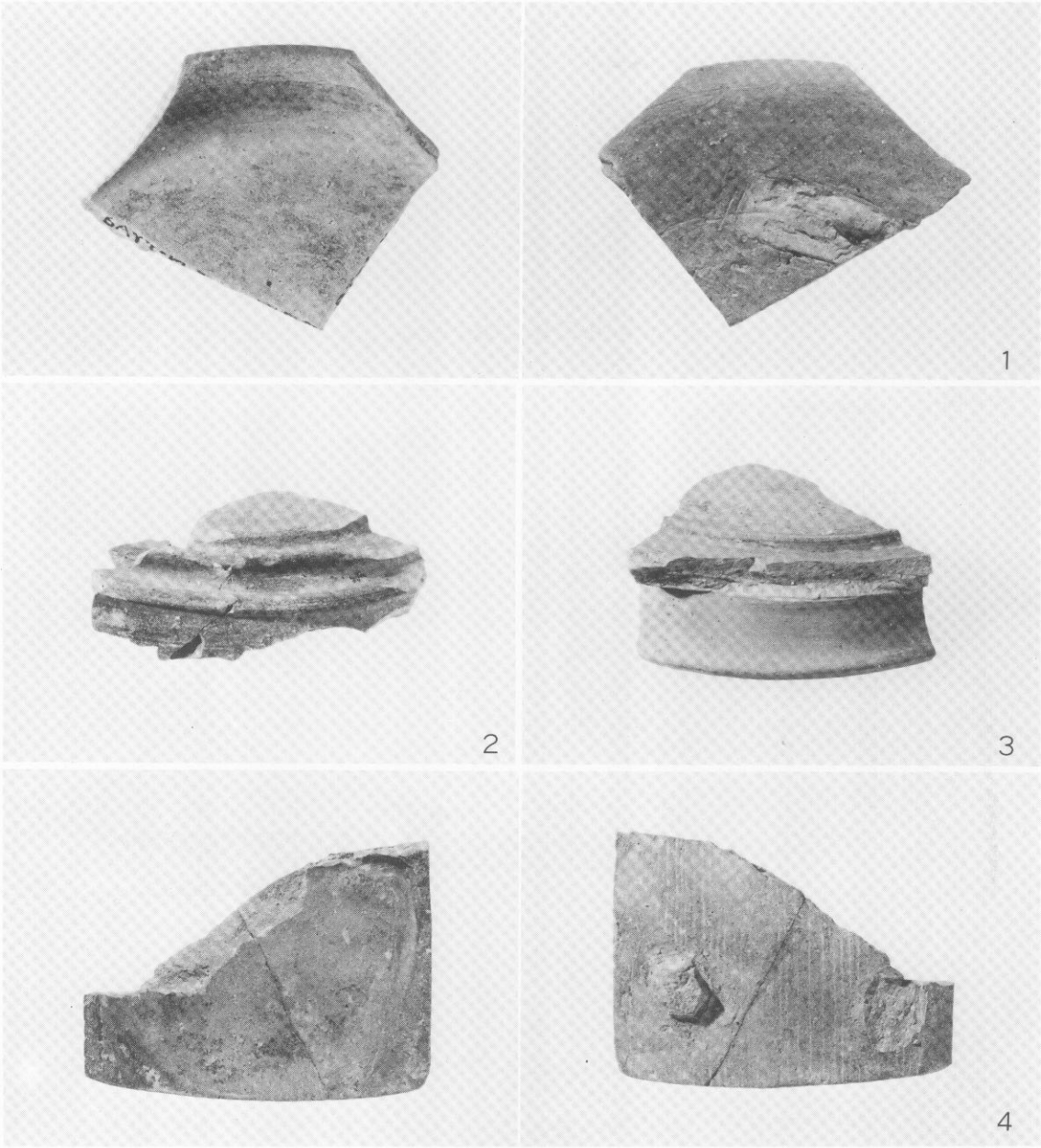
第105次調査　暗茶色土層出土土器



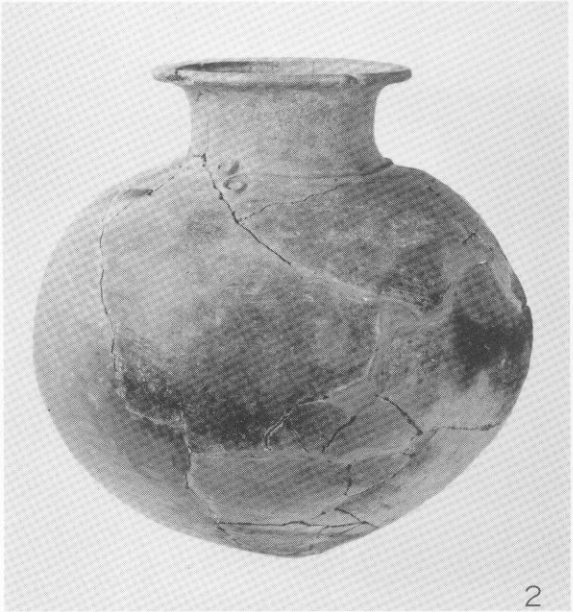
第105次調査　暗茶色土層出土土器

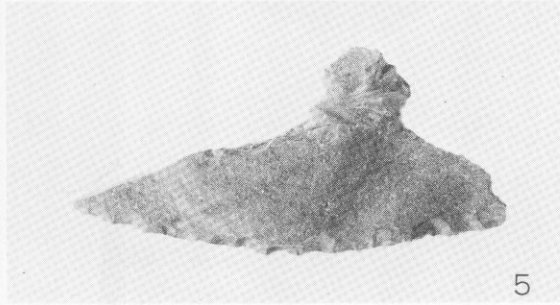


第105次調査　暗茶色土層出土墨書土器・坩堝・石帯・水晶

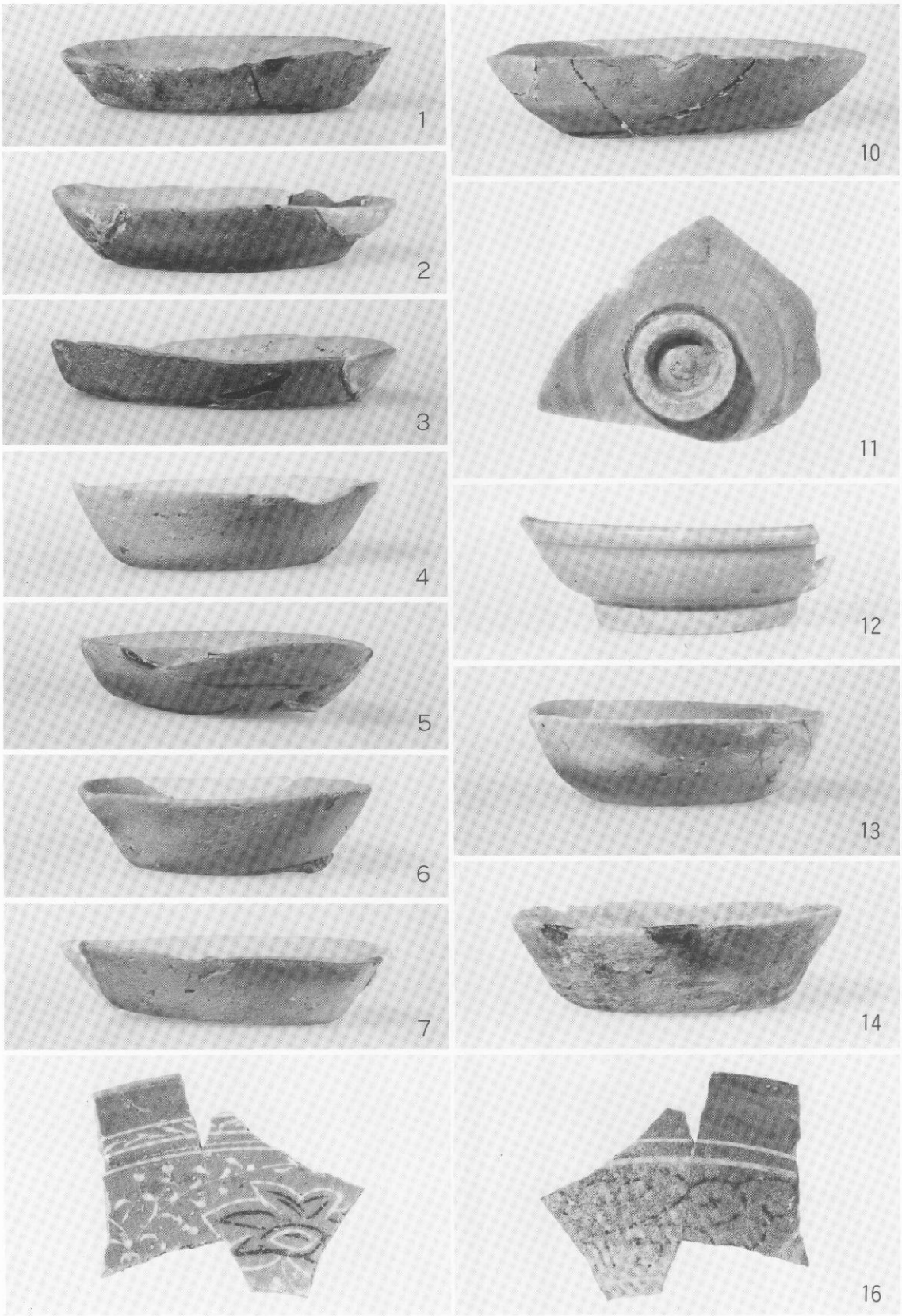


第105次調査　暗茶色土層出土硯

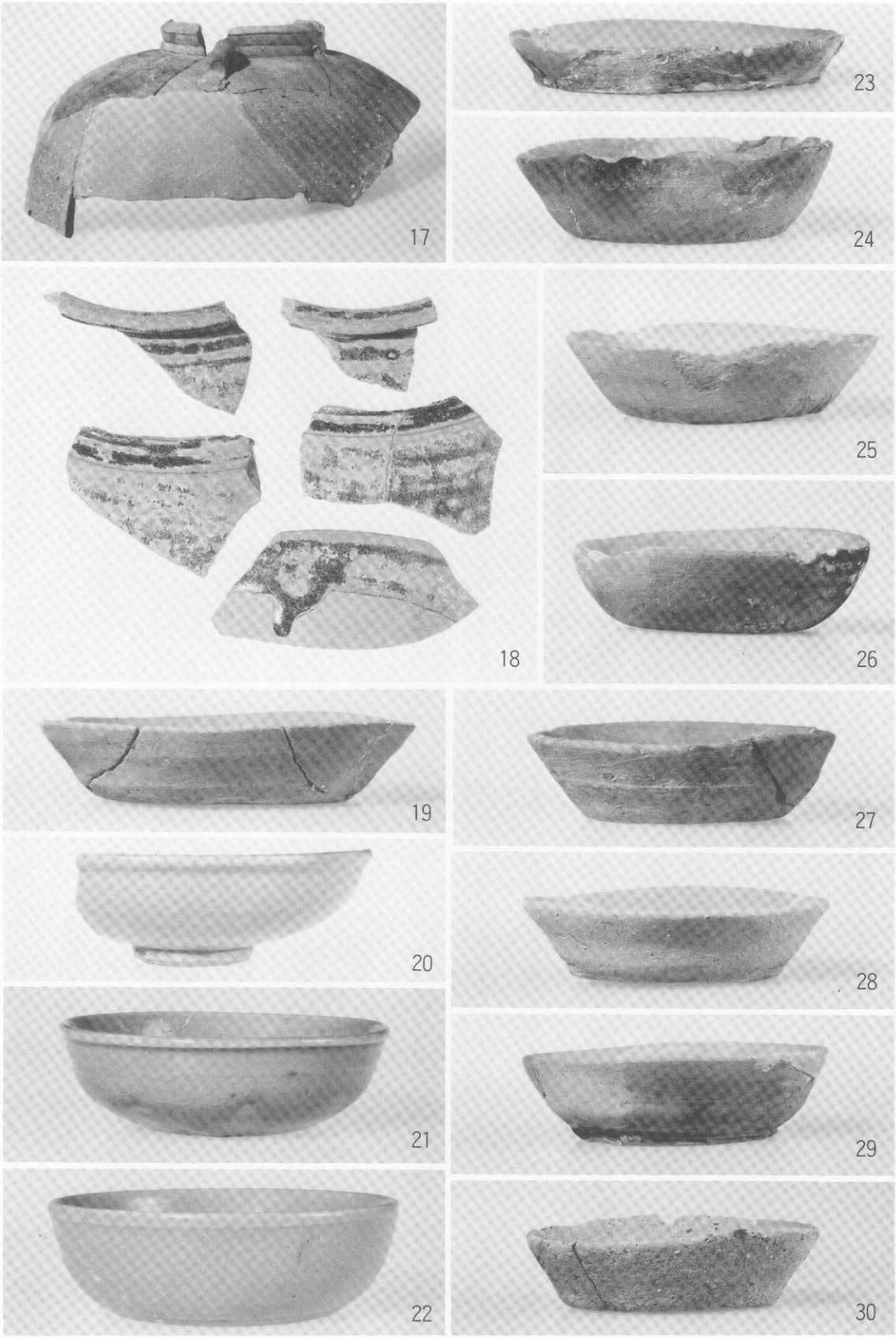




第105次調査　SX3096出土弥生土器・石器

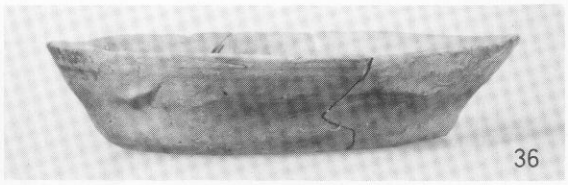


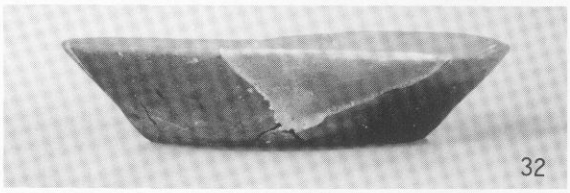
第97次調査　SD1652・SD2848・SD2849出土土器・陶磁器

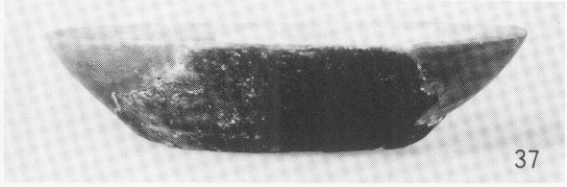


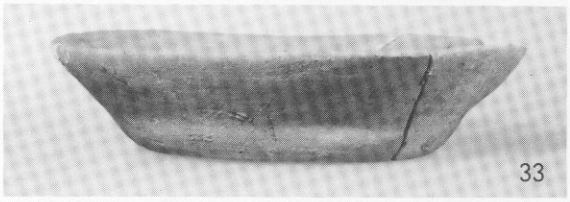
第97次調査　SD 2852・SD 2857・SD 2858・SK 2868・SK 2878・
SG 1630 出土土器・陶磁器

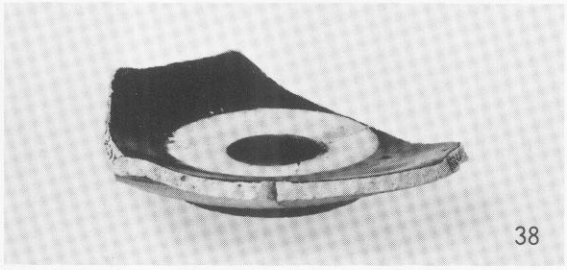
31

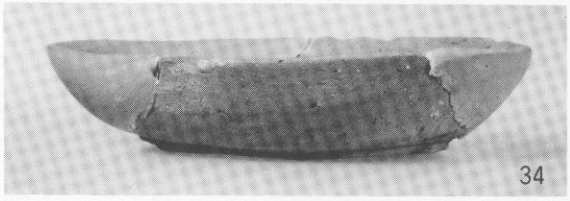

36

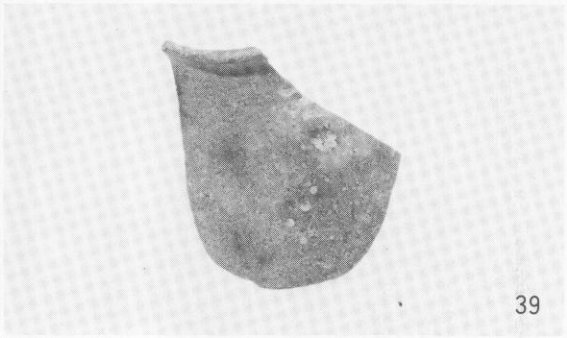

32


37

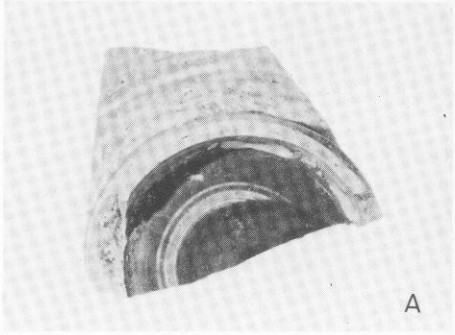

33


38


34

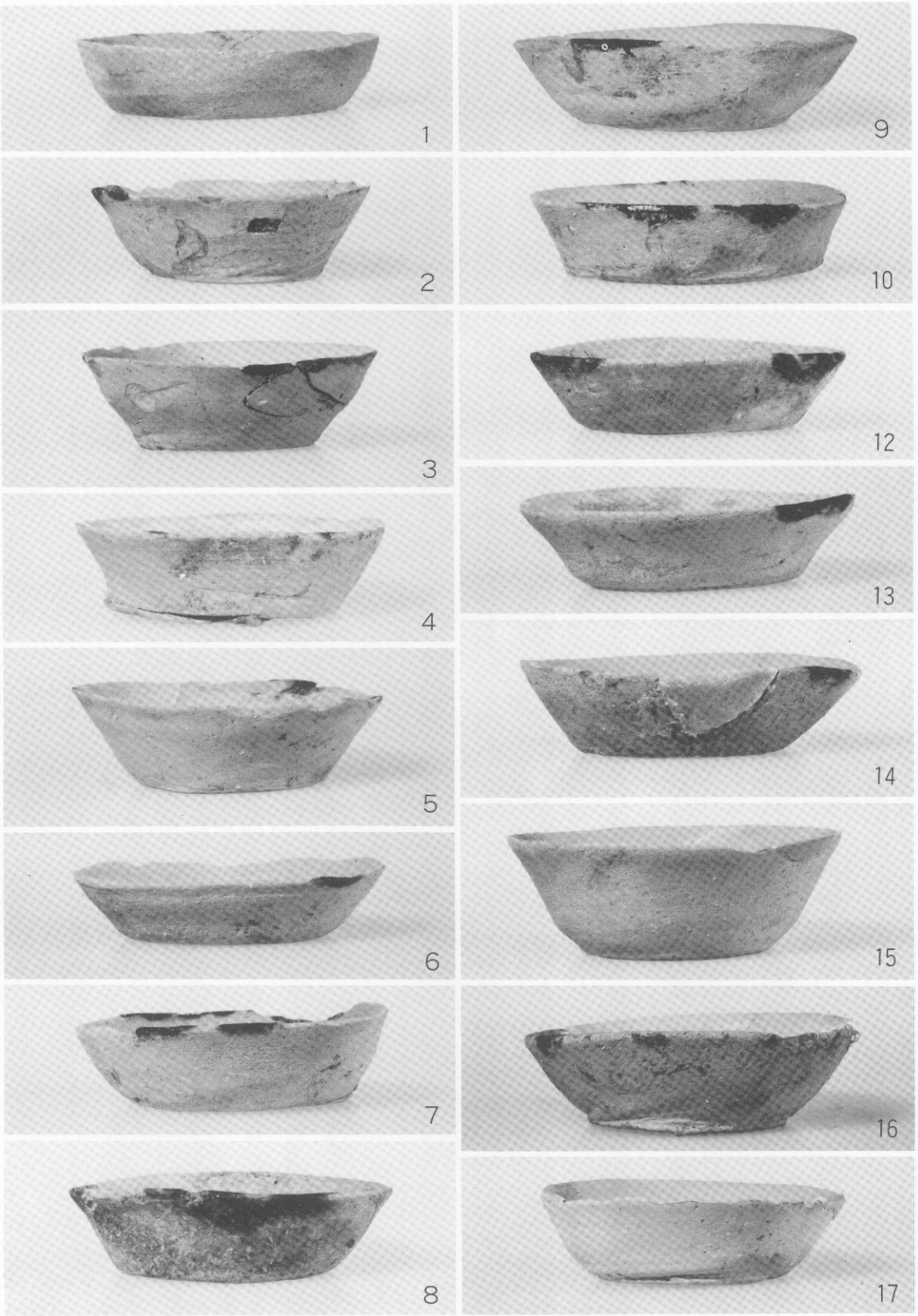

39

35

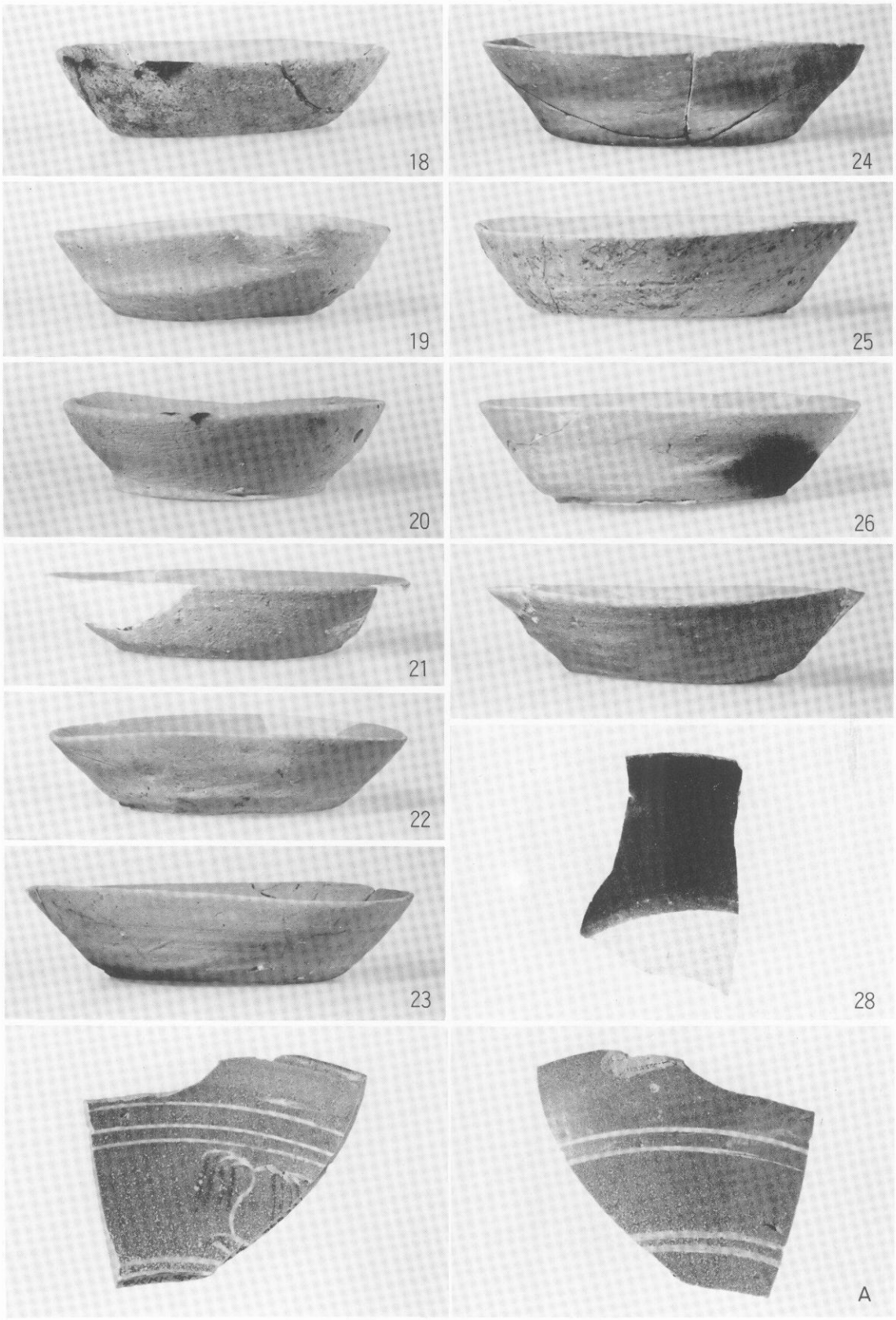

A

40

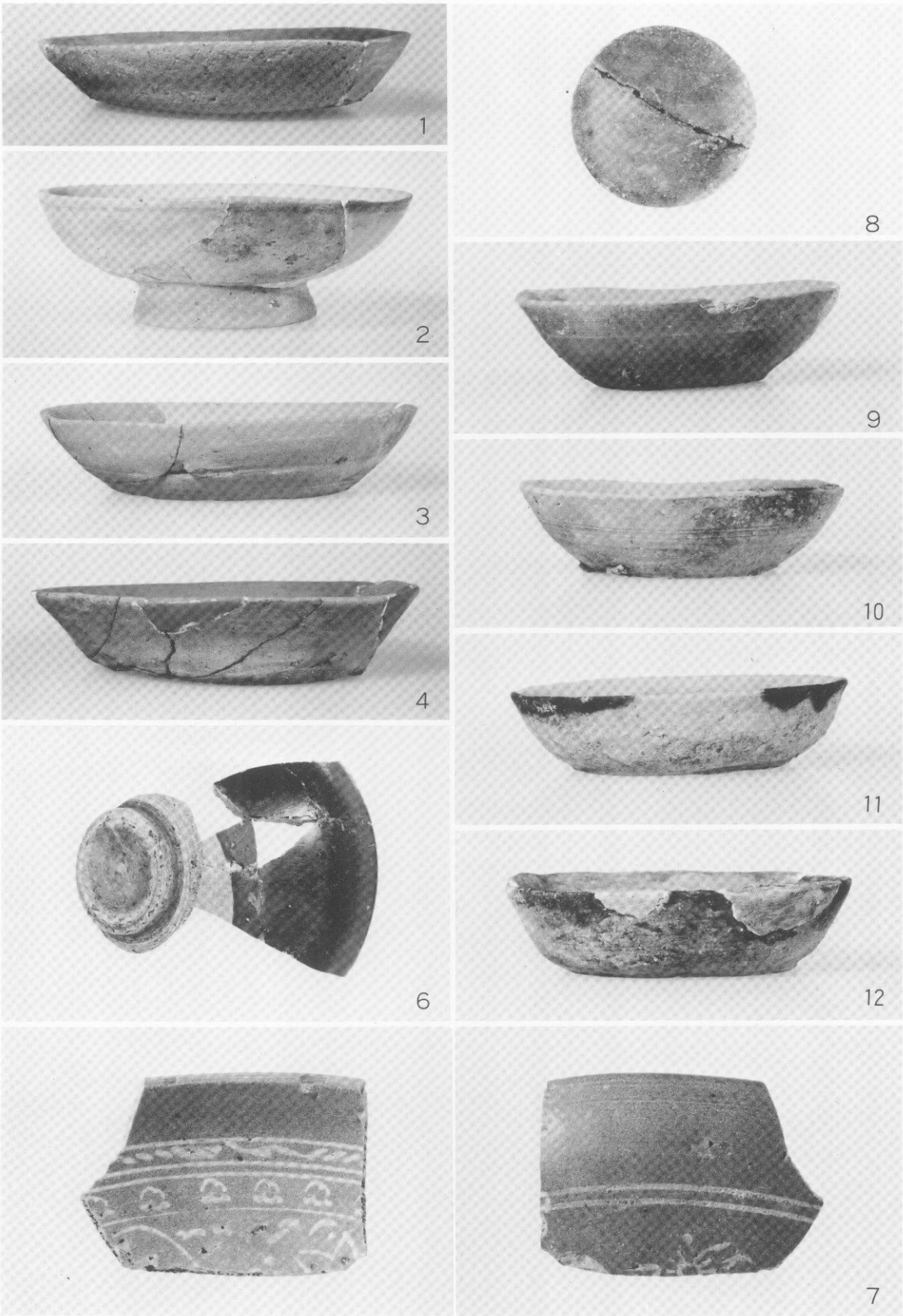
第97次調査　SG1630・SX2847・SX2879・SX2860出土土器・陶磁器



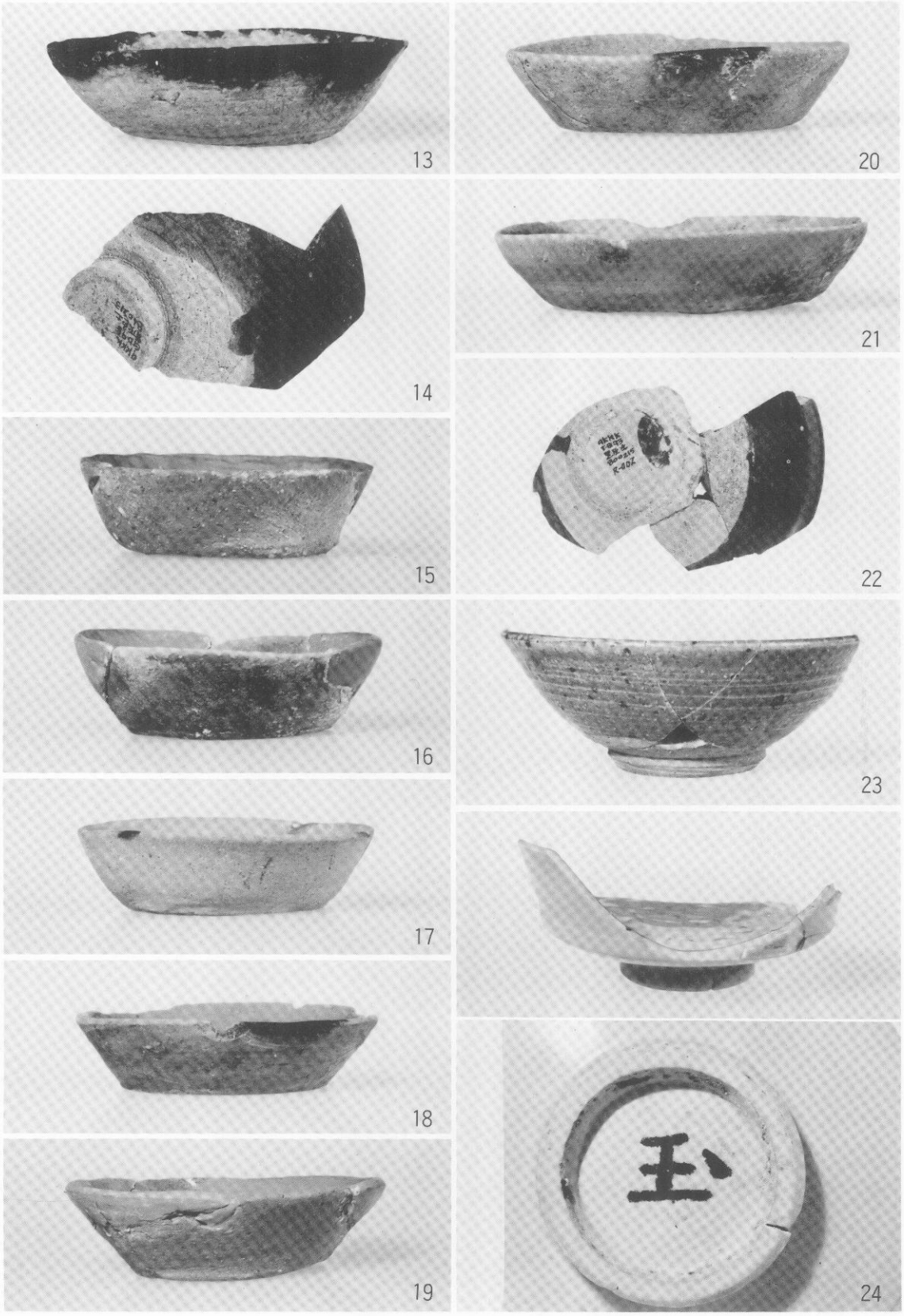
第97次調査　SG 1630 西拡張部出土土器



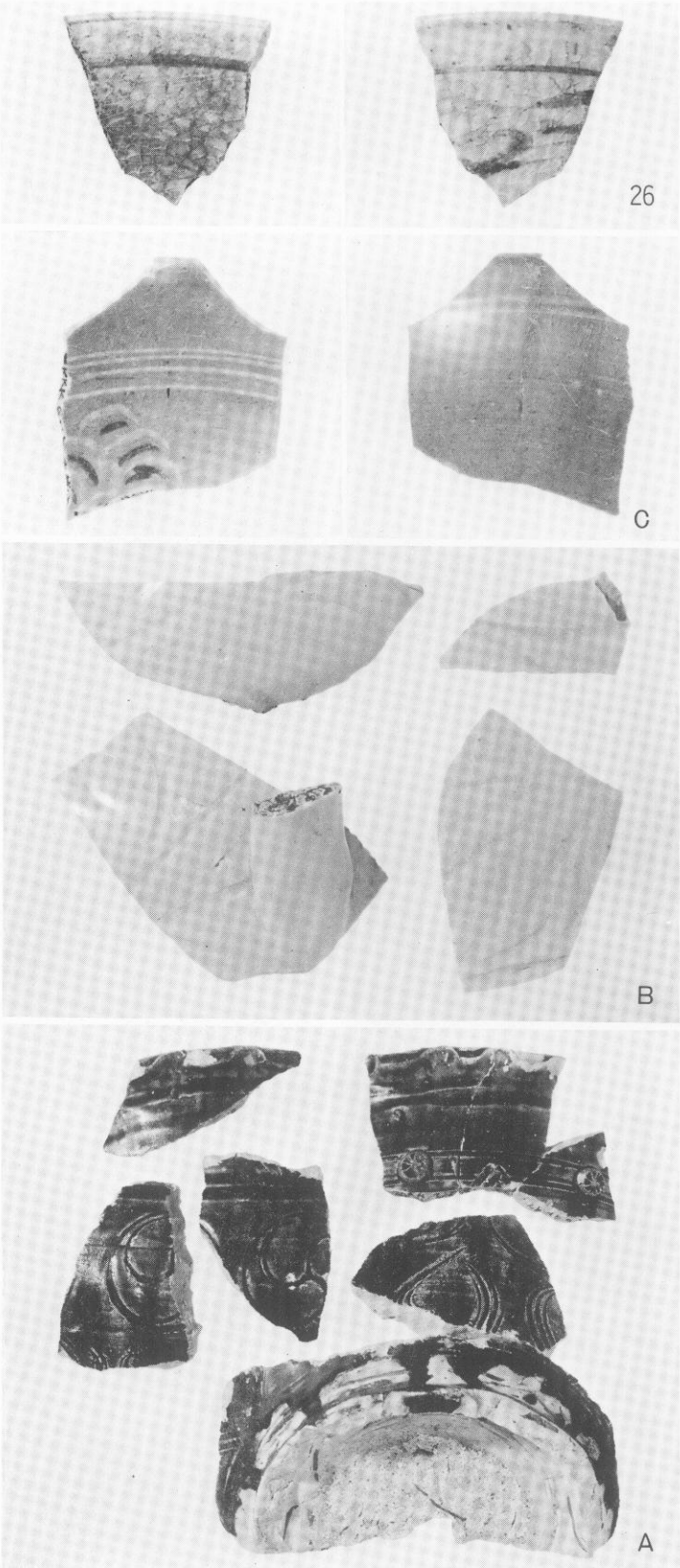
第97次調査　SG 1630 拡張部出土土器・陶磁器



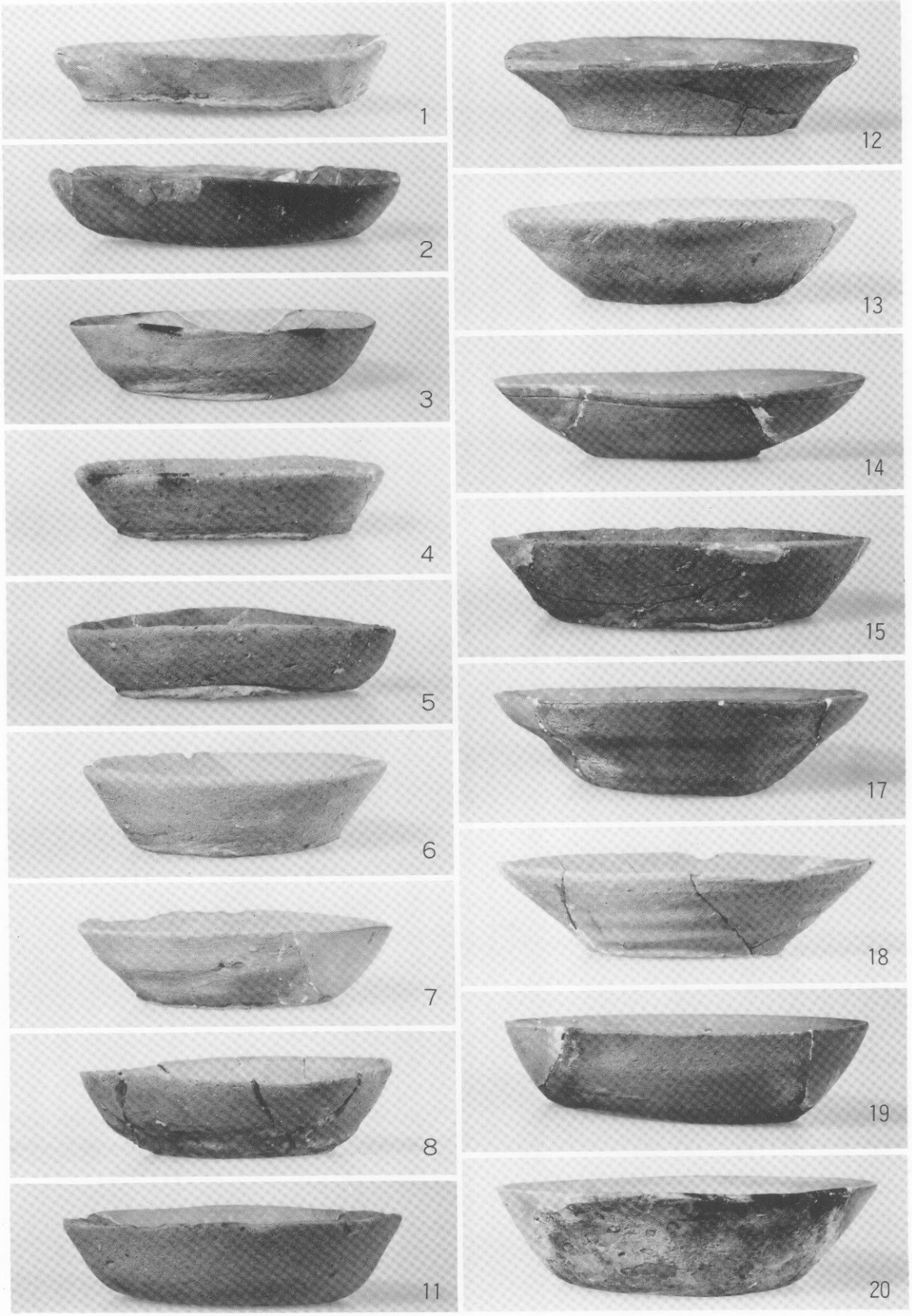
第97次調査　整地層出土土器・陶磁器



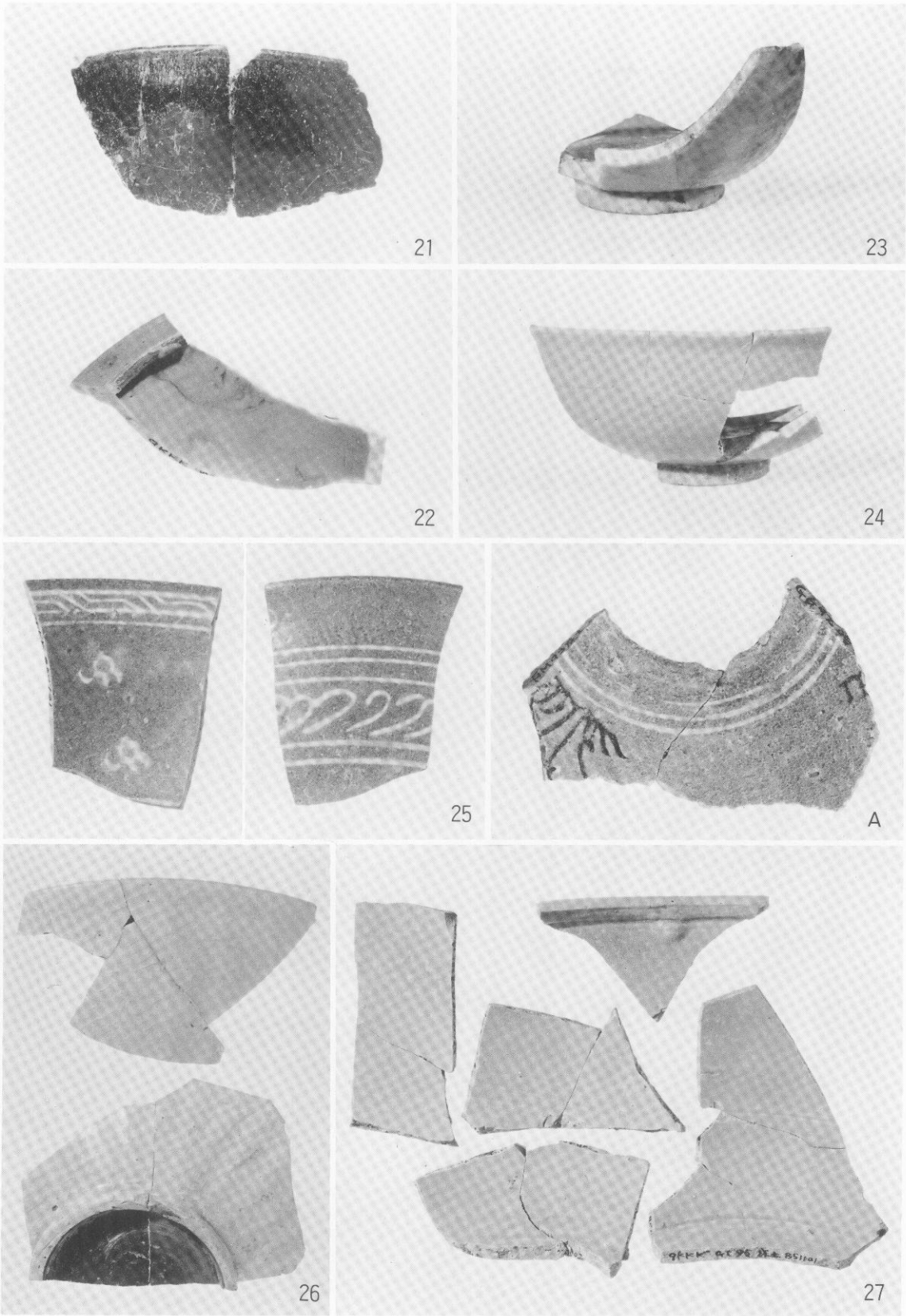
第97次調査　整地層出土土器・陶磁器



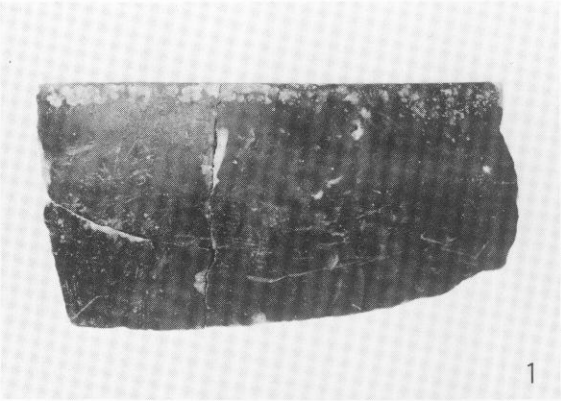
第97次調査　整地層出土陶磁器

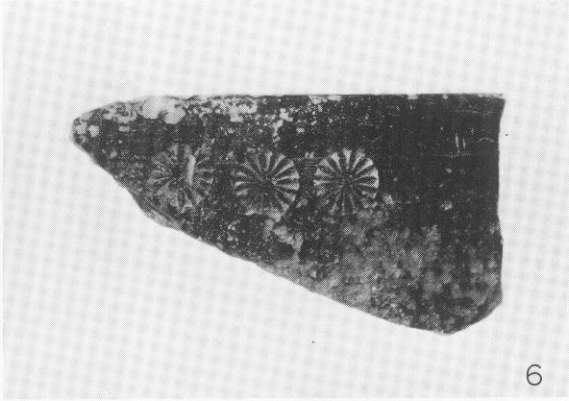


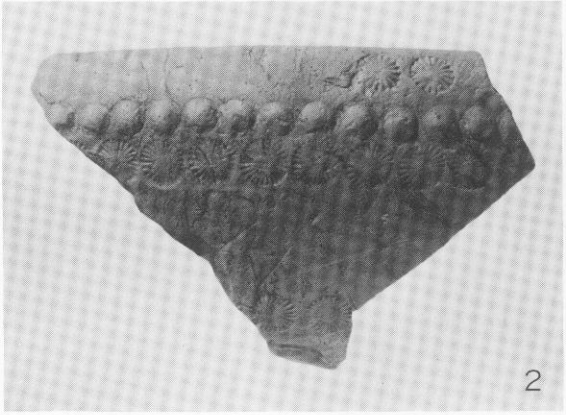
第97次調査　暗褐色土層・暗灰色土層出土土器・陶磁器

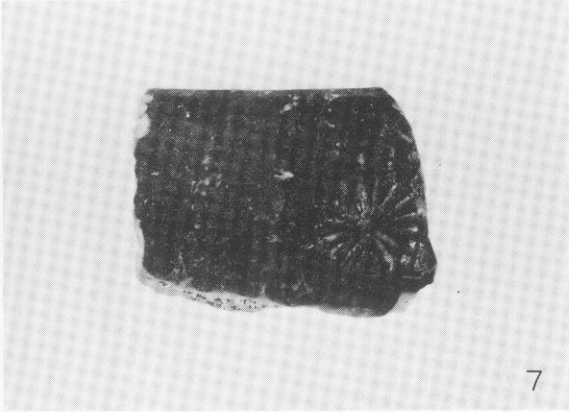


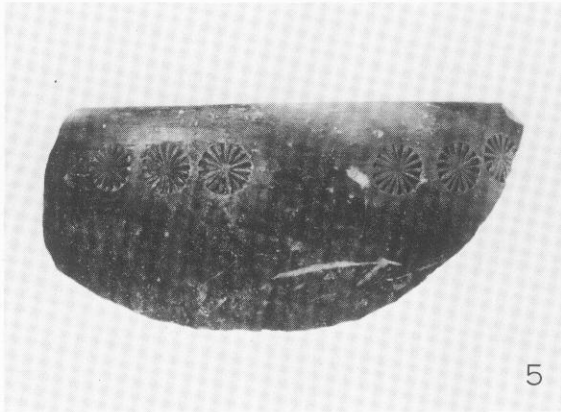
第97次調査　暗褐色土層・暗灰色土層出土土器・陶磁器



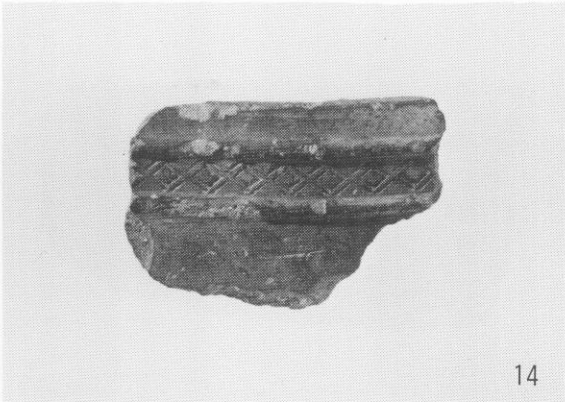




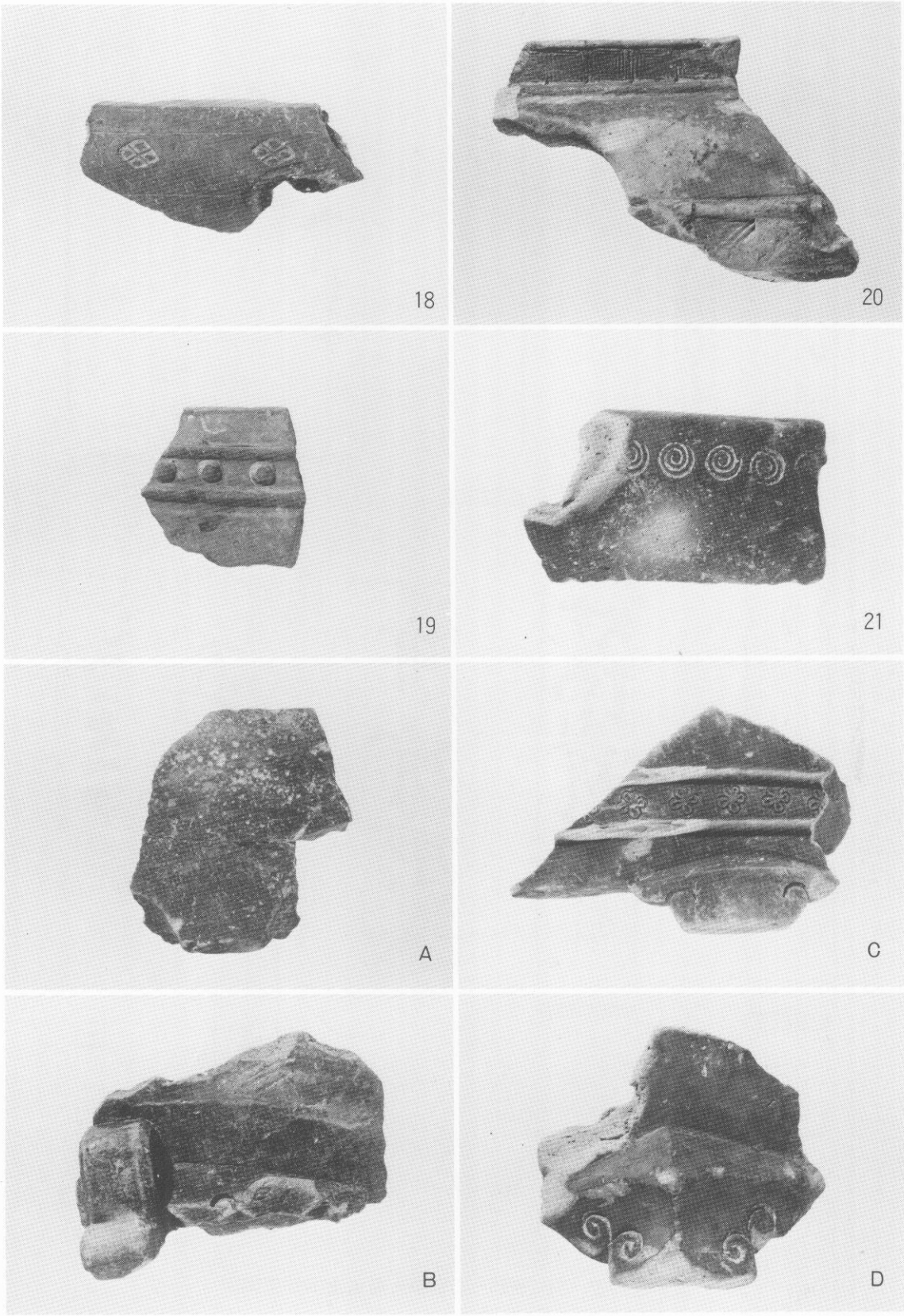




第97次調査　出土瓦質土器



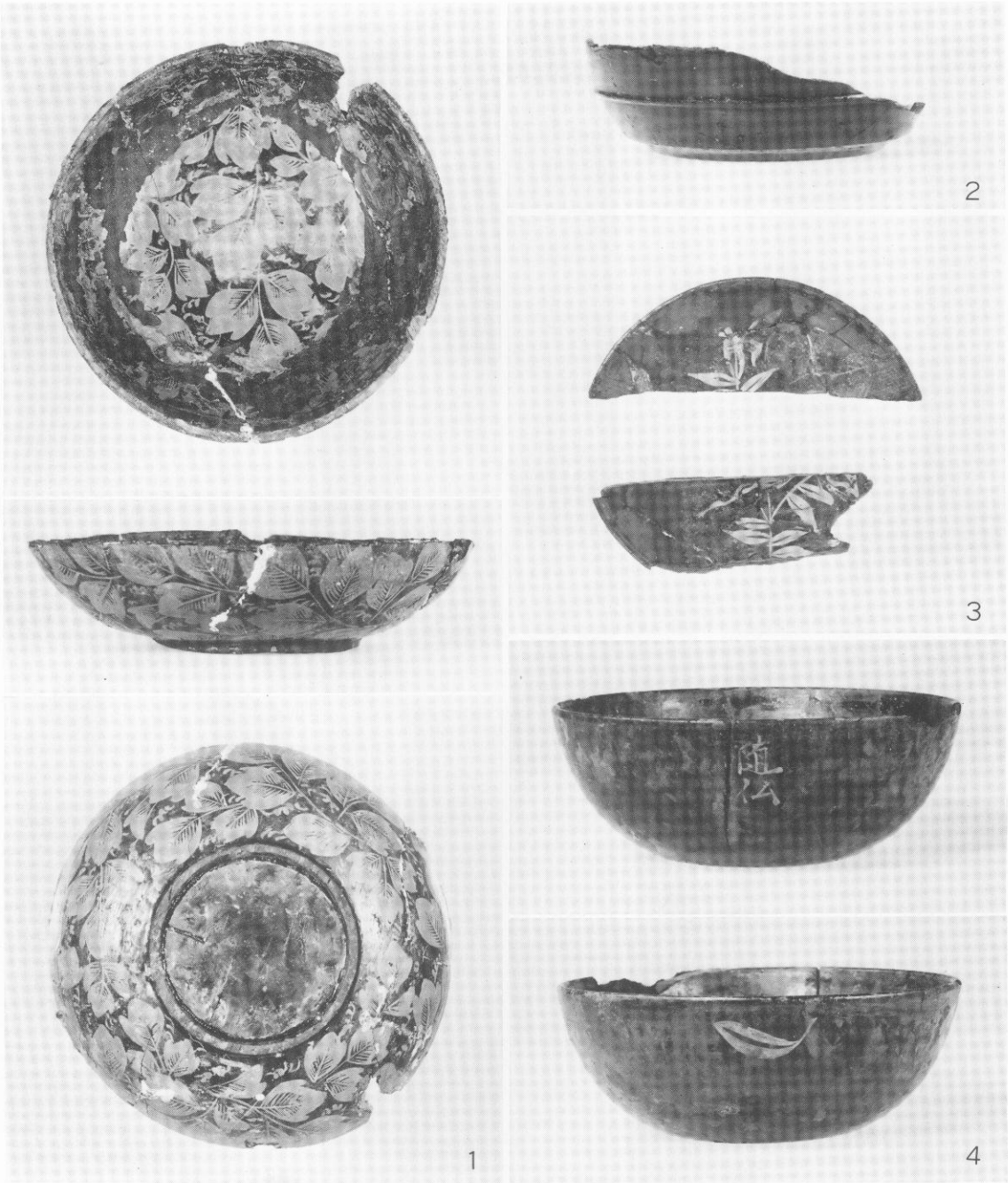
第97次調査　出土瓦質土器



第97次調査　出土瓦質土器

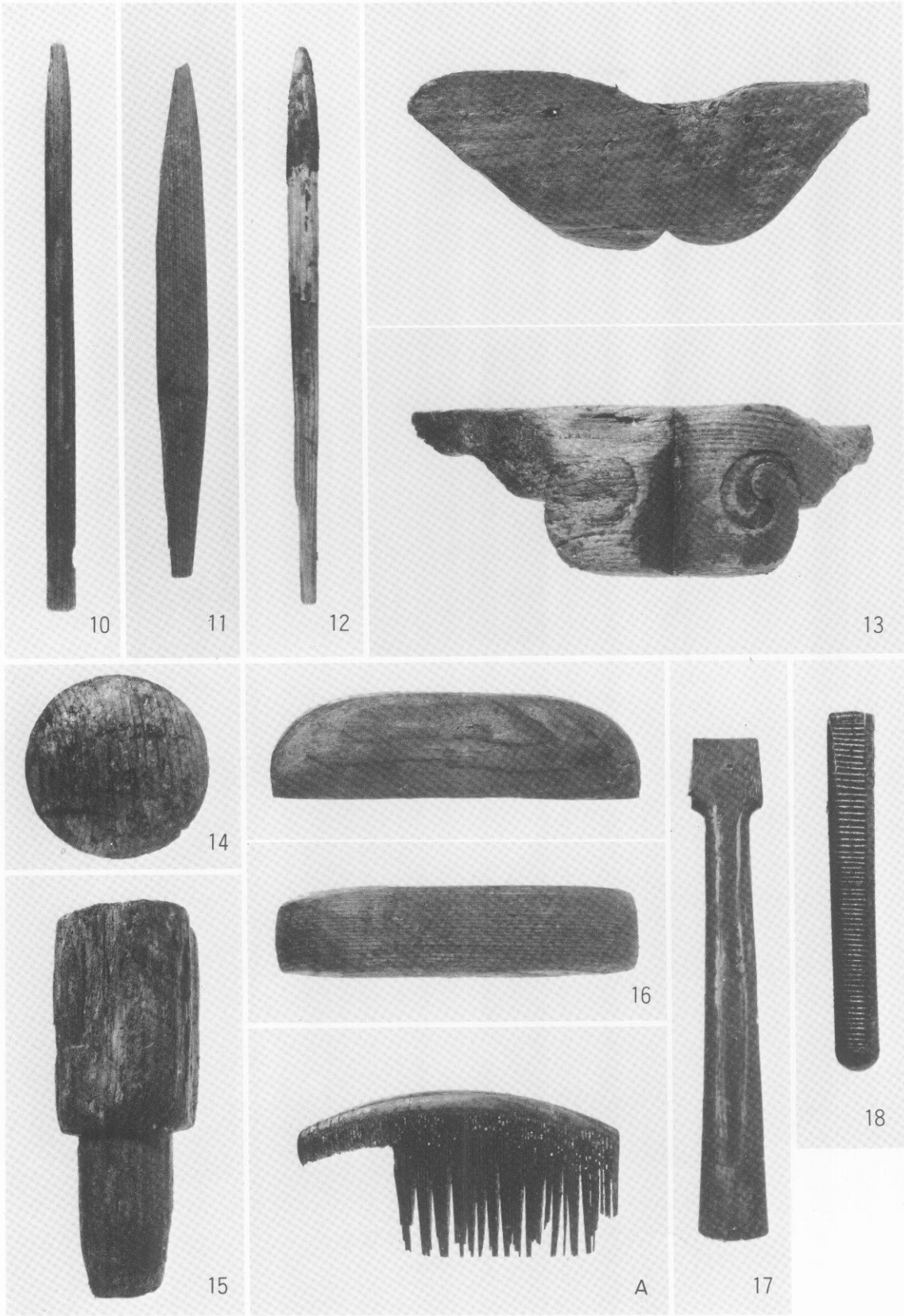
第97次調査　SB2850上面腐植土層出土木簡実測図

第97次調査　SB2850上面腐植土層出土木簡

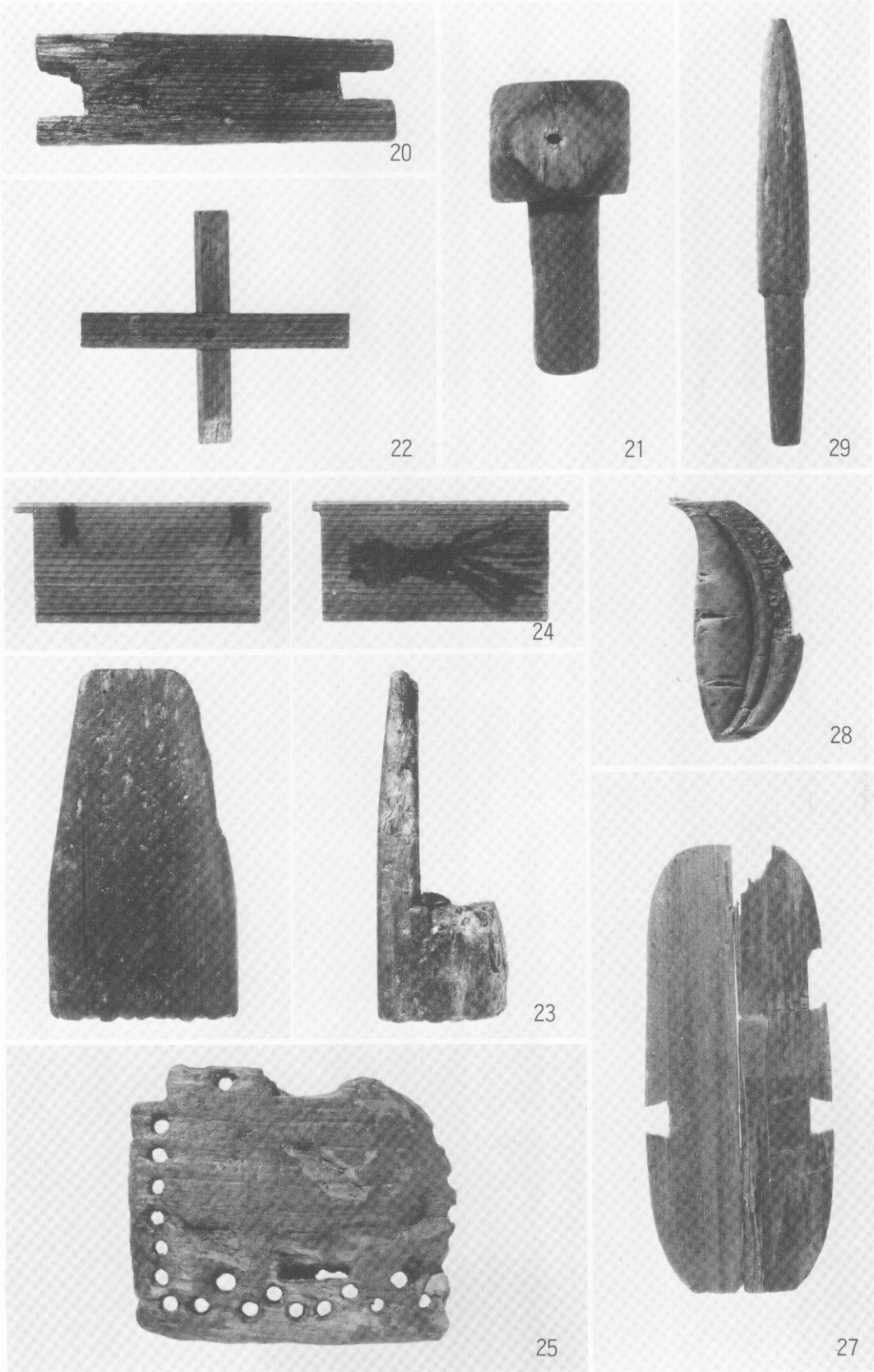


第97次調査　出土漆器

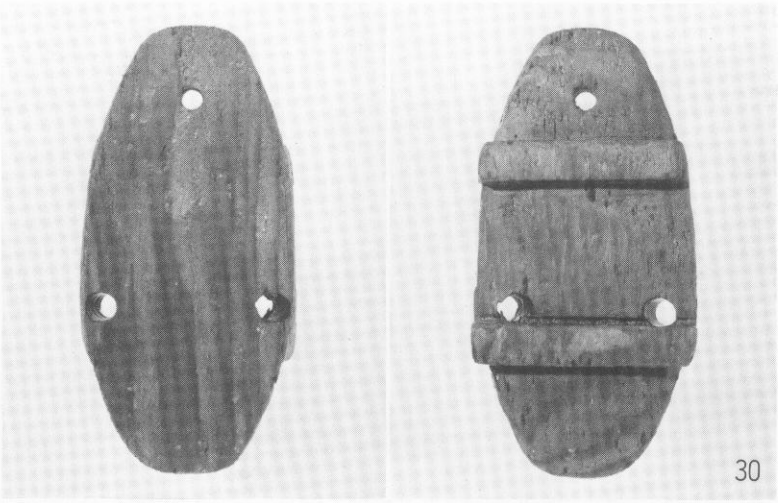
第97次調査　出土木製品

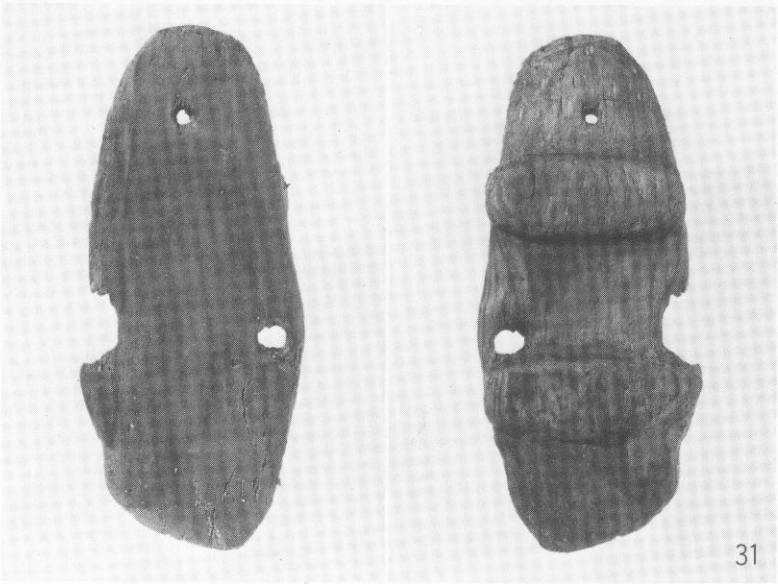


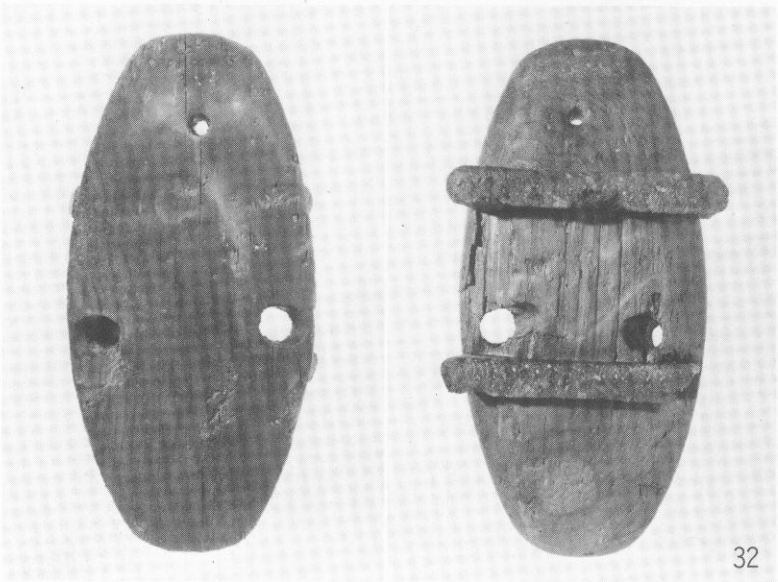
第97次調査　出土木製品



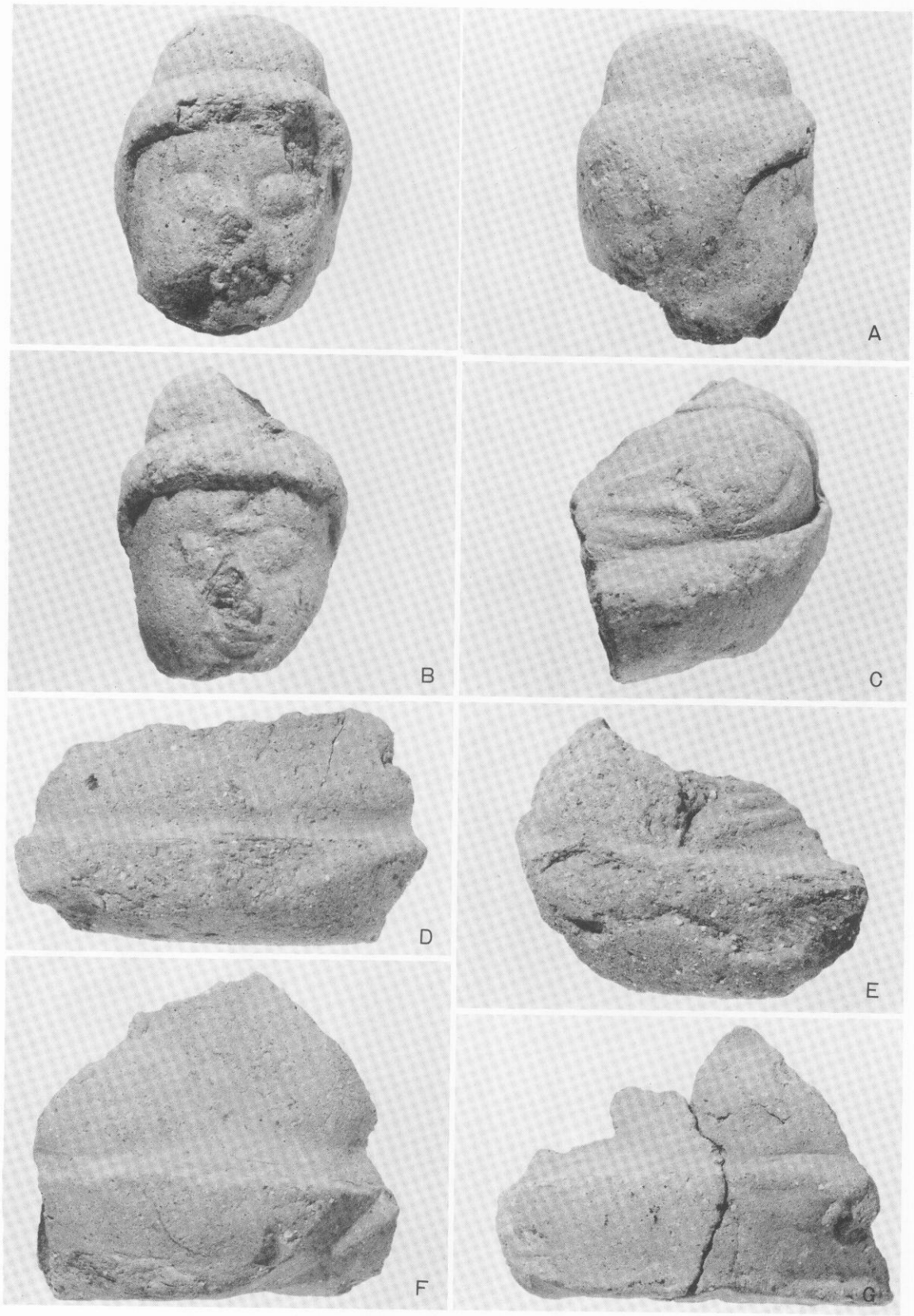
第97次調査　出土木製品



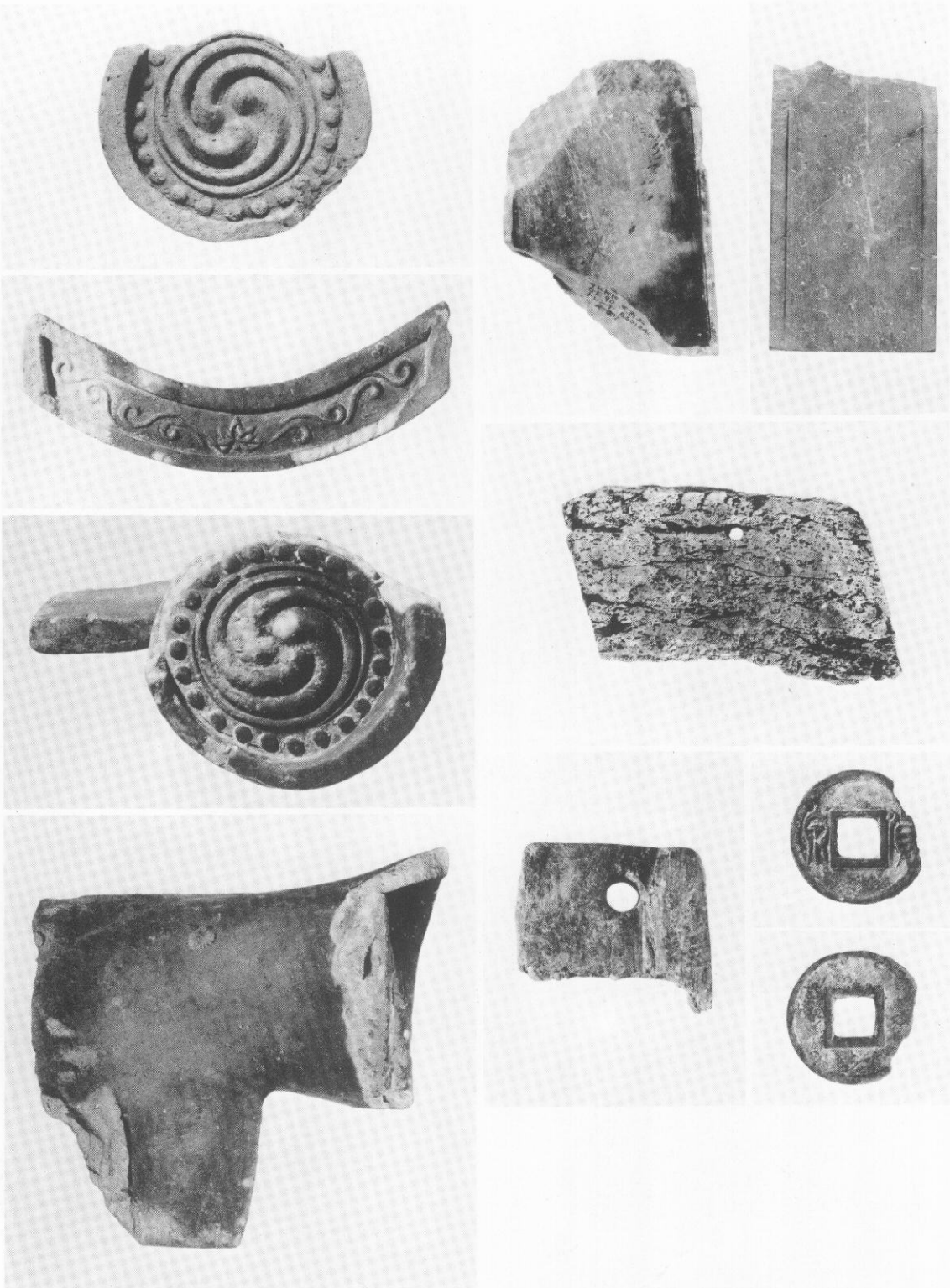




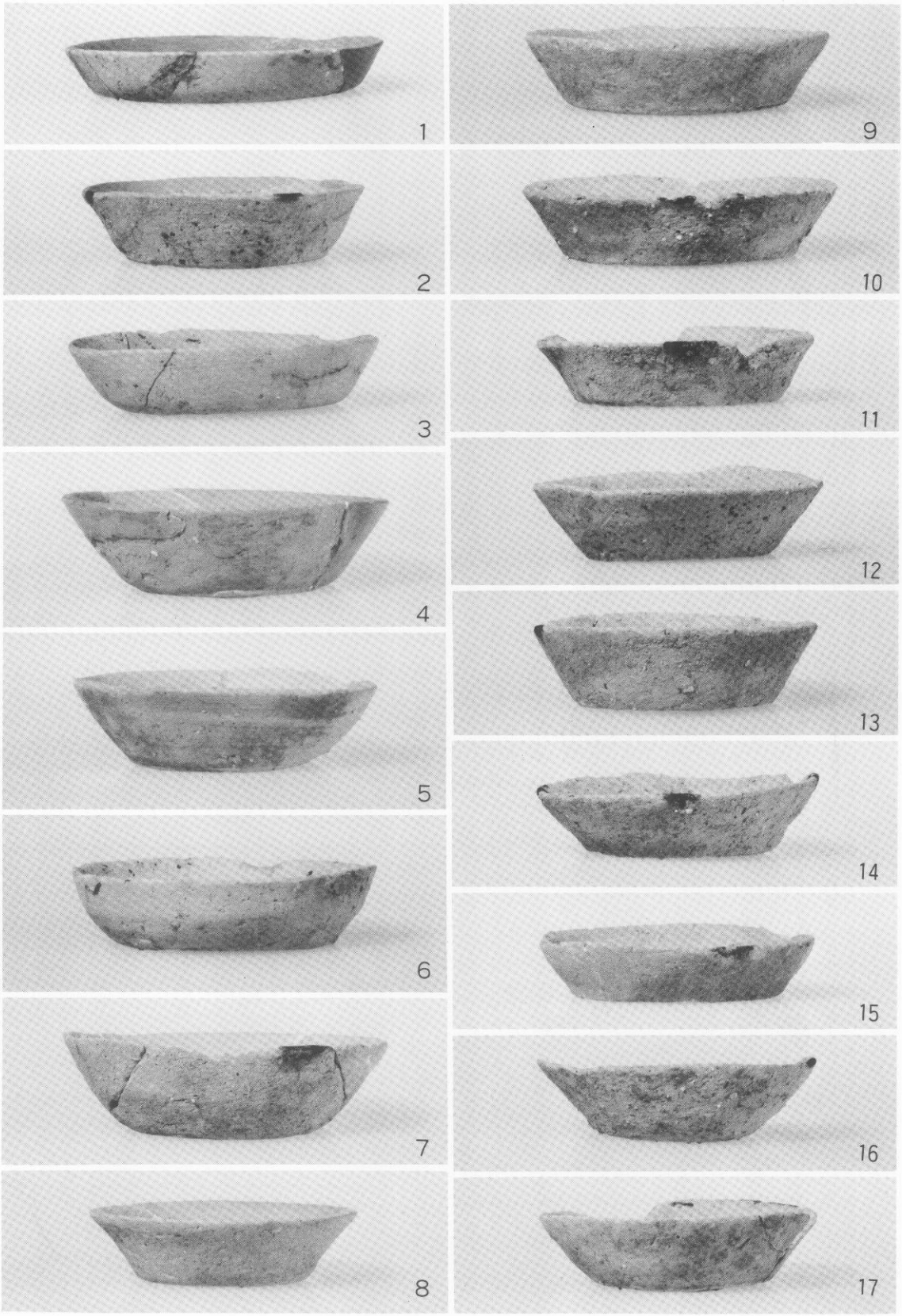
第97次調査　出土木製品



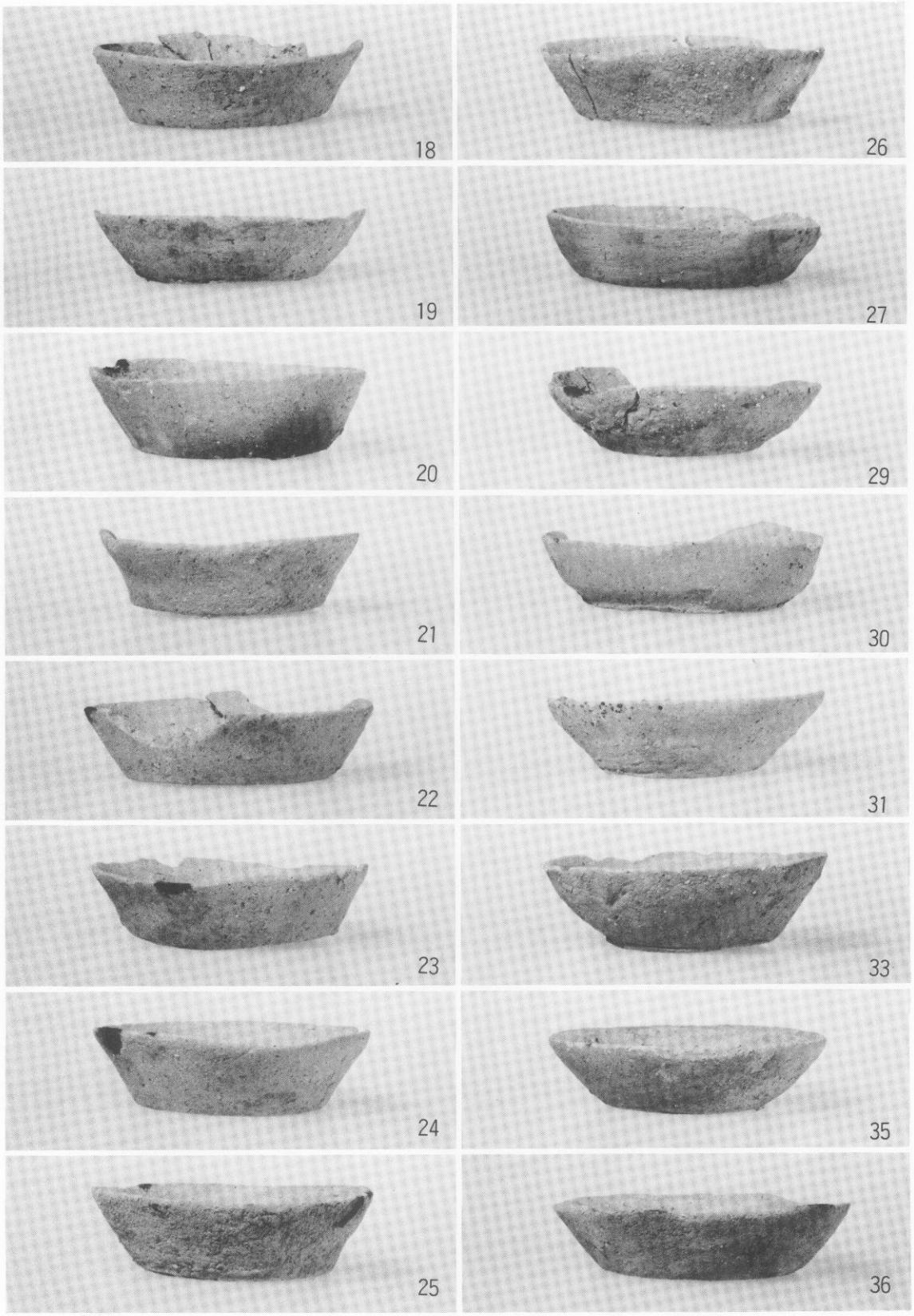
第97次調査　出土土製仏像残欠



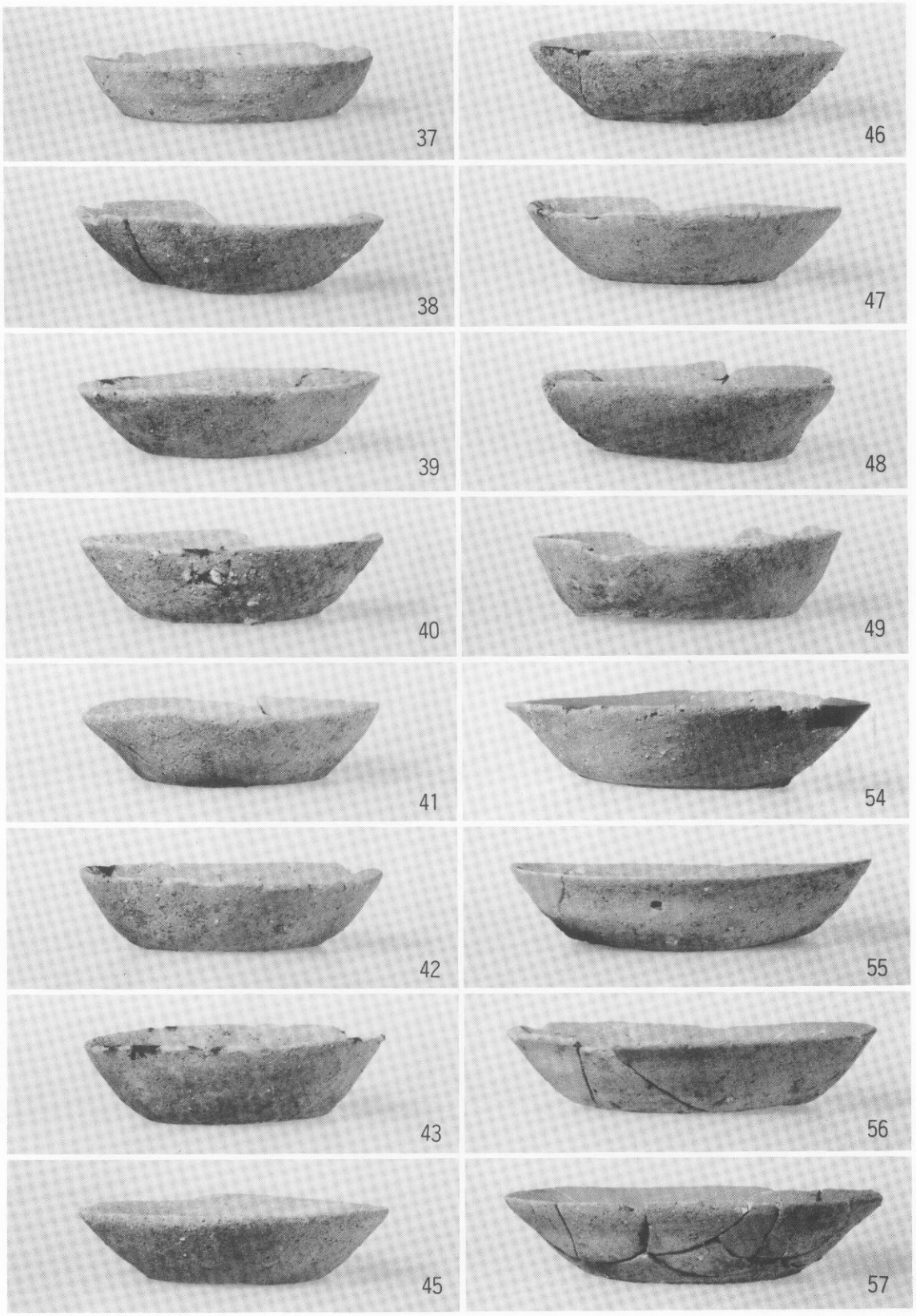
第97・107次調査　出土瓦類・石製品・貨泉



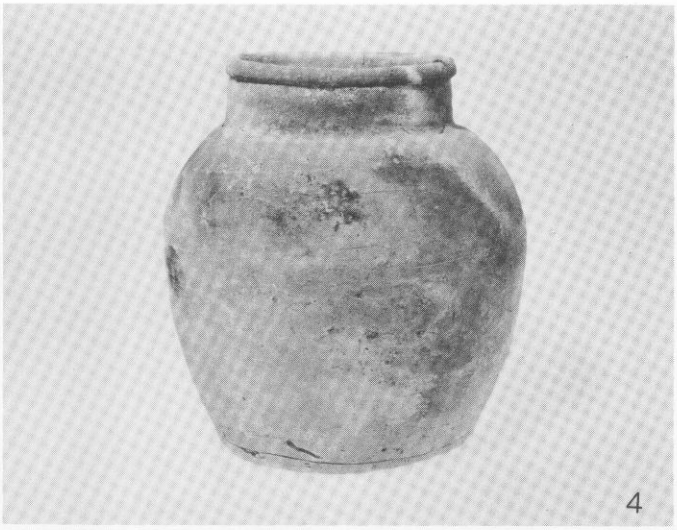
第107次調査　SQ3140・SX3137・SX3130出土土器

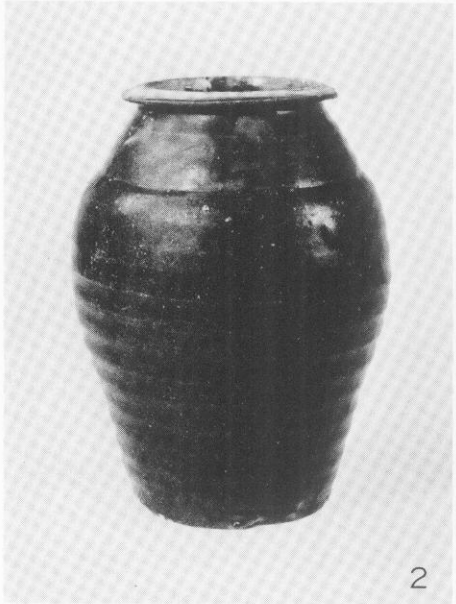


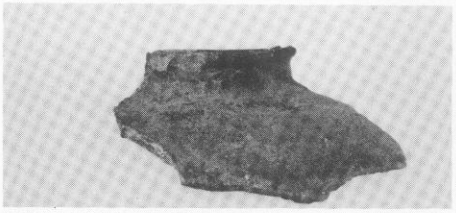
第107次調査　SX 3130出土土器

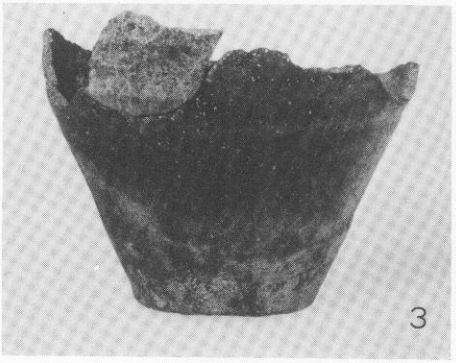


第107次調査　SX 3130出土土器

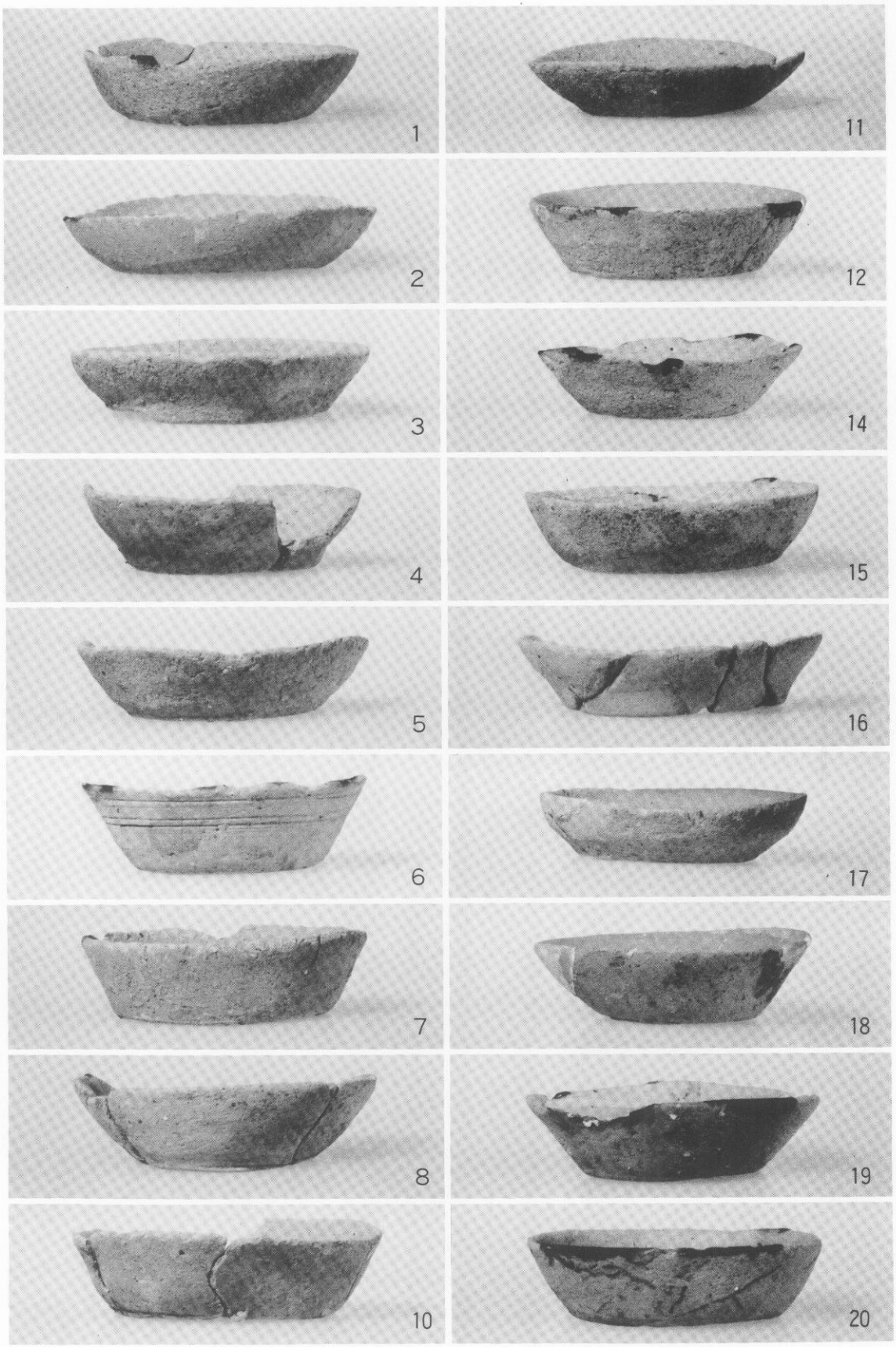




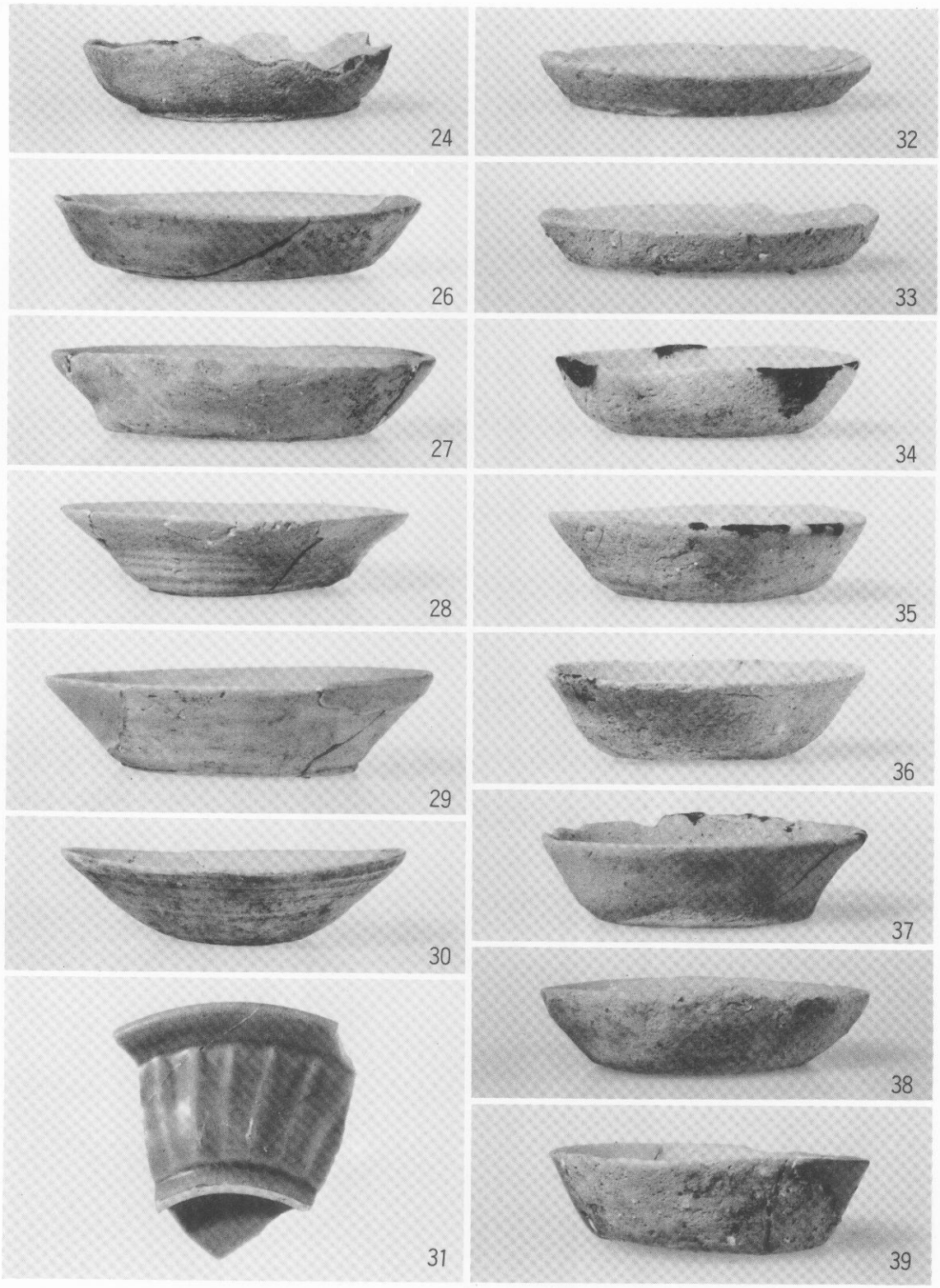




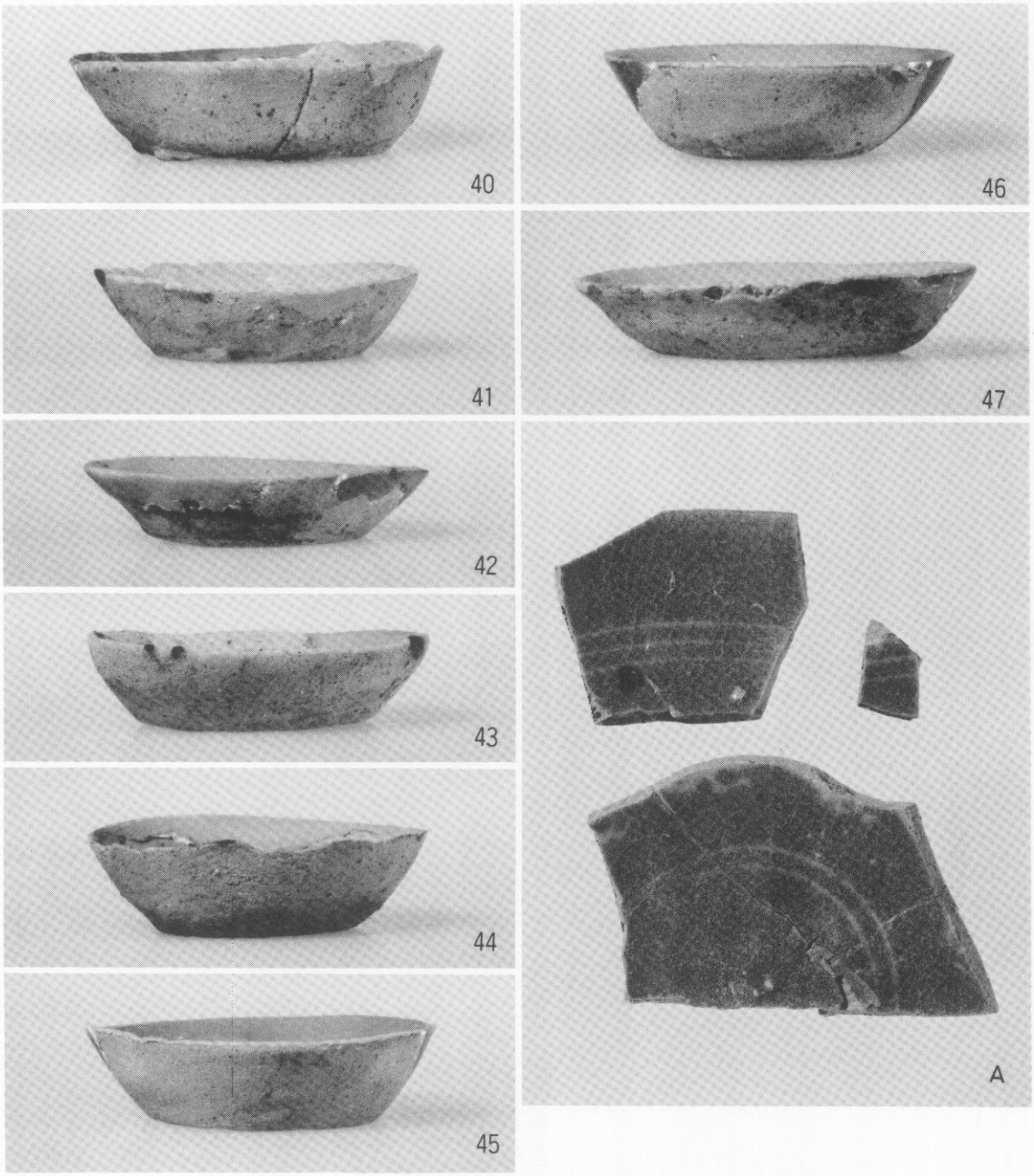
第107次調査　SQ 3140 出土蔵骨器



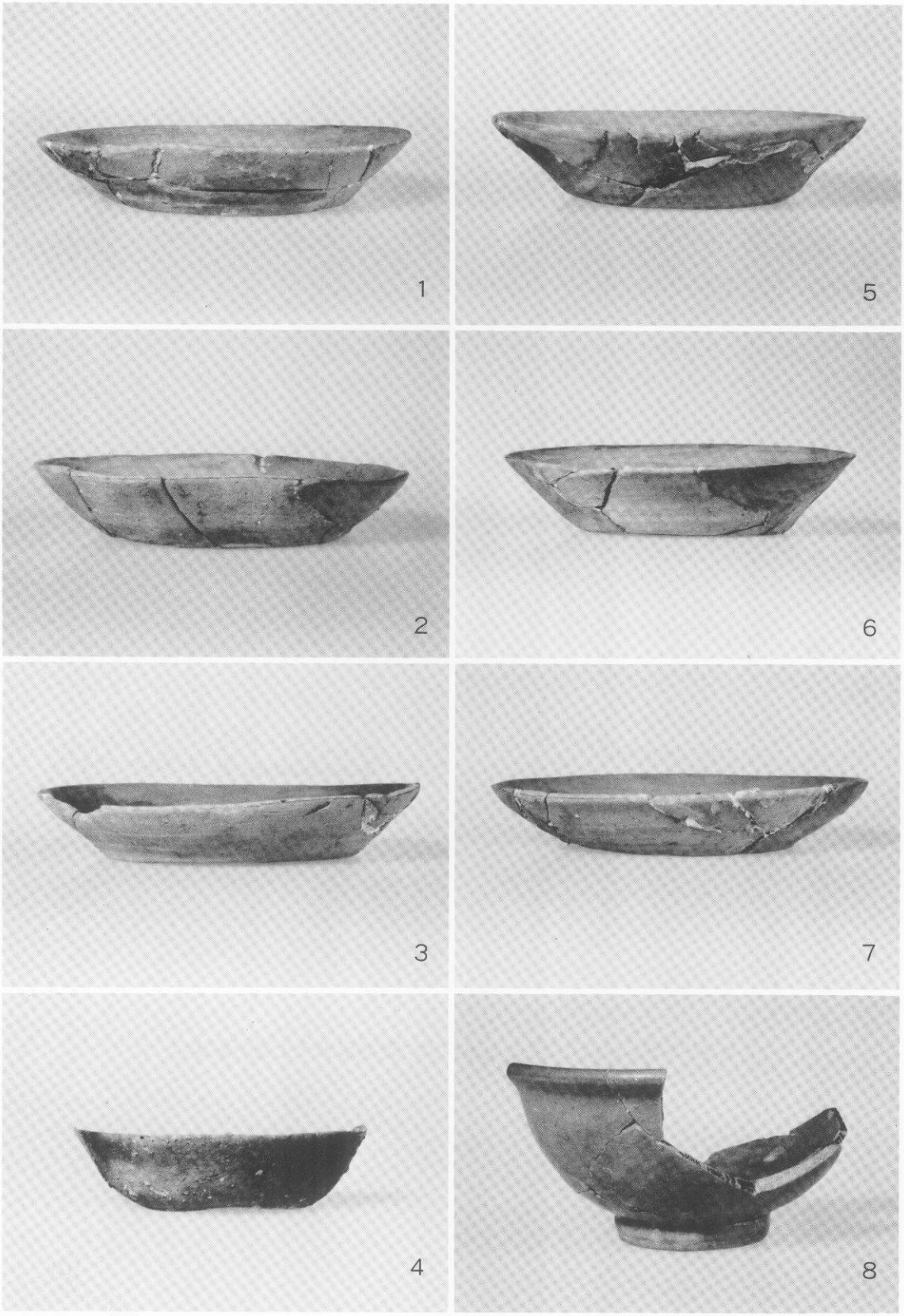
第107次調査　暗灰色土層、A－Ⅰ・Ⅱ区上層遺構面出土土器



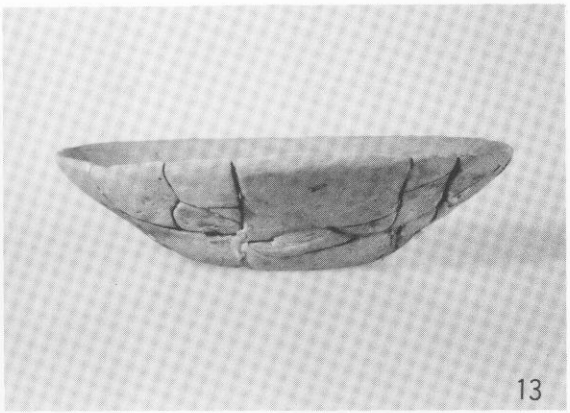
第107次調査　A－Ⅰ・Ⅱ区上層遺構面、A地区遺構面、
整地層出土土器・陶磁器

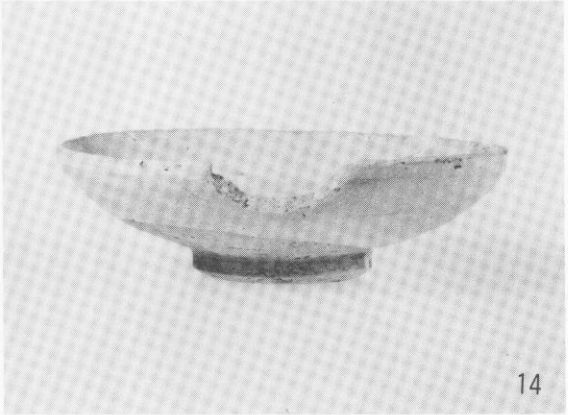


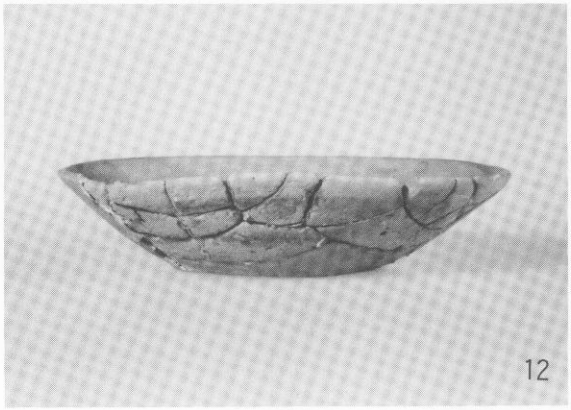
第107次調査　A－II区上層遺構面、整地層出土土器・陶磁器



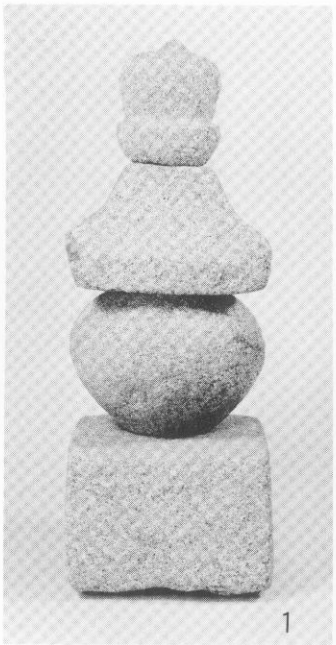
第107次調査　SX 3100・SX 3102・SX 3104 出土土器・陶磁器

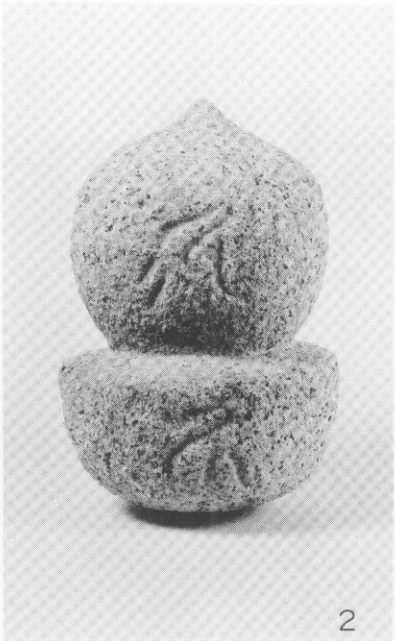






第107次調査　SX 3107・SX3111・SX3115・SX 3124 出土土器・陶磁器

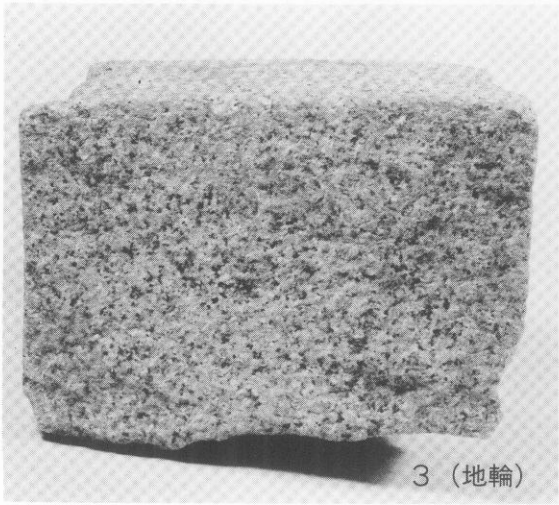

1


2

7

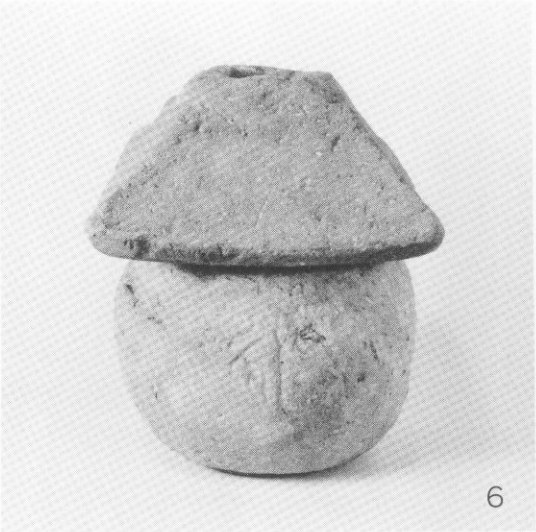
3（水輪）

4


3（地輪）

5

第107次調査　出土石塔

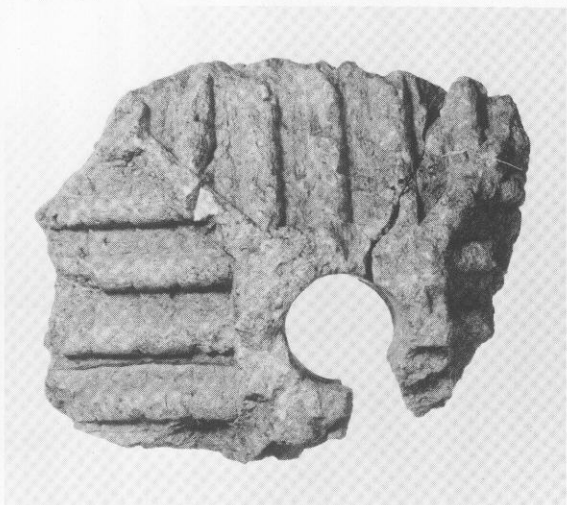

6

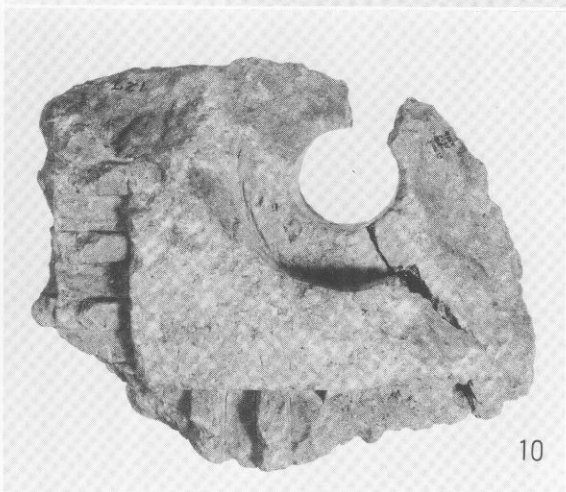
6（火輪側面）

6（水輪側面）

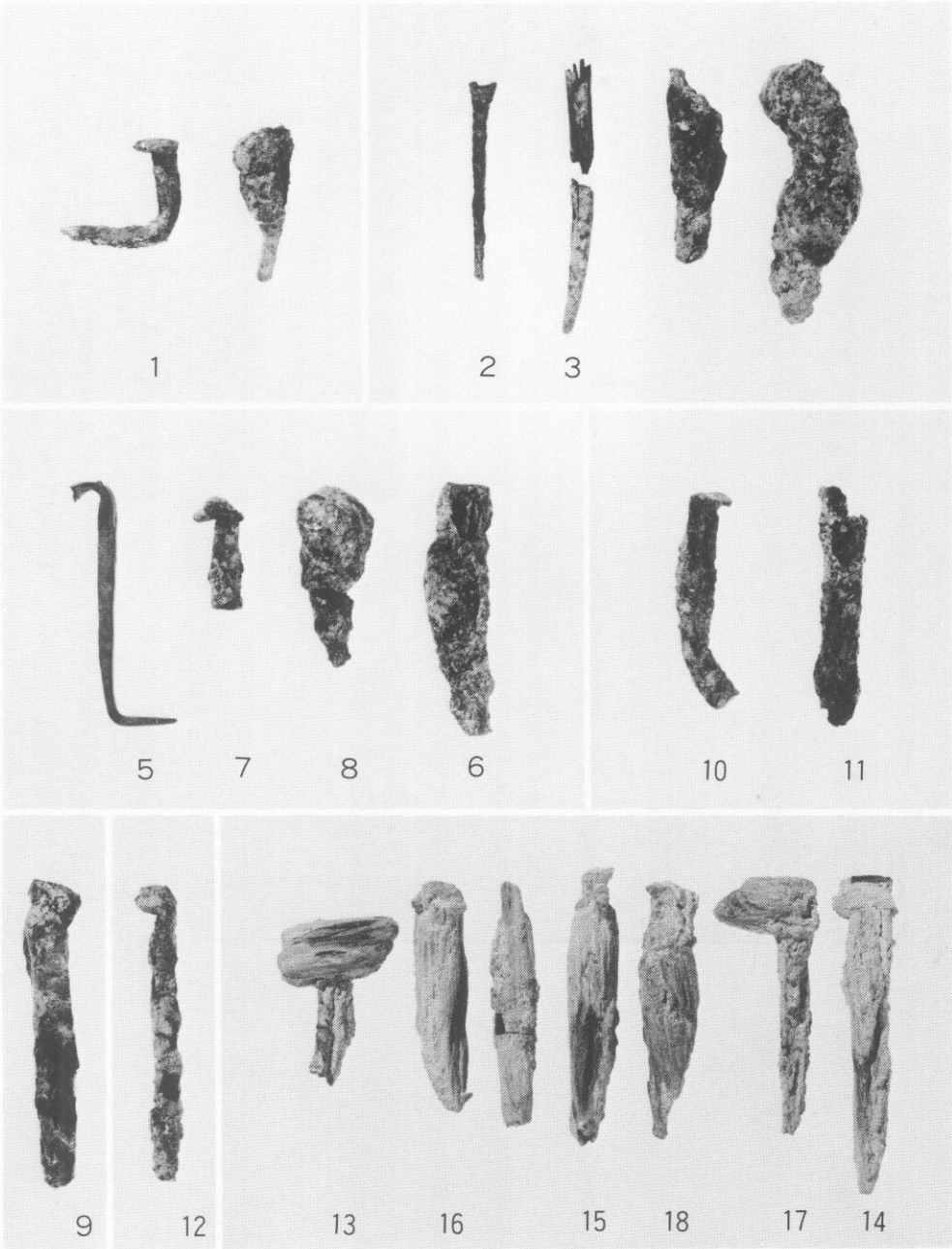
6（火輪下面）

第107次調査　出土石塔





第107次調査　出土相輪・宝篋印塔・宝塔・板碑



第107次調査　出土鉄釘

大　宰　府　史　跡
昭和62年度発掘調査概報
昭 和 63 年 3 月
発　行　九州歴史資料館資料普及会
太宰府市石坂4丁目7番1号
印　刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8－34